…十一年九月二十日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
…十三年六月一日發行　大正十三年五月三十日印刷納本

女性改造



六月號

Pompeian
beauty specialties

ポンピアン化粧料

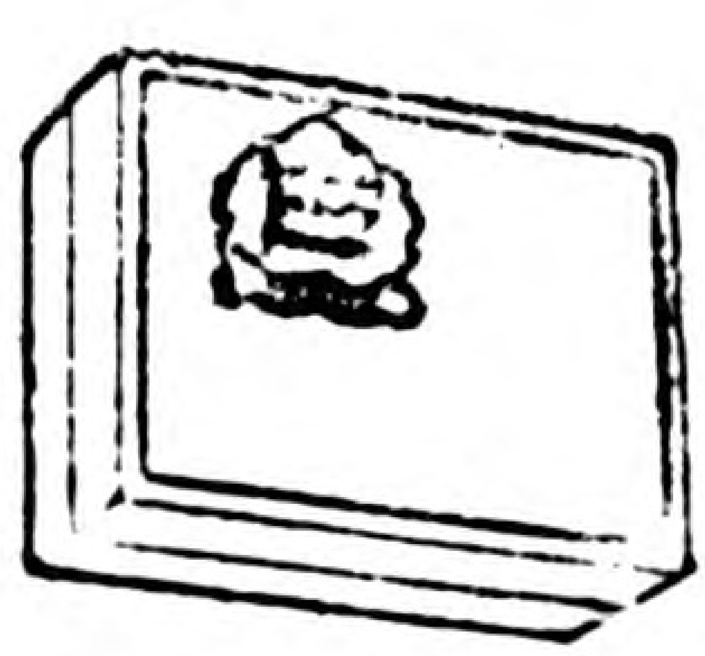
基礎化粧料 マッサージクリーム

生氣のない化粧は眞の美しさとは申されません。シツクリと生地そのまゝに落附いた仕上りの中に潑溂とした生氣が溢れてこそ始めて眞の美しさと云はれます。マッサージ・クリームは眞の美しさを發揮せしむべき唯一の化粧料で、美顔術には欠くべからざる基礎化粧料でございます。



斑附のせぬ 粉白粉

品質、匂ひ、經濟と三拍子揃つた、模範的化粧料として、全世界に賞讃の的となつたポンピアンの粉白粉、ノビツキの好い、化粧持ちの好い、そしてお使の後が何んとも云ひぬ爽快さを覺ゆるのは恐らく他品を冠越した、獨りポンピアンのみにみる特長でございませう。



初夏淡化粧料 水白粉

粉白粧同様、匂ひ、品質ツキもノビも更に申分のない極くさつぱりとした氣持の好い化粧料でございます。年齢を問はず、肌の組織に關係なくいつも思ひのまゝに、美しいお粧が出來る萬人向きの化粧料で、特に清々しい初夏の淡化粧料としてお奬めいたします。



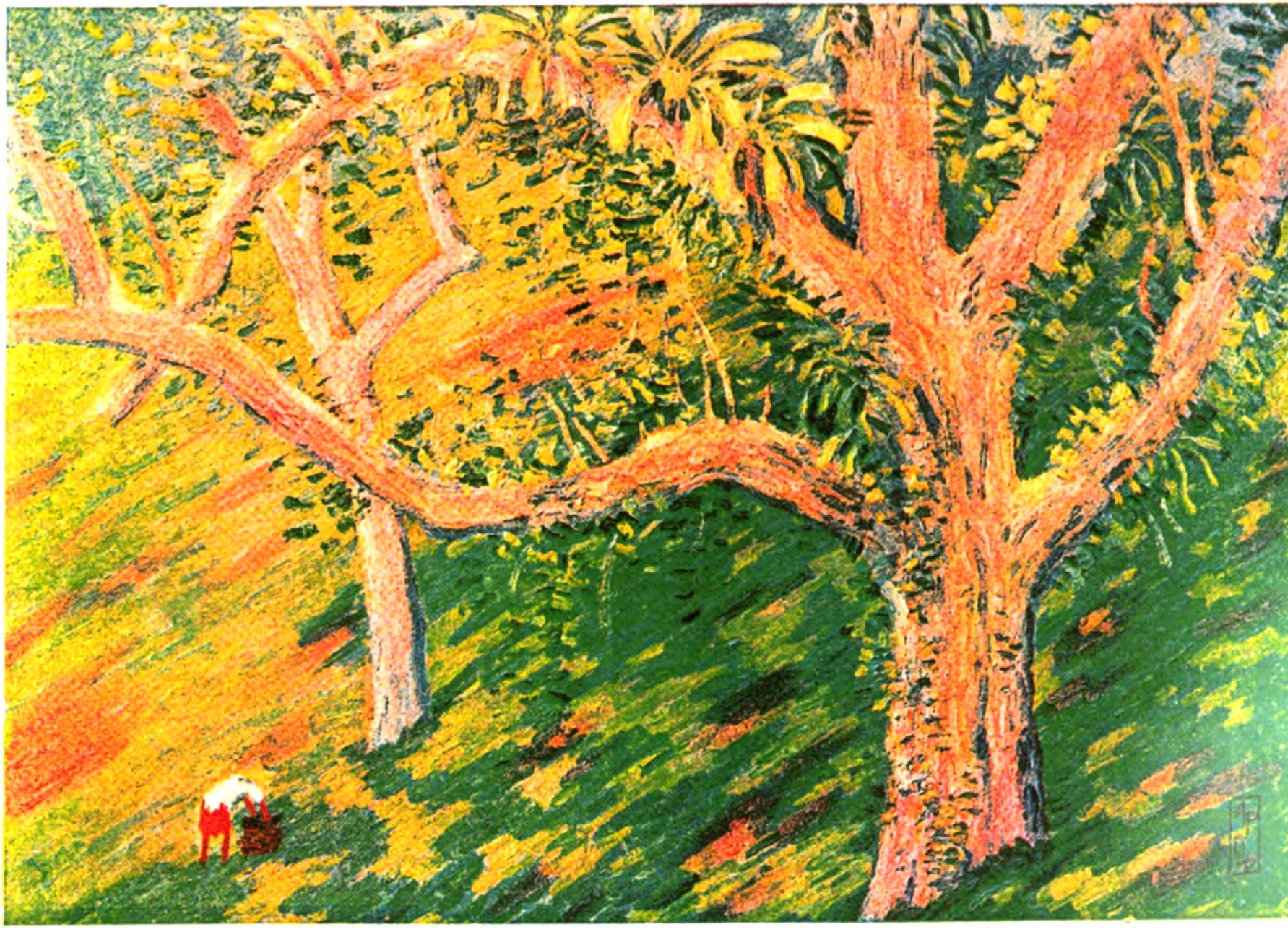
米國ポンピアン會社東洋總代理店

東京・佐々木商店・銀座


氣分よく映画を
御鑑賞遊ばすには
是非東キネへ
東キネへ
増築落成
東洋キネマ
經營者 徳川夢聲



女性改造六月號目次



熱國の晝　　橋本邦助

婦人解放論の淺薄さ

生田長江

『婦人解放』論者の或るものは、男女の一切の差別をなくして行くことが必要であると言ひ、他のものは、その差別が本質的には極めて僅少なものに過ぎないのであると言ふ。

彼等の中の特に勇敢なる者等は既に言明してゐる——子供を產むと產まないとの差別をほかにしては、男女の間に殆んど何等の本質的差別もないものであると。

しかし乍ら、これはわざわざ論駁するまでもなくあまりに實際の事實を無視した言明である。男子と婦人とは、單に子供を產むと產まないとの相違だけでなく、その相違に原因して、又その相違に準じて、殆んどあらゆる點に於て相違してゐるのである。

婦人だけ罹つて男子の罹らない、婦人特有の病氣は子供に於ても見出される。しかし、男子だけ罹つて婦人の罹らない、男子特有の病氣は子供に於て見出されない。——これは從來醫師諸君からして屢々報告されてゐるところの事實である。

婦人は男子よりも小兒に近い。
婦人には、小兒の天眞爛熳に、素樸に、無邪氣に近いものがある。
婦人には、小兒の冷酷さ、殘忍さ（平氣でトンボの頭をねぢ切るやうな）に近いものがある。
婦人には、少兒の粗惡な、露骨な自我主義に近いものがある。
子供は何よりも先づ子供と共に遊ばなければならぬ。

子供は次ぎに、子供に近いもの、卽ち婦人の傍に於て育てられねばならぬ。
子供が生れ、そして大きくなつて行く場所としての家庭は、當然婦人の領土である。
そして此領土の內にあつては、男子は時として外賓であり、又時として臣僕であるに過ぎない。
家庭は婦人を束縛するものであり、同時に婦人に榮譽を歸するものである。

重ねて言ふ。婦人は男子よりも小兒に近い。從つて、男子よりも未開人に近く、禽獸に近く、自然その物に近い。男子は婦人よりも、一層人間的であると共に、また一層自然を遠ざかつてゐる。
目的を意識することなくして、尙ほ且つ目的に適合するやうな行爲をなさしむることの動機力——これに名づけて本能と云はう。
そして、目的の意識を伴ひながら、目的に適合するやうな行爲をなさしむる處の動機力——これに名づけて理性と云はう。大體に於て、婦人は男子よりも以上に本能的であり、男子は婦人よりも以上に理性的である。
從つて婦人にあつては、本能を制御するものとしての精緻なる理性を缺乏してゐないとが、何よりも願はしい事である。

男子にあつては、理性の拘束によつて本能の潑剌たる力を殺してゐないことが、何よりも願はしい事である。乃ち、婦人に對しては特に賢明であることが要求され、男子に對しては特に勇敢であることが要求される所以も、また想見するにかたくない。

『いかにあるか』を心理的に見れば、女らしいといふのは、理性的であるよりも本能的であることである。男らしいと云ふのは、本能的であるよりも理性的であることである。

しかし、『いかにあるべきか』を倫理的に見れば、理性の指導に從つて賢く行動するのが女らしさであり、本能の命ずるところに遵奉して勇ましく行動するのが男らしさである。

一般世間の人々が（往々にして所謂識者すらもが）この『女らしさ』『男らしさ』についても、其『いかにあるか』と『いかにあるべきか』とを混同してゐるのは、改めて指摘するまでもない事である。

十分に女らしい行動も、十分に男らしい行動も、本能と理性との平衡調和を條件とする點に於て異るところがない。ただ前者にあつては、ことさらに理性を尊重してゐる故に、本能のアラミタマが理性のニギミタマに包まれて居り、後者にあつては、ことさらに本能を尊重してゐる故に、理性のニギミタマが本能のアラミタマに覆はれて居る。

乃ち、十分に女らしい女と、十分に男らしい男とは、正反對の地點から出發して、橋の中程に相近づく。時にはすれちがつてしまふことさへもある。しかし、彼等がいかに相近く立つてゐる場合にすらも、彼等は反對の方向にむかつてゐることを免れないのである。然り、永久の女らしさ！永久の男らしさ！

三度重ねて言ふ。婦人は男子よりも以上に小兒である。

一般に小兒により近い婦人の能力が、小兒からより遠い男子の能力に比して、どれだけかお粗末なものであるべきかは

改めて論ずるを要しない事柄であらう。

大體に於て、大人と子供との間に尊卑の差別を立てることが許されるならば男子と婦人との間にも、何等かの程度に尊卑の差別を立てることが許されなければなるまい。

但し男尊女卑が直に婦人虐壓であると考へるのは、決して東洋的な考へ方でない。そして我々は、一切の事を今一度東洋的に考へ直して見る必要があるのである。

婦人解放論者が自身の味方を得た如く思つたところの、リスタア・ウオオドの女性中心說なるものは、實際に於て我々にまで、何を敎へ何を考へさせたか。

それは何よりも先づ、野蠻時代へさかのぼり、下等動物へさかのぼり行けば行くほど、男性よりも女性が强かつたといふのである。大きかつたといふのである。一言にして云へば、男性中心であるよりも女性中心の社會であつたといふのであるかりに過去の經過に對する斯うした解釋を、十分に根據のあるものとするのである。その場合、斯うした解釋からして暗示されるところの將來の性的關係は如何なるものであるか。

女性が殆んど一切のものであつて、男性の存在が殆んど認められてゐなかつた下等動物の時代から、今日の社會狀態にまで進化して來た人類は（或は生物は）、今後いよいよ男性支配の、男性中心の社會にまで進化して行くではあるまいか。そして遂には、男性が殆んど一切のものであつて、女性の存在が殆んど認められないやうな究極狀態にまで到達するのではあるまいか。

男性が未だ存在しないやうに見えてゐた原始狀態に於ても、それは女性の內に包容されて立派に存在してゐたことを我我は想像する。

女性が既に存在しないやうに見える生物發達の最高階段に於ても、それは男性の内に包容されて立派に存在してゐるべきことを我々は想像する。

しかし前の場合に於ける包容は、極度の野蠻な、原始的なものであつたのに對し、後の場合に於ける包容は、限りなく人間的な、超人間的な、寧ろ神的なものでさへもあるべきことを推定させるのである。

『男子の幸福は我欲するにあり、婦人の幸福は彼欲するにあり。』

——この言葉をツアラトウストラ・ニイチエの如く、單に皮肉の心持から皮肉な意味にのみ用ゐるのは、決して當を得たものでない。なぜと云つて此の如き差別は、むしろ性的關係の最高階段に於て見らるべきものであり、また聊かも女性の名譽を傷くべきものではないのである。

ハインリツヒ・クライストが彼の殆んど總ての作品に於て常に取扱ふことを忘れなかつたやうな戀愛は——所謂主我的な男性と所謂沒我的な女性との間に起る、文字通り狂熱的な戀愛は、現實の地上に見られるところの最も美しい、最も崇高なものの一つではないか。

男性の外に出でては脱兎の如き烈婦であり、男性の内に入つては處女の如き貞女であるところの、在來の日本婦人の理想的典型が、今日の『婦人解放』論者等が無批判に輸入してゐる新しき婦人の理想的典型より、どれだけより精練された、より醇化された、より高貴なものであるかは、今日までのところ遺憾ながら甚だ少數の具眼者だけが知つてゐる。歐羅巴的なもの、特に近代歐羅巴的なものを、慘酷な程度にまで解剖しはじめたところの、そして本當に新しく見、自由に考へることを學びはじめたところの、眞に選ばれたる人々だけが知つてゐる。

附記。（私はこの種類の主張を餘程前から發表してゐます。私の立脚地を駁撃しようとする方は、他の諸論文をも參照して下さるやう希望して置きます。）

藝術意識の改造

賀川豐彥

生命の表現するところに藝術がある。生命なくして藝術はない。

生命は自己の內容の爲めに常に新しき價値を造る。刻々の價値が喜であり、目的である。その總勘定がまた生命そのもの丶自在への步み寄りとなる。

人間の藝術には恐ろしく多くの約束がある。それは恰も感覺の經濟が五官とその他の感覺に諂ぶる如く、感覺藝術もまた五官と他の感覺に引づられて行くのである。

眼のために彫刻、繪畫建築の樣式が生れ、耳のために詩と音樂が生れ、筋肉の爲めに舞踊が產れた。そして觀念の發達すると共に、演劇と、小說と、自然に對する好愛が生れた。

私はこれらの局部的藝術は、私の常に考へてゐる生命藝術に比較して　あまりに貧弱なものと考へてゐる。主觀藝術ですら――小說、詩の如きものですら。綜合的生命藝術に較ぶるならその强さに於て比較にならない。

先づ科學は、私にとつての大きな藝術である。それは生命の生產であり、創作であり、主觀藝術の至上なるものであり、その頂點に客觀の眞實性と結び附けてゐるものである。科學は生命藝術の中の最も花々しいものである。

經濟も生命藝術である。然したゞ徒らなる機械的多量生産は藝術ではない。生命の爲めの創作と生産は最も優れたる藝術である。

道徳が生命藝術であると云ふ事を理解しない低能なる局部藝術家は頗る多いことであらう。然し、人間が美しくあるためには梅毒と、淋病と、不潔から遠ざからなければならない。酒と賣淫と腦梅毒の藝術が何の藝術になり得るであらうか？酒に狂ふた、發狂者が、ほろ酔ひ加減で歌ひ舞ふ藝術に、何の陶酔があらうぞ？ 人間の不具者、藝術に於けるパセドス病患者——それは飛び出した大きな眼を持ち、色彩と輪廓の爲めに、魂と生命を蹂躪し、三越と、帝劇を凡てのものの上に尊重する口より眼の大きくなつた感覺藝術の啓示に何の權威があらうぞ。

そこに陶酔のある事を、私は拒みはしない。局部痲酔は勿論可能である。然し腦梅毒と、アルコホールの藝術を、藝術と呼ばねばならぬ藝術こそ、實に悲哀なものである。それは藝術の成りぞこねだ。精神病者の天國だ。酒の上の藝術だ。鼻のかけたる巴里のごろつきの藝術である。

生命藝術は、生命の上に美を刻む工夫である。生命の上に美を刻む工夫には自ら守るべき藝術的法則がある。それを道徳と云ふのである。

生命を至純ならしむるためには、戀愛が發生する。戀愛を何人が人間藝術だと云はないであらうか？

戀愛は生命の創作である。それは最上のものに對する陶酔である。それあるが故に、或人は凡ての局部藝術は戀愛の爲めに生れたと迄考へる。

戀愛ほど明瞭に生命藝術の何ものであるかを啓示するものはない。戀愛の前には、凡ての局部藝術が吸収されて終ふ。それほど戀愛は、眞劍に若き生命の努力を要求する。それ自身が目的であり、それ自身が幸福であり、それ自身が生の目的を完成してゐるが如く思はしむるものは、戀愛に如くものはない。

藝術意識の改造

賀川豊彦

生命の表現するところに藝術がある。生命なくして藝術はない。

生命は自己の內容の爲めに常に新しき價値を造る。刻々の價値が喜であり、目的である。その總勘定がまた生命そのものゝ自在への歩み寄りとなる。

人間の藝術には恐ろしく多くの約束がある。それは恰も感覺の經濟が五官とその他の感覺に諂ぶる如く、感覺藝術もまた五官と他の感覺に引づられて行くのである。

眼のために彫刻、繪畫建築の樣式が生れ、耳のために詩と音樂が生れ、筋肉の爲めに舞踊が產れた。そして觀念の發達すると共に、演劇と、小說と、自然に對する好愛が生れた。

私はこれらの局部的藝術は、私の常に考へてゐる生命藝術に比較してあまりに貧弱なものと考へてゐる。主觀藝術ですら——小說、詩の如きものですら。綜合的生命藝術に較ぶるならその强さに於て比較にならない。

先づ科學は、私にとつての大きな藝術である。それは生命の生產であり、創作であり、主觀藝術の至上なるものであり、その頂點に客觀の眞實性と結び附けてゐるものである。科學は生命藝術の中の最も花々しいものである。

經濟も生命藝術である。然したゞ徒らなる機械的多量生産は藝術ではない。生命の爲めの創作と生産は最も優れたる藝術である。

道德が生命藝術であると云ふ事を理解しない低能なる局部藝術家は頗る多いことであらう。然し、人間が美しくあるためには梅毒と、淋病と、不潔から遠ざからなければならない。酒と賣淫と腦梅毒の藝術が何の藝術になり得るであらうか？ 酒に狂ふた、發狂者が、ほろ醉ひ加減で歌ひ舞ふ藝術に、何の陶醉があらうぞ？ 人間の不具者、藝術に於けるパセドス病患者──それは飛び出した大きな眼を持ち、色彩と輪廓の爲めに、魂と生命を蹂躙し、三越と、帝劇を凡てのものの上に尊重する口より眼の大きくなつた感覺藝術の啓示に何の權威があらうぞ。

そこに陶醉のある事を、私は拒みはしない。局部麻醉は勿論可能である。然し腦梅毒と、アルコホールの藝術を、藝術と呼ばねばならぬ藝術こそ、實に悲哀なものである。それは藝術の成りぞこねだ。精神病者の天國だ。酒の上の藝術だ。鼻のかけたる巴里のごろつきの藝術である。

生命藝術は、生命の上に美を刻む工夫である。生命の上に美を刻む工夫には自ら守るべき藝術的法則がある。それを道德と云ふのである。

生命を至純ならしむるためには、戀愛が發生する。戀愛を何人が人間藝術だと云はないであらうか？

戀愛は生命の創作である。それは最上のものに對する陶醉である。それあるが故に、或人は凡ての局部藝術は戀愛の爲めに生れたと迄考へる。

戀愛ほど明瞭に生命藝術の何ものであるかを啓示するものはない。戀愛の前には、凡ての局部藝術が吸收されて終ふ。それほど戀愛は、眞劍に若き生命の努力を要求する。それ自身が目的であり、それ自身が幸福であり、それ自身が生の目的を完成してゐるが如く思はしむるものは、戀愛に如くものはない。

戀愛は今日迄、道德より迫害を受けて來た。所謂、義理と人情を對立せしめた日本の民衆感情は戀愛を不義なるものとし、義理の反對に立つものとした。然し之は生存競爭の爲めに戀愛が極度に壓迫せられてゐた時のことであつて、生命の自由と藝術は全く許されず、爭鬪の外に何の目的もない時の事である。そんな時には、生命そのものが呪はしいものである。それは常に外部的の脅迫に、生命の內側から湧いて出る生命藝術としての道德——即ち戀愛、社會愛、人間愛を基礎とする光榮ある藝術としての道德を認めないのである。

然し道德と云ふものは常に內側なるものである。內側なるものの歩みは、それ自身目的であり、自己が決定し、自己が創作する。自己が自己の爲めに決定し、自己の內側に更に新しき自己を創作するものを「愛」と云ふ。戀愛にしても聖愛にしても、全くこの內側の自己充足と自己內容の創造で、それ自身が目的である。

愛は完全なる生命藝術である。

生命藝術が、戀愛で止まると思へばそれは大なる誤謬である。

「生命」は戀愛をしないでも、それ自身が最もうれしき藝術なんだ。之を理解しない人がある。必ずしも戀愛が加はらないまでも、凡ての古代藝術を見ても理解する如く、混濁なき生命は、それ自身が大きな喜びなんだ。アマゾン河畔の鳥の群に、敵に追つ駈けられても、他に飛び移れば早や苦痛を忘れて舞ふてゐる如くに、生命はそれ自身が大きな躍動なんだ。飛行機が空中高く三千尺昇ると、歌が自ら口から洩れ、笑が自然出て來るさうだが、人間の生命にとつても、之は同様であるべきものなのだ。

この生命禮讃は、古代に於て「宗教」と云ふ名で現れて來た。この宗教と稱する生命禮讃の前で、凡て最初の感覺的局

部藝術が生れた。最初の歌は讃美歌であつた。最初の繪は宗教畫である。最初の音樂も最初の演劇も、最初の彫刻も、凡て神と偶像の前で、神と偶像の爲めに生れたのだ。

つまり「祭」とは、生命の表現を感覺的局部藝術の凡てを盡して神を讃め唄ふことであつたのだ。

藝術は客觀性を強くすればする程、その約束と條件が面倒になる。建築、彫刻、音樂、演劇のように、民衆一般に理解されねばならぬものには、それぞれ感覺心理の諸法則に從はねばならぬと共に、群衆心理をも考へに入れねばならぬ。然しそれだけまた普遍的生命に近くなるわけで、人間生命のはけ口をそこに求むるより外に道が無いものだから、全人藝術としての宗教を考へつゝも、それは、局部藝術の綜合となるより仕方がなくなるのである。

ショウペンハウエルや、ハプトマンなどは藝術に對して、妙な考をもつてゐて、「救はれない人生」を假にも救ふてくれるものは、美であるから、藝術は救の一種である、その陶醉は宗教的であると云ふ樣な意味の事を云ふてゐる。

之は隨分面白い云ひかただが、人生と藝術の本體が分離してゐるものだと考へるからかうした矛盾が起るので、「救はれない人生」の畑に、「假りにも救ふべき藝術の根」がどうして生えたらうか？ 全人的ではなくとも局部的に――ショペンハウエルであれば、彼の至高の藝術だと云ふ音樂に――何故陶醉の要素が發見せらるゝであらうか。

それは生命ではないか？ 生命の中に猶僅かにでも救はるべき要素が殘つてゐるのではないか？ 局部が、全體の一部分である事を彼は忘れてゐるのだ。

太古、人間がまだ彼自身の内に充つる生命の躍動に敏感であつた時には、人間は生命と藝術の區別を知らなかつた。藝術は生命躍動の一部分であつた。宗教はその全體であつた。その根底であつた。

人間の成長が局部的に偏し、所謂近代文明を見るに到つて、眼と耳と、口と鼻とが分離せる如く、宗教と藝術も分離し、善と美も分離することになつた。

そして、美專門の人々が、たゞ感覺に訴ふる爲めに、いろいろのものを彫刻し、畫き、歌ふ事になつた。

然し美の内容が益々成長して、内側に内側に潛り込むようになると共に、美の範圍が擴大し、生命の凡てがその藝術的對象となる事になつた。即ち多くの觀念藝術——詩、小說、音樂の或るもの、自然に對する或見方などになると、それは全く、宗敎そのものになつた。

又、われらは綜合藝術と言つたようなものでなくて、生命の單一なるものの各部を擔當したるものとしての、感覺及觀念藝術を見る時期が來た。

即ち敎なき人生に、猶少しでも、美の要素——否、美を探し當て得る要素、即ち主觀的に云へば、美しくなり得る要素が殘つてゐるならば、藝術を含む生命そのものは、敎そのものであると考へられ得るのである。そして藝術そのものが宗敎であり、それは敎に對する禮讃となるのである。

敎育も生命藝術の最もよく理解の出來る分派である。

生命藝術に於て道德が建築であり、戀愛が繪畫であり、宗敎が音樂でありとすれば、敎育は彫刻である。

敎育ほど面白い彫刻はない。その素材は兒童である。その鑿は敎育者である。それは愛を以て精神とする。何と云ふ幽玄なる時間彫刻であらう。

靈は靈より、魂は魂より傳はり、神の呼吸が土塊の裏に生命として燃え上る。

今、我等は感覺的局部藝術の時代から漸く觀念藝術に目醒めつゝある。未來派も、キュビストも、後期印象派も表現派の凡ての畫がそこを指さしつゝある。それは感覺より、より高い主觀に目醒めんとしてゐるのだ。それは客觀の符號……色、輪廓を借りて、内側に起る生命の躍動を外部に傳へんとする努力である。感覺以上の生命の更に感覺に投影せんとする

努力である。

それは植物に、動物に、無生物に、光に、人間の顔に、眞夜中の泥溝に、生命の神秘の働きつゝあるを聞かんとする努力である。失はれたる生物と、無生物との聯絡を、感覺以上の觀念力によつて取返さんとする努力である。神に近い觀念と稱する新しい感覺を以て、客觀の醜きものを、美によりて鑄換へんとする努力である。

かうした力強き新しき藝術はカンバスや、土塊より飛び拔けて來て、肉塊の上に新しきスタンプを押さ無いではおかぬ。

かうして、古き形の局部藝術は、生命藝術を外部に傳ふる符號となり、與へられた方程式の配列となる。それだけでは何の意味も無い。音譜が、たゞ一つの觀念の符號である如く、繪畫も、小說も、建築も、否凡ての在來の局部藝術は、それ自らの目的と共に、それ以上を意味することとなる。

「それ自らの目的と、それ以上の意味」は生命ある藝術に於て始めて與へられる。新しき藝術は、たゞ全人的生命藝術に於て始めて、我々の魂の渴を癒し得るのである。（一九二四、五、三、本所松倉町バラックにて）

人間の欲望

土田杏村

五

わたくしは前號で、心的要素としての欲望を處理し、位序し、また選擇する、價値的個性典型の三つを語つた。其れは外面的內面的否定の典型と、外面的擴張の典型と、及び內面的沈潛の典型であつた。わたくしは次に現代社會の中に現はれた、此等三つの典型の個性的衝擊が、いかなる形式を持つかにつき、一つの動學的觀察を試みよう。

外面的內面的否定の典型は、繼起する欲望を或は外面的に、或は內面的に否定することに生活の價値を見出すだけであり。さうしたから、彼は自己の欲望を絕無に歸せしめたとか、或は其の結果彼の生活はすつかり消滅せしめられたとか、いふものではないのだ。意識の劇場の正面に於て、彼が欲望の俳優を殺傷しつゝある時、其れの背景の暗室の中では、覆面した幾多の欲望が密輸入を行つて居る。外面的擴張の典型が社會的に進步型を代用するならば、否定の典型は其れの保守型となるであらう。社會は安定しなければならぬ。絕えず進化すると同時に、其れは確立の信念を含むものでなければならぬ。「社會」の意識は、個人に取り一つの强制意識となつて現はれるとは、其の「確立」の信念がわたくし達を支配するからに外ならぬ。しかるに社會のかゝる安定性は、つねに其れの基礎を個性的に、外面的內面的否定の典型の上に置く。

けれども否定の典型は、社會文化史的には所謂經過的の、手段的の意味をしか持つては居ない。其れが生活に意義を爲すは、外面的擴張の典型に適當なる地位を與へ、信賴すべき活動に展望の臺壁を築くときだ。わたくし達の生活の發展しつゝある尖端に、中心的意義を持つたものを大膽に肯定し、

其れに部分的意義をしか寄與し得ないものを勇敢に否定するとき、其れの肯定は、外面的擴張の典型のなすところであり、其れの否定は否定の典型のなすところだ。否定自身になんら積極的の意味はない。けれども、其れには甚だ多くの修練が伴はれる。時代の新しく創造した要求に、歷史的の意味を認め、其れを批判し、助成し、生活の興味の焦點に齎すことは、わたくし達が「生活人」として立つ上の、また「社會人」として立つ上の、根本的なる態度であると同時に、生活に對し部局的の意味をしか持ち得ないものへ生活の焦點を分裂せしめて、「實在」する人間ではなくたゞ「觀念」する人間となることから、わたくし達は勇敢に、離脱しなければならない。

社會現象を批判するわたくし達社會人の態度に就き、わたくしは先づ次の觀察を取ることに定めて居る。其れは彼が、どれだけの批評眼を以て、新らたに起つた社會的要求を代辯し得るかといふ事である。其の批評の實質について、わたくしは多くの顧慮を拂はない。現在の如く智識が專門化せられ、また同時に社會化せられたときには、各人の批評の實質は、其れほど大いなる相違を持つものでは無い。其の意味を以てすれば、現代の生活は事務化せられ、生活の批評に卓拔なる浪曼主義を期待し得ないといつてもよい。アカデミーの講堂は事務見習の實習室となり、商店の飾窓は最も豐かに社會的浪曼主義を表現する場所となつた。たゞ其處に生活批判の天才と常人とを區別し、ロマンテイストと事務人とを區別せしむるものは、彼がどれだけの力で新らしい社會的要求を代言し得るかといふ事である。いかにして社會の思想を善導すべきかと考へる治者的批評は、專制政治の形式に匹適する。デモクラシーの政治は、社會が生活の修練の中よりまことに一つの新らしい要求として創作したものを機敏に、聰明に、捕捉し、代言する被治者的批評を要求しつゝある。

けれども現代の社會は、中心的意味を持たない進步型の生活批評と、部局的以上の意味を發揮した保守型の其れとを、いかに多く含んで居るか。此等の二つはつねに無意義なる衝擊をなし、歷史の大事件を現出せしめ、以て社會の徒勞なき、公正なる進化を妨害して居るのである。

六

わたくしは現代が衝動的に、其れ故にむしろ無意識的に、創作した多くの要求につき、大抵の場合には其れの全部を肯定するものである。けれどもさうして新しく創作せられたものは、つねに多くの粗雜なる耕土を含む。現代文明の外觀

は、とにかく其れの氣品と雅趣とに於て、新奇ではあるが粗笨であり、豪宕ではあるが散漫であり、高雅深邃なる風趣を缺乏せしめて居ることは否定せられない。わたくし達は其處に外面的擴張の典型と內面的沈潛の其れとの葛藤を內部的に經驗しなければならない。

　生活の展開は一般的原理の上に立つ。普遍に妥當しない原理は生活を規定することが出來ない。例へばわたくし達が、日本人と米國人とにつき、人格の品位の同じ尊重を要求するは其れだ。わたくしは此れを生活改造の認識論的原理と呼ぶであらう。しかるに次にわたくし達は、其の原理を歷史生活の現實的基礎の上に實現しなければならない。わたくし達は唯一の「在る」ものだ。生活の展開は「在る」の現實的焦點より一步も離れることが出來ない。此に於てか生活を指導する原理は、一つとして歷史的、個別的ならぬは無い。例へば日本人には日本人の進む途があり、米國人には米國人の其れがあるとするは此の理より來る。わたくしは此れを生活改造の形而上學的原理と呼ぶであらう。

　しかるにわたくし達の個性型のうち、擴張型は認識的原理を生み、沈潛型は形而上學的原理をつくる。前者は此れを一般型と呼び、後者は此を現實型と呼ぶが至當であるかも知れぬ。此等二つの典型は、ともに其れ〴〵の個性に根ざした有力なる生活傾向として、現に社會の中で重大なる反嚮をつづけて居る。例へば國際主義と國民主義、集中主義と地方主義、社會主義とアナアキズムとの對立した社會的葛藤が其れだ。此等の葛藤は、個性の典型的基礎の上に立つたものであるだけ、其れの對立は、愛憎の情緒と緊密に結びつき、重大なる結果を人類社會の中につくつて居るが、隨つてわたくしは、此の葛藤の終熄する時期の有無に就てもはなはだ懷疑的となつて居る。

　世界主義であり、また集中主義であることに於て、社會主義者の懷抱する人生觀の個性的基礎は資本主義者の其れと同じく、社會進化の一般型に屬する。其れ故に社會主義とアナアキズムとの間の分裂は、しばしばアナアキズム及び社會主義と資本主義との間の其れよりも、運命的に斷然たるものとなる。知識に於て社會主義はアナアキズムと提携し、資本主義による人間の機械化と人格の掠取とを排擊するであらう。衝動と情緒とを以て統一せられた生活の背景は、兩者の融和を容易には許さないのである。

　わたくしはさきに外面的內面的否定型と外面的擴張型とが社會的進步の中に占める適當の地位と強度とを論じた。今若

し次に外面的擴張型と內面的沈潛型との結合を理論的に考へるとすれば、其等二つのものの結びつきは大して困難のもので無い。そして否定型が擴張型に對し、經過的、手段的の意味をしか持ち得なかつたと同じやうに、擴張型は沈潛型に對し、經過的、手段的の意味より外持ち得ないであらう。

內面的沈潛型の生活樣式こそは、生活の最も現實的なる、また最も具體的なるものだ。沈潛型が、與へられたる資料を飽くまでも醇化し、つゝましやかに享樂しようとすることこそは、わたくし達の生活の眞實の根だ。其れ以外に生活の焦點は無い。社會が其の生活の中より新らたに創造する要求といふものも、じつはかゝる眞實の根の壓迫を其のまゝに表現したものでなければいけない。一般的原理は個別的原理にまで現實化せられる。心的要素としての慾望を選擇し、位序する究極の生活價値座標は、此の內面的沈潛だ。外面的擴張は、活動寫眞の一枚々々の寫眞に相應する。其れを映寫して一つゞきの生活場面をつくることは內面的沈潛に匹敵する。わたくしは內面的沈潛なき單なる外面的擴張にはどうしても賛成することが出來ない。其の意味に於ては、地方主義無き集中主義、アナアキズムなき社會主義は價値の少ないものになると思ふ。マルクスやレニンが其の社會主義の極限地に、立體化せられた生活の理想を置いたことは、社會理想を考へるものに妥當の措置であつた。其れはアナアキズムの生活理想とまつたく同じいものだといつてもよかつた。けれども理想としてのアナアキズムは、經過としての、手段としての社會主義を無視したとき、當然はなはだ無力のものとなる。

內面的沈潛型が同時に外面的擴張を伴はない場合には、其の結果としてニヒリズムを招來する。何故なれば其れは單なる個別性として止まり、なんら一般的なる原理を具現せしめては居ないから。最後に此の沈潛型につき一言して置かなければならぬことは、女性の此れまで歩んで來た生活の形式が、沈潛型に屬して、擴張型では無かつたことである。わたくしは其れ故に、女性の個性は先天的に沈潛型に屬するものだとは言はない。恐らくは女性の生活——特に其れの社會的環境により影響せられた彼等の經濟的地位が、女性へ此の生活の樣式を與へることに大いなる役割をつとめたであらう。しかし其の生活形式の起原は何であれ、此の個性型を持つことは女性として不利なるもので無い。女性は社會的に生活の根を確保するものであるから、いかなる時代にも、其の形式を失はない限りは滅亡しない。女性がすべて外面的擴張の形式を持ち內面的沈潛の形式を失ふことこそは、女性の社會的

生活に一の危機を齎らす。何故なれば、彼等は其時に男性の、或は環境の、あらゆる壓迫に堪へる生活の根を失つたであらうから。

七

かくしてわたくしは、社會生活の中に實在する三つの生活典型の交渉を觀察し、且つ其等に立體的位序を與へる爲方を考へて見た。三つの型典が其れ〲の占める適當の地位を離れず、其れの固守する機能を正しく表現し得たとき、社會には個性の情緒的背景を置いた爭鬪は無くなるであらう。けれども其れが理性によつて説明せられ難き個性の典型の爭鬪である限り、其等が理論で示されたと同じやうに、現實的にも偕調せられ得るものかどうか、わたくしは其處に大いなる疑問を置く。違つた個性の典型が、社會の中で立體的の建築をつくり得るまでには、人間の教育的事業は今と比較の出來ない程高い程度の效果を舉げることが必要であらう。

最後にわたくしが人間の欲望生活につき、特に警戒して置きたいことは、現代の文化を全體的にいろづける外面的擴張の生活形式が他の生活形式に對しかくも專制的な發達を遂げて見ると、わたくし達の文化生活に將來どれだけ著しい危機を齎らすかも知れないといふ事である。其れが實は此の小篇の中で、わたくしの切言したかつた中心點だ。此處でわたくしは始めて、此の小篇の發端へかへることが出來る。人間の欲望生活の危機は、過去數十世紀を懷顧して、恐らく今日のごとくに急なるは無い。

過去の外面的擴張は個人であつた。所謂英雄主義的人生觀が其れであつた。其れが特別に顯著な發達を示した時でも、其の事業はまだ多分に人格的色彩を持ち、隨つて浪漫主義の精神を失はなかつた。そして外面的にどれだけ廣く其の生活を擴張したにせよ、個人の勢力には限りがあるから、其の擴張に比較すれば、未墾の處女地はまだ餘りにも廣く其の視野を展開せしめて居た。然るに現代の外面的擴張は、其れの個人主義的、英雄主義的色彩より脱して、先づ科學と結びつき、また社會的組織と結びついた。其處に出現せしめられた外面的擴張は最早單一人的なるものでは無くて社會的のものであつた。人格の統制を離れ、其れ自身出來るだけ機械的に、また出來るだけ事務的に進行する組織を持つた。其れが所謂產業文明であつた。

わたくし達の所謂產業文明が、其れ自身として見れば甚だ高い程度にまで發達せしめられた。其の組織と機械とを以

て、どれだけ傷ましくわたくし達の人格を物質化せしめ、わたし達の健康と純朴と品位とを傷害したかといふことについては、既に多くの批評家が人類に警告を發したところであるから、わたしは再び其の言葉を繰り返さない。ただ此處にどうしても一言して置かなければならないと思ふことは、其の組織化せられた外面的擴張により、わたくし達が此の限られた地球の上に持つ工業の動力と原料とが、僅かに現代の一二世紀を以て、銷盡せられ、結局わたくし達の後に生れて來る人類の生活へ、永遠の暗黒を殘すこととなりはしないかといふ事である。

現代の外面的擴張の生活を最もよく表現して、外面的擴張といへば、ただ其れを指すとさへ考へられて居る現今の經濟組織が、其れ自身に持つ機構の運用により、生產は出來るだけ大量でなければいけない。生產せられた商品が消費者により購買せらるゝと否とには關係無く、とにかく生產の大量なることは、現今の經濟組織の壞滅を防ぐ唯一の安全瓣だ。然るに其の生產品が購買せられなければせられないだけ、經濟組織を壞滅に導く壓力も強く加はつて來るから、生產の大量は一度加速度的に增加する。此くしてわたくし達は、到底對照の取れないほど大量の商品を、至るところの店舖と倉庫と工場の中に持ち、なほ其等の商品を無意義に堆積せしめ、彼れより此れへ流通せしむるために、都會と商業の發達は加速度的に進んで居るのである。

然るに此等の夥だしい商品の中に、既に加工せられ形式化せられた動力と原料とは、此れ亦實に巨大の分量に達するものと言はなければならぬ。動力と原料とは、其のすべてが此等の商品の中に表現せらるゝものでは無く、消費せられた動力と原料との僅かに幾割かが其中に固定せられたに過ぎない。然るに此く消費せられた動力と原料とは、地表の持つ動力と原料との素材に比較せられゝば、此れ亦其れの僅かに幾割かに過ぎないのである。現今の經濟組織が商業主義により導かれて居る限りは、右の如く、地表の持つ動力と原料とは、其上に非常に空費の多い消費の爲方が取られて居るのだ。其れの顯著なる實例として、たとへばわたくし達は鐵と石炭とをあげることが出來やう。今日の石炭採掘の爲方を以てすれば、專門家の計算したところでは、商業の顧慮なしに採掘せられたる石炭の分量に比較し、僅かに其れの五十パアセントが商業的に採掘せられて居るに過ぎないといふ。

此等の商品が一旦生產せられゝば消費せらるゝ時まで、永遠に其の品質を變へないで居てくれゝばよいが、およそ減價

するものの中で、商品ほど急速に減價して行くものは無い。今日店舗と倉庫と工場との中に、人類より消費せられず、空しく堆積せられて居る商品は、わたくし達が其上に一指をだに觸れない間に、一分、二分、五分、一割と其の價値を減少せしめて行き、結局は其の商品の中の極めて僅少なる部分がわたくし達に消費せられ、其他は空しく廢棄せられるのだ。專門家の計算に隨へば、現在の人口につき其の生活を支持するに十分なるエネルギーは、現に費消しつゝあるものの、僅かに十分の一だといふ事である。

　此の恐るべき物質的濫費をわたくし達はいかに處理すればよいか。わたくし達が現在の程度の物質的享受をなすために、地表の持つ動力と原料とに此くも巨大なる分量の費消を加へるとすれば、其れだけづつわたくし達子孫の享受すべき物質的快樂の分量は減少せられて行く。こゝに注意すべきことは、科學はどれほど著るしい發展を遂げたにせよ、科學の力を以て動力と原料とを生產し得ないといふことと、一旦行はれた化學的變化は、其れの可逆的變化の全く不可能なるか、或は甚だ困難なる方面に向つて進むが故に、消費せられた動力と原料とを舊態に恢復する途は、今後益々困難になつて行くことである。

　わたくし達の生活を、全體的に特色づけて居る外面的擴張の樣式に、大なる危機の逼つて居ることはもはや疑ふ可くもない。わたくしは先きに此の生活の樣式の昔の形態と今のそれとを比較し、其れが個人主義なる形態より社會的に組織立てられたものへ移て來たことを述べた。しかし其の組織が、共同社會の福利の見地より、社會的に統制せられるところまで社會化せられ、組織化せられて居なかつたことは、人類の社會にかゝる不幸を齎らす根本の理由であつたと言はなければなるまい。わたくし達の社會が將來取るべき社會組織への努力が如何なる形式を持つべきかは、此等の事實を正視することにより幾分は暗示せられ得ると思ふ。

　しかしそれもなほ根本的なる人生觀の問題だ。わたくし達の欲望を處理し、位序し、選擇する價値的樣式の典型に反省を加へて、各位其等に妥當した地位を與へることだ。人類を救濟するものは、じつにまた人類以外には無いのだ。

（一九二四、四、二三稿）

女性改造

文藝講演五講

藝術の内容とは何か……………里見弴
三十分間程……………佐藤春夫
ユーモアの話……………岡本一平
文壇に對する或る不滿……………千葉龜雄
批評に就いて……………片上伸

藝術の内容とは何か

里見弴

小説を書くに致しましても、かういふ大勢の方の前に出てお話を致しますにしましても、第一にまづ自分にかういふ事が書いてみたい、かういふお話がしてみたいといふ氣持がないかぎり、決していゝ小説も書けなければ、またいゝお話も出來ないので御座います。私はこれまで、講演を致しますのに、いつも草稿のやうなものは持ちませんで、會場へ參りまして、そして一緒に講演する方やなんかと雜談して居りますうちに、おのづと話してみたい氣持にもなり、また言はふと思ふことがはつきりと掴めて來るのです。そこで、ほんの即興的な心持でお話を始めるといふことにきめて居りますのですが、實はこの頃少し健康を害して居りますので、その故か何か、大勢の方の前に出ましてお話をするといふやうな事が、全くこれまでに憶えのないほど、大へんに厭はしい氣が致して居ります。で、實は今朝になつて、急にお斷り致したのです。主催者の女性改造の方には大へんお氣の毒とは思ひましたが、假令首ッ玉に繩をかけて演壇へ引ッ張り出されても、一言も口が利けさうもないほどいやでたまらないから、とまで書きましてお斷り致したのです。そしてお迎ひでも頂きますと、性來事を好まない私のことですから、矢張り心弱くも出かけて行くやうなことにもなりかねないと思ひまして、早朝家を出まして、居所をくらまして居りました。（笑聲）所が改造社主の山本實彥君に探偵以上の手腕があつた爲めに、賴

みつけの自動車屋から足がつきまして、遂に隠れ家を突き留められてしまひましたので、仕方なしに出て會ひますと、いろ〳〵言葉を盡して、私が今日になつてすつぽかすことの不心得を諭されましたものですから、それに私が出ないと入場料の割戻しをしなくてはならない、それにはそんなに澤山の小錢もないから、とかなんとか、いろ〳〵と不都合を並べ立てられまして……（笑聲）御迷惑をかけることは、無論斷る時から判ツてゐた話なんですけれど、それをまた縷々陳述されたものですから、餘程お斷りしたかつたんですけれど、とう〳〵自動車に乘せられまして、たつた今、出先からぢかにこちらへ拉し去られて來たやうな次第でして、そのために、實は袴さへもはいて參りませんで……（笑聲）……ですから、最後に此處で御講演なさる江東千葉龜雄さんのお＊



＊召料を拝借致しまして……（笑聲）……さういふ譯ですから、平生から講演は上手でないが上にも今日はまた特別お聽きづらいことだらうと思ひます。もう一つ序に白狀致しますと、昨晩、何を話すかといつて演題を聞きに女性改造の方が見えた時から、すつぽかしてしまはふと云ふ意見だつたもんですから、――併しさうかと云つて昨晩のうちにそれを明してしまふと、いろ〳〵手配されてしまつて、うまく逃げ終せるかどうか解らないと思つたものですから、矢つ張り出てお話をするやうな顔をして『藝術の内容とは何か』といふやうな題を申し上げて置いた次第です。どうもかうなつては仕方がありませんから、矢張りこの題で少しばかりお

話を致します。多分まづいだらうと思ひます。今日は非常に頭が纏つて來ない。頭が纏つて來ないつてのはをかしいが……つまり考へが纏つて來ないので、……この通り變なことばかり言ふ頭なんですから、どうかそのおつもりで……（笑聲）

そこでこの藝術の內容といふことに就きましては、私はだいぶ以前から講演も致しましたし、また書きますものでは、幾度となく同じやうな事を繰返して、時には菊池寛君などとも大に論爭致したことも御座います。ですから、皆樣の中には、或は私の內容といふものに就いての考へも、既に御承知の方があるだらうかと考へられますが、さういふ方には殊に「復か」の感がありませうけれど、それは豫めお許しを願つて置きます。

で、藝術の內容とは何か、――これは苟も藝術に携はる人々が、誰でも熟考しなければならない筈のことで、皆銘々に考へを有つて居るのであります。亡くなられた夏目漱石先生なども、藝術の內容といふ事に就ては、いろ〳〵結構なお考へを發表して居られます。既に御承知の通り、眞、善、美、崇嚴といふ、この四つのものを擧げて、藝術の內容たるべき理想であらう、と云つて居られます。眞といふのは、說明するまでもなく、本當の事を書かなくてはいけない、善は、人の心持の善が、――いゝ心持が、善意が無ければならない、それから美、美しくなくつちやならぬ、崇嚴でなくつちやならぬ、――と云ふ風に、この四つのうちのどれか一つに當はまらなければ藝術の內容にならない、――大體まあさういふお考へだつたのです。併し、これだけ云つたのでは、大へん考へ誤られ易くはないかと思ひます。そこで私は、――これは何も夏目先生に敢て楯つく意味ではなく、甚だ潛越ながら、敷衍する意味でお話するのでありますが、藝術上の眞とは、たゞ實際あつたことといふやうな意味のものでは勿論ないのであります。現にオスカー・ワイルドなどは、噓をつけばこそ藝術だ、といふやうに述べて居ります。これはどちらも本當で、夏目先生の言はれたことにも、オスカー・ワイルドの言葉も、よく考へてみれば、決して矛盾はしてゐないのであります。たゞ言ひ表し方が違ふだけで、つまり眞理の兩面とでも云ふべきでせうか。寫眞と繪とが違ふやうに、――寫眞の眞と、繪畫の眞とが違ふやうに、たゞ實際のことを書くといふのでは、文藝上の眞にはならないのであります。若しそれでよいものならば、日々の出來ごとをそのまゝに報導する新聞、――あんまり「そのまゝ」でもありませんが、――隨分いゝ加減なヨタばかり書いてるものですが、兎に角眞の理

想を滿たしてゐる點で、新聞記事などは立派な藝術品でなければなりません。ところが、如何に突飛な空想を書きましても、それで立派に眞を寫してゐる場合は、藝術品には澤山例のあることです。精しく說明しだすと長くなりまして、到底お仕舞まで話しきれるかどうか判らなくなりますから、まづこんなことで判つて頂けたものと認めまして、次に善ですが、これは、作品中に善い人ばかりを書かなくてはならないといふ意味ではありません。惡人や奸計惡事を描いては藝術にならないかといふに、決してさうではない。惡人を主人公にした小說なり戲曲なりで、立派な作品はいくらも御座います。これもつまり作家の心持から、――作家の創作心理から言つての善でありまして、よき心をもつて描かれなければならない、といふほどの意味なのです。美に就ても同じ理合です。たゞ美しい話を書けばいゝといふやうな、淺薄な意味でないのでありまして、例へば、ロダンのヘルメット・メーヤーといふ、かなり年とつた女が、背骨を露に俯いてゐる彫刻などでも、あゝ言ふ、普通の意味では決して美しいとはいへない。寧ろ醜い肉體のうちに、常人には發見しにくい美しさを感じたのが、ロダンの偉いところなのでせう。或は繪畫にしても、汚らしい掃だめなんぞ書いては繪にならないかと言ふに、決してさうではなく、普通の人が描いたら汚ならしいものでも、そこに作者の眼が、本當の美を見出しさへすれば、きつと立派な藝術品が出來上るわけなのです。たゞ本當に美しいと思ふ實感の深淺だけが、批判の標準になつて來るのであります。崇嚴に就ては、この上繰返して同じ道理を申上げるまでもなからうと思ひます。そこで、更に私が考へますには、唯今御紹介致しました夏目さんの仰有つたところの眞、善、美、崇嚴が、藝術の理想であることに間違ひはありませんけれど、私と致しましては、もう少し大づかみにお話したいのであります。

　さて藝術の姉妹の中では、文藝が一番思想が入つて居るのでありまして、直接心臟にうける感じよりも、理性の判斷といふやうなところへ持つて行かれがちです。つまり、智的の要素が一番餘計に含まれて居るので、そのために、內容といふやうなことなども大へん誤られ易くなつて來るのであります。ですから、却つてこれをほかの藝術に就いて考へてみる方が、きつと早わかりがするだらうと思ひます。假に繪畫で考へてみますと、歷史畫といふものがありますが、ネルソンがあの有名な最期の言葉を口にしてゐる所だとか、日本畫の方なら、楠公父子の湊川の別れだとか、或はまた寺の緣起の

やうなものだとか、さう云ふ繪に就いて、普通に考へてゐる所によりますと、楠公父子の訣別なら訣別と云ふ事實が、その繪の内容のやうに見られてゐるし、緣起などなら、かう〳〵いふ坊さんがかう〳〵言ふ奇蹟を現はしたといふやうな事實が同じくその繪の内容として考へられ易いのであります。が、申すまでもなく、それは間違つてゐるのです。もしそんな考へが正しいと致しますなら、建築などはどういふことになつて來るでせう。例へばかう云ふ講堂ならば、人が大勢集つて、音樂や話でも聽くとか、物を見るとか、さういふことに都合がよく出來てゐさへすればいゝ――つまりそれがその建築の内容だ、と云ふことになつて參りますが、それはとんでもない大間違ひなのであります。その理由は、說明するまでもなく、既に皆さんはよくお解りのことゝ思ひます。それが、文藝となると、一寸解りにくゝなつて來る。建築の場合と同じ誤解をそのまゝ當嵌めて考へてみるならば、文藝の内容といふものは、作品中に含まれて居る思想であるとか、或はテーマであるとか、問題とか、更に下つては一篇の筋であるとか、さういふものを指すよりほかはないのであります。それでは、前に申した湊川の繪を見て、楠公父子が別れを告げるといふ事實をもつて直ちにその繪の内容だと考へるのと、丁度同じ程度の理解、鑑識なのであります。他の藝術では、いくら素人だつて、いまどきその程度の理解や鑑識ではとても通用しないのですけれど、一旦これが文藝となると、素人はおろか、どうかすると堂々たる作家でさへも、平氣でこの謬見に安住して居るのであります。今度はまた建築の方で考へてみましても、五重塔の如きものは、あれは一體どういふ意味で建つてゐるかといふに、一山の僧徒が遠くからでも望み見て、始終敎への事を忘れないためださうですが、僧侶に限らず、俗人のためにも、大に宣傳の役に立つてゐるでせう。つまり仁丹やなんかの廣告塔と同じ意味合なのですが、その意味合を以てあの美しい建築物の内容と考へられては、とてもやり切れません。それアたゞ遠くから見るといふだけが能事ならば、瓦斯タンクや國技館なんぞの方が、五重塔より餘程内容豐富な建築物だとも云へる筈です。それから、皆さんも御承知でせうが、宇治の鳳凰堂なんてものは、誠に心持よく出來てゐますけれど、――あれは一體鳳凰の形をそのまゝ象つたものださうで、兩方へ翼のやうに、翼廊といふものがございまして、奥へ向いて尾廊といつて鳥の尾羽根を象つた廊が續いて居ります。眞ン中の、つまり鳥の胴體にあたるやゝ廣い場所だつても、別段なんの役にも立ちさう

にはありませんが、殊に郎と來たひには、私のやうな脊の低い者でも、所詮立つては歩けないほどで……（笑聲）……脚柱は可なり長くなつて居りますが、天井は誠に低い。あんな、なんの役にも立たない建物に、莫大な金をかけたのも、なんのためか、――もし目的といふ意味での内容を求めたならば、この鳳凰堂の如きは、その價値、正にゼロなのであります。所が、たゞつくぐ〳〵とあの建築を眺めてゐますと、非常にいゝ氣持になつて來ます。大へん美しいものに感じられて來ます。それは貴方方が行つて御覽になれば、きつとすぐお解りになることだらうと信じます。理屈なしに、たゞもう大へんいゝ心持になります。私のいふ藝術の内容とは、つまりそれです。見ていゝ心持になるといふのが、それが取りも直さず鳳凰堂の内容なのであります。あれをあすこに建てた人の氣持はよくは存じませんが、恐らく初ツめからさういふ内容を意識してゐたらうと思はれるのです。――つまり、美しくさへあればいいと云つた氣持の仕事だつたに違ひありません。さうでなくて、あんな變なもの、外になんの使ひ道もありやしません。物置にだつて使へやあしません。繪だつて同じことです。セザンヌの繪などには、よくかういふもの（卓上フラスコを指す）だとか、林檎が二つ三つ轉つて居つて、その下に布が敷いてある。それも凸凹に敷いてある、と云ふやうなのがあります。それを、楠公父子の袂別をそのまゝ繪の内容だと解する程度の低能さ加減で評するひとなれば、全く無内容だと云へるでせう。林檎やフラスコやテーブル・クロスなんぞ、どう考へたつて、別に人生に對して切實な交渉なんぞありさうにも思へません。そこで、よく、もつと人生に直接に觸れて來るやうなものを描いたらよからう、といふやうな議論が出て來るのであります。先刻も申す通り、有繫に繪やなんかの方では、今ごろそんな愚論を持ち出す人もありませんが、文藝となると、これが全く別天地の有樣です。現に菊池君などは、實人生に見出される切實な、光輝ある題材をテーマとしてゐない小說なんぞは、あつてもなくても同じだ、といふことを言つてゐますが、それでは、私などには、甚だ狹苦しく感ぜられまして、兼てから大反對であります。あんなことでは、所詮セザンヌの繪などは解らない。解らなくつても構はないと云ふでせうけれども、それでは廣く藝術といふものゝ觀賞も出來ないわけだし、從つて作家としての立脚地だつてあやふやなもんぢやないかと思ふのです。

で、以上、結論の方から逆にお話を進めて參つたやうな態ですから、もうこの上あらためて申上げるまでもないかと思

ひますが、もう一應ひつくり返して申しますと、つまり文藝の内容といふものは、その小說なり戯曲なりの中に取扱はれてゐる思想や問題でもなければ、テーマでもなく、尙更筋やなんぞではありません。私の書いてるものにも、かうみえて中々思想がゝつた――時には露骨に道話的なものもありますけれど、それは自分では寧ろ邪道と心得て居ります。たゞ併し、ほかの、音樂ですとか、繪畫ですとか、建築ですとかいふ姉妹藝術と較べて、はるかに智的な鑑賞、――讀者の側から言へば觀賞ですし、作家の方から申せば考察、理想、と云ふやうなことになりますが、それに著しく智的な要素が多い。ですから、漠然とした美しさだとか、漠然としたいゝ感情だとかいふものでは、書く方でも讀む方でも、なんとなく慊らなくなつて來る傾きは慥にあると思ひます。

そこに何等かの問題、テーマでももつて來なければ、力瘤の入れやうがない、といふ風な氣にもなり易いわけです、然し、それのみでは本當の意味での内容にならないことは、どんな理由があらうとも、依然として姉妹藝術の場合と同じ道理です。それぢやあ何が文藝の内容であらうかといふと、私の言葉で言へば、作者の魂、といふことになるのですが、大正の聖代をも憚らず、魂なんて言葉を持ち出すもんですから、兎角舊時代扱ひをされまして、毎度近代的青年諸君からは、輕蔑やらお叱りを受けてゐる次第ですが、なに私だつて「全人格的の活動」とでもなんとでも、言はうと思へば、今樣の言葉を全然知らないわけぢやァありませんけれど……（笑聲）……まア大體さういふ風なものでありまして、つまり私なら私といふ人間そのものが、私の作品の内容を成してゐるのです。藝術家の、廣い意味での生活、それが取りも直さず藝術品の内容なのです。自分の考へた問題が内容ではなくつて、考へた自分そのものが、いつでも、どの場合でも、必ず内容になつてゐる。――かういふ風に私は考へるのであります。ですから、私の書いた作品が惡作だつたとしますれば、その中で取扱はれた思想とか問題とか、或はテーマ、さういふものが惡かつたからではない。俺はつまらない問題を書いちまたんで、ついあんなまづい作品を拵へて了つた、などゝ言つて逃げる譯にはいかないのであります。思想の新舊、問題のよし惡し、筋のどうかう、――そんなことは問題ぢやありません。段々私が惡作をいたすとすれば、その時の私が、――私の存在全部が惡いので、扱はれたものや、その扱ひ方に罪を歸することはないと思ひます。ですから、藝術

家と云ふものは、一作ごとに自分の魂を公開してゐるやうなものでして、誠に辱いとも云へるし、穴があればはいりたいほどお恥しいとも云へる境涯なのです。

かう云ふ問題で、油が乘つて來たら、いくら喋り續けたところで、これで話し盡した。と云ふ氣はしない筈のものですが、今日は非常に話がまづい、いつもはこんなでもないんですけれど……どうもちつとも氣乘がして來ませんから……本當を言ふと、山本君の言ふには、何も喋らないでもいゝから、一寸顏だけでも出して、それで歸つてもいゝから。といふ話だつたんです、それをこれだけ喋つたんですから……非常にいやなのを、一生懸命我慢してやつたんですから……あんまり面白くもなく、それに解りにくかつたかも知れませんが、せめて私の苦衷を買つて頂いて、それではこれで御免を蒙ります（拍手）あ、一寸待つて下さい。もう少し、もう一言いはせて頂きます、つまり、今日こゝでお話した內容は、それでは何かと言ふと、――それを例にしてもう一言附け加へたいのですが、先程から私はいろ〳〵話をしたそしてそれを聞いたみなさんが、くだらないと言はれるか、名論卓說だと思はれるか――あの考へは間違つてゐるとか、あれはうまいことを言つたとか、いろ〳〵と批判なさる、その今日の講演の題目が、決して內容ぢやない。私が此處へ出て來て嫌々ながらも兎に角話をした、その私と云ふものの全體が、今日の私の講演の內容でありまして、それによつて、諸君が不愉快されたとすれば、どうもそれも私の至らないためで、話の筋が通つてゐるとか、ゐないとかいふことに關係なくなんとも致し方のない次第なのです。その代りまたよかつたで、これとても話された事實の、――考察のよしあしではなくつて、私全體のよさなのです。つまり、よかれあしかれ私の心持、私の全人格的の動きが、諸君に與へた感じ、それが今日の講演の內容であると云ひたいのであります。……えゝ今度こそ本當におしまひに致します。（拍手完）

三十分間程

佐藤春夫

……實は私は何にも考へて居りませんので、ほんの三十分程、何をお話するか判らないんですが……兎に角、皆さんの前で、何か、思ひついた事をどん〳〵喋舌つてみやうと思ひます。即ち三十分間ほど諸君の前で私の生活をお目にかけます。つまり、まあ、斷頭臺で囚人が三十分程どんな恰好をするか——見ものとしたら大變面白いかと思ひます。その代り耳の方は、面白くないだらうと思ひます。併し、斷頭臺の囚人などと云ふ言ひ方は、餘りロマンチックです嘘ですな。それよりか、寧ろ動物園で、猿が動いてゐる所を見るとお思ひになつた方がいゝかと思ひます。ところで此處へ來て、皆さんのお話を一寸伺つてゐたり演題を拜見したりすると、中々いろんな立派なお話をなさるやうで、私も、何か考へて來ればよかつたと、今さら後悔して居ります。併しどうせ考へて來たにしても、いづれは同じやうな、今のやうなつまらないことをしか申上げられまい。だから、出まかせを話します。たゞ困つたことには、三十分話すには材料がなか〳〵いりますな。それは今氣が附いたのではなくて、此間頗るまづいドラマを書きました。非常に長い臺詞があるので困りまして、一體舞臺でどれ位かゝるかとゆつくり讀んで見ました。所が書いて十二三枚もあるやうな臺詞が、ゆつくり讀んで六分か七分で濟むんです。さうしますと、三十分間話すとすれば、……何枚位になりますかな。昨日も「改造」の方が見えて、

私がこんなところへ立つのは始めてゞありますし、話はどんなことだつて心配して下さるから、なアに壇上に立てば何かしらん云ふことがあるだらう。——俺はエライからと申上げたんです。所が餘り偉くないと見えて、かうして立つて見ても何にも浮ばないのです。此處で谷崎潤一郎君の先例に倣つて、何も言ふことがなかつたからこれでまあ顔でも見て置いて下さいと言つて、ここらを三べん廻つて引つ込むと大變都合がいゝんすが、もうすでに先覺者があつて、さういふことをやらうと思つても、模倣者になつてしまふ。私は何ごとでも人眞似はいやですからそれもやめる。仕方がない私は勇を鼓してもつと喋舌り續けます。

昨日『改造』の方がおいでになつて、何を話すつもりだつたといふので、何か思ひ當ることがあるだらう。例へば明日の朝新聞でも讀ん＊



＊でる中に思ひつくこともないと限らない。その時でも話題をきめよう。さう言つて打つちやらかして置いたのです。所が今朝新聞を見ると佐藤春夫といふ活字が目についたですね。時事新報の文藝欄に中村武羅夫君の書かれたものです。そのことを今思ひ出しましたから、一つそれに就て諸君に聞いていただきませう。——題目だけはやつときまつたわけですね。——が、かういふ樂屋話などは苟くも講演會の演壇に立つた文士の口から言ふには、あまり貧弱な——つまり世間話だ、一かどの文學者としては、なにかもつと偉い、たとへば文學の本質とは何ぞやとか言ふやうな、偉さうな——又事實偉い話をした方がいゝのですが、御承知のとほり私

は無學で、とてもそんなことは駄目ですからそれは御免蒙ることにしてありますから、――つまらない世間話をどん〳〵あま續けますが中村君の言はれるのは、我々が雜誌「隨筆」などにものを書く時には調子を下げて、氣を拔いたやうなもので御役目を名ばかりに果すくせに、いざ、大資本の改造や中央公論に書く段になると精一ぱいに努力した作を發表する。これではまるでジヤアナリズムの家來ぢやないか、そのくせ彼等、流行作家なるものは平常口さきではジヤアナリズムの惡口を言放つてゐる。――それくらゐならば、なぜ文學者自身が經營する同人雜誌を尊重してその爲めに力を盡すといふだけの考へがないのだ。口さきばかり利いた風なことを言ふな。一たい現代の流行作家などといふてあいはみんなこのとほり、一片耿々の心を持たぬ。――と、中村君はまづかう言ふので、その一片耿々の心を持たぬ奴の一例として、この佐藤春夫の名が出てゐるので、いやはや、不名譽極ることであります。――私はそれに就て私の考へを述べる。と、言つて、私は中村君にそんな惡口を言はれて怒つてゐるのぢやありませんよ。世間ぢや私をよつぽど神經質な世評を氣にする馬鹿だと心得てゐられるやうですが……。

實は中村君のこの說だつて、今朝始めて知つたのではなくつて三四日も前に、同君と面會した時に、私と彼との間にこの話題があつたのです。だから、今朝新聞で見て來たやつが今だに氣にかかつて諸君の前で辯明を試みやうといふやうな、淺ましいのぢやないつもりです。又、私は中村君の說に對して辯駁を試みやうともするのではないのです。先日、中村君に向つても私は言つた事ですが、一たい流行兒といふものはジヤアナリズムがつくるものなので、だからしてジヤアナリズムに不忠實な奴は流行兒にならない理窟で、從つて流行兒たるものが、ジヤアナリスティックになるのは、甚だ自然な事であります。たゞどうも、私そのものが流行兒の代表になり、一片耿々の志なき手合の見本になるのはちよつと閉口ですな。果して私がそんな連中であるかどうか、そいつを私は自分で一つ考へて見よう。まだ考へてないから、これから諸君の前でゆる〳〵考へて見ようと思ひます。

實際、私は、中村君が口幅つたいと言はうともジヤアナリズムは嫌ひですよ。ジヤアナリズムの雜誌――、商賈主義の雜誌のために書くことは絕對にやめたいなどと思つたことさへないではありません。しかし、この點で私は、夏目漱石先

生に數へられたのであります。――漱石全書を讀んでごらんなさい。と、いつて第何卷のどんなところだか忘れてしまひましたが、あることだけたしかにあります。漱石先生曰く、一たい藝術の爲めに書くとか何とか言つて藝術的、藝術的をふりまはしてゐる作家や作品ほど嫌味なものはない。例へばダンヌチオなどを見るがいい。その氣取り方は鼻持がならないではないか。そこへ行くとシエクスピヤなどの方がどれだけ本當に藝術だかわかれやしない。しかもシエクスピヤは、決して藝術藝術と、藝術をふりまはした藝術的藝術家ではなかつたのである。劇場のために、その劇場が大入滿員をしめるために、しかも初日に間に合ふやうに大急ぎで書いたのがシエクスピヤのドラマである。ところがその出來榮の點ではどうだ！筆をとる時には、見物の爲めだつて、ジヤナリズムの爲めだつて或は金の爲めだつて、その他の何の爲めだつて關やしない。たとひその出發點に於て何の爲めであるにしろ、作者が眞に天分がある場合には、その最初の動機などは吹つ飛んでしまつて、彼の感興は益々冴え渡つて、そこにそれこそ本當に藝術が出來る筈だ。態度の如きそも〱末の末。と、夏目先生は、まづそんなことを言つてゐるやうに覺えてゐる。この言葉は私には大へん有效でした。私はこいつを便利に應用したのです。――で、私はジヤナリズムの爲めでも何でも書くのです。つまり讀者に滿足して貰ひたくて書くのですね。だが、一たい、誰が讀者だかわからぬ。そこで自分が一つ讀者になる。自分の書いたものを一つ活字にしてそれを自分が讀者になつて讀んでみる。さあ、初めはなか〱活字にはしてくれない。だが、そのうちに活字にしてもらへると、自分といふ讀者は滿足しないのに、世間の讀者はどうやら滿足してくれたらしいのです。さて、これからです、商賈繁昌で方々から書け〱と言つてくれる。

言つてくれる――といふと感謝してゐるやうですね。さう、感謝しないではない。が、考へると隨分とジヤアナリズムといふものに腹を立てる時もありますよ。だつて、初めて私が活字にしたいと言つてあせつたところにはどうです。私が頭を下げまはつても――私は頭が下げることは好かんから、あまり方々へまはりはしませんでしたが、それでも三べんや四へんは、方々の雜誌へ賴みに行つた事がありますね。さてその時は、どうだつたといふと、一たい編輯者は讀んで見てくれたものやらどうやら知りませんが、一向とりあつてくれさうにもない。それが急に、こんどはふとした機みで、先方か

ら書け〳〵と云つて來る。非常に愉快なやうな、同時に甚だ迷惑なやうな話で、かういふ點でも私はジャナリズムに根を持つてゐますよ。書きたいと言つた時には書かせてくれなかつたくせに、今では書きたくないと言つてもなか〳〵書かせないでは置かない。强ひてといつて頼む上に、おまけにお金をくれるのですからな。だれだつてちよつと書きませうといふ氣になりますよ。またこの講演にしたところがですね、お前の講演は珍らしいから一つ出て見ないか、顔を出しただけでいい。二十分でも三十分でもいい。これ〳〵のお金をやるぞ。どうだ、ちよつとでいい。やつて下さいね。と言つてお辭儀をされると、やつて見る氣はなくつてもついうつかり騙されるのですね。原稿の場合とても同じことで、書けと言はれる。出來さうもないと言ふ。でも書けるでせうといふ。五六ぺん押問答をしてゐるとつひ書けるやうな氣になる。で書いてみませうといつてしまふ。さあ、もうかうなつてはおしまひです。向ふは約束だからどん〳〵取りに來る。ところがこちらでは、いくら約束だからと言つても不思議に感興といふものは約束どほりに浮ぶやうな仕掛には出來てゐないものと見えて、ちつとも書けない。併し書けないでは濟まない濟ましたいが濟ませてはくれない。あすの夕方の六時までにはせめて十枚ぐらゐとか、いざ明後日こそ本當の〆切——本當の〆切、嘘の〆切とある程ですがね——だからとか、約束どほりどん〳〵征めかけて來る。仕方がない、自分では何を書いてゐるのだかよくわからない、讀み返して見ないうちにでも渡してしまふ。何を隱しませう！かういふ風にして出來るのが我々の作品なのであります。それを皆さんが、我々の感興が汪溢してあんなものが出來たと思つてごらんになるのですからお氣の毒千萬といふことになる。

自分の事ばかり申しますが、私はこの四五年間殆んど滿足な時間を費して作をしたことはない。さうして作をするより以上に編輯者をごまかすのに苦心するぐらゐなものです。氣が乘らないところへ、〆切日が來る。精一ぱいで一日にやつと三枚だけ出來た、など、といふ。一日に三枚とは實にえらい努力だとお思ひになるでせうが、さうぢやない。氣が乘らないからぽかんと遊んでゐる。さう正直に言つたのぢや編輯者がおこるから、その三枚といふのも實は三時間ほど前から机に坐つて書くのであります。尤も書いてる中は矢張り机に向ふと向はざるとに拘はらず考へては居りますね。ええ、少し長いものになると作中の出來事や人物を夢に見たりしますね。しかしこれとても矢張り、作品に對する非常の苦心の

結果とお思ひになつて下さるには及びません。恐らく私の神經衰弱のせいだらうと思ひます。これが現今の作者生活であります。で私は、かういふ境涯から逃れてしまつて、自分の書きたいものだけ書き、嫌なものはどん／＼斷はる。情實なしに斷はる。さういふふうにやれたら嘸よからうと思ふ。之は必らずしも藝術的忠實といふことではなく。もつと我儘な嫌なことをしたくないといふだけの事なんです。實際今のいまでは閉口です。切角、夏目先生のお言葉ながらこれぢや疲勞しますよ。さういふ意味で私は嫌應なしに書かせずには措かないヂャアナリズムの弊害に就ては中村君などにも時々言ふのであります。併し中村君などは實にうまい事を言つて、私の方の言ひ分をとほしてくれない。言ふのです――理想は理想として、しかし作家のそんな言ひ草に耳を供してゐたのぢや雜誌は出來ない。そんなことを言はずに、始めはいやいやで書き出しても油が乘つて來て傑作になることもあるのだから、して見れば我々編輯者――中村武羅夫君は御承知のとほり「新潮」の編輯者であります――は時には難産の助産婦位の役には立つてゐると思つて、ともかくも書け。といふ。是が非でも、頼まれて書かなければ文士道に反するやうな口吻である。成程、渡世には差支へるかも知れないが文士道に反する筈はないのだが、それでも私などは一つは氣が弱いのと、一つは面倒なのと、最後にはそんな我儘の押しがきかないせゐで、つひまたひきうけさせられてしまふ。それで例のメ切日近くになつて大急ぎで仕方なしにとりかゝる。そんなわけだから、調子も下がりもするし、擲り書きのも出來る。くだらないものを書いてジヤナリズムの惡口を言ふことになると、中村君の言ふことにも無理がない。併し私の方から言ふと私の方にも無理がないと思ふ。諸君がお聞きになれば多分兩方とも無理なのでせう。どつちが無理だか知らないが兎に角困ると思ふ。非常に困ります。所がどう云ふことを標準にして書く書かないの約束を、作家と雜誌編輯者とが取結ぶか。取結んだらいゝだらうか。――予はかく／＼の主張がある故に、君のところの雜誌には書かない。または君のところには書く。かういふことをきめるはつきりした標準があつたらきつとよからうと私は思ひます。――で、私の今の頭にも必ずしもそれはないことはない。またそれによつて實行してもゐる。まあ第一には毎月雜誌を送つてくれる雜誌には書く。編輯者と親交のある雜誌には書く。――これは友達づきあひです。それからもう一つ、これは何も仕事をしない時でもこちらからたのむと金を貸してくれる社の雜誌には書く。

――まあ親類づきあひですかな。改造社などは大へん仲のいゝ親類で、實は今日こゝへ出ることを斷はらなかつたのも親類づき合ひの義理であります。その代りには白狀しますが明日にでも出かけて行つて、敷金を借りたいものだといふ肚があるのです――尤も貸家はまだ見つけてはいません。近ごろはどうも貸家拂底ですね。ええ、皆さんの御近所にどこかいゝ貸家は御座いますまいか。もし御存知のお方はちよつと御教へ下さると非常に感謝しますよ。――で、冗談はそれとして、肝要な話は、どんなところまで進んでゐましたつけね。さうさう。私がもの書く雜誌ですね、そこと私とがなぜさういふ約束をするかといふことでしたね。――それが今も申し上げたとほりの極めて現實的な、ちつとも理想のないことになつてしまつてゐます。――なる程、これではいけない。何かもつと理想的な標準がなくてはいけない。――そこで中村君に從うと、ジャアナリズムに惡態をつくつもりなら、せめては雜誌「隨筆」のやうな作家達自身が編輯してゐる雜誌に書く場合に精一杯の仕事をして見せるのが當然ぢやないかといふつもりらしいのです。いかにも一應尤もであります。――一應だけですよ。

私の兼ねてからの說でありますが、雜誌といふものは編輯者の人格の反映であつてもらひたいのです。つまり雜誌は商品ではなく一つの人格的創作、或は組立であつてもらひたいのです。即ち、雜誌編輯者も亦、商賈主義に反抗して人格主義でいてもらひたいのです。さうして筆者と編輯者とは人格的の結合でありたい。これが私の雜誌編輯に對する理想なのであります。――例をとつて申しませう。武者小路實篤君は人格的な人です。――何をするにつけても彼の人格を反映させずには描けない人です。この武者小路君が、假りに雜誌をやるとする。さうして武者小路君が自分の雜誌に私にものを書かせるとする。――即ち、佐藤春夫といふ男の書くものはいくらか増しだから一つあの男に書かせてやらうと思つてくれる。そこで私が書く。武者小路君が讀む。賴んだだけの事があると思へば、そこで私の作をそこへ出すことになる。ところが、私の書いたものが何かの點に於て武者君に滿足させ得なかつたとする。すると武者君は、「佐藤君、折角、君に書いてもらつたけれどもこの作品には僕は同感しがたい。こんなものを書くだらうと思つて、僕は君に賴んだのぢやなかつた。殘念だがお返しする」「どうして惡い」「かく〱の點がかく〱の理由でよくない」「なるほど、それぢやもつとしつ

かり勉強していゝのが出來たら出して貰はう」或る場合には、私はさう言つてその原稿を喜んで——あまり喜びもしないかも知れないが、ともかくも理のあると自分も認めるところに從つてその原稿を引込める。或はまた私は「いや武者君。君がさう言はれるけれども、それは私として精一ぱいの努力をしたもので、出來上つてからも自信を失はないものなのだよ。それがつまらないといふなら君には藝術はわからないのだ。尠くとも僕の文學はわからないのだ。君も僕のものを君の雜誌にのつける事を屑しとしないさうだが、僕の方でも御同樣だ」とかう言つて私は腹を立てて、原稿を引きとる。——と假定しますね、私は腹を立ててその以後、武者君の賴みには應じなくなる。乃至は武者君の方で私に見きりをつけてしまふ。その代りには、芥川龍之介君が——この人も假りに雜誌の編輯者とするのですね、佐藤春夫のものをよくしてくれて、彼の雜誌へ採用するとしますね。——つまり、各〻の編輯者が自ら採用することを屑しとしない原稿は、自分の雜誌のどこの頁のどこの行にもないことになる。それが本當なのです。あの男のものは自分と同じ考へだから、この男のものはともかくもすぐれてゐるから、誰は非常に眞面目だから、彼はともかくも見逃すことの出來ない個性だから、世間では何といふか知れないが自分がさう認めるからそれらの人間のものを集めて自分の雜誌をつくつて見よう。——かうなると、佐藤春夫などは一月に三ケ所も四ケ所からもものを書くやうに要求される心配は、殘念ながらなささうであります。三人なり四人なりの見識ある編輯者が誰も彼も佐藤春夫をエライと思つてくれる譯にはいかないでせうから。——ところが今の雜誌編輯の狀態は全く、私の理想とするところのものとは反對であるやうに思はれます。それや無論、編輯者の好惡がそのなかに働いてゐない筈はないのですが、憂ふるところは、編輯者の商人主義が、もう一さう働いてゐやしないかと思ふのです。さうして彼自身の好惡と見識とに忠實である以上に流行に對して敏感でありはしないでせうか。さうして一ケ月に三四ケ所からも原稿を賴まれるにしたところが、それが單に流行作者であるが爲めにしかすぎないとすれば、作者たる者は單に一本のネクタイ一本の束髮ピンと何の擇ぶところがあるだらうか。一向に有難くない。無意味な流行によつて用ゐられるよりも、二三の知己を編輯者に得る方がどんなにうれしいでせう。第一にそれらの知己の雜誌へ三月に一ぺんとか、出來なけや出來るまで待つてもらつて書くといふやうなことになれば、たまに書くのだからして書く方でもよ

ろこんで面白く書ける。讀者の方でもきつときつと面白く讀めるでせう。不愉快な作を發表して自他ともに不滿足である。この點に於て流行に敏感なるジヤアナリストにその責の大部分はありはしないだらうか。——いや、責のなすりつけ合ひではみつともないから、その責の丁度半分ぐらゐは作者たる我々の方でも株を持つことにしませう。さうです——確にさうに違ひないことを、いまぼつ〳〵意識して來ました。

全體、我々は實にあまり高い原稿料をとつてゐるやうな氣がしますよ。諸君は一たい作家の原稿料といふものは大たいどれぐらゐなものだとお思ひですか。役者の給金と作者の稿料とは內輪でも內密の事、と云ふ不文律が近頃あるさうですから仲間の德義上ここではつきり申しませんが、兎にかく、私が書き出すゝでも○でも、——さう、まあ諸君が一音信の電報を出す時の一字の料金ぐらゐに相當してゐるでせうかね。そこで一日に四時間仕事をして——四時間がちようどいいですよ、四時間やると相當につかれますからね。それで四時間仕事をして五枚か八枚かは出來ます。なぐり書きをすれば一日に三十枚は書くでせう。尤も三十枚書けばその一日で、もうそれきりです。あくる日は頭がとんちんかんだし食ふものもまづい。それで後になつて思ひ出すとそんなものを書いたことが不愉快でその次の月には筆をとる氣が起らないくらい思ひ出していやになる——だからこんな作品はつまり二月がかりで書いたことにも相當しないではありません。實際さういふことが作家の頭を駄目にするのですよ。惡作の二日醉——私は二日醉と言つてゐますが、それもたつた二ケ月ぐらゐですね、氣になるのは。人間の良心などといふものは安外いい加減なものと見えて、就中私のなどは殊に上等に出來てゐないと見えて、それほど藝術的良心を反省させたところの惡作でも三月目ぐらゐにはケロリと忘れてしまふ。これがせめて半年位もつづくと、半年に一ぺんぐらゐの出鱈目ですませられることになるのだが三月目ぐらゐには忘れるものだから、忘れるが早いかまたそんな出鱈目を書く。一日に三十枚などといふ元氣のいい出鱈目でないまでも、まあ可なりひどい、書きながら自分でそれに氣がつくほどの奴をどんどん製造しますよ——本當の話です。でそんな風にするからでもありませうが、いやたとひそんなことをせずとも、一ケ月に千圓の收入は、私にはわけがないやうです。月に百枚書いて、——即ち一日に三枚か三枚半書いて、三月に一ぺん書物が出來て印税が來る。すると千圓ぐらゐにはなりますね。私は常年三

十二歳――いや三十三か。まあ考へて御覧なさい。三十三歳の青二才がすでに、腕一本でする正業の報酬として、千圓の金額は現今の社會では決して僅少といふべき報酬ではないでせう。海軍の軍人は役人としては給料が高いものださうだが、我々の年齢で彼等の到達し得る階級は大尉。頭のいい人でも大尉中の高級、少佐はごく極でせうな。さういふ人の月級は一たいいくらでせう。――私は知りませんが、まあ三百圓としませう。とてもそんなにありやしないが。が、三百圓ぐらゐの金は今の社會で一人前暮しをするには必要ですからね……。それほどもないかも知れない。しかし軍人といふものは、たとひそれが只今の事實上一つの職業になつてゐるにしても、もともと或る理想的な仕事であるべき筈で――つまり國家の干城だから、給金が安いのかも知れない。それぢや、金を儲けることを理想のやうに考へて會社などへつとめてゐる人のことを考へて見ませう。さういふ人だつて恐らくは吾々の半分も收入がありますか――ボーナスを加へてもどうもむづかしいでせう。彼等は何時間かせつせと働くのです。私どもは氣の向いた時に勝手に好きな仕事をしてゐる筈なのです。原稿料が安いなどと言つて、それぢや原稿料を高くして、忠實な態度で、藝術家としての良心に恥ぢない仕事を皆してゐるでせうか。怪しいものです。――我々のしてゐる仕事は頭腦を刻々に空つぽにするところの消費的な仕事だから、高い報酬を得なければならないといふのですか。――嘘です頭といふものは使つてゐるほど清新な働きを持てるものなのです、合理的に使へさへすれば――さうして、三十年かせいぜい五十年かそこらではありますが。しかし、まあ假りに消費的な仕事だとしませう。しかしそれぢや世の中に、金利によつて生活してゐる連中を外にして、だれが消費的でない仕事でその日の暮しを立ててゐるでせう。頭を消費するところが、すべての勞働者などは身心を一刻一刻消費してゐるのです。文學者の報酬だけ特別に高い金額で支拂はなければならぬといふ理由を私は發見するに苦しむのであります。私は金なんか、と一口に口先で――さうして心の底でも本當に卑しんでゐるのです。私は金なんか別に要らんです。食ふにさへ困らなけや。どうも私は貯金をしたらよからうなどと思つたことはない。懐に金を餘分に持つてゐると氣分が惡い――言ひすぎましたが、それにしても冗談ぢやありません。金を持つてゐると體が落付かない。そいつを使つてしまはないと原稿を書く氣にもなれない。昔は江戸の職人は宵越の金は使はなかつたさうですが、今では田舍者の一文士が月越の金を

つかはない意氣を持つてゐる――といふと、甚だ體裁もいいが、それを貯蓄して置いて、いやな原稿を書かないですませた時の米鹽の資にでもするといふのでせうかね。ともかくも私は貰へた金はどん／＼使つてしまふ。自分では何に費つてゐるか知らない。必要なことに使つてゐるのぢやないから何に使つたかわからん。とにかく私はもう少し原稿料が少くとも差支ないと思ふ。安い方がいいですな。「ね君のところの稿料は高すぎていかん。もう少し安い方がいゝ」かう私が言つたとしたら、雜誌社ではうそだと思ひ、本當だと知つたらきつと喜ぶでせう。所が單に喜んだだけではすまないで、彼が原稿料は安くつていいと言ひ出したから、つまらないものを書いたにちがひない。いか物をつかませるのぢやないだらうかと思ふかも知れません。やつぱり、さう思ふと現今の雜誌編輯者は頼もしくありませんね。編輯者がちやんと藝術を觀賞し、またその觀賞の上に一定の見識を持つてゐるとしたら、佐藤春夫作の傑作も代作のいかものも充分に區別してくれるでせう。「これこそ佐藤春夫一代の傑作だ」と信じてくれる編輯者に、私が會心の傑作を委ねるのであつたら、私はよろこびの爲めに滿腹して、喜んで安い稿料を受けとるでせう。……もう五六年――以上も以前のことと思ひますが、或る年末に谷崎潤一郎の名を騙つて原稿を持込んだ人がありましたね。さうして二三の新聞社では、その僞物の原稿をつかまされましたが、考へてみると、いい態です。もし此の編輯者にして文學を了解し、また採用原稿には必ず目を通すといふ嚴密な編輯者だつたら――これは本來當然然るべきことなのですからね――谷崎君の作品の他の人との區別は出來ない筈はないでせう。尤も贋作だから幾分にせてはゐたでせうな。それにしても目利きなら直ぐわかりますね。しかるにその原稿をつかませられる。之なぞはジャアナリズムの現狀の一端を遺憾なく發揮した痛快な出來事でした。――かういふ狀態なのだから、私が安い稿料でいいと言へば不安でもありませうし、その不安を取り越すと今度は「彼奴は安い稿料で滿足するからヘボ作者なのだらう」といふやうな氣がしだして、だんだん輕侮されないとも限りませんよ。實際、コンマアシヤリズムから發足してゐるジャアナリズムとしては、作者に對する尊敬のしるしとしては、只々、金をどつさり支拂ふといふより外には法がないのでもありませう。そこでそんなに欲しくもない金で我々は我々が輕んぜられてゐないといふことの證據を得てゐる。――いやな仕事をも解らせてくれない上に、あまりほしくない金を、先方にとつては有益なものだ

から「お前も有難からう」といふ調子でこちらへくれる。蟲のいい事を言ふやうですが、仕事のしたい時だけ仕事をさせてくれて、欲しいだけの金をくれないものでせうかね。せかずにゐられない仕事もありますし、欲しいだけと言つたところで、私が金を欲しがる程度はごく知れたものですよ。——こんなうまい事を言つて騙すのぢやないから大丈夫です。——雜誌經營が人格的事業になり、商品ではなくなつて人格的製作としての雜誌が出るやうになれば、もう一つ文運の上にいい事には無名であらうが、新進であらうが本當に力のこもつたいい作が、もつとどん〳〵現はれることでせう。有名な作家の駄作が新進無名の士の力作を拒んでゐるのです。

假りにさういふ雜誌があるとしませう、編輯者が、現代の各方面の智識のうちから、自分のよし信ずるところのものを充分な自信をもつて——それ以外の不純を感じなしに、自分の雜誌をつくるとする。即ち、編輯者は一個の現代文明的の批評家である。その批評を具體的に實行してゐる。かうなると讀者も自分の好むところの編輯者を充分に撰擇した後では、其編輯者を全く信頼することが出來る。假りに、山本實彥君編輯の「改造」がさうであるとする。山本實彥君が一代の文明批評家であり、同時に卓見ある文藝批評家であるとする。しかも其雜誌が突然無名の作家を紹介する。その紹介的廣告が商賣氣質で書かれたものでなく、一個の批評的意義を本當に持つてゐるとする。讀者は、安心してその雜誌を手にとるとが出來る。

ところが事實はさうはいかない。作者も自分でいいかげんと氣がつくものも書く、編輯者もめくら滅法でのつける。名前のある人だから安心ぐらゐな人の好い考へや、いそぐから何でもいいといふやうにもなる。それが大きな廣告になつて、讀者はそれを有難がつてよむ。三拍子揃ひますかね。——だがかういふ文運が何になりませう。——中村君は、何と言はうとも、私はやつぱりジャナリズムの惡口を言はざるを得ませんね。聞いてはゐないやうだから、ちよつと陰口を利きますが、山本實彥君なども第一流の文藝批評家といふわけにはどうも、參りますまいな。——あたりまへですよ、第一流の文藝批評家が、さうさらにあつてたまるものですか。だから、こんなことを言つても、私は山本君を別にひどく罵倒したつもりではありませんよ。その他の雜誌としたところが大差はありますまい。それならば中村君の言はれるやうに文學者たちが集まつてやつてゐる文藝雜誌ですね。それは、それならばどんな理想を持つてゐるか。私は考へてみても、さ

てその爲めには是非とも一肌脱ぎたいといふやうな理想を持つてゐるのを、乃至は私を先方でも歡迎し、私もまた喜んでそのなかに投じてもいいといふやうな同人雜誌をも見つけることは出來ないのであります。この點では私は寧ろ、商賣主義の雜誌の方がまだしもいいと思ふことがあります。格別に主張を持つてゐないだけに、その雜誌に出すといふことがさう大した矛盾を生じないですむからです。――つまり初めつから、あきらめてかかることが出來る。――自分の署名した部分だけが自分の責任といふわけですね。

……實際、我々の心から望んでゐるところのものは、本當の話は尊敬であります。ある種の尊敬であります。所がいい加減な仕事をして、その上に金を澤山に貰つて、その上にもう一つ尊敬をしてくれと言つたのぢや、なんぼ文學者だつて蟲がよすぎるでせう。當然のこととして今では誰も文學者などを尊敬しなくなつた。文藝の職業化ですね。文學者が一種のタイプライタアになつたのですね。文士の稿料が高くなつたから文士の社會的地位が高くなつたなどと考へる人もあるやうでありますが、私はそれには全く反對の考を持つてゐる者です。――そんなことを考へてくると、私は時折、さうして今も現に、昔の文人墨客を慕ふやうな精神を生じてくるのであります。文人墨客は少しも金を欲しがらない。また世俗の名譽や、政治家のやうな勢力をも尻目にかけてゐる。その代りには勝手放題なことも言ふ。する。書きたくない時には、たとひ王侯の命であらうとも肯じない。賴む方でも又、いづれは變人を合手だと思つて、無理に書かせようなどとはしない。さうして彼らは金もありもしないくせに、氣に入つた石燈籠などを見つけると、殿樣などと張合つてなけなしの金でその石燈籠などをうら長屋に持ち込んでは、殿樣よりは精神や趣味を解する點ではえらいやうな顔をしてゐる。さういふ妙な奴が妙な勝手なことをほざいたりふるまつたりする。それを誰も氣狂ひだとも言はないで、たとひ言つても少しはえらい氣狂ひだと思つてゐる。彼等は物質主義の社會の上に別個の或る社會を築いて、物質的社會の人は彼等に對して驚異の眼を瞠る。――彼等文人墨客なるものは、非常に孤獨な、そして非社交的な、社會的には自覺のない生活をしてゐたやうに見える。實際さうでせう。所が、これをよく考へて見ると、今申し上げたやうに物質萬能の社會に對して別の社會を築き傲然と構へてゐる。さうしてこれを見て王侯であらうと何であらうと、さういふ半狂人のやうな人達のうちに

何か尊重すべきものを見出して彼等を輕んじないやうな氣持を生じさせ得たといふ事は、文人墨客の孤獨な非社會的な生活の暗示が、それ自身で社會的の意義を持つてゐはしないでせうか。原稿料の値上げをして、社會問題を取材とする小說書き、しかもジヤアナリズムの走狗となると何れぞ―と言ひたくなりますね。今日の講演會にしたところが、文人墨客をなら一も二もなくそんなくだらないことはいやだと言つて斷つたかも知れない。――が、また事實を考へて見ると、昔の文人墨客と言へどもですね、とかく我々は過去の事を美しく見るといふ心理的な習慣――これは人類にとつて有難いことですが、この極めて有難い習慣によつて昔の文人墨客を有難いものに考へてゐるのかも知れませんよ。昔だつて菊池五山などといふ先生は田舍の金持からお金をもらつては、自分の編輯する詩集にそのお金持の詩を入れてやつた。そんなことをして江戸の詩風を下等にしたのだなどといふ人もあります。谷文晁の寫山樓に於ける態度はまるで政治家で、それに文晁は將軍家のお繪師になりたいなどといふ俗な考へがあつて、その爲めに將軍のお目にとまらうと思つて、將軍が入浴の時に着物を脫ぐ部屋の屛風の繪を描いて、有力な人に賴んでそれを風呂場へ持ち込んでもらつたさうです。將軍は一目見て、「はあ何に者の繪ぢや」といふから「谷文晁と申す當時有名な町繪師の作で御座います」と說明をされると、「さうか仲〳〵よく描いてあるが、俗ぢやな」と言つたので、將軍家のお繪師の夢も實現しなかつたさうです。將軍は本當に文晁の繪を見て俗だと思つたものやら、町繪師の作だから俗だときめてしまつたのだか、そこまでは判りかねますが、ともかく谷文晁は今日居たとしたら事實帝國美術院の院長にでもならうと思つて猛烈な運動をするかも知れません。事實はさうかも知れない。しかし我々が文士墨客と一口に空想すると、菊池五山であらうと谷文晁であらうと皆、もつと脫俗的に考へられますね。さうして私はさういふ風にもつとえらかつたもののやうに空想した上で、文人墨客を慕ふのであります。慕ふといふことは、やがて我々自身が、そんなものと甚だ遠いことをはつきり意識するからであります。つまりは一片耿々の心を失つてゐることに氣がつくのであります。――恥しい次第で。

……とりとめのないことを。べら〳〵喋舌つてゐると、仕合せにも三十分程すぎたやうであります。ともかく、荷が下りたやうでほつといたしました。（拍手完）

ろこんで面白く書ける。讀者の方でもきつときつと面白く讀めるでせう。不愉快な作を發表して自他ともに不滿足である。この點に於て流行に敏感なるジャアナリストにその責の大部分はありはしないだらうか。――いや、責のなすりつけ合ひではみつともないから、その責の丁度半分ぐらゐは作者たる我々の方でも株を持つことにしませう。さうです――確にさうに違ひないことを、いまぼつ〳〵意識して來ました。

全體、我々は實にあまり高い原稿料をとつてゐるやうな氣がしますよ。諸君は一たい作家の原稿料といふものは大たいどれぐらゐなものだとお思ひですか。役者の給金と作者の稿料とは内輪でも内密の事、と云ふ不文律が近頃あるさうですから仲間の德義上ここではつきり申しませんが、兎にかく、私が書き出す、でも〇でも、――さう、まあ諸君が一音信の電報を出す時の一字の料金ぐらゐに相當してゐるでせうかね。そこで一日に四時間仕事をして――四時間がちようどいいですよ、四時間やると相當につかれますからね。それで四時間仕事をして五枚か八枚かは出來ます。なぐり書きをすれば一日に三十枚は書くでせう。尤も三十枚書けばその一日で、もうそれきりです。あくる日は頭がとんちんかんだし食ふものもまづい。それで後になつて思ひ出すとそんなものを書いたことが不愉快でその次の月には筆をとる氣が起らないくらい思ひ出していやになる――だからこんな作品はつまり二月がかりで書いたことにも相當しないではありません。實際さういふことが作家の頭を駄目にするのですよ。惡作の二日醉――私は二日醉と言つてゐますが、それもたつた二ケ月ぐらゐですね、氣になるのは。人間の良心などといふものは安外いい加減なものと見えて、就中私のなどは殊に上等に出來てゐないと見えて、それほど藝術的良心を反省させたところの惡作でも三月目ぐらゐにはケロリと忘れてしまふ。これがせめて半年位もつゞくと、半年に一ぺんぐらゐの出鱈目ですませられることになるのだが三月目ぐらゐには忘れるものだから、忘れるが早いかまたそんな出鱈目を書く。一日に三十枚などといふ元氣のいい出鱈目でないまでも、まあ可なりひどい、書きながら自分でそれに氣がつくほどの奴をどんどん製造しますよ――本當の話です。でそんな風にするからでもありませうが、いやたとひそんなことをせずとも、一ケ月に千圓の收入は、私にはわけがないやうです。月に百枚書いて、――即ち一日に三枚が三枚半書いて、三月に一ぺん書物が出來て印稅が來る。すると千圓ぐらゐにはなりますね。私は常年三

十二歳――いや三十三か。まあ考へて御覧なさい。三十三歳の青二才がすでに、腕一本でする正業の報酬として、千圓の金額は現今の社會では決して僅少といふべき報酬ではないでせう。海軍の軍人は役人としては給料が高いものださうだが、我々の年齢で彼等の到達し得る階級は大尉、頭のいい人でも大尉中の高級、少佐はごく極でせうな。さういふ人の月給は一たいいくらでせう。――私は知りませんが、まあ三百圓としませう。とてもそんなにありやしないが。が、三百圓ぐらゐの金は今の社會で一人前暮しをするには必要ですからね……。それほどもないかも知れない。しかし軍人といふものは、たとひそれが只今の事實上一つの職業になつてゐるにしても、もともと或る理想的な仕事であるべき筈で――つまり國家の干城だから、給金が安いのかも知れない。それぢや、金を儲けることを理想のやうに考へて會社などへつとめてゐる人のことを考へて見ませう。さういふ人だつて恐らくは吾々の半分も收入がありますか――ボーナスを加へてもどうもむづかしいでせう。彼等は何時間かせつせと働くのです。私どもは氣の向いた時に勝手に好きな仕事をしてゐる筈なのです。原稿料が安いなどと言つて、それぢや原稿料を高くして、忠實な態度で、藝術家としての良心に恥ぢない仕事を皆してゐるでせうか。怪しいものです。――我々のしてゐる仕事は頭腦を刻々に空つぽにするところの消費的な仕事だから、高い報酬を得なければならないといふのですか。――嘘です頭といふものは使つてゐるほど清新な働きを持てるものなのです、合理的に使へさへすれば――さうして、三十年かせいぜい五十年かそこらではありますが。しかし、まあ假りに消費的な仕事だとしませう。しかしそれぢや世の中に、金利によつて生活してゐる連中を外にして、だれが消費的でない仕事でその日の暮しを立ててゐるでせう。頭を消費するどころか、すべての勞働者などは身心を一刻一刻消費してゐるのです。文學者の報酬だけ特別に高い金額で支拂はなければならぬといふ理由を私は發見するに苦しむのであります。私は金なんか、と一口に口先で――さうして心の底でも本當に卑しんでゐるのです。私は金なんか別に要らんです。食ふにさへ困らなけや。どうも私は貯金をしたらよからうなどと思つたことはない。懐に金を餘分に持つてゐると氣分が惡い――言ひすぎましたが、それにしても冗談ぢやありません。金を持つてゐると體が落付かない。そいつを使つてしまはないと原稿を書く氣にもなれない。昔は江戸の職人は宵越の金は使はなかつたさうですが、今では田舎者の一文士が月越の金を

つかはない意氣を持つてゐる——といふと、甚だ體裁もいいが、それを貯蓄して置いて、いやな原稿を書かないですませた時の米鹽の資にでもするといふのでせうかね。ともかくも私は貰へた金はどん〳〵使つてしまふ。自分では何に費つてゐるか知らない。必要なことに使つてゐるのぢやないから何に使つたかわからん。とにかく私はもう少し原稿料が少くとも差支ないと思ふ。安い方がいいですな。「ね君のところの稿料は高すぎていかん。もう少し安い方がいゝ」から私が言つたとしたら、雜誌社ではさうだと思ひ、本當だと知つたらきつと喜ぶでせう。所が單に喜んだだけではすまないで、彼が原稿料は安くつていいと言ひ出したから、つまらないものを書いたにちがひない。いか物をつかませるのぢやないだらうかと思ふかも知れません。やつぱり、さう思ふと現今の雜誌編輯者は頼もしくありませんね。編輯者がちやんと藝術を鑑賞し、またその鑑賞の上に一定の見識を持つてゐるとしたら、佐藤春夫作の傑作も代作のいかものも充分に區別してくれるでせう。「これこそ佐藤春夫一代の傑作だ」と信じてくれる編輯者に、私が會心の傑作を委ねるのであつたら、私はよろこびの爲めに滿腹して、喜んで安い稿料を受けとるでせう。………もう五六年——以上も以前のことと思ひますが、或る年末に谷崎潤一郎の名を騙つて原稿を持込んだ人がありましたね。さうして二三の新聞社では、その僞物の原稿をつかまされましたが、考へてみると、いい態です。もし此の編輯者にして文學を了解し、また採用原稿には必ず目を通すといふ嚴密な編輯者だつたら——これは本來當然然るべきことなのですからね——谷崎君の作品の他の人との區別は出來ない筈はないでせう。尤も贋作だから幾分にせてはゐたでせうな。それにしても目利きなら直ぐわかりますね。しかるにその原稿をつかませられる。之なぞはジヤアナリズムの現狀の一端を遺憾なく發揮した痛快な出來事でした。——かういふ狀態なのだから、私が安い稿料でいいと言へば不安でもありませうし、その不安を取り越すと今度は「彼奴は安い稿料で滿足するからへボ作者なのだらう」といふやうな氣がしだして、だんだん輕侮されないとも限りませんよ。實際、コンマアシヤリズムから發足してゐるジヤアナリズムとしては、作者に對する尊敬のしるしとしては、只々、金をどつさり支拂ふといふより外には法がないのでもありませう。そこでそんなに欲しくもない金で我々は我々が輕んぜられてゐないといふことの證據を得てゐる。——いやな仕事をも解らせてくれない上に、あまりほしくない金を、先方にとつては有益なものだ

から「お前も有難からう」といふ調子でこちらへくれる。虫のいい事を言ふやうですが、仕事のしたい時だけ仕事をさせてくれて、欲しいだけの金をくれないものでせうかね。せかずにゐられない仕事もありますし、欲しいだけと言つたところで、私が金を欲しがる程度はごく知れたものですよ。──こんなうまい事を言つて騙すのぢやないから大丈夫です。──雜誌經營が人格的事業になり、商品ではなくなつて人格的製作としての雜誌が出るやうになれば、もう一つ文運の上にいい事には無名であらうが、新進であらうが本當に力のこもつたいい作が、もつとどん／＼現はれることでせう。有名な作家の駄作が新進無名の士の力作を拒んでゐるのです。

假りにさういふ雜誌があるとしませう、編輯者が、現代の各方面の智識のうちから、自分のよし信ずるところのものを充分な自信をもつて──それ以外の不純を感じなしに、自分の雜誌をつくるとする。卽ち、編輯者は一個の現代文明的の批評家である。その批評を具體的に實行してゐる。かうなると讀者も自分の好むところの編輯者を充分に選擇した後では、其編輯者を全く信頼することが出來る。假りに、山本實彦君編輯の「改造」がさうであるとする。山本實彦君が一代の文明批評家であり、同時に卓見ある文藝批評家であるとする。しかも其雜誌が突然無名の作家を紹介する。その紹介的廣告が商賣氣質で書かれたものでなく、一個の批評的意義を本當に持つてゐるとする。讀者は、安心してその雜誌を手にとるとが出來る。

ところが事實はさうはいかない。作者も自分でいいかげんと氣がつくものも書く、編輯者もめくら滅法でのつける。名前のある人だから安心ぐらゐな人の好い考へや、いそぐから何でもいいといふやうにもなる。それが大きな廣告になつて、讀者はそれを有難がつてよむ。三拍子揃ひますかね。──だがかういふ文運が何になりませう。──中村君は、何と言はうとも、私はやつぱりジヤナリズムの惡口を言はざるを得ませんね。聞いてはゐないやうだから、ちよつと陰口を利きますが、山本實彦君なども第一流の文藝批評家といふわけにはどうも、參りますまいな。──あたりまへですよ、第一流の文藝批評家が、さうさらにあつてたまるものですか。だから、こんなことを言つても、私は山本君を別にひどく罵倒したつもりではありませんよ。その他の雜誌としたところが大差はありますまい。それならば中村君の言はれるやうに文學者たちが集まつてやつてゐる文藝雜誌ですね。それは、それならばどんな理想を持つてゐるか。私は考へてみても、さ

てその爲めには是非とも一肌脫ぎたいといふやうな理想を持つてゐるのを、乃至は私を先方でも歡迎し、私もまた喜んでそのなかに投じてもいいといふやうな同人雜誌をも見つけることは出來ないのであります。この點では私は寧ろ、商賣主義の雜誌の方がまだしもいいと思ふことがあります。格別に主張を持つてゐないだけに、その雜誌に出すといふことがさう大した矛盾を生じないですむからです。——つまり初めつから、あきらめてかかることが出來る。——自分の署名した部分だけが自分の責任といふわけですね。

……實際、我々の心から望んでゐるところのものは、本當の話は尊敬であります。ある種の尊敬であります。所がいい加減な仕事をして、その上に金を澤山に貰つて、その上にもう一つ尊敬をしてくれと言つたのぢや、なんぼ文學者だつて蟲がよすぎるでせう。當然のこととして今では誰も文學者などを尊敬しなくなつた。文藝の職業化ですね。文學者が一種のタイプライタアになつたのですね。文士の稿料が高くなつたから文士の社會的地位が高くなつたなどと考へる人もあるやうでありますが、私はそれには全く反對の考を持つてゐる者です。——そんなことを考へてくると、私は時折、さうして今も現に、昔の文人墨客を慕ふやうな精神を生じてくるのであります。文人墨客は少しも金を欲しがらない。また世俗の名譽や、政治家のやうな勢力をも尻目にかけてゐる。その代りには勝手放題なことも言ふ。する。書きたくない時には、たとひ王侯の命であらうとも肯じない。賴む方でも又、いづれは變人を合手だと思つて、無理に書かせようなどとはしない。さうして彼らは金もありもしないくせに、氣に入つた石燈籠などを見つけると、殿樣などと張合つてなけなしの金でその石燈籠などをうら長屋に持ち込んでは、殿樣よりは精神や趣味を解する點ではえらいやうな顏をしてゐる。さういふ妙な奴が妙な勝手なことをほざいたりふるまつたりする。それを誰も氣狂ひだとも言はないで、たとひ言つても少しはえらい氣狂ひだと思つてゐる。彼等は物質主義の社會の上に別個の或る社會を築いて、物質的社會の人は彼等に對して驚異の眼を瞠る。——彼等文人墨客なるものは、非常に孤獨な、そして非社交的な、社會的には自覺のない生活をしてゐたやうに見える。實際さうでせう。所が、これをよく考へて見ると、今申し上げたやうに物質萬能の社會に對して別の社會を築き傲然と構へてゐる。さうしてこれを見て王侯であらうと何であらうと、さういふ半狂人のやうな人達のうちに

何か尊重すべきものを見出して彼等を輕んじないやうな氣持を生じさせ得たといふ事は、文人墨客の孤獨な非社會的な生活の暗示が、それ自身で社會的の意義を持つてゐはしないでせうか。原稿料の値上げをして、社會問題を取材とする小說書き、しかもジヤアナリズムの走狗となると何れぞ！と言ひたくなりますね。今日の講演會にしたところが、文人墨客をなら一も二もなくそんなくだらないことはいやだと言つて斷つたかも知れない。――が、また事實を考へて見ると、昔の文人墨客と言へどもですね、とかく我々は過去の事を美しく見るといふ心理的な習慣――これは人類にとつて有難いことですが、この極めて有難い習慣によつて昔の文人墨客を有難いものに考へてゐるのかも知れませんよ。昔だつて菊池五山などといふ先生は田舍の金持からお金をもらつては、自分の編輯する詩集にそのお金持の詩を入れてやつた。そんなことをして江戶の詩風を下等にしたのだなどといふ人もあります。谷文晁の寫山樓に於ける態度はまるで政治家で、それに文晁は將軍家のお繪師になりたいなどといふ俗な考へがあつて、その爲めに將軍のお目にとまらうと思つて、將軍が入浴の時に着物を脫ぐ部屋の屛風の繪を描いて、有力な人に賴んでそれを風呂場へ持ち込んでもらつたさうです。將軍は一目見て「はあ何に者の繪ぢや」といふから「谷文晁と申す當時有名な町繪師の作で御座います」と說明をされると「さうか仲々よく描いてあるが、俗ぢやな」と言つたので、將軍家のお繪師の夢も實現しなかつたさうです。將軍は本當に文晁の繪を見て俗だと思つたものやら、町繪師の作だから俗だときめてしまつたのだか、そこまでは判りかねますが、ともかく谷文晁は今日居たとしたら事實帝國美術院の院長にでもならうと思つて猛烈な運動をするかも知れません。事實はさうかも知れない。しかし我々が文士墨客と一口に空想すると、菊池五山であらうと谷文晁であらうと皆、もつと脫俗的に考へられますね。さうして私はさういふ風にもつとえらかつたもののやうに空想した上で、文人墨客を慕ふのであります。慕ふといふことは、やがて我々自身が、そんなものと甚だ遠いことをはつきり意識するからであります。つまりは一片耿々の心を失つてゐることに氣がつくのであります。――恥しい次第で。

……とりとめのないことを。ぺら／＼喋舌つてゐると、仕合せにも三十分程すぎたやうであります。ともかく、荷が下りたやうでほつといたしました。（拍手完）

ろこんで面白く書ける。讀者の方でもきつときつと面白く讀めるでせう。不愉快な作を發表して自他ともに不滿足である。この點に於て流行に敏感なるジャアナリストにその責の大部分はありはしないだらうか。——いや、責のなすりつけ合ひではみつともないから、その責の丁度半分ぐらゐは作者たる我々の方でも株を持つことにしませう。さうです——確にさうに違ひないことを、いまぼつ〳〵意識して來ました。

全體、我々は實にあまり高い原稿料をとつてゐるやうな氣がしますよ。諸君は一たい作家の原稿料といふものは大たいどれぐらゐなものだとお思ひですか。役者の給金と作者の稿料とは內輪でも內密の事、と云ふ不文律が近頃あるさうですから仲間の德義上ここではつきり申しませんが、兎にかく、私が書き出す丶でも○でも、——さう、まあ諸君が一音信の電報を出す時の一字の料金ぐらゐに相當してゐるでせうかね。そこで一日に四時間仕事をして——四時間がちようどいいですよ、四時間やると相當につかれますからね。それで四時間仕事をして五枚か八枚かは出來ます。なぐり書きをすれば一日に三十枚は書くでせう。尤も三十枚書けばその一日で、もうそれきりです。あくる日は頭がとんちんかんだし食ふものもまづい。それで後になつて思ひ出すとそんなものを書いたことが不愉快でその次の月には筆をとる氣が起らないくらい思ひ出していやになる——だからこんな作品はつまり二月がかりで書いたことにも相當しないではありません。實際さういふことが作家の頭を駄目にするのですよ。惡作の二日醉——私は二日醉と言つてゐますが、それもたつた二ケ月ぐらゐですね、氣になるのは。人間の良心などといふものは安外いい加減なものと見えて、就中私のなどは殊に上等に出來てゐないと見えて、それほど藝術的良心を反省させたところの惡作でも三月目ぐらゐにはケロリと忘れてしまふ。これがせめて半年位もつゞくと、半年に一ぺんぐらゐの出鱈目ですませられることになるのだが三月目ぐらゐには忘れるものだから、忘れるが早いかまたそんな出鱈目を書く。一日に三十枚などといふ元氣のいい出鱈目でないまでも、まあ可なりひどい、書きながら自分でそれに氣がつくほどの奴をどんどん製造しますよ——本當の話です。でそんな風にするからでもありませうが、いやたとひそんなことをせずとも、一ケ月に千圓の收入は、私にはわけがないやうです。月に百枚書いて、——即ち一日に三枚が三枚半書いて、三月に一ぺん書物が出來て印税が來る。すると千圓ぐらゐにはなりますね。私は常年三

十二歳――いや三十三か。まあ考へて御覧なさい。三十三歳の靑二才がすでに、腕一本でする正業の報酬として、千圓の金額は現今の社會では決して僅少といふべき報酬ではないでせう。海軍の軍人は役人としては給料が高いものださうだが、我々の年齡で彼等の到達し得る階級は大尉。頭のいい人でも大尉中の高級、少佐はごく極でせうな。さういふ人の月給は一たいいくらでせう。――私は知りませんが、まあ三百圓としませう。とてもそんなにありやしないが。が、三百圓ぐらゐの金は今の社會で一人前暮しをするには必要ですからね……。それほどもないかも知れない。しかし軍人といふものは、たとひそれが只今の事實上一つの職業になつてゐるにしても、もともと或る理想的な仕事であるべき筈で――つまり國家の干城だから、給金が安いのかも知れない。それぢや、金を儲けることを理想のやうに考へて會社などへつとめてゐる人のことを考へて見ませう。さういふ人だつて恐らくは吾々の半分も收入がありますか――ボーナスを加へてもどうもむづかしいでせう。彼等は何時間かせつせと働くのです。私どもは氣の向いた時に勝手に好きな仕事をしてゐる筈なのです。原稿料が安いなどと言つて、それぢや原稿料を高くして、忠實な態度で、藝術家としての良心に恥ぢない仕事を皆してゐるでせうか。怪しいものです。――我々のしてゐる仕事は頭腦を刻々に空つぽにするところの消費的な仕事だから、高い報酬を得なければならないといふのですか。――噓です頭といふものは使つてゐるほど淸新な働きを持てるものなのです、合理的に使へさへすれば――さうして、三十年かせいぜい五十年かそこらではありますが。しかし、まあ假りに消費的な仕事だとしませう。しかしそれぢや世の中に、金利によつて生活してゐる連中を外にして、だれが消費的でない仕事でその日の暮しを立ててゐるでせう。頭を消費するどころが、すべての勞働者などは身心を一刻一刻消費してゐるのです。文學者の報酬だけ特別に高い金額で支拂はなければならぬといふ理由を私は發見するに苦しむのであります。私は金なんか、と一口に口先で――さうして心の底でも本當に卑しんでゐるのです。私は金なんか別に要らんです。食ふにさへ困らなけや。どうも私は貯金をしたらよからうなどと思つたことはない。懷に金を餘分に持つてゐると氣分が惡い――言ひすぎましたが、それにしても冗談ぢやありません。金を持つてゐると體が落付かない。そいつを使つてしまはないと原稿を背く氣にもなれない。昔は江戸の職人は宵越の金は使はなかつたさうですが、今では田舍者の一文士が月越の金を

つかはない意氣を持つてゐる——といふと、甚だ體裁もいいが、それを貯蓄して置いて、いやな原稿を書かないですませた時の米鹽の資にでもするといふのでせうかね。ともかくも私は貰へた金はどん〳〵使つてしまふ。自分では何に費つてゐるか知らない。必要なことに使つてゐるのぢやないから何に使つたかわからん。とにかく私はもう少し原稿料が少くとも差支ないと思ふ。安い方がいいですな。「ね君のところの稿料は高すぎていかん。もう少し安い方がいゝ」から私が言つたとしたら、雜誌社ではさうだと思ひ、本當だと知つたらきつと喜ぶでせう。所が單に喜んだだけではすまないで、彼が原稿料は安くつていいと言ひ出したから、つまらないものを書いたにちがひない。いか物をつかませるのぢやないだらうかと思ふかも知れません。やつぱり、さう思ふと現今の雜誌編輯者は賴もしくありませんね。編輯者がちやんと藝術を觀賞し、またその觀賞の上に一定の見識を持つてゐるとしたら、佐藤春夫作の傑作も代作のいかものも充分に區別してくれるでせう。「これこそ佐藤春夫一代の傑作だ」と信じてくれる編輯者に、私が會心の傑作を委ねるのであつたら、私はよろこびの爲めに滿腹して、喜んで安い稿料を受けとるでせう。……もう五六年——以上も以前のことと思ひますが、或る年末に谷崎潤一郎の名を騙つて原稿を持込んだ人がありましたね。さうして二三の新聞社では、その僞物の原稿をつかまされましたが、考へてみると、いい態です。もし此の編輯者にして文學を了解し、また採用原稿には必ず目を通すといふ嚴密な編輯者だつたら——これは本來當然然るべきことなのですからね——谷崎君の作品の他の人との區別は出來ない筈はないでせう。尤も贋作だから幾分にせてはゐたでせうな。それにしても目利きなら直ぐわかりますね。しかるにその原稿をつかませられる。之なぞはジヤアナリズムの現狀の一端を遺憾なく發揮した痛快な出來事でした。——かういふ狀態なのだから、私が安い稿料でいいと言へば不安でもありませうし、その不安を取り越すと今度は「彼奴は安い稿料で滿足するからヘボ作者なのだらう」といふやうな氣がしだして、だんだん輕侮されないとも限りませんよ。實際、コンマアシヤリズムから發足してゐるジヤアナリズムとしては、作者に對する尊敬のしるしとしては、只々、金をどつさり支拂ふといふより外には法がないのでもありませう。そこでそんなに欲しくもない金で我々は我々が輕んぜられてゐないといふことの證據を得てゐる。——いやな仕事をも解らせてくれない上に、あまりほしくない金を、先方にとつては有益なものだ

から「お前も有難からう」といふ調子でこちらへくれる。虫のいい事を言ふやうですが、仕事のしたい時だけ仕事をさせてくれて、欲しいだけの金をくれないものでせうかね。せかずにゐられない仕事もありますし、欲しいだけと言つたところで、私が金を欲しがる程度はごく知れたものですよ。――こんなうまい事を言つて騙すのぢやないから大丈夫です。――雑誌經營が人格的事業になり、商品ではなくなつて人格的製作としての雑誌が出るやうになれば、もう一つ文運の上にいい事には無名であらうが、新進であらうが本當に力のこもつたいい作が、もつとどん／＼現はれることでせう。有名な作家の駄作が新進無名の士の力作を拒んでゐるのです。

假りにさういふ雑誌があるとしませう、編輯者が、現代の各方面の智識のうちから、自分のよし信ずるところのものを充分な自信をもつて――それ以外の不純を感じなしに、自分の雑誌をつくるとする。卽ち、編輯者は一個の現代文明的の批評家である。その批評を具體的に實行してゐる。かうなると讀者も自分の好むところの編輯者を充分に撰擇した後では、其編輯者を全く信賴することが出來る。假りに、山本實彦君編輯の「改造」がさうであるとする。山本實彦君が一代の文明批評家であり、同時に卓見ある文藝批評家であるとする。しかも其雑誌が突然無名の作家を紹介する。その紹介的廣告が商賈氣質で書かれたものでなく、一個の批評的意義を本當に持つてゐるとする。讀者は、安心してその雑誌を手にとるとが出來る。

ところが事實はさうはいかない。作者も自分でいいかげんと氣がつくものも書く、編輯者もめくら滅法でのつける。名前のある人だから安心ぐらゐな人の好い考へや、いそぐから何でもいいといふやうにもなる。それが大きな廣告になつて、讀者はそれを有難がつてよむ。三拍子揃ひますかね。――だがかういふ文運が何になりませう。――中村君は、何と言はうとも、私はやつぱりジャナリズムの惡口を言はざるを得ませんね。聞いてはゐないやうだから、ちよつと陰口を利きますが、山本實彦君なども第一流の文藝批評家といふわけにはどうも、參りますまいな。――あたりまへですよ、第一流の文藝批評家が、さうざらにあつてたまるものですか。だから、こんなことを言つても、私は山本君を別にひどく罵倒したつもりではありませんよ。その他の雑誌としたところが大差はありますまい。それならば中村君の言はれるやうに文學者たちが集まつてやつてゐる文藝雑誌ですね。それは、それならばどんな理想を持つてゐるか。私は考へてみても、さ

てその爲めには是非とも一肌脫ぎたいといふやうな理想を持つてゐるのを、乃至は私を先方でも歡迎し、私もまた喜んでそのなかに投じてもいいといふやうな同人雜誌をも見つけることは出來ないのであります。この點では私は寧ろ、商賣主義の雜誌の方がまだしもいいと思ふことがあります。格別に主張を持つてゐないだけに、その雜誌に出すといふことがさう大した矛盾を生じないですむからです。――つまり初めつから、あきらめてかかることが出來る。――自分の署名した部分だけが自分の責任といふわけですね。

……實際、我々の心から望んでゐるところのものは、本當の話は尊敬であります。ある種の尊敬であります。所がいい加減な仕事をして、その上に金を澤山に貰つて、その上にもう一つ尊敬をしてくれと言つたのぢや、なんぼ文學者だつて蟲がよすぎるでせう。當然のこととして今では誰も文學者などを尊敬しなくなつた。文藝の職業化ですね。文學者が一種のタイプライタアになつたのですね。文士の稿料が高くなつたから文士の社會的地位が高くなつたなどと考へる人もあるやうでありますが、私はそれには全く反對の考を持つてゐる者です。――そんなことを考へてくると、私は時折、さうして今も現に、昔の文人墨客を慕ふやうな精神を生じてくるのであります。文人墨客は少しも金を欲しがらない。また世俗の名譽や、政治家のやうな勢力をも尻目にかけてゐる。その代りには勝手放題なことも言ふ。する。書きたくない時には、たとひ王侯の命であらうとも肯じない。賴む方でも又、いづれは變人を合手だと思つて、無理に書かせようなどとはしない。さうして彼らは金もありもしないくせに、氣に入つた石燈籠などを見つけると、殿樣などと張合つてなけなしの金でその石燈籠などをうら長屋に持ち込んでは、殿樣よりは精神や趣味を解する點ではえらいやうな顏をしてゐる。さういふ妙な奴が妙な勝手なことをほざいたりふるまつたりする。それを誰も氣狂ひだとも言はないで、たとひ言つても少しはえらい氣狂ひだと思つてゐる。彼等は物質主義の社會の上に別個の或る社會を築いて、物質的社會の人は彼等に對して驚異の眼を瞪る。――彼等文人墨客なるものは、非常に孤獨な、そして非社交的な、社會的には自覺のない生活をしてゐたやうに見える。實際さうでせう。所が、これをよく考へて見ると、今申し上げたやうに物質萬能の社會に對して別の社會を築き傲然と構へてゐる。さうしてこれを見て王侯であらうと何であらうと、さういふ半狂人のやうな人達のうちに

何か尊重すべきものを見出して彼等を輕んじないやうな氣持を生じさせ得たといふ事は、文人墨客の孤獨な非社會的な生活の暗示が、それ自身で社會的の意義を持つてゐはしないでせうか。原稿料の値上げをして、社會問題を取材とする小説書き、しかもジャアナリズムの走狗となると何れぞーと言ひたくなりますね。今日の講演會にしたところが、文人墨客をなら一も二もなくそんなくだらないことはいやだと言つて斷つたかも知れない。——が、また事實を考へて見ると、昔の文人墨客と言へどもですね、とかく我々は過去の事を美しく見るといふ心理的な習慣——これは人類にとつて有難いことですが、この極めて有難い習慣によつて昔の文人墨客を有難いものに考へてゐるのかも知れませんよ。昔だつて菊池五山などといふ先生は田舍の金持からお金をもらつては、自分の編輯する詩集にそのお金持の詩を入れてやつた。そんなことをして江戸の詩風を下等にしたのだなどといふ人もあります。谷文晁の寫山樓に於ける態度はまるで政治家で、それに文晁は將軍家のお繪師になりたいなどといふ俗な考へがあつて、その爲めに將軍のお目にとまらうと思つて、將軍が入浴の時に着物を脫ぐ部屋の屛風の繪を描いて、有力な人に頼んでそれを風呂場へ持ち込んでもらつたさうです。將軍は一目見て、「はあ何に者の繪ぢや」といふから「谷文晁と申す當時有名な町繪師の作で御座います」と説明をされると、「さうか仲々よく描いてあるが、俗ぢやな」と言つたので、將軍家のお繪師の夢も實現しなかつたさうです。將軍は本當に文晁の繪を見て俗だと思つたものやら、町繪師の作だから俗だときめてしまつたのだか、そこまでは判りかねますが、ともかく谷文晁は今日居たとしたら事實帝國美術院の院長にでもならうと思つて猛烈な運動をするかも知れません。事實はさうかも知れない。しかし我々が文士墨客と一口に空想すると、菊池五山であらうと谷文晁であらうと皆、もつと脫俗的に考へられますね。さうして私はさういふ風にもつとえらかつたもののやうに空想した上で、文人墨客を慕ふのであります。慕ふといふことは、やがて我々自身が、そんなものと甚だ遠いことをはつきり意識するからであります。つまりは一片耿々の心を失つてゐることに氣がつくのであります。——恥しい次第で。

……とりとめのないことを。べら〳〵喋舌つてゐると、仕合せにも三十分程すぎたやうであります。ともかく、荷が下りたやうでほつといたしました。（拍手完）

ユーモアの話

岡本一平

話と云ふものは話す方と話される方の程度如何で余程話し悪いものであります。今日は婦人雜誌の會でありますから皆お出になつてをる方は女性の方ばかりであります。それも非常に進歩されて皆五分刈頭や、いが栗頭の御婦人が多い。（笑聲）髷にお結ひになつたり束髪のお方は甚だ少い樣であります。余程これは女性として進歩改造されたものだと思ひます。其處で話の內容も程度を高めてお話が出來ると思つて非常に光榮に存じます。

第一にお話しますことは、心理學等で人間の感情と云ふことを色々說明してゐますが、この感情と云ふことは最早他の判斷では割切れない純粹のもので、それ以上は分析出來ないと云ふことになつて居ります。つまり怒ることゝか、悲しいとかの感情は最早それ以上分析して說明出來ないから皆自分々々の感情で味ふより以外には仕方がないと云ふことになつてをります。が、これでは誠に話がつまらない。其處で感情と云ふものを色々客觀し傍觀して、これを他の尺度をあてがつて實寫測量する、つまりその感情を批評することが一つの說明法となつてきます。感情それ自體の味といふものは、前に申す通り、それ自體を體驗した時より以外に說明されないものであります。それで私の云ふ笑ひ――この笑ひの意味はみな樣もお笑ひになつてみねば本當の所は判らない。然しこれを他の感情卽ち悲しいとか怒るとか其他の方面の感情から

比較して見て判斷すると、初めてその感情に一つの特有性と云ふものを認める事が出來るのであります。だから測量比較する尺度によつて感情の特有性といふものも亦自由自在に變へて見られるのであります。これは感情の説明にはかういふ瓢簞鯰の感じがあるといふ事を申述べ度い爲め申しました。

扨この感情を分けて大體東洋の言方では、喜怒哀樂の四つに分けてをります。大ざつぱに笑ひと云ふこと〻右の四つの感情との關係を説明してみますと、喜怒哀樂の中で、喜びと樂の二つの感情の現れとして笑ひがあります。喜びの現れた笑ひは何う云ふ風かと申しますと言葉の表現でニコ〱と云ふことに當ります。ニコ〱笑ふことが喜びの笑ひである。其から樂みの表現は何うかと云へばホクホク笑＊ふと云ふことである。これは甚だ僅かなちがひのやうであるが、喜の方はニコニコで、樂の方はホクホクである。大黑天の表情は何うかと云ふと、これは兩方あつてニコニコとホクホクと混つて居る。即ち喜びと樂とが含まれて居るといふ事が判ります。偖て怒について申せば、怒其れ自身においては笑ひが無い。純粹の哀しみと純粹の怒との上には何うしても笑ひがないのであります。只今都合上喜怒哀樂の四つを、人間の根本思想、即ち生命の發露を表現する四つの形式として説明して行きますと、第一に喜と云ふことは人間生命の到達狀態である。怒は生命の動的狀態であり、哀は生命其れ自體の反省であり、樂は生命の滯在してをる姿



である。通俗にいつても溫泉場等に滯在してゐるものは樂である。從つてホクホク笑ふ。今申す如くわたくしは人生の根本物を生命といふ言葉のカテゴリーにして說明致しますが、此の生命と云ふものが實に不可思議なものである。何んとも申樣がない。吾々は現に生きてゐる。生きて居ると云ふことは勿論こゝにお出でになつてをられるが栗の女性方も、髮を結つて居られる女性方も御諒解のことゝ存じます。然らば生きて居るといふ不思議を何う云ふものかと聞かれても何の爲めに生きて居るのかどうして生きて居るのか手に取つて見せることは出來ないし、又物に書いて示す事も出來ない。勿論これは超科學的の生きて居るといふ事を問題にしてのお話であつて、甚だ不可思議なものであります。佛敎で申しますと、佛性とか眞如とか云ふ風に色々說明してあります。只今日本で流行の大哲カントにしても、その自慢の認識論でもこのものだけは認識することは出來ないのけ物にして「物其自ら」なぞといふ文字の偶像に奉つてしまつてる。コップ其れ自身の本體は、コップそれ自らがそれに住んで居ながら決してその實體を味つては居ない。コップ自身にも認識出來ぬコツプがコップの「物其自ら」である。これは少し六つかしい樣でありますが、實際そうだ。今皆さんが手をお叩きになつたりして大層お喜びになつて居る。然し思はず自分の手を叩かした自分の自分といふものをどれかと探してもそれは誰だか判らぬ。判らないものが働いて立派に拍手さして居る。

偖て前の喜怒哀樂の話に戾りますと、笑ふものは人間だけであります。犬や猫などは餘り笑はない。多少は感じるかも知れぬ。けれど現れては來ない。其處が人間と動物との區別で、人間が高尙なのは笑ふことを知つてゐるからだといふ學者があります。其以外に人間は餘り動物と大差はないと云はれる程それほど、笑ひは人間に取つて大事なことでありますが只今云つた樣に笑ひは喜と樂の二つにしか付いてゐないが、更に深く觀察して行くと喜怒哀樂の四つが入り交つてコンビネーションになつた狀態の上には、哀しみにも怒りにも笑ひを帶びて來る事がある。人間の感情も進化につれて複雜になつて來て單純に喜怒哀樂が現はれて來ない。入り交つて來る。これも甚だ大雜把な分類でありますけれども、概括的に笑ひの方面から逆に感情の方へ說明して入つて行きますと、第一は滑稽、第二は諧謔、第三は諷刺、第四は皮肉、この四つに先づ笑ひの能因卽ち可笑味を纒めることが出來ます。この四つは人間の最も人間らしい特點であります。

滑稽と云ふことは、甚だ單純である。私が斯う云ふ所に上つてふいと足を一寸らすと皆さんがお笑ひになる、それは滑稽であります。其からこの壇上で喋る時にともすると言葉の語尾がダブつたりした時—私は口がもつれる癖があるから『それから』と云ふのを『それからう』など云ふ事があると笑はれる。（笑聲）これも單純な滑稽であります。

其の次に諧謔と云ふのは善意を以て可笑味を摘發する英語で『ジョーク』と云ひます。しやれも諧謔の一つであります。次の諷刺と云ふことは、その次の皮肉と云ふのと關連して說明すると大變に判り易い、諷刺を具體的に申しますと相手を間接に攻撃する場合のしやれであります。即ち單的に驀進せずに拋物線を描いて、相手に彈を擊ち込む可笑味の攻擊であります。皮肉と云ふのは戰爭で云ふならば搦手から城の水の手を斷ち意地惡く參らして仕舞ふ遣り方である。

例へて申しますと或る所に大變化粧の好きな男がゐました。おめかしやだ學生の癖にめかす、大いにきりやう自慢の積りだらうが、他の人から見れば顏が長くてへちまの樣である。其人を繪に描いて批評する場合に、へちまの蔓がなつてをる、そのつるの先には白粉のはけを持つて、へちまのなつた實をなでてをる、へちまには白い粉がついてをる。これなどは諷刺であります。何故ならば間接的に其人の可笑味を摘出する攻撃法です。これを見て其人は先づ苦笑する位にとゞまりませう。皮肉と云ふことになるともう少し罪が深い、長い顏の人が、白粉の壜一打も並べて塗つてもまだ顏の半分しか塗り潰せぬ繪を描いて、その說明書には全部の出來上りにはなほ一打の白粉を要す。と書くこれなぞは皮肉の攻撃である。皮肉と諷刺が藝術中に現はれた時代は、多くは一つの生命がいろ〳〵の因習や權力やの爲めに直接に抗告も發芽も出來ない。そういふ場合に諷刺と皮肉の手段を以て、せめてもの心遣りに搦手や閑道から槍を出す。その武器に遣はれる。其の實例としてフランスの十七世紀ルイ十三世の時代前後には社會が非常に形式的道德に堅まつて來ながら內實、極めて腐敗して居る。然も人心には生命のあくがれが燃え始めてゐる、これに對して眞當の人間が目醒めて意味を發表して行くには當時の社會の因習や權力では直接には行けない、夫れで藝術の上に鬱噴を洩らした。洩らし方にも對社會對公儀のみならず時代の人としての自分の一面に對して、他の自分の一面が裏切つて行くといふやうな頗るデリケートな自嘲の味もあります。そこで漫畫家としてドウミエー、喜劇家としてモリエルが出たのも大に原因がある。日本でも舊幕府時代が下り坂

になつた時に一般の民衆が幕府の政治に餘程不平であつたが、民衆は直接に發表する機關でなかつたので、今で電信柱に宣傳ビラを貼る流義で狂歌や川柳で時代を諷する落首といふもの、また繪双紙などにもした。しやれ交りにお上の惡口を言つたり偶意繪で楯をつく其の意味の諷刺が非常に流行つた。これは別に署名も何もないから筆者は判らない、それで民衆大學者、民衆畫家が大いにやつたものです。つまりこの二つは藝術に加はり、人間生命の進展の上の特別の武器となつてをる記であります。これで大體可笑味といふことの概略がお判りになつたと思ひます。一體ユーモア等を話す者は餘程面白い人間だとか或は奇拔な行動をする者だとかいふ風に思はれて居るようですが。この實當人は決して面白い人物でも無し可笑味にも痲痺した人物であります。物を觀察して其處から可笑味を出すには丁度曲つた物を計るに曲らぬ尺度でなければ測り出せぬやうに、可笑味の人物では決して可笑味は測出せない。膝栗毛を書いた十返舍一九と云ふユーモリストが道中記を書くといふので、甲府から江戸へ向けて旅立つた。それをある人が何卒御願ひですから連れて行つて下さいと同行を求めた。一九は「僕は案外つまらない男だからよし給へ」と云つたが相手は聞かない。そこでとう／＼同行したが成程道中面白くない。この有名なユーモリストは道中苦い顔で考へ込んでばかり居る。それで折角連れ立つて行つたものがへこたれて別れたといふ逸話がありますが、僕の話を聞きに來られた諸君にも多少この心持があるだらうと思ひます、がどうですか？丁度これも皮肉の言葉の一例として早速諸君の役に立ちます。

　再び話は笑に戻ります。前申すやうに人心が複雜になると笑が單純でなく、喜怒哀樂入り交つた笑ひゴンビネーションの笑ひの方が多くなると申しました。これからはその間の子の笑ひの説明に取かゝります。第一が「保護色の笑」と申します。これは學校の先生が何時でも生徒に向ふ時に必ず相手を子供扱ひにする樣な、――自分は研究の深い學者であるといふような――一種、作つた笑ひを脣に泛べます。これは先生の一枚看板であり、多分師範學校の課外教授にでも教はるものかと思ひますが、これが出來なければ、教師の資格がない、と思へる程老練な中學教師に多い笑ひであります。この笑ひも學校ならこそよけれ家庭に持込まれては甚だ遺憾である、茶の間の食卓についても妻や子供に對して學識を仄めかすような相手を子供扱ひにするような笑ひを向けて居る事は無駄骨でもあるし、また家庭は不愉快だ。だが教師は永い

間癖になつてゐるから家庭に入つても急にこの笑の取り外づしは出來ない。でついやつて居る。次は擬勢を示す笑がある、一番良い例が芝居の幕であります。甲の武士と乙の武士と血鬪をする。兩方一軍の大將である。が今は一人づゝだ、闘つたが乙の武士は負けて組伏せられて仕舞ふ。すると甲の武士はそこで任俠の心を出して、乙の武士の頸を取らずに助けてやる、そしていふには此場はこれでお前と袂れやう。併しながら何時何日を期して何々山で改めて決戰しよう、こんな事をいふ。いふ許りでなくスッカリ其計畫を踊つて見せて終ふ、何々山の東で何う陣を張つて、何處の川を何う云ふ風に渡つて軍がゝりでやると云ふ軍機の秘密をスッカリ踊つて話して終ふ、すると乙の武士も吊り込まれて仕舞つて、お前がそうなら、俺は斯う云ふ風にとこいつも當日の軍機の秘密を踊つて曝露して終ふ。これならばもう何も日を決めて戰ふ迄もあるまいにそこは芝居だ。双方踊り終へると助けられた乙の武士は花道の所で振り返り甲の武士と顔を見合せて双方見榮を切るキッカケに其處で互に『ウフ』『アハ』『ウフ』『アハ』と掛け合ひで笑ふ。最後に『アハヽヽ』と笑ひの合唱をやる。これを擬勢を示す笑と名付けます。

それから嘲笑と云ふのがあります。嘲笑は昔の武士に取つては致命的な恥辱であつて、金を借りた時にかういふ證文を書いた、といふ話がある『萬一違反致し候はゞ人中で御笑ひ下されても苦しからず候』これは嘲笑を最價値的に扱つた一つの例であります、次に泣笑と云ふことがあります。泣笑と云ふことになると餘程近代的の臭ひを帶びて來て、感情が複雜になつて居ります。泣笑の一番單純なのは上りがまちを上がる時に向脛をブッ付けた時である。これは古今東西を通じて普遍性を持つた泣笑ひの例であります。進んで近代的になつて來ると、餘程六つかしくなつて來る、一番苦悶なのは思想上、宗教上の行きづまりである。何處へ持つて行つても解決が付かず、遣り切れない。悶へてヂットしてゐられない、何うにも仕樣がないので、結局人生と云ふものに自分の期待を裏切られて終ふ。裏切られ方があまりに痛快過ぎる、美事抛り出された自分の姿が目に見えるようだ。ひよいとそこで却つて自分を客觀して見る事が出來て思はず唇に笑ひが泛ぶがその笑はゆがんで居る。これが泣き笑ひであります。

一茶の俳句には泣笑ひの含畜がある、例へば『人の世の錢にされけり苔淸水』『一文に一ツ鐘打つ寒さ哉』『春雨や喰

ば殘りの鴨が鳴く』『死にこぢれ死にこぢれつゝ寒さ哉』是等の俳句は笑つても笑ひ切れない、何處かに泣笑が入つてゐる。次に神秘的な笑ひがあります。この笑ひは十六世紀の文藝復興時代にレオナルド・ダ・ヴンチ作のモナリザの繪の表情が代表のものであります。この笑ひの謎はいろ〳〵の學者が解くに苦んで居るといふので有名です。

近代に創始された精神分析學では確か母性の笑ひと解決してるようですが矢張り何うもはつきりうなづかれないようです。私が向ふへ行つた時ルーブルのその繪の前に立つて見て見ると此の笑はどの方面から眺める見物人にも笑ひかけて居るようである。そして見る方の思惑で嘲笑にでも微笑にでもどうにでも思ひ取れる。日本でいへば八方睨みの龍と云つた風な描き方です。たいそういはれて見ると母性愛の笑ひと認められない事も無いが、それも單に母性的でなくその中に戀愛に近い濃愛に、更に母性の愛が交つた味があるように思はれました。ミルクセーキの中にカルピスの入つたやうなものであります。(笑聲)結局判らないから神秘的の笑と云ふのであります。これから淨化した笑と云ふのがあります、これは一段上に上つてゐます。昔印度の釋尊が——傳說にあることですが、色々の弟子を集めて自分の法を傳へ樣とした時、一本のマンダラゲと云ふ花を拔いて弟子達に見せた、一寸ひねくつて見せて何うだ判るかと云つた。誰も判らないと見えて何んとも言はなかつた、其中で迦葉と云ふ者がこれを見てニコリとしたといふ事であるが、何を笑つたのか判らない、出した方でも何を笑はせたのか判らない、これは餘程六つかしい。而してこれを近代的の說明の仕方で言へば、先づ話の最初の處で說明した樣に、花それ實體は「物其自ら」において認識せられる。これに外の認識を持つて行つて見た所で、結局無駄骨に終る。併しながらそれだと云つて他から認められずとも、物それ自身は千變萬化して滞りなく宇宙を活動してをる。花はちやんと斯の如く咲き斯くの如く裝つて居るとでも先づ說明を付ければ斯うなる。此の意味において釋尊が默つて出した花それ自らに說明せよと促されたものである。迦葉も理窟は判らずにこの意味を直ちに花其物の上に直感し、感得した時に思はず知らず泛んだのがこの笑ひであります。微笑したと傳說にはなつてをります。此の笑になると余程超越的になつて來て、神秘的以上だ何んとも名狀すべからざるものであります。微笑したけれども迦葉自身は微笑を自覺しない、微笑が微笑してる丈けだ。何うにも手のつけようがない。諸君須らく微笑されて諒解あらんことを望せまそす。れ

からモウ一つ面白い笑があります。それは笑つてゐながら笑つてゐないと云ふ笑であります。それはどんな笑ひであるか諸君も暫らく想像されたら面白からうと思ひますが、それは矢張り今の釋尊と迦葉の間に生れた微笑と同じ樣ですが、それ程には六つかしくはない、人間的だ。生れ立ての嬰兒が何かに催されて自然と笑ふ、捨子が馬が通るのを見て笑ふ、馬が通らずともふいと笑ふ、今生れ立てのあかんぼといひましたが生れ立てのあかんぼはまだ笑はないかも知れない。いつ頃から笑ふかしら。婦人雜誌には書いてありませう、一つ讀んで見て下さい。そのあかんぼは河の中へ投げ込まれる刹那でも笑ふ時がある、當人は笑つてゐる積りでなく、而も笑つてをる、山が霞み草が萌えると同じやうな笑ひです。笑つて笑はぬ笑ひにはもう一つあります。——幇間の笑！これは笑つてゐて決して笑つてゐない。實際幇間の顏と云ふのは笑つてゐるのはふだんのことで、眞面目な時はよそ行きの樣である。言葉と言葉とのうめぐさには大概コンマで句切る代りに笑を入れる、その笑が決して可笑しいのではない。笑ひが色々の代辯になつてをる。例へば『旦那に哀願する時には矢張り笑ひで哀願を表現する、』旦那を威嚇する時には『貴方が若し私に羽織を買つて下されなければ貴方の秘密を誰々に打明けます』と云ふ意味を笑ひをもつて通ずる。それから認得の笑——『成る程それもさうですナー』と云ふ言葉も笑ひで間に合せる又煽てるにも笑を以てする、何にか攻撃するにも皆笑を以て便じて終ふ。結局笑つて笑はぬと云ふことになる。

こういふ風に調べて行くと、まだコンビネーションの笑は澤山あります。そしてこれ等の笑の中には人間生命の進化から判ずると向上的なものと向下的なものとある。私共お互ひ人間は先程申したその生命を體得しながら生命に催される理想を追つて——理想を形作つて無窮から無窮の人類生活に移る進化の過程を踐む上に於て何の笑が利益であつて、何の笑が利益でないかこれを批判してかゝるのも大事な事と思ひます。これを生命の全部肯定から云つて終へば、例へ何んな笑でも皆な生命を培ふ砌であつて其の中に害なるものは何に一つない。——丁度此間ある必要からゲーテのファーストを讀んだのですが、私は割合に東洋の思想に馴致され來つた運命にをるものですが、ファーストを讀んで見て流石に西洋でも達人の悟得は偉い、東洋のものに負けぬ深遠がある。例へば悪魔を使ふのにこれを神の一つの別働隊の樣に扱つてをる、神が悪魔を決して除外したり、排斥したりしてゐない、最後に行つたらどうせわしの掌中にあるものだが下界におい

ては人間は必ず苦勞すべき運命をもつてゐる。だからお前はお前として働くだけ働くもよからうと云ふ樣な意味の事をいつてゐる。遲蒔乍ら僕はそこで初めてゲーテを認めた譯ですが、さう云ふ譯で天上からいへば、何の笑だつて生命に不利益なものは一つも無い。然ししばらく下界のさし當つての實踐上の問題としては、生命的勇氣は起らない樣な、元氣を無くする樣な笑は使はない方が良い。諷刺皮肉は自他共に向上的刺激劑として使へば良いが、消極的に使へば自他共に段々枯小される劇藥になる。輕蔑の笑も高い所から低いものを輕蔑するのは結構な刺戟だが、逆に行くと自他共にイージーゴーイングに墮落する一方だ。斯の如く笑ひは向上から向下まであります。

ひるがへつて現代を見ますと、殊に震災後ユーモアと云ふことが流行つてをります。ヨーロッパでも大戰後今日までは喜劇物が全盛ですし、音樂なども米國ではジャズバンドと云ふようなひよろきんで突飛な笑を叩き出し絞り出すようなものが流行です。地震後の現代の藝術にも輕いユーモアを出すと云ふことは一方から見て理の當然でありますが、餘程注意しないと引下げるユーモア流行となつたり、下へ下へとイーチーゴーイングに車の逆落しになります。人類生活は一時退歩して終はなければならぬ、これと反對に眞實なユーモアが流行すれば、——眞實のユーモアといふのはお互にどうせ人生は苦樂相半してをるような、或は苦の方が多いかも知れない、其の苦に當面し乍ら人生を荷ひ上げて行く、然も一時に長途は遣り切れなくなる。そこでどこかでホツト一息つき度くなる、程よい場所を見附けて腰を下ろし日なたぼつこし乍ら一寸周圍の人生を見廻して見る。この酸苦の中の悅びと甘味の愛すべき矛盾を發見する。この慰めの憩ひがユーモアだ。どこまでも人生に對する愛を失つてはゐない。そして可笑味に胡麻化されない、現實を踐みしめての諧謔です。このユーモアなら地震大災後當然私等が要求してよい心の潤ひであります。今流行の或はこれから流行するユーモリスチツクの藝術について、大體この目標の下にお互に協力いたしたいと存じます。（拍手完）

文壇に對する或る不滿

千葉龜雄

私は今日の講演に何の縁故もないのですが、講演者の中でどなたか御出でにならぬ方があるらしい、來られないやうだと困るから、出て來て何か話すやうにと引つぱり出されたやうな譯でありました。ところが歴々の御方が皆な御出でになつた。これ以上の事は無いと歸らうとしますと、まだ時間が少し餘つて居るから、一寸でも演壇に出て具れといふ事なので、こゝに立ちました譯です。別に文壇に籍を置く者でもない私ですから、こゝではたゞ文壇の一個のバイスタンダアとして、新聞記者的の、一揣的な意見を申述べて皆さんの御教訓を得たいといふだけの事です。

ところで、私の題は、突然の事なので「文壇に對する或る不滿」といふことにいたしましたが、これはもちろんわが國の文壇に對する不滿を指すのであります。その不滿をかいつまんで申せば、わが國の文壇が、外延における廣さを缺き、内包における深さに乏しい。これを申さうとするのであります。

先づ第一の、外延における廣さを缺くといふのはどういふ意味かと申しますと、日本の文壇の生産が、むやみと統一、統一といふ方に忙いで、そのために微妙で、多様な複雜性を失つて了ふ、一つのメイン・カアレントがある。するとすべての文學の生産が、悉くそのメイン・カアレントに從屬したものでなければならない。それに屬したいものは、悉く異

壇だ、邪道だとして排斥してしまふのであります。こゝに文藝の單純化が行はれます。元來文藝といふものは、すべての思想と同樣に、細かく、細かく細かくと分裂して行つてこそ、その國の藝術が百花爛漫の相を作り上げ、それによつて、讀者の、どこまでも微妙な審美感をつくり上げることが出來るのだと思ひます。なぜなら、藝術といふものは、一つの發見であります。すぐれた世界の藝術とは、その成素を、どこまでも細かく、深く分裂し、凝視し、そこにどれほど微妙な纖維が存在するかをより深く發見することであります。だから、或る國の藝術が最も榮えたといふ場合があれば、それは、一つの大きな大道、即ちメイン・カアレントが充分に開拓されたと同時*



*に、一方で、その大路、小路、横町、露路にもあたるところのそのメイン・カアレントと竝つた藝術が、同じやうな熱烈さをもつて、また同じやうな公平と自由をもつて、らんまんと咲き亂れたものでなければなりません。

古典主義から浪漫主義へ、浪漫主義から寫實主義へ、寫實主義から自然主義へ、自然主義から新浪漫主義へ、浪漫的現實主義へ、そこから更に現實主義へ、表現主義へ、象徴主義へと辿つて來た途は、いつも一つの途の單純な貫通ではなく、いつも一つの派と一つの派の絶えざる葛藤と消長を語るのであります。そして一つの新らしい主潮が、他の前期の主潮を

克服するには　またそれだけすぐれた藝術思潮を、その中に宿して居るからにも相違はありませんが、しかし一方に、物をロマンチックに考へるとか、自然主義的に見るとかは、その當時にはやる主潮が何であるにせよ、それとは關係無しに、すべての人の靈魂にやどる先天的な傾向なのです、だから、今の主潮が現實主義だからといつても、始めからロマンチックな傾向をより多く持つて居る人は、やはりその表現を、ロマンチックな樣式に借りるでせう。そしてもつと省察に富んだ藝術家は、そのロマンチックな思想の仕方を、現實主義の中にすら現すでせう。現實主義から一歩進み出たところの、ロマンチック・リアリズムがこゝから生れます。かうして藝術の鋪道は次第にその深さと廣さをひろげて行きます。然るその自由な開展をゆるさないところに、文壇の停滯と固着があります。

たとへば、菊池寛君や、芥川龍之介君が作物を始めて文壇に提出した頃、一般の文壇は、これはロマンチックな傾向のものだ、或は觀念的な理論そのものちやないかなどと排斥しましたが、それはたゞ、當時の主潮であつた自然主義と、全く異なつたものだといふだけで、本當は、二氏の藝術の中に潜んで居るところの、ロマンチック・レアリズムの深味に味到することが出來なかつた爲であります。とかく、その當時の主潮から見て風がわりのものだといふと、直に價値がないとして排斥する。これがわが國文壇の、狹小と固定を形作つて了ふ原因だと思ひます。尾崎紅葉氏が全盛であつた頃は、小栗風葉や、柳川春葉といふ御弟子達の方が評判がよかつた。そして、今の德田秋聲氏などは寧ろ異端視されて居ました。秋聲氏が未だ大成しなかつたせいもありませうが、一つは廣い眼で藝術を哺ぐむ全知が無かつたためです。また自然主義の全盛時代には、夏目漱石氏の藝術などは、一種の心理小說、觀念小說、あそびの小說として價値以下に評價されて居た。ところがその當時、當時の主潮がどこから來るかとなれば、皆な歐洲で流轉して居るそれを、そのまゝに御丁寧に移植するに過ぎなかつたのです。

ところが私のせまい觀察によると、こんな一本調子な見方といふものがあるものではないと思ふのです。ラシアでも、フランスでも　イギリスでも、たとへそこに一つの主潮があるにしても、そこの藝術家の誰も誰もが、みなその主潮だけで書くといふやうな馬鹿げた話は無いと思ひます。元來人間の心的機能がこんな窮屈なものに出來て居るとは思へぬので

す。で、當時文壇の主潮は何であつても、お互ひは、お互の個性と傾向に忠實に所依して、自分に純眞に奉仕したものだと思ふものだけを書く、殊に現代のフランスなどは、最もこの自由が尊重され、少しも主潮などに捉はれぬために、第一主潮なんといふものが生れて來ない、それで立派にさんらんたる藝術が、百色眼鏡のやうに展開されて居る。つまり自然な個性を尊んで、不自然の大勢順應の自卑に陷らないからです。

然るにわが國の文壇にはそれが無い、やれ志賀式だ、里見式だ、宇野式だといふやうに、或る點まで、現代の作家の足跡を踏んだものでないと受け入れない。他から新進氣鋭の作家が出て、從來の慊らない文壇に、一矢を酬ゆる樣な文體で以て、本當に人生に理解ある作物をしても、世間では、やはり風がわりものとして、馬鹿にして相手にしない、たゞ著名な作家に知遇を得た者とか、指導を受けたと云ふ人だけが、其作家によつて世間に紹介されて、初めてマア少し宛でも世の中に知られる樣になるのでありますが、これまでになることは仲々六つかしい非常に困難をしなければならぬのであります。斯う云ふ間に古い作家の亞流をそのまゝまねて愈々文壇に現はれると云ふことは其文壇に少しの新味も加はらない、たゞ同じ道程を辿つて其軌を一つにして居る樣なものであります。これでは日本の文壇は何時まで經つても進歩する氣遣はないのであります。要するに、時代の主潮といふやうなものから解放されてもつと個性に即するやうに、藝術界を開展して行きたいと思ふのであります。第二の、內包の迫力が乏しいといふのは、現代の藝術が、人生の眞實に徹する熱意に乏しいといふことです、單に人生の上つ面を擦過して平氣で居る。といふ意味は、云ふまでもなく、人生と云ふものは唯一つの個人が存在してるのではなく、その人生が生ける上において色々の環境や時代の影響を受けて居るそれが即ち生活であつて、生活の無い藝術といふものは有得ないのであります。なるほどブルジョア藝術の世紀では、靈魂の生き方と、肉體の生き方を別々にし、重に事實の生活を取りはなしたところの、靈の生き方だけを描いたものを、藝術だと見て居たのでありますがそれは非常な間違ひです。生きるといふことは、肉と靈の生き方を綜合した總額と決算そのものを言ふので、藝術が、もし生きる人生を描くなら、自然その眞人生に交渉した、一切を貫ぬいたものでなければなりません、然るに人生はどうしても、社會、環境、時代の拘束をのがれる事が出來ない、そこで文藝はどうしても社會を通じ、政治を通じ、

經濟を通じて、人間生活に觸れた眞實な叫びでなければならないのであります。そうでなければ眞の藝術は生れないのであります、然るに或作家達はその時代環境とは餘り關係のない、個人だけを掘下げて行く。それで完圓した人生が、深徹した人生が生れぬのは當然であります。それが徹底しないといふのにはいろ／＼な意味がありませうが、また實社會と時代の壓迫がもつと藝術家の上に苛酷に加はり、藝術家自身にも自分の藝術心といふものを、もつと深く掘下げる必要を感ずる刹那が來なければ、中々これは救はれぬではないかとも思ふ。たとへば婦人問題、——現代のわが藝術家が、新時代の婦人問題をどういふ風に取扱つて居るか。といふと、少くとも新しい時代に於ける婦人の地位、婦人の本當の自覺、さういふものに對して、大した好意を持つて居るものが在るとは思へない。何か大きなピンをさして目をくまどつたやうな女を書く、しかしこれは現代の人生といふものを本當に眺める婦人の階級、さういふものではない。人世に苦しんで居る、時代に苦しんで居る所の女性は澤山あるのでありますが、さういふものはあまり書かれてない。婦人は必ず男性の獸慾に屈從するとか、さういふものに依て節操をどうするとか、或は虛榮をどうするとかいふ風な、殆んど人生の表皮にさへも徹しないやうなことが興味を以て謳歌されて居る。これは現代といふものを嚴肅に見守らないためぢや無いかと思ふ。現代の生活は、決してさう浮ついたものでは無い筈だ。みんながみんな苦しんで居る世界だ。藝術家もまたその苦しみに共鳴せねばならぬ。たとへば一千九百五年以後の露西亞の革命藝術を書いたものを見ると、彼等はたゞ革命とかいふものを、面白づくに、寫實的に書いて居るのではない。そこでは奥深く人間の惱みといふものを眺めて居る。政治、社會の長い歴史の惱み、その湧きかへる地獄の釜でうでられて居る、ラシヤ國民の惱み、その惱みをいかにしても解かなければならぬどいふ風に書いて居ます。非常に敬虔な嚴肅な考へ方でこれを說いて居ます。またそこに描かれた人生は、みな、生きた社會、生きた時代に居る人生ですから、そこに捉へられた舞臺は、みな讀者に親しい世界である。その意味では通俗とはいへるけれども、その舞臺を通じて眺められた人生は、全く藝術的に純化し、聖化された人生である。藝術はかくの如きものでなければならぬ。然るにわが國はどうであるか。わが國の新聞ではよく懸賞小說の募集をします。

それには新聞的なものといふ條件を附ける。新聞的の小說といふのは、ヤマの非常にある、通俗味の多い、廣い新聞の

讀者に興味を與へるやうなものを言ふのである。それはどういふ意味を示して居るかといふと、藝術界で非常にいゝとか何とか言つて褒められて居る所の藝術は、割合に讀む人が少數で、國民が六千萬か七千萬あるに拘はらず、ほんの三四千人に過ぎない。つまり非常に狹められた限られた特殊の世界しきや描いてないからであます。然るに本當の藝術といふものは、最も廣い世界を描き、それによつて總ての人に讀まれなければならぬものであるべきに、それが狹い享樂の道具にしか使はれてゐない、單に藝術的遊戲、享樂に耽るといふ傾向を有つて居る。新聞讀者は、もつと讀者自身に近い社會生活を描いたものを欲しいといふ。一體本當に勝れた藝術は、何人にも解るやうなものでなくてはならぬ。少數の人ーか刺戟しないといふのは藝術の力ではない。享樂者以外には刺戟しないといふことは本當の藝術の力ではないと思ふ。ドストイエフスキーは非常に亂暴な文章で小說を書いて居る。博奕をして金が足りなくなると小說を書いて、又金を拵へるといふやうな生活で、文章としては隨分らんばうな所もある。べら棒に下らない所もありますが、併しその中に書かれてある所の靈といふものには淚なしには讀まれないものが多いのであります。だゝわが國の所謂新聞小說のわるい事は、廣さにおいては、讀者により親しい、廣い社會を書いたにしても、深さにおいて、凝視において、どれもどれも、べら棒に非藝術的で、調子がひくい、これではまだ一向救はれない。

それはそれとして、世界の藝術の中では、何といつてもラシアの藝術が一番人生の神祕に觸れて居ると思ひます。元來社會的な思想を書いた藝術では、イギリス、フランス、ラシアなどが一番多いやうに見えますが、イギリスの社會小說は先づ社會そのものの姿を單的に書いて居る。フランスは、人道といふものを透して社會を眺めて居る。次にラシアは政治を通して社會を眺めて居る。政治と實社會に包まれた所の人生相といふものを深酷に眺めて居る。そして、環境と內包が一番ぴつたりと融和して居る。若し人生派といふ名前が附けられるならば、何處の文學よりもラシアの文學が一番人生派に屬するものであらうと思ふ。私はラシヤの作家から一番多く啓發される。さういふ風に人生を遊戲として見ないといふ藝術であつて、始めて本當の社會の輝きとなつて來るのであります。日露戰爭後、或る英國の新聞で日本を評した。日本は戰爭ではラシアを破つたが、精神的にはアベコベにラシアに征服されて居ると。恐らくこの言葉に、熨斗をつけて返すだけの

勇氣は日本にはないと思ひます。さういふ風な人生派のものを讀む人が多いに拘らず、日本の文壇の人生といふものに對する觀察、或は省察が非常に到つて居らぬといふことは、いろいろ、その藝術家自身の興味と生活の關係があるかしれませんが、また歷史的傳統的思想の問題もあるだらうと思ふ。それが何であるにもせよ、あるからそれでいゝといふのではない。あるのが非常に惡いのである。私は今、本當の人生といふものを、本當に眺める所の熱情を正しい所に向けて來たらば、日本の藝術も始めて世界に肩を並べることが出來るだらうと思ふ。日本の或る作家は、日本で一番進んで居るものは、何といつても小說だといひましたが、なるほど日本藝術も技巧ではたしかにすぐれたところはあるが、併し人生に對する眼、社會に對する眼、時代に對する眼といふやうなものでは、世界の文學に比肩するやうな內容をもつたものはなからうと思ふ。そこが考へられずには今日以後のわが藝術といふものはどうしても行き詰つてしまふ。いかにも夕暮の空氣のやうに鈍い灰色に頹廢した藝術、それはいたづらに病的享樂だけに法悅し、眞劍で眞實な人生には何等考へる所もないやうなものでなく、もつと明るみと暖か味を抱き、人生改造の熱情を漲らした藝術がもう我國にも出なくてはならぬと思ふ。甚だ要領を得ない話でございますが、さういふ風な不滿を申したいと思ひまして、茲に出ました譯であります。(拍手完)

批評に就いて

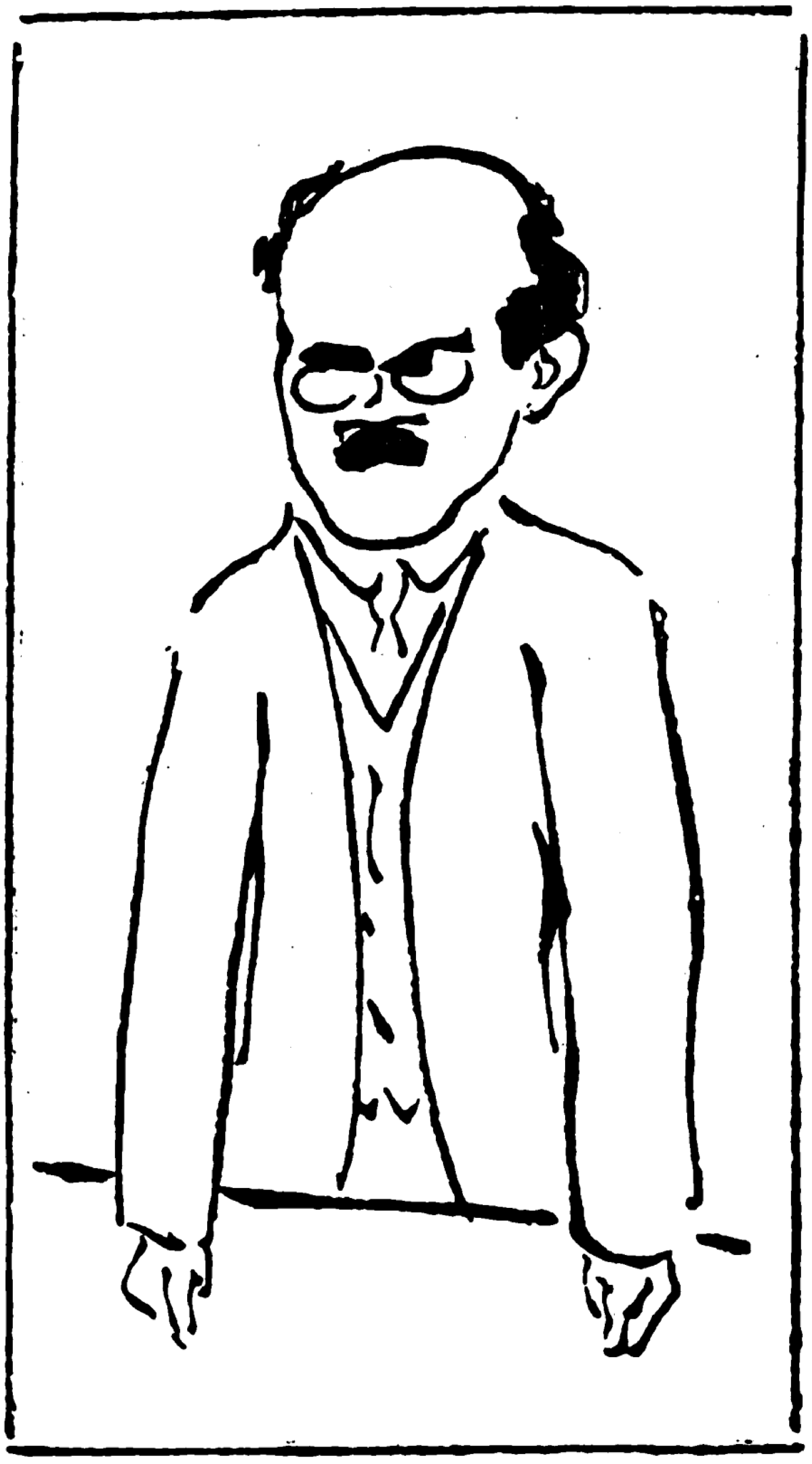
片上伸

文學のいろ〳〵な種類の中で、詩歌、戯曲などに於ては隨分世間で研究もされてゐる。議論もされてゐる譯であります。大抵さう云ふ方面の事に關する理論上の問題も、殆ど說き盡くされてゐるやうな感じがある。唯文學の中で比較的閑却されて居るのは批評の方面である。

批評と云ふものは面白くないもの、何だか地味で、餘計なおセッカイのやうなもののやうに思はれがちで骨を折つて批評をやつて見ても、餘りやり榮えのないやうな、喝采を受ける事も少ないやうな傾きのある仕事である。兎に角批評に就いては昔から日本ばかりでなく、西洋でも、他の文學上の種目に比べると餘り立入つて、身を入れて研究したり、議論をするやうな事の少なかつたものであります。今日に至つても同じ事で續いて參つて居ります。

一體批評と云ふ事を申すと、學問上の言葉としてゞなく、俗に使ふ批評と云ふ言葉を考へて見ても、隨分いろ〳〵な意味がある。批評と云ふことに關する種々の解釋を集めて見れば、隨分面白い解釋が並べられるだらうと思ふ。批評と云ふことは昔から評判、惡口と同じやうなことに考へられて、且つさういふ意味で實行されてゐる場合が甚だ多く――多過ぎる位であつて、日本などでは、批評と云ふとは殆ど九分がたは惡口、漫罵と云ふやうな風に實行されて居る傾がある。十

九世紀の英吉利でも、随分批評が悪口として事實に現れてゐる。バイロンの百年祭が昨日であつたと思ひますが、そのバイロンも當時スコットランドのエディンバラレギウ」の批評家の悪口に激して一詩を作つて、これに劣らぬ悪口を以て不平を洩らした事がある。其時分の批評家と詩人逹の關係は、犬猿も啻ならなかつた有様で、中には其爲めに非常に感じ易い、敏感な詩人がひどく氣にしてそのために病んだといふやうなことさへ傳へられてゐる。英吉利は十九世紀の初頃はまだ宜い方で、露西亜などは一般の文明が遅れてゐた國でありますから、露西亜の十八世紀の半頃の批評は、迚もお話にならない程亂暴なもので、其當時の露西亜に於ける＊



＊學者とか、上流の人々が、馬鹿野郎とか、豚とか云ふやうな亂暴な言葉を、互に投合つてゐた。そこでこの批評と云ふ言葉が、ロシアの十八世紀頃にどういふ一般的の意味で使はれて居つたかと云ふことを知るに足る一つの證據に、斯う云ふことがある。或家で社交上の會合が開かれ、風俗や流行に關するいろ〳〵な議論を、紳士淑女の間で取交してゐた。其問題から或紳士が他の一人の若い紳士を批評したといふことがある本に書いてあるが、その批評したと云ふのはこの場合では罵つた事で、批評と云ふ言葉が罵ると云ふ意味に用ゐられてゐたことである。批評と云ふ言葉をさういふ風に用ゐたといふことは、如何に其時代に、文學方面に於ての批評と云ふことが、十分なる正しい理解を持たれて居なかつたか、といふことを察するに足る譯であります。是は遠い十八世紀の半頃の露西亜の話でありますが、併しながらまさか今日日本の批評が亂暴でも、批評といふ

言葉を毆る意味には用ゐないでせう。

併し或ひはそれに等しい、それ以上亂暴な批評そのものが、文壇に於ても、社會に於ても行はれて居る事は、諸君もよく御存じであらうと思ふ。批評の一番悪い、極端な意味ではさう云ふやうな事さへあつて、昔からさういふ傾きの考へかたが全く根絶されとはいひにくいところがある。人の批評と云ふと、何となく惡口といふ感じがこびり附いて離れない。批評と云へば、惡口と云ふやうな要素を含まない筈であるか、含むべきであるか、含むならば如何やうな程度に、如何やうな形式で、どう云ふ形を以て含まれなければならぬかと云ふことが問題だと思ふ。

批評の事を考へて見ると、それが文學の方の批評である限りに於て、文學はどう云ふものであるかと云ふことを拔き離しては考へられない。それは無論私が說明致さなくともさうだとお思ひ下さるでせうが、尙念のために申すならば、事實に於て、文學に對する考へ方の段々に變つて來た跡を辿つて見ると、其文學に對する考へ方の未だ今日迄發達しない時代の批評は、矢張り隨分變なものであつた。例へば文學が或一つの型にはめて之を作らなければ、本當の文學でないと云ふ風に考へられた時代があつた。さう云ふ時代の文學上の作品に加へられる批評は、丁度昔私共が中學時代に、作文の先生が點をつけて呉れるやうな、佳とか、美とか、或は大變流暢であるとか、明快であるとか云ふやうな、簡單な評點を附けて呉れた、と同じやうに、さういふやうな批評が、立派な文學上の作品に加へられて居つたのであります。批評と云ふことは、出來上つた作品に關して、簡單なる順序を附ける、第一等、第二等と云ふ風な順序を附けると云ふやうなことに考へられて居つた時代も、隨分長くあつた。十八世紀頃は何處の國でもさう批評が多かつたことは事實である。今日はさう云ふやうな幼稚な批評は行はれなくなつたが、或時代には、シッカリした敎養のある人々が、批評の仕事としてさう云ふ風なことをまじめに行つてゐた。こんなやうなわけで、文學の本當の批評のやり方、批評に關する考へ方と云ふことも、文學そのものに關する考へかたとともに段々變つて參つた譯であります

そこで批評の事を考へて見る爲めには、文學に就いて、多少基礎的の事を知つて置かないと批評の事が分らないやうに思はれる。僅かの時間で文學とは何であるかといふお話しを致す事は出來にくいのでありますが 私の平生考へて居る事を、

簡單に申して見れば、文學は時代とか、階級とか云ふものに關係がない。文學は人間の本性の現れだと云ふやうなことをよく云はれる。或は一方では人間の本性と云ふやうな、そんな抽象的な、それだけとして存在するものはない。そんなことは詰らない考へ方だと云ふやうな考へを持つて居る人もある。形式、技巧の方面がなくして文學があり得ないと云ふ人もある。かやうにいろ／＼議論がありますが、一體文學と云ふものゝ、本當の說明、有らゆる點を言ひ盡して遺憾なしと云ふやうな說明を、今迄何人がして來たか。さういはれてみればさうであるやうでもあり、それでは足りないやうでもあると云ふやうな感じが、常に吾々に取殘されて居る。私のお話を致す事も、有らゆる事を盡して、それだけをお聞き下されば何もかもお分りになると云ふやうな萬病藥的の事を申す事は出來ませぬ。私だけで自分に見當をつけた其位の見當だけしか申上げられませぬ。さう云ふ點を申して見れば、文學と云ふ意味も實は段々と變つて來てゐる。凡そ彼樣な文學とか文學の批評とか云ふことに關して、吾々が論ずる場合に、自分だけの持つて居る考へも大切であるけれども、其の言葉の歷史的變遷の事實、其事實の中に含まれて居る所の意味を、十分に了解して行く事がなければ、現在云つてゐる事を基礎づけて行くことが出來ない事になつて來る。其の文學の歷史的變遷も一口には中々云へない。先づ變つて來て居ると云ふことだけは申す迄もない。私の考へでは段々に變つて來て居る中に、言葉の說明の仕方は變つて居るか知れませぬが、其中から取出して今尙役立つものとして考への中に取入れて差支ないものを集めて、其處に自分の考へを打立てると云ふ工夫をして見るとすれば、また一方からは自分の知り得る限り歷史上の事實を辿つて、其中から要點を取出して、自分が打立てる材料として整頓して見ると、其中には文學上の重大な事實の一としてかういふことがある。文學が文學として現れた當時に於ては、少なくともそれを發表した人、之に共鳴した讀者、其文學が社會的に成り立つに至つた周圍の關係した人々、文學に興味を持つてゐた人々、之に依つて感動せしめられた人々、斯う云つた人々の範圍に於て、ライフに對する全體的な考へ方を纏めて現して行くと云ふことがなければ、文學として成立しない。トルストイは、藝術の中には其の時代の最高の意識が現れてゐるといつて居る。これは要するに其時代の、考へられる限りのライフに對する全體的の考へ方、味ひ方、見方、之を愛し、之を憎み、之を悲しみ、之を悅ぶと云ふ、其時代の有らゆる心持の表現である。この表現の

努力の結果が、どの位現れて居るかと云ふことは別々な問題になつて來る。少なくとも人生の興味の全體的の表現をしようと云ふ努力なくして、如何なる文學も成立しない。歴史的に見ても文學は其時代の最高の、最大限の生活に對する興味を包含して現れて居る事實はいくらもあげられる。（例を略す）

とにかく昔の作品は、其時代の人には最も高い、深い、廣い全的の人間性に打當てたやうな内容を持つてゐたわけである。併し今日の吾々の生活では、その時代程の動かす力は失はれて居る。矢張り色が褪せて、何となく昔のものだと云ふ感じは抑へ切れない。併しながら歴史を離れて生活がある筈がない。從つて文學が歴史的の條件、時代の條件を離れてありやう筈がないから、一面に於て其全的人間興味に觸れると共に、文學にもどうしても時代と云ふ制限がつく。併し時代は何時迄も、何處迄も進んで行く。そして其中の生きて居る全體の力が——何處迄も突破して行かうと云ふ力が、その時々々の藝術を作る。それが合致して出來たものがトルストイの云ふ時代の最高意識の表現である。併し人々は斯く迄明白な事實を忘れ勝で從つて超時代の藝術、超階級の藝術と云ふやうなことをいふ。とにかくこの二つの力、即ち生活に對する全的興味を表現せうとする要求と、時代の色と、この二つの條件が融和して初めて其時代の最高の意識の表現としての藝術が作られる。從つて新しい生活を生み出すと云ふ意思を持つて居り、其の全體的の生活興味を表現すると云ふ意思が盛であれば、其中に非常な時代の先を見越すやうな力のある藝術が生れて來ることになつて來る。

文學がさう云ふ風な狀態で出來上つて來るものであるとすれば、文學の批評に對する考へ方も餘程見當がついて來る。文學は生活の全的興味の表現を求めて新しい世界を打開いて行かうと云ふ力に進む。本當によい文學は、何か何時でも新しい時代を切り開き、新しい時代を打開しやうとするの意思を持つて居る。いろ〳〵人の作品に現れて居る人生の一部分として、或形を以て現れると云ふことなしに、最高の生活興味と云ふものが現れやう筈がない。文學の批評は、時代の最高意識と云ふ、全的の生活興味について考へるとともに、それを結撰して、一の形に表現する技巧形式をも論じなければならぬ。同時にその全的興味を刺戟し制限してゐる其時代の樣々の條件を無視する事は出來ない。それなしには文學は成立つて居ないので、文學を批評する場合には、大ザツパに申して三つの問題、——生活の全的興味の問題、形式の問題、歴史的の條件の問題この三つのものを取り入れて考へねばならぬ。すぐれた批評は必ずこの三つの問題を十分に取扱つてゐるのである。（講演筆記の大要）

附記（講演の大意としても前半に比べて後半が非常に省略せられたことになつたが、締切を急がれて已むを得ずこのままにして置く。）

一番嬉しかつた友情の思ひ出

思はず頭が下つた

藤森成吉

數年前のこと、H（假りにそう呼んで置かう）が京都から出て來た時、すばらしく面白い話を聞かせてくれた。

Hは、今は記者をしてゐる。十何年來の友人だつた、ひどくロマンチックテムペラメントを持つた男で、話ずきの、又話上手だつた。が、此の時の話は、彼の故郷土佐を舞臺にした、或る果樹園の人々の特別な面白いロマンスだつた。

「君、何なら書け。」

私が感嘆するのを見て、Hは云つた。

「君書け、折角のいい題材ぢやないか。」

「いや、俺にはとても小説は書けん、俺の代りに書けよ。」

Hは、自分の話が私を惹きつけたのを喜ぶやうに、熱心にすすめた。

「そんなら書かう。」

私はやや興奮して引き受けた。

「忘れちまつちやアいけないから、覺え書きを書いて置かないか。」

そう云ふHの言葉に、私は何枚かのノオトを作つた、Hはその初めへ、物語の舞臺の精密な地圖を書き添へてくれた。

いつか時間の餘裕がついたら書かう、……そう思つて一年足らずそのまま過ぎた夏の始めの一日、或る先輩が訪ねて、是非福岡日日の爲めに長篇を書いてくれ、と云はれた。

これはノッピキならない依頼だつた、前に一度頼まれたのを、自分の都合から延期して貰ひ、代りに友人を推薦したが

その友人の長篇が終りかけてゐるのだつた。やむを得ず私は承知した。が、その翌々日か、牛込の方のAと云ふ友人を訪ねると、その本屋の主人は、私が土佐の物語でも書かうかと云ふのをきいて、すつかり乗り氣になり、是非書いてくれ、その前一遍土佐へ行つて、實際の場所を見て來るがいい、旅費は全部出す、と云ひ出した。

それは、全く思ひがけない言葉だつた。が、早速その場で小切手を書いてくれたAの好意で、私はその二三日後家を立つた。

途中京都驛へ降りるとそこにはちやんとHが待つてゐた。

「どうして時間を知つたの。」

汽車の中で、ヨウジノタメアスユク、とだけ電報を打つた私は、びつくりしてきいた。

「君の打つた驛をしらべて見たんさ、そうして明日來るとすると、多分此の急行か此の前の汽車だらうと思つて、二度迎へに出たんだ。」

「そりやあ濟まなかつたね。」

熊野神社近くの新居にゐるHの爲めに、私は心から感謝した、そして電車の中で、私は例の長篇執筆の話をし、その便宜の爲め土佐のHの知り合ひへの紹介狀を頼んだ。

「俺へ用があるつて云ふなら、多分その事だらうと思つた。」

Hは言下に承諾して、いろんな人々の名前を擧げたり、その依頼の方法を親切に敎へてくれたりした。

二三日Hの家にゐて——もつと遊んで行けと云ふのを、時日の不足の爲め拒んで、——私は土佐行きの初めての汽船に乘つた、Hは神戸の埠頭までわざ〳〵見送つて、歸りには是非もう一遍京都へ寄つて結果を話して安心させろ、と云ふのだつた。

土佐へ着くと、Hの古い知り合ひの高知新聞その他の人々が、痒いところへ手の屆くやうに世話をしてくれた、そのお陰で、私は出來るだけの調べを濟ませて高知に別れを告げたが、豫定の時日が超過した爲め、そのまゝ眞つ直に東京へ歸つて了つた。

「なぜ寄らなかつたんだ」

私の御禮と云ひわけの手紙に對して、Hから折り返して强い詰責の手紙が來た、その言葉を私はしみじみ感じた。

やがて長篇が新聞へ出初めると、一部づつ私は新聞社から取つて、一部は始終Hの方へ送つてやつた。が、時々途中で不着の事があつたりした。

主として時間の餘裕の不足の爲め、私はその長篇を充分滿

足の行くやうに書き終られなかつた。Hは時々ハガキなぞで意見を云つてくれたが、新聞へ出切つて了ふと、間もなく一つの小包みがHの名で屆いた。開けて見ると、それは送つてやつた新聞を切り拔いて、一々丁寧に臺紙へ貼りつけて綴ぢ、その臺紙の餘白へ、あちこち一杯に訂正や注意や感情を赤インキで書き込んだ帳面だつた。

私は思はず頭がさがつた。處々拔けてゐて、意味がつづかず腹が立つ、と云ふやうな言葉をよむと、一寸涙が出た。

その後友人のKが來た時、Hやその長篇の失敗の話をすると、――Kは、昔投書家時代のHの知り合ひだつた、――自分に嘗て果樹を作つた事があるから、何ならその方面の間違ひのないやうに眼をとほそう、と云ひ出した。早速賴むと、間もなくKはその帳面を風呂敷へ包んでやつて來てくれた。それには、Hの書き込みの傍へ重ねて一杯丹念に書き込まれてゐた。

「果樹の方のことは、不思議にまちがつてゐませんでした。」

そう云ふKに、

「まるで、これはみんなの合作ですね。」

私はほんとに心から云はずにはゐられなかつた。

それほど友人達の厚い氣もちを浴びながら。――一方にはそれを考へれば考へるだけ、――不甲斐ない私は、未だにその長篇に手を加へられずにうつちやつてゐる。Aは、金のことなぞはそつちのけに、出版をすつかりKの關係の本屋の方へ讓つてくれ、KはKで、そのまゝまで結構ぢやあないか、と何度となく私を力づけてくれるが。

一番うれしかつた友情の時、とは云へないかも知れないが今迄澤山書いた私の物で、これほど友人の心を一緒に受けた經驗はない。

異性のK

原阿佐緒

私は、友情といふことを思ふ場合に觸れるごとに、また異性の不眞實を見るごとに、または、自分のかなしめる時、寂びあまる時、たゞひとりの？ ともいひたい異性の友Kを思ひ出さずにはゐられないのである。

それが異性であつただけ微塵の不純さを持たないで私に接してくれたことが、ロマンチックな私にいかに美しい感激を持たしたことであつたらう。いま、私に斯うして思出の筆を

をとらしめてゐる彼が、ほんとうに永久に出逢ふことの出來ないやうになつてしまつたことは、私にとつてどんなに悲しい事實であるか知れない。十年もの長い歳月を、どんな時にも信じ合ひ頼り合ふことの出來た私たちは、彼の最後に近かつた二三年の間を、或る理解の齟齬をもつた儘、遠く離れてしまつてゐたのであつた。殆ど私の全生活を知つてゐたと云つてもいゝ彼は、私の周圍に起る徒ならうわさなどには、耳を借しはしなかつた。けれども、私が以前若い青年たちなどと、がや〳〵さわいでゐる時など、彼が來合はせると、皆の前では笑顔を見せてゐても、それらの人達が歸るとKは嚴粛な顔になつた。そして、私に「勉强してゐますか」と云つて、机の上や何かを見まわす。私が目につくやうな仕事のあとを彼れに見せることの出來ない寂しさから、曖昧な返事でもすると、彼はより以上に寂しさうな顔をするのであつた。

「本當に どうしてあなたの周圍の人達はあんなに思ひやりがないのだらう、私はあなたのかくれた才能を知つてゐる、それを發揮して貰ひたい、私はあなたに勉强さしたいばかりに、あなたの子供まで自分が引き受けて自分の家から通學させてゐる。(事實、その時分私の子供はKの家において貰つてゐた)それだのに、誰も彼もがあなたの心を靜かにさしておいてはくれないやうな人達ばかりだ、あなたももう山へ歸つて靜かに病氣をなほした方がいゝ、(私は當時病氣でKの住むでゐるS市の下宿にゐたのであつた。)

Oは大丈夫だ、私がきつと偉いものにして見せる、あなたは安心して自分の勉强をして下さい、ね、さうしたらいゝでせう。」

と云ひながらしばらく腕を組むで默然としてゐたKは、急に腕を解いて眼鏡の下に指先をやつた。私は押へてゐた感情が迸るやうに涙とともにそこに溢れ出た。

「Kさん、すみません、本當にすみません、私、あなたの仰有るやうな才能はないかもしれない、けれども意志だけで、意志だけでやつて見ます。私は明日にも山の家へかへりませう、ほんとうに子供まであなたに願つておいてくづ〳〵してゐる私は、何といふ……馬鹿でせう。」

「いえそんなに昂奮しないでもいゝのです。たゞ、ほんとうに立派な藝術家で立つて下さい、あなたは男性にはこりてゐる筈だ、負けないで下さい。あらゆる誘惑と戰つて、ね。」

「え、きつと書きますわ、自分の生命の涸れるまでかきますわ」ほんとうにあなたひとりの御心にむくいる、たゞそれだけのためにだけでも。」

た樣して、私は沈默に陷つた。けれどもその頃、私にはまだ彼に打ち明けない一つの事情があつた。ある時は子供を見かた〳〵S市の彼の家に宿つて、殊に暗い彼の顏を見た。恐らくKは私のこゝろの奥を直覺したのであつたらう。私は何かをいふかはりに、Kの出勤前の幾分かを捉へて、
「すみませんけれどこの手紙を、この宛名の人にとゞけていたゞけないでせうか、御願ひです。お話することを許して下さるなら、あとでいたしますから」
と改まつて云つた、すると彼は、宛名をじつと凝視してゐたが、
「とゞけてあげませう」と
たゞひと言、しかもはつきりとした語調で云つた。
そして彼は出かけてしまつた。私は急に堪へがたい寂しさと、悔に似たなやましさを感じないではゐられなくなつた。手紙を頼むだことが二重に彼を傷けはしなかつたか、もしそれが世間的に罪と云はれるものなら、彼に罪の加擔者としての自覺を強ひはしなかつたかといふ恐れが、私をこの上もない自責に捕へさした。けれども私自身としては斯うした時の來ることを覺悟した筈であつた、長い間尊敬し合ひいたはり合ふことの出來た、この神のやうな友をうしなふ時がまのあたりに逼つて來てゐることを知らなければならなかつた私は、多くの感慨を秘めて、短い別れの言葉をつゞらうとしてKの机に寄つた、が、涙がとめどなくあふれて來てそれを妨げた、Kの妻が心配して、
「父ちやんが何か御氣にさわることでも云つたの？」と云つて眞實に慰めてくれる、私は、
「いえ、いえ、私がわるいのです。ずい分、長い間、本當によいお友だちであつて下すつたのですけれど……」と口ごもつた私は、あとの言葉を續け得なかつた。
私はなほ、その期に到つても忘れられない記憶が更によみがへつて來るのであつた。
母と私の以前の良人との感情の行きちがひから、私が良人の許に歸りたい意志を果せずにゐる時、私に「ひそかに逃れよ、母上は私がなだめる」と云つて、貧しい彼れの生活の中から私に旅費をくれた彼、または私の良人の無職からえられない私たちの幸福のために就職の口を與へてくれたりした彼、私はそれらの尊い涙ぐましい友情を、いまになつてむざむざと裂かられねばならぬ悲しさを思つた。

私は彼に一言の詫びをして、理解をもとめる時期を待つてゐたのであつたに、彼は去年の初夏、私の知らぬ事情のもとに自ら命を絶つてしまつたのであつた。私はいまでもこの美しい至純な友情に對して、自らを顧み努めなければならぬことを思ふ。そこには一點の不純さも見出し得なかつた。私の一生の經驗の間にこの友情は永久に輝かしいものであらうことを誇りとして、私はいつまでもKの靈に感謝とさんげのこころとをさゝげたいと思ふ。

思出さるゝ友

徳田秋聲

文壇的ではないけれど、私は玖馬で客死した友人太田四郎君のことを時々思ひ出させられてならないのです。四郎君は私の郷里の町では名家の第四男であつたが、大學へ來る時分に、醫科を出たその長兄の肺病の看護をして傳染したらしく、入る早々學業を休まなければならなかつた。その長兄も秀才であつたが、其の次弟は格別の秀才であつたけれど、一高時代にもう放蕩を初めて、勘當のやうになつてしまひ、三番目の兄さんだけが法科を出て、三島太郎君と一緒に朝鮮銀行にゐましたが、世間で知つてゐるとほり金塊問題などで骨折つた人で、先年箱根で腦溢血で亡なつてしまつた。その前に次兄も北海道で死に、四郎君も玖馬で死んでしまつた。お父さんは緒方洪庵の門弟で、最初の金澤病院長であつた。私は中學時代に、四郎君を毛色の變つた人間だと思つてゐたが、何うかしたはづみに遊びに行くと、廣い庭のなかにある茅葺の茶室のやうなところへ案内されて、若茗を喫つて其の頃の青年らしい鬱勃を洩らしたものだが、それから度々遊びに行つた。老荘韓非物語などを讀んだのは、大抵同君の本で　四郎君はその頃東洋の經綸策とか、世界の平和とか、今で言ふ人類愛とかを、よく說いて[illegible]せた。これはお父さんの遺傳であつたと思はれる。蘭學者であつたお父さんは、四方の志を抱きながら一家の都合で國へ引込ませられたものらしかつた。私は繪畫の本もづいぶん見せてもらつた。大雅堂の大きな屏風なども、その家で初めて見た。「木戸の書なんか仕方がない」と、孝允の掛物を振廻りながら言つてゐたことも覺えてゐる。その庭園に今思ふと文旦のあつたことも不思議である。四郎君は、私などと違つて、靜かなお行儀のいゝお上品な人で、いつでも角帯をしめて、きちんと坐つてゐたり、よ

く繪をかいてゐた。書は古人の風格があつた。私は四郎君に激賞されたことが甚だ多いのである。

　四郎君は再び大學へ戻る機會がなかつた。長いあひだ旅から旅をあるいて、病を養ふてゐた。するうちに段々年を取つて來た。思想が幾度も變つた。畫で立たうと思つたこともあつた。小笠原へわたつて、視學をやつてゐたこともあつた。それを罷めて歸つたとき、私としばらく同棲する機會があつたが、小笠原にゐるあひだに、づいぶん色々のことを體驗したらしかつた。小說の材料が澤山あるといつて、自身で流浪人のことを書いてみたりしたが、間もなく美術研究が目的であつたらしく、京都へ行つてしまつた。

　京都ではづゐぶん長くゐた。大德寺に立籠つてゐたこともあるし、黑谷の方にゐたことも隨分長かつた。元來が藝術家肌の人間なのだが、氣質が狷介であつたのと、それに氣づいたのが遲かつたので、大變に損をしてしまつた。

　お父さんが亡くなつてから、彼はしばらく看護に行つてゐた家の始末などして、いよ〳〵洋行するときが來たと言つて悅んで東京へ出て來た。お父さんの片身だといふ金時計をもつてゐたが、それはお父さんが長崎にゐた頃、歸國の旅費に困つてゐた蘭人から買つたものだと言ふことであつた。それから乾山の畫なども、少しもつてゐた。立つときには東京のことを一ト通り知つておきたいと言つて、方々見てあるいた。

　彼は最近まで僧のやうな生活をしてゐたが、枯泉に入つたわけではなく、年を取つても靑年のやうな淸純さを失はなかつたのであつた。しかし渡航前にはいくらかそんな事にも目ざめてゐて、東京の遊廓なぞも瞥見した。私は貧しかつた。碌に東京を見せることもできなかつたのを、今思ひ出して遺憾に思ふ。彼は立派な親類が東京にいくらもあるに拘はらず、私の陋宅に滯留して、そのまゝ孤影悄然とアメリカ行きの旅に上つたのである。

　アメリカから歐洲へ渡るつもりであつたが、餘り思はしいことがなかつた。玖馬で或る農園で働いてゐるうちに、世界戰爭中スパイと誤認されて囚はれの身となつた。友人が朝鮮銀行の兄さんのところへ知らしてくれて、兄さんから外務省へ釋明の方法を講じてもらつたが、通信の思はしくない時節なので、早速の間にあはなかつたらしい。獄を出てから間もなく死んでしまつたのである。

　私のところには四郎君のかいた畫が少し殘つてゐる。手紙の面白いのがあつたけれど、無くなつてしまつて、彼の面影を偲ぶよすがもないのを、始終淋しく思つてゐる。

四郎君は私がほんとうに渝らない友情を持合つてゐた人の一人である。

大切な芽

中條百合子

私は、友情と云ふものに多くの夢をかけて居る者だ。どうかして一人でも一生の間には、これこそ自分の心の友として悦びや悲しみを倶にし得る人を得たいと常に思つて居た。けれども、子供の時から私の生活は兩親の保護でぐるりととりまかれ、その狀態が長く續いたので、本當に自分の感情を流露させて深く交際する人を見出すことは難しかつた。一つには、性格の傾向や趣味の問題もある。何かで讀んだ通り、此方で求めるときには、却つてよい友などは見つからないものなのかもしれない。一時、私は同性間の友情に、隨分悲觀的な見方をしたことがあつた。女學校時分に相當親しかつた友達などでも、段々時が經ち、生活の樣子が異つて來ると、どうもぴつたり心が喰ひ合はない。正直なことを云ふと感情を害し、自己の生活などを全然客觀し得ない、あるまゝの面も綺麗なよそ行きな部面だけを照し合はせていき合つて行かなければならないのは、私にとつて苦痛であり、物足りなさが增す一方であつた。

私は、其にいろ〳〵理窟をつけて考へて見た。女と云ふものは、概して自分を發育させ、広い確かな地盤の上で生きようとする本能的な熱意が男より少いのではないか、家が幸福で兄妹でもあつて育てば、友達を求める切な望みは起るまいし、大きくなつて結婚でもすれば、良人に承認される丈の自分で大抵安心を得てしまふ。友達との關係は第二次的のものになる。良人同志ハ社會的地位などが若し互の意識に這入りでもすれば友情は衰弱するばかりであらう。

仕事を持たない人、これ丈は一生かゝつてどうにかしようと云ふ一つのものを持たない人は、その點不氣であると思つた。仕事をするのは獨りぼつちの業であると知つても、時々心の底を打ち破つて思ふたけを話し合ふ友達が欲しい。仲間が欲しいと云ふのが本當であらう。趣味、餘技などと云ふなまやさしいところを拔け、百姓ならば汗だく〳〵になつて振つた鍬を一休みし、額や頸でも拭きながら腰を延して「やあ、どうだ、うまく行くか」と聲をかけ合ふ、さう云ふ交りが實に實に欲しいのだ。

男の人は誰でもさう云ふ友達がある。女は、なか〳〵さう云ふ友達は見出せない。其故、女性で一つの特殊な道に進む人々、畫家でも、(音樂家は數の多さから見て他の部門よりはましだらうと想像する)創作家でも孤立的な場合が多い。考へればつく〳〵寂しいことだ。そして、さう云ふ孤立的な少數の女性は、一人や二人しんから解り合ふ友もない程、女性の世界は狹小で未熟である、自分の生れた國の乏しさを歎くより、とかく孤立の程度を自己の卓越の程度と同一視する。佗しい限りだ。

私は、四五年來、何處からかいつか相ふれて來るだらう友を待つことが切であつた。近頃その希望がやつとそろ〳〵日の目を見るやうになつて來たらしい。私は近いところに(感情の距離から云つて。妙な表しかただけれども。)二人、それより一寸はなれて一人、よい仲間が出來始めた。方向をかへると、他にも二人ばかり。この人達は、皆生れつきが違つて居る、それで私を種々な方にのばしてくれる。私がよい友となれる希望を充分にもつのは、その人達と一緒に居ると私は虚飾を忘れ、樂な、きのまゝの、それで居て決してうちやちやけては居ないいゝ心持になれるからだ。その人々と遊んだり、喋つたりすると、あとは爽やかで勇氣づけられ、意氣込んで來る。實生活の上でも、仕事の上でも、本當に友達の有難みを知ることの出來るのは、これからであらうと思つて居る。その人々とのつき合ひが始つてからでも、もう私は可なり深くその感謝を感じて居ることもある。其那ことを一々具體的に、友の名を並べ面白く書いて欲しいのが、多分編輯の方の目的であつたのだらうけれども、私の友情はやつとおそまきの、私にとつては大事な芽を地面の奥でふき出したばかりと云つてよい時期にある。私は、今迄待ち望んで居たものが到頭見出せるかと云ふときなのだから、それを自然に育てようと眞面目に考へて居る。自ら地面を破つて現れる迄、私は滋養にとんだ沈默で二葉を包んで置かう。

異性の友情も、私は微妙な陰翳のあるまゝ朗らかに肯定し暢々保つて行きたい。けれども、むづかしいのは私の根性が思ふ通り垢拔けて呉れないことだ。

身にあまる犧牲

埴原久和代

想ひ出せばそれはもう十年餘りも前のことで、美術學校た

卒業すると間もなく私は郷里の家に一年ばかり歸つてゐたときのことであつた。忘れることも出來ない。それは正月の二日の出來事である。私は偶と思ひもかけない急性のしかも甚だ質のよくない眼病にかゝつたのである。それで家から四里程離れてゐる甲府のさる眼科醫のところへ入院しなければならないことがあつた。生來私は眼が弱かつたので、學校にゐる時分でも、殆んど一年の半は眼醫者へ通はねばならなかつたほどで、眼に就ては常から並ならぬ注意を持つてゐた方だつた。にもかゝはらず、この時の病氣は、俗にいふ風眼とやら言ふので、酷い毒に犯されたのだといふことだつた。何しろ昨夜までふだんと少しも變らなかつた私の眼は、その翌朝は殆んど身うごきも出來ないほどの烈しい痛みで、その上腫の様なもので閉ぢふさがつた兩方の眼は、まぶたまですつかりはれあがつてしまつた。病院へ連れてゆかれた時にもとりあへず一應の診察をして見た後、醫者は深く思案の首を傾けたさうだつた。併し手當をしてから數日して、痛みは漸んだん輕くなつていつたが、元々眼の弱いところへそんな急性の悪質を受けたのであるし、おまけにあの四里もあるところの道を如何ほど靜かに運ばれたといつても、それだけは確かに障りにもない手おくれにもなつてゐなければならないので、或はもう眼はつぶれてゐるのかもしれない、――私はそつと仰向きに寢かされた儘、まぶたの中の眼球の痛むあたりに深く心を集めながら、然う思はずにはゐられなかつた。しかも醫者は何度診察しても私に向つてはその容態について決して言はなかつた。私もまた、それをたづねて見ることが怖ろしい氣がして、唯だ默つて醫者に任せてゐるよりほかなかつた。

二週間ほど過ぎたある日、診察する爲めに、繃帶をとりのけた時、醫者は私の眼の上に、懐中電燈をつきつけて、そして『あかるく見えますか』と言つた。私はやゝ明るく感じたのでそのことを言ふと醫者はしばらく考へるらしく、後に『大丈夫です、全く失明するほどのことはないでせう。』然ういつて新らしい繃帶と取かへて醫者は行つてしまつた。私は醫者が、『全く失明するほどのことはないでせう。』といつたその言葉をきいた時、今更の様に失望しないではゐられなかつた。そしてもうだめだ。と思つた。よし失明するほどのことはなくとも、私の眼はもう完全ではない、とにかく電燈が唯だあれだけのあかるさにしか感じられない様では……そして私の眼はもう再び、色を視ることも、形を視ることも出來なくなつてしまつたのだ。然う思つた時、私は全く世の中も心の中も眞つ暗闇になつた氣がした。それからといふものは私はも

う、ものを言ふことさへいとはしくなつてしまつた。そして唯だ默して運命に從ふよりほかないことを覺悟しなければならなくなつた。

この病院には看護婦といふものは醫者附のものよりほかにはゐなかつた。それですべての世話は母の手を煩はさねばならなかつた。でも私はなまなかの看護婦にまかされるよりはそれの方が遙かに願はしかつたのだ。けれども私は何もかも推察してゐる母の心を想ひやつてはともすれば繃帶にしたゝるほど涙が流れるのだつた。母はその時はじめて私の友人の二三の人にだけひそかに私の眼病のことを知らせたらしかつた。母は私の失望の心を慰めるすべがなかつたのであつた。私はまた母の悲しみを慰めるよすがのないのがたへがたい苦痛だつた。

ながいこと東京にばかりゐた私には、その時分郷里には殆んど語り合ふ樣な友人はゐなかつた。毎日たづねてくれるのは大かた村の人達と親戚のものばかりだつた。けれども唯だ一人その前の年、商業を出たAといふ友人が、甲府のさる銀行へ來て居つた。それまでは何んにも知らなかつたAさんは母の知らせに驚いて急いで見舞に來てくれた。さうして病室にはいると直ぐに私のベットに近よつて、やさしく力のある聲で『Aです。とんだことでしたね……』然ういつて思ひのほかの重患らしいのを見て深く嘆息するらしく『併し、決して失望してはいけません。いま醫術は驚くべき進歩をしてゐます……』私は久し振りで、しかも思ひがけないところでこの新しい友の聲を聞いたよろこびと、自分のその時の悲しみをあまへて訴へたい樣な氣持とで、胸がつまつて直ぐにはその友の言葉に答へることも出來なかつた。Aさんはそれからは銀行から引けると殆んど一日もかゝすことなく、それこそ寒い雪の日も、風の日も私の病床を訪ねてくれる。そして疲れた母に代つては何くれとなくいろ／＼の世話をしたり、私の無聊と失望のなやみを慰め樣と心を盡してくれるのであつた。そしてAさんはいつも私が睡りにつくのを見なければ歸つてはゆかなかつた。

それからその時、いま一人東京にゐるSさんも母の知らせに驚いてとるものもとりあへず出て來たといつて遠くからわざ／＼見舞はれたことは私にとつて言ひ盡せないうれしさであつた。Sさんは私の眼が或は見えなくなるだらう將來を想ひ極度に心を暗くしてゐる母と私との氣持を何うすれば少しでも引立たせてやれるだらうかと深くおもひなやんでゐるらしくある時斯んなことも言はれたのであつた。『醫者は大丈

夫だと言つてゐます。併し例へ貴女が萬一失明する樣なことがあるとしても、斯うして私に完全な眼のある間はきつと貴女の眼に代つて何物でも貴女に視せ得ることを信じてゐる。悲しまないでいらつしやい』これをきいた時私の繃帶に包まれた眼は痛いほど熱くなるのを覺えた。Sさんは斯う言つてその翌日、『では大事にして下さい、また來ることにします』といつて早くもまた東京へ引かへす用意をするらしかつた。

その頃Sさんは繪畫のほかにある仕事を研究してゐた、そして其の研究材料としてながい間求めてゐるものがあつた。ところが偶々ある外國人がその材料を研究してゐることを知つてSさんが、それを見せてもらう約束の日が恰度私を見舞はれた翌々日になつてゐたのであつた。併し然んなことのあるとは少しも知らない私は、しばらく東京の友達から遠ざかつてゐたので、Sさんの思ひがけない訪問が非常に嬉しくて自然心も引立てられる樣だつたのに、然んなに直ぐまた行つてしまはれることがひどく淋しく思はれた。それで私はいかにも名殘惜しく、せめて一週間此所に止つてください。私の眼もその頃になればはつきり癒るものか何うかの見込もつくでせうから。といつて精一ぱい引とめたい氣持を洩らした。其の時Sさんは『よろしい、では何時までゞもゐます』といつて極めて無雜作に、しかも快く諾るのを無期限に延ばされたのであつた。

ところがSさんは其の時東京へ歸らなかつた爲めにながい間求めてゐた研究材料を持つてゐる外國人は、Sさんの會はない中に東京を立つて、遂に遠く歸國の途についてしまつたのであつた。私はそのことをあとになつてから偶然に知つてほんたうにすまないことをしてしまつたと思つた。Sさんは其の材料を一見しさへしたならばその研究も着々進行して、ながい間の志を遂げることも出來たであらうものを、しかもSさんはこの千載一遇の好機を唯だ私の我儘の爲めにむざむざと逸してしまはれたのであつた。それにもかゝはらずSさんはそれからあとにもたゞの一言すらそのことについては話されなかつた。SさんとAさんと、この二人の友情の想出は今もなほ感謝の心を深く且つ新たにしてゐる。

戀愛？ 友情？

中西伊之助

一

今でこそ少しは落つくやうになつたが、私ほどよく放浪して廻つた男は少いと思ふ。で、その間には、友人などから涙の出るやうな親切な友情に接したことは數へ切れないほどあるが、それらは、みんな甚だ平凡で、雜誌で發表するほどなことはない。が、後にも先きにもたつた一つ　今でも僕には解らぬ友情をかけてくれた婦人がある。それも、若い婦人であつた。

かう云ふと、それは戀愛だらうと、だれしも思ふに違ひない。しかし、決してさうではないと考へられる點がいくらもあるのだから、私は今でも、やつぱりあれは友情であつたと思つてゐる。いや、實は、それはどちらであるか、自分にもいまだに解らない謎である。――

それは私がまだ二十五六の頃であつた。私はその頃、ある植民地の病院の調劑生をしてゐた。やはり青春時代の放浪生活の間であるから、かなり放埒な行爲のあつたことはいなめない。この話も、そのコンフエツスの一つである。

その病院には、澤山の看護婦がゐたが、その中の『帝國醫科大學卒業』と云ふ肩書をもつてゐる看護婦長は、年は私と同じ年であつたが、意志の強固らしい女で、八九人の内科の看護婦の間には信望も厚かつた。

そんなことを云つてはなんだか、私はその頃その病院にゐる女なんどは眼中になかつた。そしてしきりに白粉臭い女の許に通つてゐた。が私はどんな暗い魔窟に入り浸つてゐても自身は頗る眞劍で、甲から乙と渡り歩くやうなことはなく、一人の女に夢中になるのが癖であつた。――放蕩兒としてはまあ甘い方であつた。從つて、そんなところへ通つてゐても社會の普通な處女と戀するやうな惱みがあつた。いや、物質關係では、それ以上の強烈な惱みがあつた。面白いのはその唯一の慰め手であり、相談相手であり、また物質的な方面にも、自分を扶けてくれたのは、その病院の婦長であつた。

二

二十五六と云つても、私はまだ他愛のない子供らしい男で

あつた。で、私はよく懋子——婦長の名——に、自分の煩悶らしいものをもらした。と、彼女は或る時は姉のやうになつてそれをきいてくれた。或る時は戀人のやうにしてそれを慰めてくれた。或時はまた母のやうになつて、自分の貯金の通帳から、金を貸してくれた。私は、その頃、彼女が他の一人の女友達と家を借りて住んでゐるところへよく行つた。が、彼女は一言半句も艶めかしいことを私には言ひ出さなかつた。私はもちろん、彼女を少しも戀してはゐないのだから、それをさびしく思ふ理由はなかつた。しかし、彼女は、決し容貌の醜い女でないことは斷つておく。

が、かうした關係は、すぐ周圍の人たちから誤解を招くのは當然であつた。そこでまづ私は病院から馘られた。私はすぐ行きどころに困つてしまつたが、懋子は早速私を自分の家に引取つてくれた。一ケ月ほど後、彼女も病院を自分からやめてしまつた。そして私とは、一見戀の勝利者のやうな生活をした。云ふまでもなく、周圍の人たちは、私等の戀が成立したものであると決めてゐた。そして、私は今まで血道をあげて通つてゐた女とは、勢ひ切れてしまつた。が、私は、決して懋子とは戀し合つてもゐなかつたし、また、肉的な關係は毛頭なかつた。

不可思議な男女の生活であつた。彼女は、今までの職業を捨ててしまふし、私は生命がけの戀をすてゝしまはなければならなかつた。そして二人は兄妹のやうに、純な友情と云ふものばかりで、新しい生活をつゞけてゐた。こんな生活は、或は變態であるかもしれない。が、私は、どうしても懋子を自分の戀人にしようと云ふ感情は起らなかつた。懋子も、きつとさうであつたらうと思ふ。二三ケ月の間に、懋子は、長い間に貯へて置いた貯金を、すつかり費ひ果してしまつた。そして、彼女は知人の間をかけ廻つて、借金をして、二人の生活費に充てたりした。私は、心から彼女の親切を感謝してゐたが、それ以上の感情は懐くことはできなかつた。

三

更らにそこに面白い問題が持ち上つた。それは、懋子がその後、私に内々で奔走して、私の關係してゐた女と、私との情交を、舊にもどしたことであつた。相手の女も、懋子の心がわかつたと見えて、私ともとの如き關係をつゞけることを拒まなかつた。懋子のさうした行動は、私が、女と切れた後の憂鬱な心境に同情したためであらうと思はれた。そして女と私が逢曳をする金さへ、その苦しい財布の中から工面して

くれた。

しかし、そんな生活はいつまでも續かなかつた。憲子は、もう自分の持物全部をなくしてしまつた。そして、私達二人の生活は、すつかり行き詰つてしまつた。が、彼女は、一言だつて恨みがましいことは云はなかつた。が、彼女も考へて彼女の知人の勸めてゐる、一つ海を越えたT市の病院へ行くことにした。ある朝、私はこの親切な——それはまるで私には不可解とも思はれるやうな、私の婦人の友だち——を、すぐ近くの港行の汽車の着くステエションに送つた。

『では左樣なら、……』

憲子は、ぢつと私の顔を見つめて、さびしげに云つた。

『左樣なら……』と私も云つた。

『軀をだいじにね……』さう云ふ彼女の顔は、聖母のやうに私には感じられた。

なにもかも無くして、中位の信玄袋一つになつてしまつた彼女はかうして旅立つて行つた。

向ふへ着いてから、當分のうちはよく手紙をくれた。私からも出した。が、それもいつの間にか遠のいてしまつた。そして永久に別れてしまつた。

戀愛か、友情か、——私はいまだにそれがわからない。けれど、彼女の温かい親切は、今でも私には忘れられないものである……。

友の描いた畫

丹野禎子

「一番嬉しかつた友情の思ひ出。」と言つて何か特別に書かうとすると、どうもそれよりもつと嬉しかつたことがほかにあつたやうな氣がして、結局何を書いていゝかわからなくなります。つまり、自分と今親しくしてゐる友との間は大したこともなく、單に樂しい友情のつゞきだつたと言ふよりほかに言ひようはないのだといふ氣がして來ます。

もう十二年ほどまへに死んでしまつた友だちですが、私は時々、妙にその人のことを思ひ出します。ことに、疲れて淋しい晩なんか、その友のはがきや手紙なんかを讀み返してゐると、何とも言へず和やかな慰められた氣持になつてくるのです。何の氣もなく受けとつて、たゞそのまゝ仕舞つておいた昔のはがきや手紙が、今、こんなにまで、しみじみと、自分の氣持を靜かにさせるのかと思ふと、むしろ不思議のやう

な氣がします。繪をよく描く人で、そのはがきや手紙はみんな繪ばかりです。字はほんの、その說明ほどしか書いてありません。その繪がまた隨分變つてゐるのです、筆で思ひ切つた線で、ぐつぐつと、人の顏でも着物でも描いて、その上を簡單な美しい色でちよこちよこと塗つてあるのです。さういふ繪を描く時の安井さんを知つてゐますが、どんな繪でも、三分とはかゝらない。造作なく描いてしまふのです。この頃でこそ自由畫とか何とか言つて騷ぎますが、十四五年前に描いた安井さんの繪を見せたら、その思ひ切つた筆に人はきつと驚嘆するでせう。

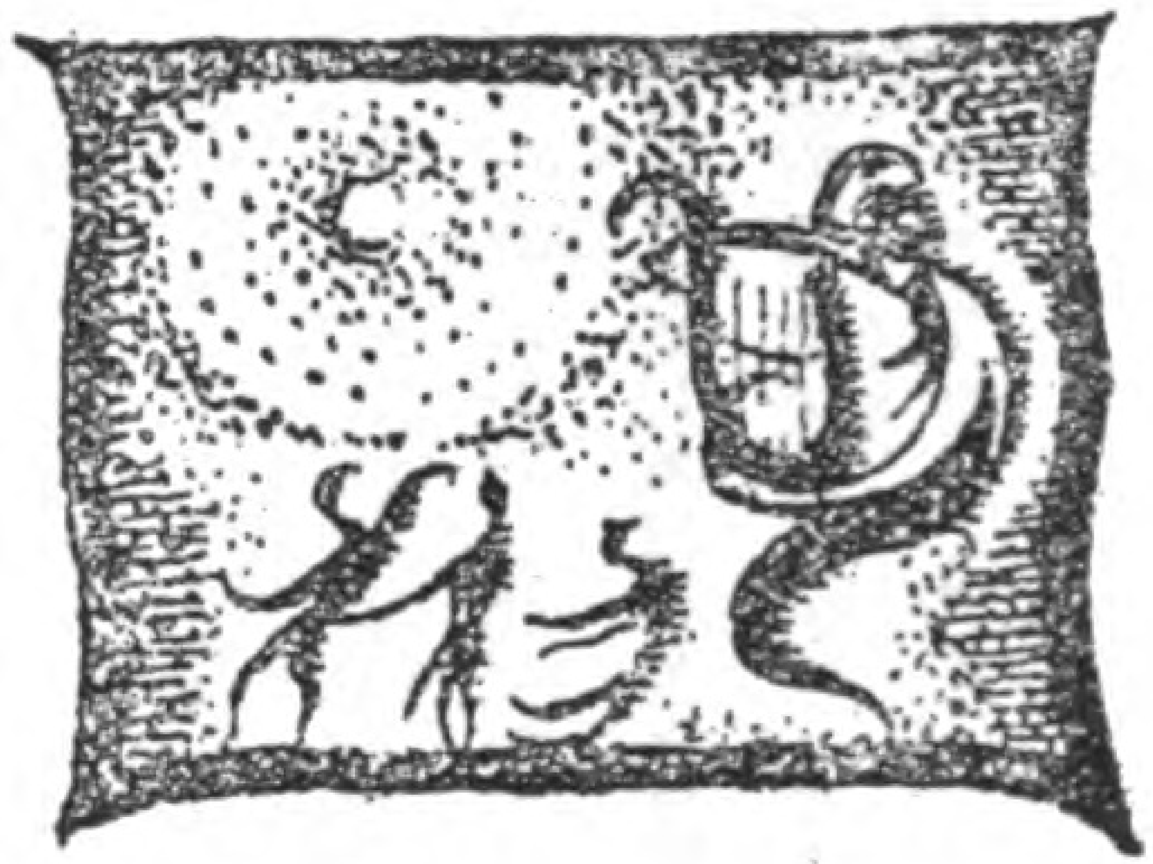
土曜日の半日と日曜日一日會はないでゐると、きつと日曜日の夕方にはそのはがきがくるのです。ですからほんの一年ほどの交際でしたが、私のところには二寸ほどの厚さにはがきがあります。お下げに結つた女の子が机に向つて勉强してゐる。机の上にはランプがあつて、ほやの周りには黄色い光りがパッパッと出てゐる。壁のわきには、（貴女は試驗の勉强をなさいましたか、私は理科だけさらひました。）と書いてあるのです。また、束髮に結つた人と、お下げの女の子との半身を向き合ひに話しでもしてゐるやうに描いて、はがきの下の隅の方に、墨で眞黑に描いた黑猫が眼を剝いてゐる。わきには、（私が十二支の中になぜ猫の年がないのだらうかと言つたら、猫は魔物だからと姉が言つた）と書いてあります。朝花屋に行つてダリアを切つて來た。貴女にも一つ上げませうと書いて、花瓣を墨でぐる〳〵と描いて、臙脂の濃い色をどす黑く塗つたダリアが描いてあります。（あゝ私は貴方のやうなお友だちが出來て本當に嬉しい。神に感謝いたします。）といふ言葉のわきには、羽根の生えた天使が杖を持つて立つてゐる下に、女の子がひざまづいてゐる繪が描いてあります。

それはどのはがきもみんな子供らしい一とむきになつた優しい、友情の溢れてゐるものばかりです。安井さんといふ人は女學校に入學したての一年の時から、本當に友だちのない人でした。いつも教室の後の方の自分の机で、一人で何か知らん描いてゐるのです。その取りすました、どこか淋しさうな樣子が氣になつて、「何をしていらつしやるの。」といつて、私がその側に行き、安井さんの手つとり早い繪の描きようを驚いて見てゐたのが、友だちになり初めだつたのです。それから二人は一年ほどは仲よくしてゐたでせう。

その内安井さんが、「この頃私はあなたと口を利くのがいやになつた。といふ手紙をよこし、それに私がすつかり怒つてしまつて、それからあと、安井さんがどんなに詫びても承知

しない。たうとう喧嘩をしつゞけてゐる内に、安井さんは病氣になつて學校を休んでしまひました。安井さんの病氣がひどく惡くなつたと聞いてから、私は驚いてせつせと見舞ひに行きました。けれどもその時には、もう會ふことも出來ずただ、時々花なんか持つて行つて玄關から歸つてくるだけでした。そんな風で、話をすることは出來ませんでしたが、氣が向いた時には、持つて行つた花の繪なんか描いてはがきをくれました。文句も前より簡單でしたし、字も、なほ亂暴でした。きつと病氣で疲れてゐたのでせう。それを私は子供でわからなかつたもので、安井さんは、まだ自分に怒つてゐる。だからこんなにぞんざいなはがきを描くのだと思つてゐました。でも仕方がない。自分が安井さんに隨分意地惡だつたのが惡かつたのだからと思つては、見舞に行きました。歿くなられてから安井さんのお母さんに伺つたのですが、歿くなられる少し前に私は仲見世で飛んだりはねたりの奴さんの玩具と、一輪ざしにダリアをさして持つて行きました。この飛んだりはねたりを大へん嬉しがられたさうです。その時にも、奴さんと一輪ざしとダリアの繪を描き、一輪ざしを描いた同じうすい水色の畫具でお禮の文句を書いてはがきを下さいました。字が疲れたやうにぐしや／＼してゐました。ダリアの赤い色は、ひどく綺麗でした。そのはがきを書かれたのが最後で、それきりどつと病氣が惡くなつてその秋に歿くなられました。

安井さんの描いた畫は殆んどみんな大切に仕舞つてあります。その中には雜記帳の紙を破いて、色鉛筆でぐしや／＼描いたのもあります。（ゆうべ見た夢）とことはり書がしてあつて紋つきの羽織を着て顎髭の生えた人が立つてゐると、安井さんらしいお下げに赤いリボンをかけて、黄色い兵兒帶をしめた女の子が、その背の高い男の人の膝に手をかけて何か言つてゐる繪もあります。その畫はたしか、月曜日の朝、敎室のあの黒い机で二人が話してゐた時に、描いたのです。私はその時の安井さんの表情から言葉まで思ひ出すことが出來る。考へれば聰明な頭のいゝ、そして思ひ切つてひねくれた旋曲りの、そのくせ人なつこい人でした。今生きてゐれば、きつと何かの折に安井さんの噂を聞くこともあるでせう。そして十五六の時分にあんなに仲よくした安井さん。と思つて、陰ながら懷しく思ふでせう。本當に生きてゐたらば、何かしらん出來た人です。死んでしまつては、もう、私よりほかに、こんなにあの人を懷しがる友だちはないかも知れません。



或日のレムブラント夫妻

泉甲二

レムブラントは友人仲間と樂しい晩餐會を催した夜、遲くなつてから家に歸つて來た。然し、彼はいつものやうに、二時間あまりもぐつすり寢込むと、又生々とした自分にかへるのが常だつた。翌朝になると、彼はおそろしく早く床を離れて、畫室に入つた。そして、早速蠟燭の灯で仕事を始めたが彼は時々窓の方を氣にした。それは明かに夜明けを待ち焦れてゐるもののやうに見えた。

「もうサスキアも眼を醒ますだらうな」とレムブラントはおもつた。「あれは俺がゆふべ家に歸つて來た時も、今朝床を出たときも狸寢りをしてゐたんだ、さう俺にはおもへる、然し俺を瞞着しようなんてことが出來るものか、馬鹿々々しい……」

朝日がすつかり畫室に射し込んでゐた。淸々しい朝の光が、レムブラントをすつかり包んでゐた、彼は畫架の傍で仕事をしてゐたが、突然、若い妻のサスキアが、階下で女中の一人を叱りつけてゐるらしい聲を聞いた。

「又、始まつた!」と、彼はおもつた。それからしばらくのあひだ、彼は呟きながらも、描きかけのカンヴスに視線を落してゐたが「さうだ、サスキアがあんな風にがみ〳〵やるのも、決して間違つてはゐない、結局は俺が家にゐてやらなかつたのが悪かつたのだ」

彼はこんな風に考へた。然し、このあまり幸福でない考へは、すぐ繪畫に氣をとられて、消えてしまつたやうである。次の瞬間には、彼は急に筆を置いて、部屋の中を步き始めた。それから彼は強ひて輕い調子を裝ふかのやうに、口笛を吹きながら下におりて行つた。二階を下りたところには、一

枚の繪が懸けられてゐた。そこまで來ると、彼は立ちどまつて、その額に見入るのが癖みたやうになつてゐた。繪は結婚後間もないサスキアが描かれてゐた。サスキアは、大きな鍔廣の帽子を被つてゐて、その深いかげの下からは可愛らしい顏が覗いてゐた。彼はしばらくのあひだ彼女を覗めてゐた。彼女も、亦彼を覗めてゐた。遂には彼女が微笑してゐるかのやうに、レムブラントには見えた。勿論、さうした彼も微笑してゐた。この一枚の繪は、全くレムブラントにとつては、生々とした力を與へてくれる唯一の追憶であつた。彼はそのまま踵を返して、再び畫室に戻つて來た。それと同時に、ドアを開いて入つて來る男があつた。それは、年老いたドクトル・ハインシウスだつた。

　レムブラントは、この老人と握手してから、椅子にかけるやうにすすめた。そして、また自分は畫架の方へ歩いて行つた。老人は、言はれるままに腰をかけたが、持病のリウマチスと喘息を餘程氣に病んでゐるものと見えて、いろいろと愚痴を並べ始めた。彼のからだ具合は、全くよくなかつた。あらゆる手當をしたにも係はらず、老人のからだは段々惡くなるらしかつた。

「お惡いやうですね」

と、レムブラントは窓から射し込む光線を眞面に顏にうけながら言つた。そのとき、ハインシウスは哲學を識つてゐたといふのは、彼は今や死に對して用意をしてゐなければならなかつた。死の世界に入つて行つても、靈魂は果して存在するものであるかどうかといふ問題が、彼には一つの疑問だつた。

　レムブラントは、何か口籠りながら、仕事の方に相變らず氣をとられてゐたが、彼の意見としては、靈魂が不滅であらうがなからうが、そんなことは、大して重要なこととでもなかつた。

　老人はレムブラントが獨語してゐるのを聞きのがさなかつた。

「レムブラント君、君は今何か言つたね」と、ハインシウスは訊ねた。「我々人類の靈魂が不滅であるか、或はさうでないかといふことを、君は重要な問題でないといふのかね」

　レムブラントは、再び描きかけのカンヷスの方を向きながら應へた。

「私はさういふことを考へるよりも、私には唯數年の日月を持つことが出來さへすれば、それだけで、いい仕事を完成することが出來るんですが」

「數年だつて？　レムブラント君、永劫と比較して御覧、我々が永久に存在することを考へたら、それだけの存在は何等の價値を持たないぢやないか」

「いや、私はほんとに一日だつて結構だとおもひますよ」

　と、若い藝術家は應へた。

「一日だつて？　勿論、わしも大きな仕事を完成して來た。そして、その仕事に對しては、相當榮譽も贏ち得て來た、然し、死が我々の生の扉をノックするとき、さうした仕事の價値はどうなるのだらう？」

「お願ひですから、あの椅子にかけてくれませんか」と、レムブラントは、老人のさうしたお話にはおかまひなしに言つた。「いい光線だ、私はあなたを私の好きな光線の中にゐてもらはなければならないのです」

　ハインシウスは求められるままに動いた。そして、永い間、レムブラントを眺めてゐた。レムブラントはまだ三十歳にもなつてゐなかつたが、當時彼は既に名聲嘖々たるもので、世の崇拜を一身に集めてゐた。それに、彼は尚引きつづいて、絶えず傑れた作品に、天才を見せてゐた。從つて彼が死の問題にあまり興味を感じないのも、自然であるかも知れない。彼の現在の生活は、輝しい光のなかに舞ふ胡蝶のやうに、自由で生々としてゐるのであつた。

「レムブラント君」と、ドクトル・ハインシウスが言つた。「わしは君に眞面目に話さなければならぬことがある、それは別に大したことでもないのだが、どうか何事につけても、も少しきびきびしてもらひたいと思ふのだが……」

「すべての事實に、私がぼんやりだと仰言るのですか」

　と、レムブラントは、微笑しながら老人の方を向いて言つた。

「さうだ、君は全くきびきびしたところがない、わしはきのふ君の所に澤山のお金が入つて來たことを知つてゐる、わしが今日君の所にやつて來たといふのも、實はそのためなのだ」

「それぢや、あなたはその金をすつかり借用でもしようといふのですか」

「いや、さういふわけぢやないが、君は爲替手形や家賃を、すつかり支拂つてわしを安心さしてもらひたいといふのだ、君が幸福だと、わしも矢張り幸福なんだからね」

「そりや御尤もです」と、レムブラントが言つた。「それぢや、お金はあそこの抽斗にはひつてゐますから、それを持つて行つて、あなたのいいやうに支拂を濟ましてくれませんか」

かういつて、レムブラントは繪の方に批判的の眼を向けたのち微笑した。

老人はごほん〱と咳を續けた。そのあとで、彼はどうしても言はなければ氣がすまぬといつたかたちで、附け加へて言つた。

「君はどうして、はひつて來たお金の少しでも貯蓄しようとはしないのかね、わしはその理由がききたいものだ」

「貯金なんて、そんなことが出來るものですか」

と、若い藝術家は、吐き出すやうにかう言つて、高らかに笑つた。

「いや。そんなことを言ふものぢやない、然し、お金を貯へるからといつて、そのお金で、投機的な金儲けをしろといふ風にすすめるのぢやない、君は大きな、いい家を持つてるんだからな」

「家なんかどうでもいいんですがね、然し私はずつと此前に、客間に飾るのに相應しい、それは素的な壺を買ひましたよ」

老人は、涙を浮べてゐた。

「そりや、虚榮といふものだ」と、老人は言つた。「家を飾るのに、澤山のお金を浪費するといふことは、ね」

突然、レムブラントは噴き出した。

「私はこの家に、一人で住んでるんぢやないのです」と、彼は言つた。「そりや、あなたが結婚したことがないから、そんなことを仰言るのでせう、それでなけりや、私の氣持が理解出來る筈だとおもひますがね」

「レムブラント君、それぢや、君のやり方は家庭的の幸福のためにだね」

「それでなくて、何の意味があるものですか」と、レムブラントは繪筆を握つたままで、笑ひながら應へた。

老人は溜息をついた、若い藝術家はさつさと描きかけの畫架の方に、歩いて行つた。

レムブラントは、理解のない老人の無駄話を苦笑してゐた。彼にとつては、金を貯へるといふことよりも、殿堂のやうに、家を愛することが必要だつた。その殿堂には、彼の最愛の妻が住んでゐた。その妻は、若くて美しかつた。

ドクトル・ハインシウスはやつと立ち上つた。

「わしたちは、午後から支拂に出なければならない」と、老人が言つた。「君は支拂をしなければならぬところが、四ケ所もあるんだから」

老人は畫室を訪れてから、このときまで、レムブラントが

描をかけの新しい繪に少しも注意してゐなかつた。ところが、今になつてやつとそれに氣がついたらしく、彼は顏をあげながら、畫架の方へ歩いて行つた。

「レムブラント君、君はどうして光線描寫の祕訣を明かにしないのかね」

「祕訣と仰言ると？」

「馬鹿々々しい、オランダの畫家といふ畫家は、皆君を羨望の眼で見てゐる。而も誰一人として、君の光線の描き方をとり入れようとして成功したものはないのだ。それで、彼等は最近、君のことを魔術師だといつてるよ」

「そうですか」と、レムブラントは相かはらず、仕事をすすめながら氣のない返事をした。ドクトル・ハインシウスは微笑した。兩手を背中に組み、顏をあげて、しげしげと藝術家を見つめた。

「光線描寫の祕訣？と、さうですね、私は確かに繪の具をまぜますね」と、レムブラントが言つた。

「馬鹿な、誰だつて繪の具をまぜないで、繪を描く人があるものぢやない、いや、レムブラント君、その祕訣といふのは、君の魂のどこかに存在してると、わしは信ずる。君の繪筆は單なる窓に過ぎない、ね、さうだらう、わしの言つてることに間違ひはないわけだが——」

　レムブラントは、心持一方に頭を傾けながら、繪を眺めた。そして獨語つた。

「さうだ、ハインシウスさん、私たちは午后から一緒に出かけませう、先刻の話の支拂にね」

　ドクトル・ハインシウスは默頭いた。それから、彼はレムブラントの畫室を出た。

「おれの魂のどこかに太陽が輝いてるつて言ふのだな」と、レムブラントはおもつた。「然し、賢い人達は何といふ馬鹿なことを考へるものだらう」

　それからしばらくして、彼はいつになくいい仕事をしてゐるのだと考へながら、妻の方へ飛んで行つて、何か話をしたいとおもつた。が、そのあとで、今日はそんな具合にうまくゆかないだらうとおもひかへした。

「おれの魂のどこかに、太陽が輝いてるといふのか」と、再び彼はおもつた。それから老人のことを考へると、噴き出したくなるほど可笑しかつた。然し、この考へは、彼をある追憶へと引つ張つて行つた。それは、レムブラントがサスキアと婚約したところの思ひ出である。或日、彼等は郊外を散歩したことがあつた。ところが、その時突然レムブラントは、

ある考へから身を隠さうとした。恰度二人が森の中を歩いてる時であつた。彼はさつさとその森深く駈け込んで行つた。

彼女は驚いた。

「レムブラントさん、レムブラントさん」

サスキアはかう呼びながら、彼のあとを追つかけた。

レムブラントは竹藪の中へ隠れた。そこからサスキアが心配気に、自分を探しながら走つてくるのを見た。そこから、彼女はあたりを見廻しながら立ちとまつた。そのとき、雲間を洩れる太陽の光が、さつと彼女を包み、その金色の光がすつかり彼女の全身に輝くのを見た。それは、まるで光芒の流れのなかに泳いでるかのやうに見えた。レムブラントはかつてこんな美しさをもつサスキアを見たことがなかつた。又、如何なる生物にも、このサスキアに見るやうな驚くべき光を見たことはなかつた。それは、彼がカンヴスの上に描寫しようと、永い間求めてゐるところのものだつた。

こんな思ひ出に、彼が耽つてゐるあひだに、突然ドアが開いて、サスキアが畫室に現はれた。彼は丁度畫架のうしろから、その姿を覗いた。それに彼女を見て驚いたことは、彼女が壜とコップをのせた盆を兩手に持つてゐたことだ。

「あなた、今日はきつと喉が乾いていらしやるとおもふわ」と、彼女はコップにライン産の葡萄酒を注ぎながら言つた。

そして、そのコップを彼の前に持つて來た。

「有難う」

二人はお互に顔を見合した。彼女の顔は、レムブラントがどんなに喜んだか、それをすつかり知つてゐながら、強ひて押しかくしてゐるやうに見えた。レムブラントはしばらくサスキアの顔を見つめてゐたが、突然彼女の手から盆を奪ひとつて傍に置くと、そのまま彼女を長椅子に引つ張り込んだ。そして、二人はぴつたり並んで、そこに腰を下した。

「僕はお前に話したいことがある」と、彼は言つた。「僕はね、實際お前のやうな妻を有つてゐる者は、恐らくこの世界にないだらうと思つてるよ」

「お默りなさい— 何であなたが、そんな殊勝なことを考へていらつしやるものですか」

「それから、第二に、僕はね、レムブラントのやうに、自分の妻を愛する紳士は、全く少ないといふことをお前に話して置きたいのだ」

「さうでせうよ、もう澤山だわ、夜通し私を置いてきぼりにしてゐるやうなあなただもの、あなたは、自分の妻よりあな

たのお友達にちやほやされるのが嬉しんでせうよ」

「かうと　第三に、……僕は第三番目に、かういふことをお前に質ねてみたいよ、お前は全く僕以外に夫として價値のある他の男を見出し得るとはおもはないだらうね」

　彼女は、横目でちらりと彼を見たきり、默つてゐた。

「それから第四に、さうさう僕はお前と一緒に家にゐなかつたときに、お前が僕のことをどんな風に考へてゐたか、それが知りたいとおもふのだが」

　彼女は、一寸又レムブラントを見た。

「あなたが家をあけてらつしたとき」と、彼女が言つた。「そりや、むなたわかつてるぢやないの。お、さうさう、私は他に考へることがあつたのよ」

「ね、ほんとのことを言つておくれ、お前が一人きりでゐたとき、僕がお前にどんな具合に見えたかさ」

「どうして、あなたそれが知りたいの」

「僕はね、お前が一人きりでゐたときに、屹度僕のことを何とか考へたらうとおもふのさ。それが僕は知りたいのだ」

「まあ、あなた隨分變だわね」

　彼女は無意識に考へ始めた、然し、サスキアは、今彼が要求したやうなことは話したくないとおもつた。遂に、彼女は微笑しながら大きな窓の方に視線をやつた。そして、云つた。

「あなたは、猶太人のイスラエルがこちらに差押へに來たときのことを覺えていらつしやるの、そら、私たちが丁度食事をしてゐるときで、あなたはその猶太人のために、上機嫌で乾杯して、その男を歸したでせう」

「サスキア、お前はそんなことを考へてゐたのか」

　彼女は默つてゐた。然し、一寸顏を赤らめて、それから無意識に、手をレムブラントの頭髮にかけた。しばらく沈默がつゞいた。彼女は尚ほ甘へるやうな恰好で、彼のあたまから手を離さなかつた。

「僕のことを、そんな風におもひ出してゐたのか」と、レムブラントは言つた。さう言つた彼は、自分でも彼女が考へてゐたときの自分の姿を描き出さうと努めた。そこには、世界のあらゆる悲しみは、乾杯すること一つに依つて消滅する、愉快な、心配といふものに無頓着なレムブラントがあつた。

「私もあなたが私のことをどんな風に考へていらしたかを知りたいとおもふわ」と、しばらくしてからサスキアが言つた。「しかし、あなたはどうせ私のことなんか、思ひ出しつこないとおもふわ、ドアを〆めて、一歩外に出ればすぐお忘れ

になるんでせうから」

　レムブラントは彼女を顧みた。

「僕がお前をどういふ風に見るかつていふのか」と、彼は眼を細うして言つた。「さうだね、僕をして言はしむれば、お前はよく、快い氣持になるために、僕の膝に靠つかることがあるやうだ」

「然し」と、彼はそのあとを續けた。「お前がまだ僕の可愛い妻にならない前、いつだつたか森の中で、僕を探してゐたときのやうな、そんな素振を見せることがよくあるやうだ。心配さうな顔をしてさ」

　サスキアは、彼のことばには耳を借さないで、何か音樂にでも聽き入るやうに首を傾けた。

「何でせう」と、彼女が言つた。

「さあ？　然しそんなことはどうでもいいとして、僕はお前にすべてを話したい、僕たちは、現在何か樂しいことについて考へてもよい時だ。さうだ、僕はお互がお互に見てゐるやうな僕とお前とを一緒に、今から描いて見ようとおもふんだが」

「いけないわ」

「どうして？　僕はね、お前の持つてゐる最も美しいものを大いに描いて見るつもりだ」

「いけないわ、今そんなこと出來るもんぢやない、私は三つのお鍋で、煮物をしてるんですよ、女中の指圖をしなければならないわ」

「鍋なんか放つとけ！ああ、繪が描けるんだがな、指がむづくして來た、チエッ、どうでも勝手にしろ」

　サスキアは、彼がこんな風に昂奮して來ると、どんな口を利いても結局無駄だといふことをよく知つてゐた。そこで、彼女は立ち上つて、そのまま急いで階下に下りた。

　午後、近所の青年達がレムブラントの畫室を訪れたときであつた。最初その畫室には誰もゐなかつたが、すぐ主人が入つて來た。彼は赤い絹の胴衣を着て、首には金鎖をかけ、長劍を腰に釣るした、祭の衣裳で美々しく着飾つてゐた。

「どうだ、見給へ、大きな畫布が用意してあるだらう」と、レムブラントは青年達に言つた。

　それから、しばらくしてサスキアもはひつて來た。彼女は手輕な衣裳を纏ふてゐた。それに氣がついたレムブラントは、（何んて馬鹿々々しいことだらう）と、顔で物を言ふやうにして、彼女を見た。

「どうしたらいいの」と、サスキアは驚いて反問した。彼女

は自分の衣裳に視線を落してゐた。それは、自分の姿がレムブラントには滿足を與へなかつたことを見拔いたからであつた。

「その帽子は何だ！」と、レムブラントは顏を顰めながら言つた。「もう、それよりいいのはないのか」

「いいのつて仰言るの、そりや新しくはないけれど、これで結構だとおもふわ」

彼女は、大きな鏡の前に立つて、自分の着物の襞を調へながら、批判的に自分の姿を眺めた。

「ポール君」と、レムブラントは靑年の一人に呼びかけた。「君、濟まないが、大急ぎで角のヅン、ヘルデンに行つて、僕のところにいい帽子を持つて來るやうに言つて呉れ給へ」

「あなた、そんなことをしてお錢が拂へるとおもつて」

「心配しなくつたつていいよ」と、レムブラントは鏡の中を覗き込みながら言つた。

「もう一つの帽子は、あれは隨分高價なものぢやないの」

「奧樣、あなたは不贊成でいらつしやいますのですか」と、彼は四角な帽子をとりながら、サスキアの前に低く腰を曲げた。サスキアは、ぢつと彼を見つめてゐたが、その顏は段々と輝き始めた。

「あなたの帽子の羽毛は、新しいのを買つた方がいいわ」

「フランツ君」と、レムブラントが叫んだ。「君、面倒だが、ヅン・ヘルデンに走つて行つて、駝鳥の羽毛一束も持つてくるやうにさう言つて呉れ給へ」

二人の靑年は早速出掛けた。

「そこで、お前の衣裳の方はどうかね」と、彼は妻を批評の眼で見ながら訊ねた。

「まあ、あなた氣でも違つたんぢやないの、だつて、この着物はまだ買つたばかりなのよ、誰だつて、ほんとに綺麗な衣裳だと言つてるわよ、それだから、ね、ほんとに無鐵砲なことをなさらないやうに、わたしお願ひするわ」

「ジャン君」と、レムブラントは三人目の靑年を呼んだ。「君、オステンに走つて行つて、絹の衣裳と天鵞絨の一等いいのを大急ぎで持つて來るやうに、それからね、色は茶色がかつた綠だよ、忘れないやうにさう言つて來て呉れ給へ」

サスキアは、おもはず溜息を洩らした。

「ほんとにこの衣裳は氣に入らないのね、それぢや、この衣裳をわたしが着てゐては、私の顏見るのも厭やなんでせう。ええ、きつとさうだわ、まあ、何んてあなたは難し家なんでせう」

「さういふわけぢやないが、僕がひとりでお前のことをおもつてゐた時の姿が、そんな姿ぢや、ないといふわけなのさ」と、レムブラントは辯解した。

　レムブラントのこの辯解は、非常に効果があつた。彼女の機嫌がすぐ直つた。

「そこで、今度は身のまはりの裝飾品だが、その首飾りはどうだらう、案山子には釣合つてるかも知れないが、レムブラントの奧様としてのお前には、ちと變だね、シモン君」と、彼は四人目の青年を呼んだ。「君、迷惑だが、下町の寶石屋に走つて行つて、鏡と腕輪を屆けてくれるやうに言つて呉れ給へな」

　サスキアは、椅子に腰を下ろした。

「今日はまあどうしたといふんだらう」と、彼女は呟いた。「あなたは、私たちが借金をしてるのをお忘れになつたの」

「借金の支拂なんかどうでもいいんだ、それより僕は奧様に綺麗な衣裳を着せてみたいんだよ」と、レムブラントは言つた。「僕はね、僕の奧様がどんなに綺麗だかを、世界中の人達に見せたいとおもつてゐる」

　さうしてゐるうちに、彼の畫室は、高價な衣裳や寶石の見本で、まるで商賣屋みたいに變つてしまつた。彼はかうして集められたものの中から、好きな帽子と、衣裳とを選び出すやうに、サスキアをせき立てた。彼女はもうどうすることも出來なかつた。レムブラントが言ふままになつてゐたが、流石に眼に涙を浮べてゐた。

　彼女が氣に入りの衣裳を選び出すと、レムブラントは、最も美しい首飾をとり出した。そして、彼はそれを彼女の首にかけてやつた。それから最後に、彼は自分の帽子に附ける羽毛を選んだ。その他、いろいろの裝飾品が求められた。

　やがて、商人達はからになつた箱を抱えて、レムブラントの畫室を出た。そのあとでしばらくのあひだ、レムブラントとサスキアは、大きな姿見の前に立つて、お互の姿を見てゐた。

「レムブラントが私の姿を心に描いてゐたのは、こんな風なのか知ら」と、彼女はおもつた。

「サスキアは、どんな具合におれの姿を描いてゐたのだらう、こんな恰好だらうか」と、彼も同じやうなことをおもつて微笑した。帽子の羽毛が頭の上で軍旗のやうに波打つてゐた。

「さあ、食卓に着かう」と、そのあとでレムブラントが言つた。「お前が僕のことを考へてゐたのは、食卓についてるとき

の僕のことだつたからね、僕たちが繪になるのは、食卓を圍んでゐるときの場合が一番よささうだ」

　サスキアが食卓の椅子に腰を下ろしたときに、レムブラントは聲をかけた。

「帽子をおとり」

「あなたは、高價なお錢を拂つて、この帽子を買つて置きながら、もう脱げと仰言るの」

「帽子もいいが、それよりお前のその髪の方が餘程綺麗だよ、ね、帽子はぬいでお置き」

　そこで、サスキアは言はれるままに、帽子を脱いで、傍に置いた。彼等の周圍には、一方に鏡が据ゑられ、他方に畫架が立てられた。

「何といふいい氣持だらう、さうお前は思はないか、これから僕達は、大いに御馳走を頂戴するんだ」

　と、レムブラントは妻のコップに葡萄酒を注ぎながら言つた。彼女はレムブラントの膝の上に乘つかつてゐた。かうして、二人は同じ皿のものを食ひ、佳い酒を飲んだ。彼等は時時高らかに笑ふかとおもふと、愛情を湛へた眼を、そつとお互に見つめ合つたりなどした。

「お前は僕が光線を描くのを、何か魔術か何かのやうに廣言してゐる畫家のゐることを知つてるかね」

　かうレムブラントが言つたあとで、彼等は一緒に笑つた。

　そして、お互に顔を見合せた。

　それから、お前は僕の魂のどこかに太陽が輝いてると、かう頻りにドクトル・ハインシウスが言つてつたことを信じようとするかね」

「あなた、どういふわけでそんなこと仰言るの」

　と、サスキアは、彼を氣にするやうに見つめながら反問した。

「どういふわけだと？　お前が言ふのは尤もだ、僕はねアムステルダムに於いて、最も不幸な男なんだ、僕の魂のなかには、光といふものは全然輝いてないんだ」

「私はどう言つたらいいかわからないわ、でも、私何だか言ひたいの、そりや始終あなたが、そのことについて考へてらつしやることを知つてるんですもの」

　サスキアはかう言つてから、おもはず兩腕を彼の首に投げかけた。

　その瞬間、ドアがあいて、ドクトル・ハインシウスがゆつ

くり入つて來た。それは借金を支拂ひにレムブラントを誘ふためであつた。

「抽斗はすつかり空なんだ、ごらんなさい いろいろのものを買ひ込んだんですよ」と、レムブラントは老人の姿を見つけると叫んだ。そして、そのあとでは彼の妻の方を指さした。

ドクトル・ハインシウスは、開いた口がふさがらなかつた。レムブラントはその老人のために乾杯した。彼は微笑してゐた。一方サスキアは首をねぢるやうにして、ドアのところに立つてゐる老人を見ながら、

「レムブラントは今日は駄目です、然し、どうぞ心配なさらぬやうに……」

から、口に出しては言はなかつたが、彼女の表情は、こんな意味を相手に與へた。

ドクトル・ハインシウスは、遂に一言も口を利かないで書室を出た。老人の姿がドアの外に消えると、この若いレムブラント夫妻の束縛のない幸福が、あだかも光の汎濫のやうに、湧然と輝き始めた。

悩ましき矛盾の中に住む

三宅やす子

○

もつと早くから高唱されても可い筈だつた婦人職業の問題が、やう〳〵最近凡ての人の注意を惹くようになつた。

それが震災後の感激であつたり、或はまたあの、取るにも足らぬ丙午の迷信と結びついて論據づけられたりするのは、皮肉なユーモアだが、もう、實際、婦人職業は、彼是と云ひ合つて見る時代をとうに通り過して居る。

私達は今更婦人に職業が必要かどうか、婦人も職業を持ち得るかどうか、そんな事を考へても見ない。

事實こうして、多くの婦人の力が刻々に擧げられて居るのだもの。

若い女の人は云ふ。

「私達も經濟的獨立を得なければなりません。何かしら働き度いと思ひます」

多くの人が云ひ合せたように同じ事を云つて居る。

でも、其人達に職業の與へられる日はいつであらう。

「仕事はなか〳〵容易にはありませんよ。でも自ら求めるものには、きつと、自分の才能に合つた職業が探されるでせう。與へられる職業をさがすより、自分で創造する職業をみつけることが今の一番の問題なのです」

私はこう云ふことが度々だ。

實際、結婚の相手を求めて得られないものに、支度はどの位が可とか、和服の紋服より洋服の婚禮が便利だとか、結婚後の注意はどうだとか云ふ事を聞かされる位莫迦らしいことはあるまい。

職業を求める心が充分ありながら、いつとあてもなく待つて居る若き女性にとつて、職業論は恐らくもうあき〳〵してるだらう。

倦きるほどきいて居ても、只一つの小さな仕事さへ、みつけることが出來ない、それが現在の實際の狀態である。

私が初めて職業といふやうな味を知つたのは、今からもう十二三年前の事である。

其頃の私は、婦人が多少なりとも、社會的に働いて、婦人の持場を廣め、たかめてゆかうといふやうな考へが、勿論あるのではなかつた。

又、それによつて、自分を研きあげてゆくことが、どれだけ自分の周圍を强め、明るくしてゆくかと云ふ事にも想像さへつかなかつた。

只、今迄定まつた家の收入以外に、自分で收入を得る事が嬉しかつたのだ。それだけ家計にゆとりのつく事が、何となく固定された世帶の束縛から、少し暢びやかな氣分にひきいれてくれるのが愉快だつたのである。

私の家を明ける度數は僅に一週に一度か隔週位でよかつた。其間に、約束した原稿をかいて、期日迄に持つて行けばよかつた。多くは、文藝方面の事でなくて、家庭の實際記事であつたから、其ために、家で實驗したり（燃料の比較研究とか調味料と材料との關係とか、料理洗濯に要する時間の正確な表を作ることとか）また他に一つはよそから聞いて調べて書く記事を作つたりした。

私は、それに對する勞力をさう苦しいとは思はなかつた。何故なら慾ばつた氣持とは全く別に、この働きは活きた報酬になるといふことが何となくたのしみだつたから。

けれども、それは、只初めの一二ケ月であつた。だんだんにいつも自分の仕事が完全だといはれる筈はなかつた。

仕事を托する人と托せられる人との心持の相違を明かに意識して、出來るだけ、云はれる通りに合せようといふ苦心が伴ひはじめた。

また或時は、家屋の丁度忙しい用事の時に、〆切が迫つて居て、混雜した心持と疲れた身體を持ち扱つた事もあつた。

丁度長女の生れる前に、大儀な身體で、赤坂から大塚へ、毎日朝から夕までを洗濯法の講習の筆記に出かけた時は十日の會期のすむのがどんなに待たれたか。其時の私は、一日服をかけて洗濯や張物の實習を見て、細かくかき記してゆく事は往復の疲勞の上に負擔だつた、そして夜、眠にくはれなが

ら忘れないうちに其日の分をすつかり秩序だつて原稿にかきあげなければならないので、二三日たつと私は全く疲れ切つて了つた。(それは會後に講習錄として出版するためだつた)でも雜誌の仕事とは別にといふ私の責任をもつた仕事だつたから、急に代りの人を求めるのを心苦しく思つて、夢中で毎日通ひつゞけた時、或時は電車にのる空氣草履の足許さへも不安だつた。

八日間それが續いた時、私はもう此上どうすることも出來ない疲勞に追ひかけられて居た。ある大事變が起つたら明日は休みますと講師の方が云つた時、私のいやしい心は、萎えた肉體をやすめたいために、さうした休みを希はずには居られなかつた。そして、その事柄を知らせる號外の音をきいたとき、「すまない事だ」と心にわびながら、グタリと床に横はつた。

左樣した苦しい記憶が、今もあり〳〵と浮ぶ。そして、それは私が職業の上でもつた肉體的の苦しみの一番鮮やかな印象である。

左樣した過程を經て書き上げたものを、講習の任に當つた講師に一應校閲してもらつたら、「よくあれだけ悉しく書けましたこと」と驚いたやうに云つて、私が訂正を求めた其原稿には、一つの訂正もなしに返された。

勞力をねぎらはれた心地で、稍得意の感情を胸に秘めながら、編輯の主となる人にさし出した其一綴りは、講習に全く一度も出席した事のない其人の眼には何とうつつたか、とも角、其まゝ保留された。そしてよほどたつてから「あれは其うちもつと書き直して頂きたいから」といふやうな言葉で、それなりになつて、豫告の出た講習錄は其まゝ出ないで了つた。どこが惡かつたか今でも私は知らない。そして、私の勞力は、私のかなりな精神的の苦しい印象をとゞめたゞけで消滅して了つた。

晴れた日に、子供の毛糸のものなどを洗濯して、干しながら私はふと「あの苦しさが私にくれたものは、こんな智識だけだつたかな」と、皮肉めかしく思ひ出される。

「そして、いゝえ、さうではない。もつと〳〵深いものがあつたのだ」と考へに沈ませられる。

兎も角、女が職業をもつなんて、左樣らくな仕事ではない。殊に家庭をもつた女が職業をもつ事は、よほど健康な人でないと堪へられまい。二重にも三重にも、時によれば四重の負擔にもなる。家庭婦人の職業問題は、議論では解決出來

ない。

夫を愛し、子を愛し、己れの進むみちをしつかりと愛し得るものが忍苦をしつてなしとげられる大きな事業である。

それは苦しい事だと思ふ。でも、何も知らないで、御用聞と女中を相手にして、知己の交際を用事にして居る退屈な奥様生活よりは、どんなに恵まれたものだらう。少くとも男性の携つて居る此活社會の、活きた實相を觀知し得る點に於て、世の進展と一所に歩いて行かれることで。

○

母性といふ事を重く説く人がある。

母が子を愛するのに何も理屈はない。

それは自然であるもの。鳥獸でさへ虫けらでさへ、一つも取り除けなしに果してゆく事なのである。

何故そんなに、女性に母となる事だけが尊いのか。それならば男性に父となる事も尊くなければならない筈だ。

母たるが故に凡てを犠牲にせよといふ事は、其儘、父たるが故に何をも忍べと云つてもよい筈ではないか。

でも。でも兩親で生んだ子を女性だけが負擔する。子供を養ふ物質を父親が出してゐるではないかと云つて責任を果したやうに無關心で居ることを止めよ。

それは、里扶持をやつて、里子に出した親が、充分子に盡して居ますとうそぶくのと何の違ひはない。

一人の女性として私にいはしめよ。

私達は決して子を生むために生れて來はしない。自然界は種族の保存されてゆく事が原理だといつても、そして、凡ての生物が種を繼續するためのあらゆる便宜と機會とを與へられるやうになつて居ると云つても、それは只大づかみな此世の中の約束である。強いて云へば、凡ての現象から察して人間の唱へて居る理論ではないか。

私達は生きてゆく間に、子を持つ時もあらう。(持たないかも知れない)子を生んで可愛がらないなどといふ筈はない。

特に母性を高調して、母たる道を盡させようとすることは、男性がうまく逃れた責任の押しつけどころではあるまいか。

弟妹を持てば兄姉の道徳をならはなくても、大方はよき兄妹になる。

女性に母性云々をことさらに云ふ事は女性全體への侮辱である。

更に母たるがために、自分の全部を準備するやうなことは自分自身への虐待である。

子供をよく育てる事は美しく尊い事である。然し乍ら、母となることは、尊いことでも卑しい事でもない。それは極めてあたりまへのことである。特に女性の天職といふ美しい名を冠せられて、自分の全部を失ふことを悔いないのは無神經だ。

無智に、無自覺に、男性の對象となつて、いつか母となつてしまふ恐ろしさを知らなければならない。たとひ、それが結婚といふ形式で、無難に、無造作に片附けられてしまつたにしても。

自己を完成されないうちに、他の新しき生命を育むといふ事は悲しみと戰きなしには居られない事である。

我がいのち、小さきもの〻いのち、此不思議なつながりをぢつとみつめてゆくときに、人生の悲壯な、嚴肅な姿が、身にしみてせまつてくる。

安易な、おめでたい人達が「お子さんが生れて結構です」と云つて呉れるだらう。

誰が、前途の全く未知數な、あはれむべき母子を戰慄なしに祝ひ得るか。お祝の奉書包の重なつた室の中に、ふくよかな搖籃の上に、スヤ〱とねむる赤子は私達の涙を誘ふに充分である。

無造作に雷同して母となるは女の天職だと云ふことを避けよう。

さうして暢氣に母となつて鷄のように子を生むためには、現代の女性はより多くの考へるものをもたされて居る。

○

一體結婚といふ事をあまりに過重視することすら私にはよくわからない。

私達は結婚するために生れて來たのではないのに。

私達は生きて居るから結婚する許りだ。

結婚のための結婚、それがまあ、どんなに多いことだらう。

世間體のために結婚する人がある。

「もうそろ〱細君を貰つたら可いぢやないか。それとも誰かもうあるのかい」

そんな事を友達から云はれると何となく早く結婚しないと具合が惡い樣に考へる男。

「まだお嫁に行かないの？」

と、云はれるときまり惡がつて、大抵なところなら我慢し

ようと、容易く自分をみくびつてしまふ女。

是非早く結婚したいとも何とも思つて居ないのに、「結婚の相手がないから困つてるのだらう」とおせつかいをやく世間。

斯様考へて來ると、結婚問題といふものは、結婚しようとする當事者二人許りでなく、誰の頭にも、いつでも興味を持たれる事なのかしら。

それにしても「私が幸福な結婚をした經驗」「不幸な結婚に泣く實話」それから「何故私は離婚したか」「結婚生活中に愛人が出來たら」等、等の問題は、雜誌等に倦きもせずに揭げられるたびに、倦くことなしに人に讀まれる。

他人の結婚と自分の上とどこに交渉があるだらう。他家の幸福と自分の家の不幸とに一つの繋がりもついて居ないではないか。

私が小學校に通つて居る時分、それはまだ十位の時だつたかも知れない。

「女子は成長すれば他家に嫁して舅姑につかへ」と云ふような事が修身に書いてあつたのでそれを先生が話すと、皆で聲をあげて、

「いあだ。お嫁になんかいかないわ」

と笑つたものであつた。

女學校でも澤山、嫁しての心得を云はれた。家事といふ時間には、煮物だとか燒物だとか、それは御叮嚀にも料理の實習とは別に、簡單で無味な理論じみたものを敎はつた。

育兒は何であつたかしら。初生兒の扱ひ方、哺乳のしかた、ちつとも興味もなく、つまらないといふまでの氣も起らない遠い世界の要らない夢みたいなものを敎はつたが。

あれは私の云ふ結婚過重視弊の適例ではあるまいか。

それほど女性は結婚だけを目あてに敎育されて來たのである。

情ないことだと思ふ。

此頃よく夫婦愛の圓滿にゆくようにといふために、いろいろのことが書かれて居るのを見るが、それとても私は、夫婦といふ一つの偶像を左樣尊重することはないと思ふ。

まだ現在の日本では、極めて偶然の機會に結びつけられるのみの、間に合せな夫婦を、生れる前から天の掟で定められた、天下無二の配偶として、一も二もなく夫婦萬能でゆく事は出來ないのが當然だと思ふ。

それかと云つて私は、一夫一婦の掟をたやすく輕しめてし

ものではない。

只、達觀して男子を撰び得る女性が、たしかにつかんだ戀愛のもとになりたつた二人の結合ならば、まぢなひじみた夫婦和合の理論を說かずとも、はなれやうとして離れ得ぬ心境に達してしまふのではなからうか。

結婚、家庭、夫婦、型にはまつた偶像を過重視して、あるものは、其偶像の殿堂に自らを祀り込まれる事のみを無上の光榮とする如きは、殆ど何等意味のない事である。

形を超越した眞の活きた力、しかも何物をも徒らに破壞し盡さないあたゝかな心もち、それらが渾然とけあつたときに、理想の境地はあらはれようものを。

○

暖かい日だ。

ぢつと家に許り居るのがうつとうしい。

混んだ電車に押されて乘り乍ら、それをも苦にしないで外に出て見るのは、三越に開かれて居る畫の展覽會を見るためであつた。

下駄ばきの儘で上る其建物の中は、砂塵がもや／＼にたち上つて、息ぐるしい不快さを、一寸でも早く出てしまひたい焦燥とに客を置く。「下足の儉約はどれだけ客の購買力をへらして居るかしら」と考へて見たり、泥路を步いて汚れた下駄で上らなければならない東京の町に、歐米の眞似のこんなことは無理だと思つたりしてハンケチで鼻をおさへて階段を上るうちに、會場へ來た。

其處に並べられた畫は、どれもみな相當によいもの許りだつた。拙くない畫を見てゐるきもちは、いつか、美くしい感覺の世界に連れてゆかれる快さだ。

深みのある、落ちついた、或は華やかな色彩から受けとる感じは、何となしの激しい感情から、私達を全く救つて呉れる。

燒煉瓦の積みかさねられた廢墟に佇たあの災後の東京の街は、只、今食べるものをさがす人で充滿されて居たやうに思はれたが半歲の月日は、再びかうして、其燒け落ちた日本橋の街頭に、これだけの藝術の國を現出したのである。

或る人々は呉服店の中でふいとまぎれ込んだやうに、興味もなしにゾロ／＼とほこりを立てゝ步いてゐた。然し、或人達は、熱心にそして滿足さうに、一々見て行つた。

牛丼、ライスカレー、の旗許り立つてゐたあの東京の街を懐ふ。ゆであづきとすいとんが象徴して居た間に合せの、今だけの生活に、都會人は、永く堪へられはしなかつた。

忙しく生活してゆくうちに、匂やかな藝術の中に息づいて、私達の感覺は飽和されてゆくのである。

只、生きるだけの飯と肉と、それだけあつて、どうして惱ましさなしに生活が出來よう。

かくして、都會にあるあらゆる刺戟を求めて、追つて、色彩に明るくされ、音樂に慰められ、自分自身の服裝からさへ、複雜した感じを受けとつて、あへぐようにも休養して、此めまぐるしい生活を一日一日と送つてゆくのである。

○

さうだ。本當に私達は、見榮や禮式に、衣服を着た時代とはへだたつた世界に住んで居る。

節儉は美德だと思ひ乍ら、綴りつゞつた足袋をはいた氣持よりは、白足袋の滑らかな感じの中に足をふみ入れた時の方がどれほど活動的な爽快さを覺えるだらう。

春になつて、冬の襟を、洗つてかけかへるよりは、輕い色彩の新らしいものを一つ求めて襟元をかざることによつて、どれだけ氣持を新にされることだらう。

贅澤だらうか、いゝえ、さうは私は思はない。

鈍感でありうる田園の無刺戟な生活ならば例外として、いやでも神經を尖らせられる活動の生活に身を投げいれて居るものには、當然の一つの有効な變化であるもの。

細い帯止一つの色彩からでも、私たちの、心持がキリつとしめられる事がある。

白足袋をふまれた電車の中の悔いは、其日の行動を不愉快にする。

一番厭なのは、高價な品の數々を身につけて得意になること、

たとへば太い腕に金のくさりで腕時計をとめて居るのや（何故黑いリボンでひきしめてみせる事をしないのだらう）うるさいほど指輪をかざるのや、お召と錦紗で身を包まれて、じろ〳〵と銘仙姿の人を眺めることなど。

美しいきものがきたい。其共通の女性の心理を、意志の力でおしころして、便利に經濟にとはしらうとする氣持には決して矛盾を感じないわけにはゆかないけれど、それも仕方のない時代の要求であらう。

○

人といふものは勝手なものだと思ふ。
よいこともあり悪いことも伴ふ凡ての實相を、知つて居ながら折々は矛盾したきもちになる。
いゝえ、矛盾か此世の本當の姿かもしれない。
自動車をかけさせて、チップを渡した時の氣持は、全くひどく輕快な爽やかさだ。殆んど瞬間的な快さなのに、
そしてそれは、只若干の金を失つた事によつて起る極めて僅かの爽快の感情だとあとでいつでも知らされるのである。
都會はうるさい、埃が多い、左樣云つて暫く田園の生活を撰んだところが、到底長くそれに堪へられるものではない。
又、塵埃の中に歸つて、騷がしい生活をたのしまうとするのである。
恐らく我々には、矛盾の中に生きて苦しんで居るのであらう。
生きて居る限り矛盾の世だ。
そして、一切が終つて、燒場の灰と化した時さへ、此世の習慣の下らない情實や、死を彼等の生の糧として居る男達やにとりかこまれて最後の始末をするのではないか。
私は、或時肉親の骨を拾ひに行つて、其處の番をして扱ふ男が、盆の上に一圓紙幣を二三枚と白銅を澤山おいて居るのを見た時に、生と死の錯雜した妙なきもちに打たれた。
此人生の最大悲慘事に遭つて來る人たちから上手に心づけをくれと示威する男も、いのちが可愛くて斯樣して居るのだ。
何だか凡てが妙なことにも思はれて來る。どこまで行つてもわけのわからない世だ。
只此錯綜した現實の中から一すぢの糸を自らひきぬいて自己といふ其純眞な糸だけを一貫して世を渡らう。
いつの日にも、どんなもつれにもまぢることのない一筋の糸はある筈である。
糸は切るまい。切れてもつながう。
私達の歩んでゆく途は險しく、あやふく、悩みが多いのだから。（十三、三、廿六）

巴里で遇つた舞踏家・女優・其他

大橋房子

瑞典舞踊の巨星
ジヤン・ボーラン

扉の開かれた瞬間、私は、客室の中央、火の氣のない爐邊から、誰よりも先に新入の私を射た視線のあるのを感じた。

が、ちやうど六月も末近い日のお茶時のこと故、勿論電氣は點いてゐなかつたし、それにあかりとりの惡い巴里の舊家屋の小さい窓を背後にしてゐるせいもあつたのであらう、その視線の主の姿は、熱氣のある煙草の雲を孕んだ鈍重な影繪の一枚とより以上、別にこれといつた深い印象も私には與へなかつた。だから私は、その日のお茶が瑞典舞踊の別名といつてもいゝジヤン・ボーランを私に引き合はす爲のものであると豫めその家のマダムから言ひ聞かされてゐたにも拘らず、一通りのお愛想を言ひ合つて後も、話題が數夜前ジヤンゼリゼーの舞臺上に觀た當のジヤン・ボーランの踊りに向ふまで、その影繪の正體を突きとめ得ずにゐた次第である。

「ウサ（巴里の友達はみんな私をウサと呼んでゐた）、あなたには『エル・グレコ』が大變お氣に入つたやうでしたね。」

マダムは火のない暖爐の向うと此方にぎごちなく坐つてゐる影繪の主と此の日本娘とをそれとなく結び付けようとした。してみるとやつぱりこれがボーランなのかな、と私は初めてその影繪の內容を明細に檢べてみる氣になつた。健康過ぎるほど健康な、と私は思つた。拔け上つた廣い額、其處から垂直に下りた希臘人のゝやうな、が短くて上を向いた鼻、三角形の大きな深いはにかみがちの下り眼、受け氣味の

重い瞼……堅くなつてゐるせいか、上衣の肩や袖が肉付きのよすぎる體軀につられて無様な大皺を浮べてゐる。これが果して巴里の子から「シャルマン、シャルマン」と騒がれるジャン・ボーランなのだらうか、若しさうだとすると、あの、白夜期の瑞典民踊などに於いて彼の示す飛鳥のやうな輕快さや、若さそのもの〻やうな運動美は、此の男の何處を突いたら出て來るものなのであらう——私はも一度半信半疑の眼で鈍重な彼の影繪を撫で廻した。が、その瞬間私は、客間に居合せてゐるほどの男女の瞳が、一様に此の二人の若い異邦人の上を泳いでゐるのに氣が付いた。私はそれとなく眼をそらせて何か言はなければ、と思つた。さう思ひながら私は、お互ひが巴里人でないといふことの爲に、ある溫みと親しみとがはにかみあつてゐる二人の間に湧きつ〻あるのを感じた。

「え〻、『エル、グレコ』は、素敵にい〻もの——殊にあの群衆運動の如きは、驚歎すべきものだと思ひます。かうして皆



ジャン・ボーランの舞踊

さんに取りまかれてお話してゐると、ほんの幼い坊ちゃんみたいに思はれますけど、舞臺の上では年に似合はぬ深酷な表現力を持つて居られる……」

が、好意と親愛の心から發した卒直な私の言葉は、豫想に反して若いジャンの不興を買ふことになつた。齢十九にして既に巴里藝界の最高水準に押された入神の舞踊者ボーランにとつて、不用意に私の放つた「坊ちやん」とか「年に似合はぬ」とかいふ言葉は、聞くに堪へぬ侮辱と響いたのは無理ないことである。その時二十三になつたばかりの彼は、四十男のつもりで話しかけることを當然だと思つてゐたらしい。

「そりや、私のサロンに來れば、家の息子も同じことですものね。」マダムはとりなしながら、目立たぬほどの瞬きを私の方に送つた。「だから、御自分の家に來たつもりで、も少しおく ろぎになつたら如何?」

今度はボーランの方で、若き故に場慣れぬ自分を恥ぢるやうな顏をした。

「ポール・クローデルの『人間とその慾望』を踊つたのは此の方でせう?」私はその隙にやうやうに自分を取り戻した。

「瑞典舞踊の盛名は、極東の日本にさへ響きわたつて居ります。」

「え?日本にまで?」これは彼の若い心に、快い驚きであつたにちがひない。

「えゝ、えゝ、瑞典舞踊の印象記は私が立つ少し前『新潮』といふ文藝雑誌にも出ましたし、それにクローデルが東京に居る關係から、『人間とその慾望』に關連して、自然バレースウエドアの噂を耳にすることも多いわけです。

「東京に行つてから、何か新しい舞踊を書かれたといふことですが?」

「えゝ『女とその影』。筋は讀みましたけれど、舞臺の上の成績はどうだつたか、ちやうど出帆の直ぐあと上演せられることになつてゐたもので、詳しいことはまだ知りません。」

「私も一度日本の舞踊を觀たい研究したいと思つてゐるのですけれど、出掛けて行くには遠すぎるし といつて巴里にゐては――いつたい日本の藝術は何故巴里に紹介せられないのでせう。」ボーランは語調に熱を加へて來た。

「さアね、何しろ、あなたの仰しやるやうに遠すぎるし、一つ舞踊團をまとめて持つて來るとなると、旅費だけでも大變な額に上つてしまうでせうからね。日本にもずいぶんいゝものがあるにはあるのですに。」

「もう少し手つ取り早く、新しい日本の作曲者を引つ張つて來て、ムスイユー・ボーランに見合したら、きつと面白い混成舞踊が出來るでせうよ。」マダムが横から、冗談でなく、口を挾んだ。

「さうですね、音樂には國境がない筈だから。」私はぼんやり別のことを考へてゐた。

『人間とその慾望』は何日でしたつけ。」お客の中の誰かが言つた。

「え?『人間とその慾望』が此の季節にも觀られるのですか?」私は思はずも少し聲を高めた。

「えゝ、明後日――最終日の晩です。マダムと一緒に入らつしやいませんか。」

かうして私達は泥抱のない友達になつたのである。

その翌日晩私達は、テアートル・デ・シャンゼリゼーの管絃樂槽近くに座を占めてゐた。その座席を選ぶに就いては、「エル・グレコ」作曲者であり、『人間とその慾望』の指揮者であるアンゲルブレックを間近に見たいといふマダムの浮氣

心が大いに働らいたわけである。正直に言つて、私はクローデルの此の新舞踏をあまり感心することが出來なかつた。成程ボーランは懸命に踊つてゐる。近くで見ると鈍重にさへ見える線の感じも、きびきび發育した筋骨と相俟つて、彼の所謂彫塑的姿態や動作を試る場合、非常に力強い舞臺的効果を添へてゐる。が、そんなら彼は何を表現しやうとしてゐるのであるか。勿論此の疑問の一半は作者のクローデルの負ふべきものであらう。彼の舞踏其物に就いていへば、彼は强建な美しい肉體と深みのある非凡な表現力とを兼ね備へたいゝ舞踊者である以上に、眞實藝術家の心を持つてゐるやうに思はれる。たゞ、惜しいことは、彼は何ぶんにもまだ若い、彼はまだ人生を――生きることの苦しみを、彼自身の内部に體驗してゐない。だから彼が『エル・グレコ』や『人間とその慾望』などに於いて試みた新しい技巧は、「苦しみを苦しんでゐる』といつたやうな印象を與へることにもなるのであらう。言ひ換へれば、彼がその舞踊の内部に表現してゐる苦腦は、苦腦の爲め苦腦、或ひは彼がその若い心で考へてねぢ上げた虚構の人間苦乃至は人間苦の外廓だけである爲、切實に觀衆の胸に迫る力を缺いでゐるのではないかと思ふ。私は寧ろ、明るい民踊などに於ける彼の若さそのものにまゐらされずには居られなかつた。

「何といつても、若さはかけがへのないものですね。」と傍らのマダムに囁く裏で、私は、若いジャンにはやはり春を――戀を踊らせておくのが一番いゝではないかと私がひとりごちしてゐたのであつた。

はねて後樂屋に案内された時、『おろかなる娘』の花聟を踊りをさめて歸つて來たボーランは、奇行を以て聞えたシャンゼリゼーの總監督ジャック・エベルトーから、額に接吻を受けてゐるところだつた。憤られるとは知つてゐても、「若さそのものゝやうだ」とその耳に囁いてやりたいほど、その瞬間の彼は、若く、そして美しかつた。私達は、當時ボーランと同性關係であるといふ噂の專らだつたエベルトーとボーランをも含めた此の舞踊團の團長であるロルフ・ド・メーアとの監視の前で、その夜の成功を壽ぎ合つたことであつた。

「今日はすつかりパリジアンヌですね。」日本キモノの私を見慣れた彼は妹をでも、揶揄ふ調子で、物珍しさうに私の夜會服姿を見下すと、今度はお愛想のつもりか、いそいそと、化粧臺の側に置き据ゑてある二尺餘りの踊人形を取つて來た。「これは、エレーン・ベルドリア夫人が造つて下さつたものです。」

『小鳥賣り』のでせう。何て可愛らしい…………」マダムが私の肱掛椅子に歩み寄つて來た。『小鳥賣り』とはマダム・ペルドリアの着想に成る今期の新舞踊の名稱なのであつた。

「でも、此の方のマルシャン・ド・オアゾーの方が、此のお人形さんよりよつぽど可愛らしかつた。」私はわざと私の前に立ちふさがつてゐるジャンの方は見ず、椅子の肱に身を寄せてゐるマダムの眼を、まともに射つた。

「あたりまへなことですわ。」マダムの聲には、此の小娘の詭辯にやられたな、といつた濁りが見えた。

再會を約して別れる時、花聟姿の中世めいたポーランは、敬虔な上眼と共に私の手先を靜かにその唇に押しあてた。

まちまちの避暑生活から、人々が又巴里のセゾンへと雲集して來たところで蓋を開けたシャンゼリゼーの最初の出物は、モスコー藝術座の「カラマゾフ兄弟」だつた。スタニスラウスキーの藝術座其物が呼物である上、社交界の人達の「久しぶり」といふ氣持も手傳つて、初日のフオアイエは、文士、批評家を混へた藝術愛好者の群で、文字通り、身動きにも差しつかへるほどの盛況を呈してゐた。何番目の幕合だつたか、私の友達のマダム連とが、幾分人の減つた、フオアイエの一偶で、ジャック・エベルトーの片腕であり、此の小屋の裏から出てゐる『テアートル・エ・コメデイア・イルュストレ』の編輯長である戯曲家ルネ・ブルュエーズと談笑してゐるすぐ向うを、見憶えのあるタクスィード姿が、遊歩場の氣分とは似合はしからぬ速度でかすめ通つたと思つた。

「ジャン・ポーランぢやない？」

「え？ ポーランが？ 何處？」

「ホラ、今階段の下を……」

ジャンを又お茶に呼びたがつてゐたマダムは、ブルュエーズをも私達をも置き去りに、周章てタクスィードの跡を追つた。數秒の後私達はフオアイエの中央、上開きの八の字形の階段の間に、人目を集めずにはおかぬ聚合をつくつてゐた。

「十一月の渡米前に『世界創造』を發表することになつてゐるので、今はちよつと出ぬかれませんけれど、發表會がすんでから、出立する前に是非、今度は僕のお茶にお呼びしたいと思ひますから。」ジャンは一寸私の方を見て、「マドモアゼールと御一緒に入らして下さいませんか。」

さういふ身振りなり、流す眼なりに、私は非常な變化を見出して驚いた。だから私は、用意のベルに急かれて「さよなら」を交すなり、

「ポーラン、痩せましたねえ。」とマダムに耳打ちせずに居ら

れなかつた。

「變りましたよ、大變人ずれがしてね。」

「さういへば、私を見る眼がもとのやうではありませんでした。」

「先生、飲むことをおぼえましたね。エベルトーなんかに飲まされるんでせう。ジンの匂ひがひどかつた。」

「どうりで……」

「が、あの人の將來の爲憂うべきことですよ。舞踊者がからだを壞したら、おしまひですからね。」

そんなに心から心配し合つて數週の後、たしか十一月の五日か六日の午後だつたらう、私達はブルバー・サン・チヤルマンの電車通りに向つた古城の一室のやうなポーランの寓居を訪れることになつたのである。暮れやすい秋の日の五時半といへば、もう夜も同じ暗さだつた。私達は毛皮の外套の中に身を竦めながら、古めかしい木造の階段を、三階まで登つて行つた。

正裝したドメステイクに慇懃に迎へられて入つたのは、さすがに藝術の家とでも呼びたい一家だつた。重い帷り、暗紅の繻珍を張つた壁、壁に切り込まれたぼんぼりのやうな燈火、華麗なクツシヨンの山、ほどよい處に掛けられた立體派の畫――その畫のいくつかは、いふまでもなく彼自身の踊姿を描いたものである。先客や踊娘達と一通り挨拶を交すと、マダムは暖爐に向つた中央の席に、私は伴れの令孃と華麗な被布を掛けられた低い椽無の寢臺の一端に跼つて坐つた。

「息子を御紹介致しませう。」

主人役であるといふ爲でもあらうが、ポーランは莫迦に上機嫌に、愛想よく、片手ほどの小さな生物を抱いて來た。キキといふ疳高い叫びに氣が付いてみると、一見栗鼠のやうなその小さい生物は、毛なみの恐ろしく美しい小癪な尾長猿だつたのである。ジヤン、ポーランが新舞踊『世界創造』の振付に際し、原始人の運動研究の爲、幾匹かの猿を飼つてゐるといふことは、どこからか傳へ聞いてゐたのであつたが、此の珍猿が彼の愛物になつてゐやうとは、全く思ひがけなかつた。好惡の強い、我儘とヒステリーそのものゝやうな小猿が、可愛げのない雙眼をいからせて、キキと暴れ廻つてゐる間に話しは自然數日前の『世界創造』に集つて行つた。

「立體派むき出しのデコーアはまだいゝ。があの無樣な蠢動を何故踊りと呼ぶのだ。いや、なぜあなたはあなたの藝術のいゝところを殺してしまふのだ」感情家のマダムは、强烈な北歐のリキユールに煽られて、正面からジヤンに喰つてかゝ

るのだつた。それに對するジャンの答へは、徹頭徹尾立體派――といふよりは自分の舞踊を肯定するたちのものだつた。

酒も飲めず、結局どうにもならない議論の渦に巻き込まれるのもいやだつた私は、芳醇な酒と煙草の匂ひに醉つた心で、何故か私の膝を離れない惡戯者の小猿と切りに遊んでゐた。と突然ジャンは

「その猿は僕以外の人の膝には乘らない筈なのに……」と、不安げに歩み寄つて來た。

「サア、お前の父様の方に行つたらいゝでせう。」と私が手を退いても、猿はよけい私の胸にかぢりつくばかりだつた。

「ウサは猿にまで好かれるのですね。」

小猿を除いた一座は腹の底まで笑つた。

夜會を一つひかへてゐた私が、誰よりも先に辭し去らうとした時ボーランは一人席を立つて、玄關まで私を送つて來てくれた。

「亞米利加には何ケ月位？」

「半年――僕は一ケ月で澤山なのですけれど。」

「あなたの坊ちやんが可哀想ですね。」

「いゝえ、勿論伴れて行きます。」

「それは、それは！　が、私が日本に歸ることにでもなると、もう何時お目にかゝれるか判りませんね。あなたにも、あなたの坊ちやんにも。」

モスコー藝術座の初日に見た時とは別人のやうに純眞にかへつてゐたその日のジャンは、シャンゼリゼーの樂屋で衣裝のまゝ挨拶した時と同じ中世めいた敬虔な上眼と共に、愼しく私の手先をその唇におしあてた。

第二のデューセ

スザンヌ、デプレ

「誰が何といつても、リユーニエポーだけは自分の書くものを認めてくれるから。」

在東京佛蘭西大使ポール・クローデルが、さう繰り返していふほど買つてゐるリユーニエポーとは、純藝術的巴里の一面を代表する小劇場メソン・ド・ルウヴルの總監督であると同時にその劇場の一俳優でもあり、今此處に擧げる名女優スザンヌ・デプレの夫君でもあるのである。いつたいメソン・ド・ルウヴルは名が古いだけ、又やつてゐることが有意義であるだけ、いかにも整頓した立派な小劇場のやうに思へるけれど、實際に於いては全く名稱通りの『爲事の家』で、坐り心地の惡いこと此の上ない腰掛二百足らずを鮨詰にしたバラ

ックといへばまア見當が付く位の、劇場ともいへぬ劇場なのである。

十月半ばの或る日、佛蘭西人の友達家族の間に入れられて、私が初めて此の劇場を訪れた時には、芝居者にありがちな三角關係から暫らく夫の小屋に出られずにゐたスザンヌ・デプレが、久しぶりで『ヂヨコンダ』のスイルヴイアを務めるといふので、眞面目な觀衆の中には、かなりの期待と緊張と好奇の心とが漲つてゐた。リユーニエポーの寵を失つた彼女の境涯がダヌンツイオの書いた此の異常な悲劇の女主人公に等しいのと、彼女の戀仇である若い女優が妹役に出てゐるのとで、彼女の演技は澁いながら直接心情に迫る底深い力を持つてゐた。

彫刻家である夫がモデルのヂヨコンダとそのアトリエで逢ふことになつてゐるのを知つたスイルヴイアが、女の先を越してアトリエに出て行くところで幕の下つたあと、私は伴れのマダムやムスイユーと、渇いた喉を潤すべく地下の遊歩場へと降つて行つた。此の芝居の幹部連と交遊關係のある美しいマダムは、遊歩場に入るなり人の渦に捲きをさめられてしまつた。そしてその渦はやがて、珍客の私をも含めて扉一つ越した樂屋の內部に流れ込んで行つたのである



至極面相のよくない

スザンヌ・デプレ

スザンヌ・デプレの部屋はすぐその取りつきにあつた疊數にしたら三疊そこそこの物置のやうな汚い部屋申譯ばかりの化粧臺の傍らに、脱ぎ棄てた衣裝が散らばつてゐるばかり。其處に幕切れの衣裝をそのまゝ立つてゐるづんぐりした至極面相のよくない中年の女が、芝居道の玄人さへ嘆稱を惜しまぬデユーセ第二世スザンヌ・デプレであるとは、どうしても信じられなかつた。取るべきものがあるとすれば、まアあの深い眼と智的な額とであらう、と

私は思つた。彼女は強い意志と深い理智との底に、此の二つの重みを撥ね上げるに充分な彈力のある熱情を秘めてゐる。取りえのない容姿やつぶれた聲が獨特の渋い藝となり力となつて、觀てゐるものゝ胸に迫つて來るのは、此の秘められた情熱の故ではあるまいか。私はやりてのおかみさんといつた形の彼女を、眩しげに見てゐた。

　私の友達のマダムは着道樂を標榜してゐる美人だつたので、彼女等は切りに「ヂョコンダ」の衣裳を論じてゐた。と、スザンヌは突然私の方に身をこゞめたと思ふと、次の瞬間には、私の赤面にまで、容赦なく着物の裾をまくつてゐた。

「いや……いけませんたら。」

　私は私の衿元に、仲よしの若いムスイユーの視線を感じてゐた。だから私は、よけい周章てざるを得なかつた。

「何故？　羞しいの？」名女優はけげんさうな顔をした。「御覧なさい。此のコスチイユームはキモノの型をなぞつたものですよ。」いひながら彼女は、日本服のやうに合せる形に切れた衣裳の裾を、膝の上まで割つて見せるのだつた。私はもう一度赤面せねばならなかつた。

「が、今日の『ヂョコンダ』は如何です？　お解りになりましたか？」彼女はやつと別の話題に救ひ出してくれた。

「えゝ、筋は讀んで知つて居ますし……あなたのスイルヴィアにはずゐぶん動かされました。」

「ほんたうですか？　舞臺の上の私を初めて御覧になつたわけですね。」

「いゝえ、ダヌンツイオの『フエードル』に、ルビンスタインとお出になつたんでせう？」

「あの時觀に行らしつたのですか？　歌劇座に？」

「えゝ、初日――たしか六月七日でした。尤も、その前からお噂はよく聞いてゐましたが。」

　性格がはつきりしてゐるだけ、腹に藝を持つた稀有の女であるだけ、リユーニエポーに棄てられて後のスザンヌの不遇の寂しさが、私にはよく解つた。だから私は、最後の幕でも、嫉妬から雙手を失し、夫の愛をも全く失つてしまつた彼女のスイルヴィアを、涙なしに觀ることが出來なかつた。私は彼女の不幸故に、彼女の人をも藝をも、よけい愛の尊む氣持になつた次第である。

女に驕れる男

マックス・ダーリー

巴里滞在の七ケ月を通じて、毎日のやうに出入りしてゐた友達の一人に、シュライペーア夫人といふのがあつた。又主人は「レズエマーレ」といふ商業雑誌の主筆、夫人は上院議院タレミユー氏の愛娘、巴里社交界きつての美しい、可愛らしい人である。シャンゼリゼーの小屋から二三軒目、モンテイヌの並樹越しにセイヌを見下した素晴しい三階に居を構へて、立派にブルヂョアの生活をしてゐる。此の家で私はずいぶんといろいろのものを見 そして學んだことであつた。

十月初旬、避暑地生活のほとぼりのまだ醒めきらぬ頃だつと思ふ、土曜日のお午に來いとの招きだつたので、十二時少し過ぎに行つて見ると、マダムはまだ朝の外出から歸つて來て居られなかつた。が、取次の下男に助けられて外套を脱いでゐると、ムスイユーがこそこそと出て來て客間で待つてゐるから直ぐ入らつしやいといふ。家のものゝつもりで帽子までぬいで、下男の頭を下げてゐる前をサロンに通り抜けた瞬間、私はだだつ廣い部屋の正面、布團で埋つた一つ長椅子の中に、思ひ設けぬムスイユーが一人坐つてゐるのを眼にしてハッとした。



女に騒がれる男ダーリー

「どうか御遠慮なく、ずつと此方へ。」シウライペーア氏は私に長椅子の一隅をゆづつて立ち上ると「御紹介致しませう。マドモアゼール、ウサ。此方はムスイユー……」耳慣れないので私はついその初見の人の名前を聞き落してしまつた。「此のムスイユーは芝居に出てゐらつしやるのですよ。」

どうりであんまり綺麗すぎると思ひながら、私は何かを捜すやうな氣持で、小憎しいほど整つた彼の服装を、も一度見なほしてみた。胸を包む形のちよつきや、上衣の襟の切り込み方など、細い所までが一通りの凝り方ではない。剃りあとの水々しい頬、鮮かな、こすい眼の使ひ方、わざとらしくない身のこなし――凡てがなるほど芝居者以外の何者でもないと思

はせる。
「何處のお芝居に出てゐらつしやるんですの？」
「パレー・ロアイアールと申します。」彼は低い聲で慇懃にいつた。
「御存じでせう？」と御主人が覗くやうな眼をする。
「いゝえ、ブルヴァー添ひの劇場には、つい行きにくいもので……………」
　其處へマダムが元氣よく飛び込んで來た。食堂での話しによると、此の俳優は一つ避暑地に此の夏を過した關係から、今日初めて此の家の客となつたものらしかつた。
「此のムスィユーはね、をかしいんですよ。」居間に移つてからマダムはリキユールを進めながら、いたづらな眼をした。「あの海岸に來てゐるほどの人はみんな夫婦同伴なのに、此のムスィユーばかりは初めつからおしまひまで獨りぽつちだつたんですの。」
「つまり其處にゐるほどの女は、みんな自分のものだと思つてらしつたからでせう？」
　私はいふともなく、つい、いたづらなことをいつてしまつた。
「その通り」今度はシュライペーア氏がいたづらな上眼をした。「此の方は今『ハイカラ學校』といふ喜劇を演つて居られるのですよ。」
「あゝ、あの『エコール・デ・ユコット』の……？」
「御覽になつたの？」マダムが聞耳立てた。
「いゝえ、『コメディア』筋が出てゐましたの。」
「さういへば、私の寫眞も出てゐましたでせう。」喜劇役者はしんから悅しさうに目を止めておゐでですね。」
　そして私達はその頃新聞で騷れてゐたモスコー藝術座のことや瑞典舞踊のことやヴィウ・コロムビエの新季節の評などを、それからそれへと倦かず語つた。が、話しはやがてブルヴァーの諸劇場の出物に移つて行つた。婦人參政權協會の副會長である若い、美しいマダムは、その頃ヴオードヴィルに上演せられてゐたウーヂエーン・ブリューの新社會劇『嬰兒』を中心に、勿論反婦參論者である此の氣取つた役者の詭辯を、むきになつて打ち消さうとしてゐた。
「僕、今日はゴルフがしたいんだけど……」退屈さうに二人の議論を聞いてゐたシュライペーア氏は、たまりかねて鼻聲を出した。
「したいなら、早く着物を着かへて出かけたらいゝでせう。」夫人はすげなく同行を拒絶した。

「一緒に行かうよ。」
「今日は用があるからだめ。」
「年中何かしら用のある人だね。何にもしないで一緒に遊んでくれる妻君はないものかな――マドモアゼール・ウサは今日お暇？」

　シュライペーア氏の矢が飛んだ方向に廻つて來た。

「別に用もありませんけど。」
「ぢや　サン・ヂャルマンのゴルフ場まで一緒に遠乗して下さいませんか。」
「えゝ、ゴルフでも出來るなら、お供する氣にもなれるのでせうけれど………」

　マダムの若さと美貌とを此の上ない寶と誇りながら、その同じ若さと美しさとの故に絶えず不安を感じてゐる嫉妬深い此の夫君は、誰からも見放されて一人しほしほ着更へに入つたけれど、妻を此のいたづら役者に托して外出することは彼にとつてたへがたい苦痛であつたにちがひない。行つて來ますの接吻を交す間も、彼はまともにマダムの顔を見ることが出來なかつた。

「あ、私ももう失禮しませう。」

　さすが厚かましく構へてゐた喜劇役者も、見かねたとみえそゝくさと席を立つて、夫君のまだ出ぬうちに歸り仕度を始めた。

　子供の始業式に行くマダムの自動車に送られて私が寄寓してゐる家に歸つた時、うちの奥さんは臺所でお茶の用意をしてゐた。

「パレー・ロアイアールのマックス・ダーリーつて、どんな人ですの？」

　芝居通の奥さんは、お菓子を切る手を休めて、私の無智に呆れたといつたやうな顔をした。

「どんな人つて、あの人氣者のダーリーを知らないんですか。」
「正直のところ何にも知らないんですけど、今日のお午はそのマックス・ダーリーと一緒だつたんですの。」
「ちよつと、イヴオンヌ、お聞きよ。」奥さんは娘の部屋の方を向いて大きな聲で言ひ續けた。「ウサはマックス・ダーリーと一緒にお午を食べたんですつて。あなたはほんとに果報者ですね、なら、『エコール・デ・ココット』の切符を貰つてくればいゝのに。」
「ひとの家で、初めて會つた人に、そんな厚かましいこと………」

「なに、舞臺の上のあなたが見たいからつてウサがいへば、きつと悦んで名詞に署名してくれましたよ。」

「どうだか……が、あの人、なかなか氣取つた風をしてゐますね。」

「そりや、おしやれの爲放題なのですからね。あの人の着物なんて一枚だつて自分で造つたものはない。」

「すると、女達が造つて着せてやるといつたわけなのですか。」

「えゝ、えゝ。ほんたうに結構な御身分ですよ。」

「それで解つた。ちや、ムスイユー・ライペーアが燒くのも無理ありませんね。勿論マダムには浮氣心なんて、これんばかりもあるわけではないのでせうけれど、やつぱり綺麗な奥さんを持つてゐるとしないでもいい心配までしなければならないとみえますね。」

私は、貧乏世帯のきりもりに疲れはてたうちの奥さんに、又ヒステリーを起させるやうなことを、いふ氣もなしに言つてしまつた。

星のかくれが

佛蘭西下層民の友として知られた畫伯スタインレンの死が紙上に報ぜられたのは、私が巴里を立つ一週間ほど前のことであつた。諸紙の傳へるところによると、此の老畫伯の遺骸は、その愛孃の許に安置せられ、其處から墓地に送られたといふことである。その愛孃とは、瑞典舞踊付作曲兼指揮者として知られたアンゲルブレックの妻にほかならない。つまり、スタインレンの葬儀はアンゲルブレックの家で行はれたことになるのである。

ところがその當のアンゲルブレックは、瑞典舞踊の春季興行、卽ち私達が『人間とその慾望』を觀たその最終日を最後に、瑞典舞踊からも、從つて巴里の樂界からも、全く影をひそめてしまつた。指揮する姿を間近に見たがつてゐたほどの私の友人のマダムの傷心はいふまでもないことである。そこでマダムはいつの間にか一策を案じ、スタインレンの死によつて明かにせられた彼の宿所に宛て、彼の近業を知り度がつてゐる日本の婦人記者があるからと、いゝ加減な理屈をつけて、面會を申し込んだものである。すると藝術的に不遇の位置にあつたアンゲルブレックは、日本の女に注目せられてゐたといふことがよほど悦しかつたとみえ、早速訪ねて來てくれといふ返事を寄したが、をかしなことにその手紙は、スタインレンの葬儀の行はれたアンゲルブレックの家とは、まる

で別の住所から出てゐた。

　いつたい人を訪ねることの嫌ひな私は、大して興味も持たず、感心してゐない此の作曲者の住家に、好事家のマダムのだしに使はれて行かねばならなくなつたのが、腹立たしくてたまらなかつた。だから、モン、マートルへと走るタクスイーの中でも、すねて、ふくれて、どんなにマダムを困らせたかしれない。が、たうとう私達は日暮れ近くに、おそらくはスティユデイオであらうところの、彼の新しい家の前まで來てしまつたのである。

　マダムにあたりつゝけて來ただけ、私は、薄暗い五階の客間の一隅で、莫迦に愛想のいゝアンゲルブレックその人と初見の挨拶をした時には、わけもなくその人の上機嫌に救はれた氣がした。それから私達は長い廊下をめぐつて、奥の奥の奥まつた勉強間へと通されたのであつた。が、廊下の突きあたりのその勉強間への扉が開かれた瞬間、私は、一人の氣味悪いほど蒼褪めた女が、綠色の光りの中、漆黑のピアノを脊に、謎のやうに力な



戀愛の勝利者・カリナ・アリ嬢

く坐つてゐるのを見て足踏みした。

「御紹介するまでもなく、瑞典舞踊でお顔なじみでせう？マドモアゼール、カリナ、アリ……妻とは、もうとうに別になりました。」アンゲルブレックは強ひて快活に、此の春迄はジャン、ボーランの寵愛を一身に集めてゐた瑞典舞踊の花形の一人をかけがへのない自分の愛人として、はつきり私達に引きあはした。これで凡てが讀めた、と私は思つた。なるほど考へてみれば、カリナ、アリ孃の踊姿は、アンゲルブレックの名と共に、いつの間にか瑞典舞踊から消え失せてゐたのだ。アンゲルブレックは此の戀故にシャンゼリゼーと手を切り、巴里樂界から退き、恩師であり、妻の里であるスタインレン一家に叛いて、此の踊娘とひそやかに生き、そしてその創作の道に精進しつゝあるのだつた。一見異樣に蒼褪めたアリ孃も靜かに話してみると、美しい夢を持つた清純な乙女だつた。綠色に見えるほど血の氣のない滑かな肌、恰好のいゝしなやかなる、何もかもを忘れて夢を追ふ湖のやうな深い眼――私には彼女が北歐の雪の精のやうに尊く見えた。

　感激と陶醉との只中にあるアンゲルブレックと、彼の愛に委ねきつた、影のやうなカリナ、アリとは、戀愛もかうまで完全に幸福であり得るものであるかといふ羨望に充ちた嘆聲を私の内部に起させた。私は切ない、しかし快い涙をかみしめて、彼女の穩かな眸に耳をすましながら、二時間近い時の飛んで行くのを、全く知らずに坐りつくしてゐた。

　暮れはてた屋外の石を踏んだ時、私の心は此の家の前に立つた二時間前とは反對に、底の底まですがすがしく晴れてゐた。今度はマダムが不機嫌になる番だつた。が、私は晴れの氣持にはわざと無關心に、輕やかな心で切りになにかの一節を口ずさんでゐた。まる一日の後には、巴里をも、此のマダムをも、此の町と人とにまつはるロマンの數々をも、おそらくは永久にあとにして行く私だつたのである。

――一九二四、三、二三――

自由投稿五篇

晩婚をした叔母への公開状

八幡千枝子

叔母さん

とう／＼あなたは、結婚なさる事になりました。そうして、近く上海へ旅立たれます。何だかたまらなく嬉しい氣がします。たまらなく淋しくもあります。たまらなく、淋しいと言つた方が、正直な心持であるやうです。それは、たゞ優しい肉身の叔母さんが私達から失はれてゆくといふ單なる淋しさではなくて、そこには何か知ら深く、考へるべきものを强ひられてゐるやうな大きな寂寞が潛んでゐます。

女子最高學府の敎育者として、獻身的に敎育事業に携つて來られた叔母さんが、その名譽や抱負と共に、長い三十年間の獨身生活を葬らうとしてゐられる現在の、その複雜な心理の交錯と言つたやうなものを、觀察する事に私は非常な好奇心を持つてゐます。

叔母さん、

女子敎育者の殆ど誰もが持つてゐる(勿論例外はありませうが)所謂老孃の惱み、殊に最も性に關して敏感な欲望の旺盛である中年婦人が、冷い理性に、たてこもりながら、不自然な禁慾生活を、生きねばならないと言ふことは、女子敎育界に於ける、一つの大きな悲慘事ではありますまいか。そうして、それもその敎育者達の一種の負け惜しみから彼女達を、益々人間味から遠ざけて、自己を最も高い變態的なプライドに保たせながら、超然としてゐる人達が少くないと思ひます。

叔母さん、

私は、決して、あなたを、かうした一般に見る慘目な老孃教師の型にあてはめて、考へやうとは思ひません。たゞそうした冷い空氣の中で同じく老孃としての名目のもとに、周圍の白眼に壓されながらも、情に戰つて來られたあなたの過去を考へると涙ぐましくなります。

叔母さん、

女學校時代の秀才だつたあなたは、間もなく、某女高師へ入學されました。その頃のあなたは、未だ、自分自身、敎育界に身を貢獻したいといふやうな理想も野心(?)も持つては、ゐられませんでした。たゞ知識慾の旺盛だつたあなたが、わけもなく、モット勉强したいといふ希望を持つてゐられたのと、總じて一般的に、圓滿な才氣を持つてゐられたあなたは、

どちらかと言へば教育者タイプに近く、形づくられてゐた爲めに、校長のすゝめによつて、高師へ入られたまでだつたでせう。そこでもあなたは、絶えず粋を拔んでての優勝者でした。

そうして、四ケ年の高師教育を受け了つた時、校長や先輩のすゝめによつて。そこで他二ケ年の研究をおつゞけになりました。

間もなくあなたは、助教授として、母校である女高師に、教職を執ることになりました。その頃からあなたは、あなたに與へられた使命が教育事業にあるといふ事をハツキリと自覺なさいました。そうして、あなたは、いよく\奮勵なさいました。間もなくあなたは、生徒監に任命されて、寄宿舍に入られました。

あなたの強い責任觀念は、益々あなたを自重させました。そうして、昨年、あなたは、遂に、某市の視學官にまで任命されるやうになりました。

女子視學官と言へば日本では最初の出現でありましたから、それは、あなたにとつて、非常な名譽でありました。同時に、あなたはいよく\女子教育界の一人者として、社會的に注目されるやうになりました。ところが既にあなたといふ人が女子教育界にはなくてはならない人として嘱望され、期待されるやうになつた今、突然教職を退いて結婚なさる事になつたのです。

勿論、あなたは、教育者として、その生涯を教育事業に貢献なさる事に、何の不滿も感じてはゐられませんでした。而し、あなたは、そこに、どうしても全的な優越意識を完全に、形づくる事は出來ませんでした。それはあなたが人間であると共に女性である事を、お忘れにならなかつたからです。

人間として、社會的に、活動すると共に一面、女性として家庭的にも一個の完全な主婦であらねばそれは、女としての使命を半ば以上、無視した一種の不具者だとさへあなたは考へてゐられました。

その點であなたは、絶えず結婚したがつてゐたのはほんとうです。そうして、今までにも、そうした緣組の問題は澤山ありました。

而し、あなたの深い教養と、高いプライド——といふよりも、むしろ、周圍から強ひられて、自然と、形づくられてしまつた社會的地位と言つたやうなものが、あなたの配偶者を選擇する上に於て、或程度までの外觀(?)を、必要とさせた爲めに、自づと、その理想や條件が高められてゆきました。それがあなたの結婚を容易ならしめなかつた重大な原因だと思ひます。

叔母さん、

あなたはどこまでも快活な明るい性格と柔和で圓滿な人格を持つてゐられました。少くとも普通、獨身婦人にあり勝ちである病的な憂鬱さや、暗い僻みの影は、微塵だにありませんでした。その點で私は、全々肉身の慾目なくして、あなたの洗練された教養の美を尊敬してゐたものです。

而し、どうして、あなたが淋しくなかつた、と言へませう。名譽ある重大な公務を、背負つてゐる全身に、一杯充實してゐる生命の躍動が、どれだけ、性の觀念を、超絶させ得たところで、或意味で切實な結婚讃美者であるあなたが、自分の生活の不自然さを顧る時、

あなたの快活さは、あなたの悲哀をどれだけ誤魔化し得たでせう。

去年、私が旅行した時、某女高師の舎監室に、あなたを訪れた事がありました。その時私は何氣なくあなたの本箱に並べられた、書物を見ました。何れも私達には到底わかりそうもない哲學や心理や倫理や經濟の金文字洋書ばかりでした。私は、わからないながらに、それ等を引き出して居る間に、その一番奥の最も隅の方に、まるで秘密のやうに並べられてゐる五六册の和製の書物を發見しました。

それは、すべて、性に關する書物ばかりでした。私は見てはならないものを見た時のやうなショックを感じました。未だ二十歳に充ちたばかりの私にとつて、殊にそれが強く反映したのかも知れません。而し老女教師達のかうした方面の心理といふやうなものに格別の興味を抱いてゐた私にとつて、それは、異様な發見に違ひありませんでした。

勿論一個の教育者として眞實それに携つてゆく爲めには、殊に、性教育の盛んに唱道されてゐるこの頃、或程度までの知識や、理解を得ておくといふ事は、もつとも必要なことに違ひありません。而し、獨身の女教師達が、それを、研究しなければならないといふ事は、何といふ皮肉でせう？　而も、あなたの秘藏してゐたあの書物があなたの研究材料——？たゞそれだけのものだつたでせうか。私は、淋しい〳〵氣がして、それを閉ぢてしまつた事を覺えてゐます。

叔母さん、

而し、私は、たゞそれだけであなたに對する尊敬がその幾分でも殺がれた、といふやうなことは決してありません。それが、あなたを批難するどれだけの材料になり得ませう。

むしろ、私のあなたに對する心持は、或憐憫を(僭越な言葉をおゆるし下さい)さへ伴つて、益々深められてゆきました。

しかし、私は、間もなく、あなたに對して、或反感と言つたやうなものを、持たねばならない時が來ました。それは、あの有島事件が起つた時の事です。

あなたは、某女高師全體を代表して、有島氏、情死事件についての批判を、某新聞記者の要求に應じて解答せねばなりませんでした。

間もなく、それが某新聞紙に發表されました。あなたは、おつしやいました。

「…そう動物性を端的に發揮されては困る云々…」と。私は、それを讀んだ時、殆どあなたに對して、絶望に近いものを感じました。いいえ、私ばかりではありません。それは社會全體の反感を買つたと、言つても過言ではないくらゐその當時は、問題にされたものです。殊に有島氏を讃仰する若い人々にとつて、恐らく、それは、致命的な暴言であつたでせう。

人々は、有島氏の美しい死を、冒瀆したものだとして、頻りにあなたを怒り、罵り、憎みました。

あなたが私の肉身の叔母であるといふので私がどれだけ　葉をつくして、共に、あなたを罵つても、人々は、私をさへ受け容れてくれなかつたくらゐです。

而も、それが、はからずも、今度の震災で、

惜しい最後を遂げられたあの文壇の巨星——殊に、戀愛至上論者として、現代の思想界を風靡した厨川白村氏によつてまで問題にされた事です。

白村氏は、數多い人々の感想文の中であなたの、あれを見出されました。そして「時代の進展を阻害するものだ」とお怒りになりました。「一日も教職に、あらしめてはならない」と、罵りました。「頑冥愚昧だ」と言つて、嘲りました。「生徒達は、そうした教師の敎へを決して聞いてはならない」と、憤りました。

そうして、この白村氏の痛罵論が間もなく「改造」によつて發表されました。あなたを罵つた人々は、どんなに快く微笑んだことでせう。而し、私は、それを知つた時、どんなに寂しい氣がしたか？……

叔母さん、

あなたは、それをお讀みになつたか、ならなかつたか私け知りません。私はそれを、あなたにお讀みなさいと、告げるだけの勇氣がありませんでした。

女高師の生徒達の中では、有島氏に共鳴し白村氏の力強い味方を得て、あなたへの反感をかすかに渦卷かせてゐたグループもあつたといふ事を、私は、あなたの敎導を受けてゐる私の友達から聞きました。

而し、それは、社會的にそれほど大きな問題をひき起した譯ではありませんでした。しかも、校長の沈默と、所謂高師敎育に慣されてゐる、どちらかと言へば、叔母さんに味方したいやうな頭に、つくられて來た人々の可成り多い生徒達によつて、それは、何の反撥をも示さなかつたやうです。

叔母さん、

而し、私は今になつて、靜かに考へて見ますと、白村氏があんなに、激憤されたそれほど、あなたを批難する事は出來まいと思ひます。

勿論、あなたの言葉は、瞭かでは、ありませんでした。そうして、あの新聞に報導されたあなたの言葉にも何等、僞りはなかつたでせう而し、たゞ、ほんの言葉の斷片を知つただけであなたの思想全部を推移し、あなたといふ人物全體を批評し、それを難じ怒つた白村氏もいさゝか早計にすぎやしなかつたかと思はれます。

白村氏はあれほど眞劍になつて、憤りの言葉を連發する前に、せめてそれを發表する前に、もう少し、直接あなたといふ人物を深く知ることがほんとうではなかつたでせうか。

私は、私の叔母さんが若しも個人として、記者に面接し、その批評を求められた場合、よし有島氏を讃美するとは答へられないまでも、あゝも極端に、動物呼ばはりするほど理解がなかつたとは信じられません。

女高師の生徒監といふ名義のもとに、最高學府全體の代表として答へなければならなかつたあなたの大きな抱負意識と、強い責任觀念が、あなたをして、個人としてよりも、むしろ學校の言葉として、そこに、幾らかの假言と誇張の巳むなきにまで至らしめたのではなかつたでせうか。

叔母さん、

しかし、白村氏は死にました。そうして、最近その著書「十字街頭を往く」といふ現行本が出版されました。そうして、それが素晴らしく、世人に迎へられてゐます。その中にも、

有島情死事件、として、かつて改造に發表されたそのまゝの一篇がをさめられてゐます。」「彼女をして一日も早く教職を退かしめよ」といふ白村氏の言葉がその著書によつて、益々宣傳されてゆくわけです。

それが偶然にも、あなたは、あなたの結婚の成立によつて、どうしても教職を退かねばならなくなりました。何といふ皮肉でせう。白村氏が既に、この世にゐないといふ事も二重の皮肉を意味するではありませんか。

而も校長や先輩、殊に生徒達は、あなたの退職を非常に惜しがつてゐるといふとです。叔母さん、

あなたの結婚は、どんなに、あなたを幸福にするでせう。「ほんとうに、生きる時が來たのだ」

あなたは、そうお感じになつてゐるに違ひありません。

遠い上海の地には、あなたを、社會的にも、家庭的にも、最もよく生かす、大きなく舞臺が待つてゐるでせう。私は、女々しい肉身の執着を捨てゝあなたの結婚を祝し、あなたの旅立ちをお見送りするこの際、この一篇をあなたへの公開狀としてお贈り致します。未だ年若い未熟者である私が、生意氣な、高踏がましい言葉であなたの名譽を傷つけるやうな個所がございましたら、どうぞお赦し下さいまし。

英語をやるに限る

野田幸雄

半日程考へてみた後筆を取りました。

藝術家となるのに如何に竹取物語の講義がよく出來ても如何に方丈記、枕草紙に趣味があつてもほんの一部分の間にしか合はぬと思ひます。源氏物語は立派な古典であるとは言へ何等近代人の胸奧に共鳴する哲學を含んで居らないと思ひます。さすが古典だけあつて汲んでも汲みきれない情調があるけれども只其時代に引き入れて讀者の心意を奪ひ去る處に價値があるかも知れないが現代に生きて藝術家たらんとする人に何を敎へますか。只現代の新しき思想を通じて此等の古典を讀んだ時始めて或る材料を得るに過ぎません。更に近代の近松の淨瑠璃を見ても千偏一律なる戀の悲劇は只其情話の手本とでもなるの外何の價値も無からうと思ひます。そして此等のものは必ずしも講義を聞かずとも必要に應じていくらでも研究が自分で出來ると思ひます。素質さへあれば何を修めてゐても藝術家たることが出來るが無駄なものよりも役立つものを修める方が有利であると思ひます。故尾崎紅葉は英文科に入り、中途にやめて小說家となりました。其他國學者は依然國學者で大藝術家は殆どありません。英文學を修めた人に故夏目漱石、大家坪内逍遙、獨文學に精通した人に森鷗外などがあつて藝術の上で一流の人々で漱石の如きは又哲學者でありました。今の新進作家の中でも

英文學を修めた人が非常に多いのです。たとへ完全な一定の英文學なるものを修めずとも、英國或は其他佛、伊、獨、露、米、西の藝苑を漁つて清新なる思想を得た人々です。之等の人々が自分の内生活を描き或は材料を我國の歴史上から取つて近代化し藝術化したものが、藝術品としてあらはれてゐるのです。

さらば見よ。かの潤一郎の「お才と巳之介」が如何にオスカーワイルドの作品に似てゐるか、又夏目漱石の「道草」が如何にドストイエフスキーの作品に似た處があるか。私は讀む毎にさう思ひます。佛國のゾラ。ドーデー。フローベル。モーパッサン等の小説が如何に恐ろしく悲しく又樂しきこの現實の世界を赤裸々に描いて、私を知らず〳〵の中に宗教に導き、哲學に導いてくれたか。單に面白い懐しい小説としても、是等の小説は是非一度讀まねばならぬものだと思ひます。

是等の小説を讀むにはどうしても英文學の素養がなくてはなりません。單に英文學だけでもシエクスピアの研究に一生を費して惜しまぬ人もあるものを、一度「リヤ王」を繙き「オセロ」を繙かば其の主人公の孝心に泣かされ貞節の徳に心を勵まさるゝ、我國の作品にこんなものは一つも無いだらうと思ひます。そして大陸の近代物に至つては世界の思想界に革命を起す動機となつてゐるものが澤山あるではありませんか。これ等の藝術には英文學さへ修めてあれば易々として接することが出來るのであります。飜譯物の如き如何に多くを讀んでも其眞價を味はふことが出來ません。只形骸に接するだけです。藝術は批評や概念などによつて教へられるものではありません。作品の中に沒頭して摑み來つたものでなければなりません。

哲學的思想の有無は作品の價値の有無に大なる關係を有することは、勿論です。我國女流作家の貧弱な單にセンチメンタルな讀物に過ぎないと言はれてゐるのは、この思想の缺けてゐるからでありませう。露西亞文學の優秀なる、ゲーテの作品の思想の深き、其他佛國近代文學の懐かしき、又此の哲學的思想の豐富なるによるのであります。斯の如き思想は如何にして得らるゝか。而して其の心理描寫の精緻なる心理學者でなければ描くことの出來ないものであらうか。私は決してさうでないと思ひます。これらの哲學的思想、心理描寫の精緻なる等は哲學心理學によつて學び得るものではありません。哲學や心理學は此種々雜多なる浮世の材料を學問として組織的に研究する迄でありまして、倫理學が道德的行爲を組織的に說くと同じことです。倫理學者必ずしも道德家ではない。道德ある崇高なる人必ずしも倫理學者ではありません。哲學的思想は自己に生るゝもの、これ等哲學者の主張を讀む時自己の内心に燃え上るものです。心理學者が決して心理描寫に巧みではありません。又一方哲學者必ずしも哲學的情調の中に生活するやは疑問です。それがらそなら試みに哲學史哲學概論、心理學等を讀んで見ればわかる、私は現に讀んでゐますが單に讀んで其哲學的情調（私が假に名づけたもの）の中に引き入れられるには非常な價値があるが、唯哲學心理學のみを專攻して其概念に拘泥するのは却て損であると思ひます。現代の頭腦の明晰な人と言はれて喜ん

である青年などの中に、只概念ばかりに縛られて得々としてゐる者が多いが、之等はあはれむべき奴隷だと私は思ひます。私は寧ろ頭のわるい而も瞑想の出來る、直感の出來るやうな人を懐しく思ひます。以上言つた所に依つて私は貴女に英文學を修め、そして修學の後趣味に應じて哲學を讀んで思想を高遠にし、國文學を讀んで我國人の思想の捨つべからざる所を發見し、大いに貢獻されんことを希望します。然しこれは藝術的方面に重きを置くものとしての論で、一つの纏つた學問として研究しようとならば哲學が第一だと思ひます。又私のすゝむる英文學は只英文學史や文學概論として研究せよと言ふのでは勿論ありません。英語を研究し、語學の力を養つて、外國の文學哲學書を讀破することの出來るやうになりなさい。つまり無限の寶庫に入るの鍵得なさいといふことです。讀書力さへあれば何でも出來るといふことです。

プロの子供とブルの子供

佐々木啓子

A、B、共に同じ學校を出た青年教育者。

AはK都會でも有名な中央部のブルジヨア階級の子弟の集る學校教師。

Bは場末の細民窟の特殊小學校の教師。

B「君なんか幸福だなア。あんないゝ學校に奉職出來て。僕の方は迚も酷いよ。同じK市にもあんな學校があるのかと感心してゐる位だ。あの場末の貧民窟から逃れるやうにして、シヨウウインドウの眼も覺るやうなM街など散歩し、流行のワンピース、ドレスや短かいスカートに高い踵の靴も輕やかに談笑して行くお嬢さん達を見ると、あれも同じく人の子かと不思議な氣がしてならない。よくもまあ、あんなに不器用に子供を作つたものだなア」

A「それでは君は今の君の學校の仕事に熱を感じ愛を持てないのだね。何處の學校だつて教育には大した違ひはないだらうが」

B「僕も初めはさう思つた。プロの子供だつてブルの子供だつて同じく人間だ。そして比較的不幸な境遇にある彼等を、心から愛を以つて導き幸福にしてやるのが僕の貴い生甲斐のある仕事だと。理窟では確かにさうだ。然しいざ直接子供に接して見るとその理想は何處かへ消え去つて了つたよ」

A「矢張り綺麗な着物を着た、出來のいゝ子供でないと愛が持てないのかね」

B「さう言ひ給ふな君。僕は初め彼等はたゞ家が貧しいだけで、それ以外に本質的な違ひの無いものだとばかり思つてゐた。處が何ぞ知らん、彼等の思想なり感情なりは貧しさの爲に歪められて了つてゐるではないか。僕だつて行つたからには獻身的に彼等の幸福のために働いてやらうとは思つてゐた。けれどいざ成つて見ると一事一事に

まで手のつけ様もなく、どうしてよいのか腕を組んで考へ込んで仕舞つたよ。」

A「さうかね 實は僕もそんな所へ行つて賀川さんではないが本當にやつて見たく思つてゐたんだが」

B「口だけでは餘り當にはならないね。然し他人を幸福にしてやることが出來るなんて全く思ひ過ぎたことだ。彼等は僕等とは全然別な世界に住んでゐるんだからな。好んでプロ的な思想や言論を吐く僕だけれど、矢張りブル的な雰圍氣の中に育ち、ブル的の教養を受けて來たのだもの、實際貧民教育は難しだ。」

A「馬鹿に六ケ敷く事を考へるね。そんな人達だつたら教科の内容も全然替へて、違つた方法でやつて行つたらいゝだらう。」

B「さうかも知れない。確かに彼等にブルジョア文化を注ぎ込まうとするのは無理だ。然し其處の教師達は平氣で文部省の定めた教科に就て彼等の實生活とは何の交渉もないブルジョア文化を教へ込まうとしてゐる校長さんも市内の他の事情を全く異にせる學校と同じ程度の、同じ形式の智育や德育の成績を擧げようと空骨を折つてゐるのだ。」

A「その點に於て僕の方なんか全く樂なものだね。何一つ努力することもなく相當の成績を擧げて行けるし、一肌脱がうものならその努力は覿面に酬いられるのだからね。子供達は大抵家庭に理解のあるよい父母を持ち、家庭教師までもついてゐるのが少くないからね。毎日の豫習は行届いてゐて、讀ませればどん〱讀めるし、書かせればスラ〱書ける、教師は遊んでゐるやうなものだ。まあ仕事といへば豫習して來たものを整理してやるのと、適當な材料を指示してやる事位なもの。時々參考書などを指定してやれば翌日はちやんと揃つてゐる。いつか母姉會の折、課外讀物の必要と選擇に就て家庭への注意を促した處が、數日後その母姉達の申合せで數百圓を醵集して子供達の爲に學級文庫を寄贈したいから圖書目錄の選定をお願するとの事であつた。」

B「羨まれてゐるね。僕の方の子供なんか課外讀物處か、鉛筆もノートもなか〱買へやしない。五錢か十錢の學校に出す金を漸く貰つて來ても默つて使つてしまふんだ。子供が家へ歸つて感心に本でも復習すればヤカマシイ、ウルサイと叱り飛ばされるんだから話にならないよ。」

A「それは言語同斷だね。僕の方の奴なんか時々新刊書など持つて來て、先生これにはこんな事が書いてあります、面白いからお讀みになりませんかと貸してくれるのもあるよ。まあ物質には不自由のない人達だ。」

B「そんな事を僕の方の子供に話したつて恐らく本當にしまいね。先生を仇敵のやうに心得てゐるからね。言はゞ先生と生徒の關係は看守と囚人だ。父兄などの日頃の口吻を聽かされてゐるのか、學校の先生の言ふことなどきく馬鹿正直の奴は何時迄經つても貧乏で、出來るだけズルクごまかして例へば今の資本家のやうにすれば成功するといふやうなことを信じてゐる。教師をブルの走狗位にしか思つてゐない。少し親と

切にしてやると當り前の氣になつてつけ上るんだ。紙を忘れた奴に一枚やつた。その翌日から皆貰へるものと思つて持つて來やしない。美しい子供を連れて三々伍々笑ひ興じ乍ら和氣藹々と遠足などしてゐる君等の有様はマアザット蓉の花園と言つた處だね。」

A「然し遠足といふと大抵一人に一人づつの附添があつて、場合によると附添旁々一家族連立つて一緒に一日の清遊をするなんていふのもある。さうなると都合のいゝ事もあるが五月蠅いね。それから一二年の頃は大抵毎日附添ふて來るし、上級になつても母姉父兄の參觀が毎日五六人はある。授業もうつかりサボれない。然し貴婦人淑女が參觀やら子供の躾の打合せ旁々、室咲きの花束など持つて來て敎室に飾つて呉れるのは惡い氣がしないね。」

B「さう羨しがらせるなよ。少しはプロの身の上も考へて見るがいゝ。それあさうと君の方は年末中元の贈答で門前市をなすといふぢやないか。自動車で横づけにして運ぶといふが本當か」

A「話ほどでもないだらうが、折角持つて來るものを突返すことは喧嘩することになるからな……」

B「僕はたつた一度子供から贈物されたことがあつた、トテモ奇抜だ。「先生」と言ひ、いきなり僕からサンマといふ魚を二本、紙にも包まぬ奴を出して敎卓の上に置くんぢやないか。然しそれなどは可愛いいと思はないか。雨の降る日は定つて大勢缺席するので、雨が降つた位で怠けてどうなるものかとひどく叱つてやつたら「ワイ傘がないんだ」と涼しい顔して答へたので、笑ふにも笑へなかつた。そして自分の餘りにも無智だつたことを恥しくも思つたよ。」

A「さうかなア、傘を持たないのか。然し僕の方の雨の日の自動車や俥の送り迎へも少し極端だな。洋服細民の敎師には泥を飛ばして追越して行くなんザア、餘り皮肉だ。全生徒の三分の一は郊外の町や村の別莊から通つてゐる。矢張り中等學校への入學率がいゝとなると爭つてその學校へ入れようとするし、名義だけは區域内に寄留して實際は市外から通學してゐるのだ。僕も今のブルに對しては隨分反感を持つてはゐるが、その子供達は素直で從順で物がよく解つてゐて、溫かい純な心を持つてゐるね。」

B「僕の場合はそれと正反對だ、プロに同情を持ち、彼等の當然占むべき地位を得ることを希つてゐる。けれどもその子供達はどうしてあんなにヒネクレて嘘つきで子供らしい、いとしさが無いのだらう。惡いことをして取調べてその事實が明瞭であり乍ら決して白狀しない、物靜かに言つたのでは服從しないから、嫌でも怒鳴り聲と顔と險惡な人相が必要だ。或日餘り騷がしいので「コラッ」と大喝を喰はせた處が、窮鼠のやうに窓から我勝ちに運動場に逃げ出した。僕は餘りのことにその時は驚きもしたが、恐らく家庭で常にあれだらうから、叱られる事位何とも思つてゐない。少しきつく叱ると急いで家へ歸つてしまふし翌日は缺席だ。一時間の授業の中の過半は靜肅

に保つ爲に費されて仕舞ふ。彼等は榮養不良やその他の生活上の壓迫から注意が放漫で、その上に教師の數へようとする教材は彼等の生活の核心には觸れないブルジヨア文化だからな。修身で「親類は親しめ」と言つた處で彼等の生活には親類の交際といふ事實が無いのだ、教科書にあることは皆ブルジヨアの思想と感情の生活だからなア。よく流行つた童話だつて皆ブルの生活から生れたものばかりだよ。總てがこれだからどうにもならない。君の方の子供なんかそのまゝすくよかに成長すればいい、だけの純良さと躾けとがあるだらうから、訓練や管理に心を勞することは無いだらう。」

A「全く無いね。彼等の周圍の空氣がさうなつてゐるので、割合に自覺を持つてやつて吳れるね。鐘が鳴れば教師はゐなくても速かに整列するし、級長は指圖して教室に入れるし、その時間の學科の道具を出して勉强してゐる。其處に僕等はコツ〳〵行つて「さあ今日は何頁からでしたね」と講義なり實驗なり讀書なり初めるといつた調子だ。各〻自の力に應じてそれ〳〵の深さの學習を續けて行くので一年生で二年三年の教材迄は無理なくやれるね。去年から例のパーカースト女史のダルトンプランを加味して學級經營をして見たが、面白いよ。」

B「羨しいなあ、さうして仕事に興味を感じ研究の結果を實行することが出來るんだから。それでは何の不滿も不快も學校ではあるまいね」

A「まあ子供に接して、仕事に熱してゐる間だけはね。然しさうして心から愛を持つて導き巣立させた子供も數年の後には自分の心から離れて行つてしまふのだもの、教師といふのは哀しい職業だね。それから眞の意味での人間の教育をすれば受驗準備から言へば不結果に終るし、父兄の目的は要するに中等學校の入學にあるのだし、校長も入學率ばかりを誇るといふ有様だから、理想と現實との間に苦しみはあるね。殊に校長は有力な父兄にあつてはペコ〳〵頭を下げて只管にその信望を害しないこと、首のつながりを心配ばかりしてゐるのだから腑甲斐ないよ。あんな奴に人間の教育などいふ尊い仕事が解るものかね」

B「確かにさうだ。大抵校長といへば頭の古い奴と相場が定つてゐるからね。だつて偉いから校長になれたのでなくて、年功で鰻上りしただけだから、教育上の理想や考察に就ては代用教員以下だ。帳簿の記入が奇麗だつたり、朝早く出勤して暗くなる迄居ればそれで機嫌がいゝのだ。内容はどうでもかまはない。外見さへよければ。居殘り訓導何の仕事をしてゐるかと思へば煙草をふかして雞が卵を生んだとか、魚釣りがどうのと四方山話し、若しそんなに遲くまでゐなければ事務の終へない奴なんか、低脳で、はした者だよ。」

A「眞人は何處へ行つても虐げられるか。訓育だつて道德だつて彼等は飾り概念で生きてゐるからね。」

B「さうだ。帶は後で結ぶこと、鼻は紙でかむこと、食事の前には手を洗ふこと、垢のつかない着物をつけること、それは皆ブル

ジョナの勝手に決めた道德だと思ふ。うしろに結びたくも帶の長さが足りない。紙で鼻をかみたくも紙がない。子供は裸足のまま平氣で敎室に飛込む。それもその筈、彼等の家には疊が敷いてないのだ。だから、土足で座敷に通らぬことは彼等の生活では道德でも何でもないのだ」

A「朝めしを食はずに來るのがあると聞くが本當かね」

B「本當だとも、飯櫃を質に入れることを知つてゐるか。トテモ文化生活だよ。仕事に朝出掛ける時飯の入つた櫃を質屋に入れて金を借り晝の食事のためにする。夕方賃銀を得て歸つた時質から出して晩餐する、夏向きのすえ時は質屋が涼しい處に置いて腐らぬやうに氣をつけて與れるので非常に具合がいゝだらう。」

A「驚いたね、――」

B「僕の方のマスは頭が惡い。然し外觀上の清潔は大切に思つて時々全生徒に運動場に落ちてゐた紙屑を拾はせる。あとでその汚れた手を洗はせるかと思ひきや、平氣で忘れてゐるらしかつた。子供の中に一人だつて手を洗はふといふ考を起した奴はゐなかつた。あれだから事なしだが、若しそんなことをしたら君の方だつたら大問題だらう。第一子供が手を洗はずには承知しまい。」

A「全く道德觀念も何もないやうだね」

B「ブル道德は駄目だ。彼等の遊びが振つてゐるね。第一パクチだ。親爺の眞似で當り前だゝ思つてゐる。『君のお父さん何をしてゐるかね』と訊ねたら、『ワイのチャンか？ワイのチャン、パクチ打つてる』とあつさりしたものだ。彼等は明るい陽の向る所は嫌ひだ。例へば活動寫眞館の裏手のやうなジメ〳〵した暗い處が大好きだ。そんな處にもう十二三で貞操を賣つてゐる少女がゐる。一錢か二錢の小使欲しさにだ。驚いたかね。（了）

空想の家

杉村すえ子

机に向つて本でも讀んでゐると、すぐ疲れてくる。頭はいつも本をそつちのけにして、勝手な事を考へてゐる。考へはいつも自分が建てたいと思ふ家のことである。家は四間あればいゝと思ふ。自分の部屋が四疊半、これは本當は八疊くらゐにしたいのだが、建坪が多いと普請にお金がかゝるから、せい〳〵四疊半で我慢しておくのである。それから祖母の部屋が六疊、女中部屋が三疊、祖母の部屋と自分の部屋の間に、玄關からづつとぶつ通しで、疊三疊くらゐの幅の板敷をおく。かうしておけばやかまし屋で、しよつ中人をどなり散らしてゐる祖母の部屋から自分の部屋に聲の聞えることはあるまいと思ふからである。自分の部屋には鍵がかけられるやうにしておく。そして勉强してゐる時はその鍵をか

けて、靜かにして、恰も、自分が留守のやうな風をしてゐよう。さうすれば祖母も私の部屋に來て、用事を言ひつけたり、小言を言つたりする事はあるまい……。考へはそれからそれへ、綿密に動く。併しいつも、いつたいそれだけの普請のかゝりをどこから持つて來ようかといふことになると、當惑してしまふ。自分のこの安月給をいくらどう儉約したところで、いつまでたつてもそんな家は建てられさうにもない。自分は一生このほこりつぽい町中の職業婦人の寄宿舍に、祖母はあの邊びな山の中にゐるより仕方がないのだらうと考へなほす。さうは思つても、また、すぐそのあとから、例の自分の部屋、祖母の部屋が頭をもたげる。私が五六年前、ある小さな會社に勤めてゐた時分、仲間に一人若い社員がゐた。ひどい浪費家で、月給を貰うと一と晩に使つてしまふといふやうな亂暴をする人だつた。その人が、冬になつて木枯が吹き始める時分になると、きつと、小型の洒落た金錢出納帳を買つてくる。そして普段の浪費家にも似合はず丹念に一々つけ込む。

「ね、杉村さん。僕はこの頃こんな事を始めたんですよ。かうして月給を少しづつ殘して行つて、今に西洋館を建てるんです。どうも日本間はいけない。すき間風つていふやつがやつて來て、貧相でやり切れない。西洋館はいいですよ。窓さへぴつたり閉めりや、風なんか洩れつこなしですからね。」

私はその人が月給をどう殘したところで、西洋館なんか建てられさうにもないのにと思つて笑ひながら聞いてゐたが、今思へばこの人の方が實行に着手しただけ、私の空想よりはましだつたのだとも思ふ。

いつたい私はいつ頃から自分の家といふものを考へたのか。八つ位の時、私はプランコのある西洋館の家が欲しいと思つてゐた。これは友だちがみんな立派な家に住んでゐるのに、自分の家が古ぼけて狹かつたからである。だからそんな友だちの一人もゐない學校に移つてからは、家のことなんかてんで考へなくなつてしまつた。併し大ていの女の人がさうであらうが、女學校に出る前になると、何ていふこともなしに、自分の未來の家といふものを空想する。ところがその頃の私の空想の家といふのは、至極ぼんやりした、まるで影繪のやうなものであつた。丘がある。その丘の上に小さな家が一軒立つてゐる。夕陽が丘や家にいつぱいさしてゐる……。そんな空想がいつとはなしに消えて、最近十年といふもの、私は家なんては、てんで考へもしなかつた。それがこの頃は何かといふとすぐに頭に浮んでくるのは、やつぱり年のせいなのだらうか。細かく平坪まで計算してゐるが、私は本當は、そんな小さな家は嫌ひなのである。自分に建てられる範圍と思へばこそ、きりつめて考へるのだが、本當は大きな／＼お城に住みたいのである。古い／＼お城である。黒い森がある。廣い湖水が靜かに水を湛へてゐる。その湖水を前に森を背景にして、古い大きなお城が、太古からのもののやうに聳えてゐる。私はそのお城に、自分の赤坊と老爺と三人で暮すのである。大ぜいの召使や夫は不必要である。そんなものは、うるさくていけない。私はその大きなお城に、赤坊を相手に影のやうに暮す……。併し、これこそ本當に空

想である。森だの湖水だの古いお城なんていふものは、てんで自分の手にはいりさうなわけもない。であるから少しは讓歩してもいゝ。場所は東京の郊外である。そこに、美しい、併し大じて人目を惹かない家を建てる、部屋は十間ほどあればいゝ。この十間の部屋は、一と部屋、一と部屋、それぞれ感じの違ふ美事な飾りつけをする。燈火の色も部屋々々によつて違へる。この部屋の燈の色を變へるといふことは、たゞ部屋の感じを變へるばかりでなく、その部屋の窓からそれ／＼違つた色の空の色を見るためである。これは私の聞き違へか、あるひは覺へちがへかも知れないが、部屋に黄色い燈をつけると、空が濃い、紫色に見えるとか、青い燈だと淡紫色にとか、空の色は燈の色の反映で、一々違つて見えるものださうである。私は部屋の窓から見る空の色が一々違つたら、どんなに不可思議に美しく、この世に住むとは思はれぬ心持ちがするだらう、と思ふと、考へただけでも嬉しくなる。部屋の樣子も飾りつけも、その燈の色に調和させることはいふまでもない。黒ずんだ青い灯の色の部屋には、四隅に大きい玻璃器の鉢をおいて、金魚を泳がせる。その部屋の暗い灯の色の中に染つて、ひらり／＼と藻の間をくゞる小魚の鰭の動くのを見てゐると、きつと自分は水底に沈んでゐるやうな氣がして來るであらう。紫色の灯の部屋には、銀の卓をおき、銀の小さな盃を伏せる。部屋全體が何となく和やかな夢の中にあるやうな氣がする……。一々、こんなに書いてゐてはきりがない。私がポウのやうな不思議な才を持つてゐるならば、それ／＼に違ふ空の色を持つ十色の部屋に、一つ／＼美しい物語でもこしらへて、建てられない家の代りの慰めにすることが出來るだらうが、自分の頭には、それさへ許されない。やつぱりすぐに、坪百圓の普請なら我慢出來るだらうかとか、いくら祖父が怒鳴るからといつて、自分の部屋に錠を下すのは不人情ではあるまいかといつたやうな、だらしのない平凡なことばかり考へつゞけるやうになつてしまふ。

花火の夜

楳小路則子

葉櫻の陰濃く、初松魚の呼聲に、「髪結新三」が見たい時が來たけれど、ありし日の東京ならぬ、失はれたものゝ多さに、雨にうたるゝ桐の葉よりも、心はいたむ。「千両の光間もなき」と元祿の俳聖をして歎ぜしめた、両國の闇にひらめく煙花の美を再びのぞみ得る日があるであらうか、あまりになま／＼しく惡夢の後の見るもうたて、見ぬも淋しとかこちながらあぢきない災後の夏を送るのではないであらうか。

× × ×

茅場町で電車を降りた時は、「七時までに」といふ案内だつたのにもう暗くなつてゐた。

坂本公園の麓のすゞかけの蔭で梶棒に腰を下して客待をしてゐた俥夫に「濱町×丁目まで」と聲をかければ、「へい。」といつて立つた。見上げるばかり背の高い、褌股引のきりつつとしまつたいなせな男だつた。

後から來てはすうーつと越して行く電車はどれもこれも鈴なりで、宵の空模樣に一入の蒸あつさを加へた。

鎧橋を渡る。鐵の欄干にもたれて、洋館や土藏づくりの間のどんよりとした狹い空合に小さく光つて後からポーンと音がする花火をみてゐる人か——とても大川端へ行つてはこまれるばかりとあきらめをつけた人か——ぎつしりだつた。

少しおそすぎた。と輕い悔に似たものを覺え乍ら、明るい人形町の中ほどからきれて右にまがる。ぞろ／＼と手を引いて河岸へ／＼と行く女づれ、子供づれ、「チリリン」となる音にはつとしてふりかへつたら眼には、なまめかしい芳町あたりのならぬ失望とて をつかつてちらせた毛唐人めいた髷に對する好奇とが交互に稻妻のやうにひらめいた。

「踏車止」となつてしかたなく下りて河岸に出る。赤い筋の入つた警察の提灯が人ごみの頭よりや丶高く右に左にふられてゐる。汗をとあぶらでむつとする中に入つて急ぐ事も拔ける事も出來ず押され／＼て漸く目ざす濱町に入つた。

節なしの一枚板を使つた檜の門扉が八の字に開かれて、敷石の上も兩側の八ツ手もまだ打水でぐつしよりと濡れてゐる中を通つてみがきたて丶すべすべする格子戸に手をかければする／＼と開いて夫人の好の銀の鈴が「チリリン」と涼しい音をたてる。阿波屋らしい兩ぐり、二こく緒のフエルト、糸柾の俎下駄、白の短靴、紅繻子の草履等が二三列行儀よくぬぎそろへてあつて、案内もせぬ中とこ／＼と可愛い、足音がして出て來たのは、女の兒のやうに髮の毛をのばして、純白の洋服をきせられた誠ちやん、胸のあたりで白いものがむく／＼すると思へば生れて間もない仔猫だつた。

「マ丶は」ときけば、金冠をかぶせた糸切齒のこまつちやくれた口許で、

「お二階よ」と答へる間もなく、しとやかに葭戸の蔭から出て來た水々しい島田のお袖さん、

「お待ちかねでございます、すぐお二階の方へ」と先に立つた。

階段を上りつめた川に近い西洋間二つを通して花火を見る趣向、ぱつと美しい火の花が開いて散るのが忽ち目に映つた。香水や白粉の入りまじつた匂ひがまづ鼻をつく。

「まあ、ずゐぶんおそうござんしたのね——、今お電話でもつていつてたところでしたのよ。」といふ夫人。羨やましいほど多い髮を夜會卷にあげて、少し夏やせした身に黑と鼠のこまかい縞、うすあづきに一本独鈷の獻上、いつも乍ら垢ぬけした人だつた。そのよく透る聲に一せいにふりかへつた人達のひとみが射る樣に私の顏にあつまつて來たのに、いくらかどぎまぎし乍ら一禮して、示されたベランダの椅子によると、こゝはまた手すりにもたれて小つちやいお客樣達が目白押しといふ有樣である。

「仕かけ！ 仕かけ！」とはしやいだり、

「ダリヤガーデンよ、ダリヤガーデンよ」と後へ振かへつてゐる間に消えたり、中でも白地に杜若の絽縮緬にえんじと白の鱗形の帶を男結びにした、切り禿の目許のすゞしい人がはつきりと心に殘つた。
　水の上は寸尺の餘地もなく一面船、といふよりも赤い灯でうづまつて、ポーンとあがる度に、うなりに似たどよめきが起る。絃の音もまじつて息苦しい程の氣を醸し乍ら私の胸のあたりまで押よせてゐた。
「おみづはいかゞ」とかるく肩をたゝかれて後を向くと、ビールのカップを並べた六角のテーブルをかこんで、葉卷をくゆらしてゐた人達の視線とばつたり出合つてしまつてたぢたぢとしたけれど……ふと氣がつくと半白の元園町さんが、さつま上布に紗の羽織で中央だつた、そのとなりが建築家の中村さん。瀟洒な絹あみのネクタイにダイヤが一つ眩しいまでに光る、元園町さんに對することを呑込んで、花火の講釋でも話させてゐるらしい、若いのに如才ないのが心にくい、一面こまかい薔薇をみせた純白のレースのカーテンのそばでは、四五人あけびのソーファーによりかかつて、華やかな笑聲まじりに、着物のはなし、芝居のはなし、巴里院のはなしがはずんで、美しく上氣した頬にはてんでにもつた小さな扇が胡蝶のやうにたはむれてゐた。小さなかごめの小紋につゆしばの帶をしめて、ひすゐの根玉とうすときの手柄とが美しいえりあしに映えた人を誰だらうと見まもる中ふりかへつてにつと笑んだのをみれば赤坂のお慶さんだつた。「こちらへ」といふ風にあごをしやくつてみせたけれど、仲間に入つて口をきくのが物うかつたので笑ひながらかぶりをふつてみせたら、つまらなさゝうに向ふをむいてしまつた。
「いかゞもうみんなお先に失禮しちやつたんですから」といつて、側らの小さいテーブルにレモンテイーだの大坂ずしだの、水菓子だのが並べられたけれど、何故だか胸がいつぱいだつた。そのくせ心の底の方ではさつきから物足りなさが頭をもたげて漸ひろがらうとしてゐた。
　水の上は以前よりももつと灯がまして、國技館のドームのイルミネーションは目まぐるしくまたゝき、花火は青に赤に黄に紫にしげしげと散つては消えて行つた。橋からも船からも桟からもそれにつれてます〱どよみがあがつた。けれども私はそれと一緒になつて「あつー」といはれない氣持になりつゝあつた。それが自分乍らたまらなくはがゆかつた。花火の美しさに見とれ乍ら、闇に向つて刹那的の繪をかいてゆく玉屋鍵屋のうでと數萬金を一夜の歡の爲に烟にしてしまふ意氣をたたえ乍ら、心はます〱つまはづれになつて行つて、とう〱その場にゐたゝまらなくなつてついと席をたつて、新大橋の見える窓に行つてもたれた。
「おう、こちらにもずゐぶん舟がゐますね。」と近よつて來たのは中村さんだつた。私にまで如才なくして……少しかんにさはつたのかぶつきらぼうに、
「えゝ」と答へてしまつたものゝ、すぐにあんまり素ッ氣ないといふ氣になつて、
「あれが、藤村でせう。」と十ばかりつるした提灯のほのぐらい二階を指ざしたら、

「馬鹿にしめつぽいですね。菊四郎が旅にでも出てゐるのかしら」といつて、階段を下りて行つた。ふと庭に目をおとすと、青銅の燈籠に灯がかぼそくまたゝいて、楡葉の緑をてらしてゐた。突然うしろで「アハ……」と笑ひ聲が起つたのをしほに憚りに立つ風をして階下に降りる。すだれを巻き上げた座敷の簾で張つた椽側に近く坐れば、しきつめた青疊の香りもうれしく、煤竹製のスタンドの灯も青かつた。籠の中にでもゐるらしい鈴蟲が思ひ出したやうに鳴いて、庭の中ほどに白く咲いた口無の高い匂ひが漂つて來た。香の匂のしみこんだ床の間には翠雲の山水がかかつて、白磁に生けた蘭がすつきりした水際をみせ、黒檀の机の上には觀世水を銀でかいたうちわが二三本ちらばつてゐた。

「おや、こちらでいらつしやいましたの」目ざとく見付けたお袖さんが、水色匹田の座布團をすゝめて、扇風器をもち出さうとするので、

「いゝんですよ。それは」といふつもりで手をふつてみせたら、

「おきらひで？」と問ひかへすので、かるくうなづいて見せて、じつと目をつぶつた時、花火の音がドーンと馬鹿に遠く聞えて、はつと目にうつたのは一枚の絢爛な錦繪だつた。船宿にしきつめた緋毛氈、屋根ぶねにつるした提灯、藍と薄墨をまぜたやうな空の色、とぼけたやうな黄色の花火、りうとした身なりの旗本は佐團次に似、粋な男伊達は羽左に似、いさみ肌の鳶は菊五郎に似、はるばると見上げる青楼の大廣間には、藝妓、役者、たいこ末社にとりかこまれた大盡が悠然と脇息によつて杯を傾け……とこゝまできたときさつきの物足りなさはいつの間にか影を消して私は自畫自賛の悦よさにうつとりとしてしまつてゐるのだつた。……それから……えゝそれから、船板塀の横町を紺綿に藤色のうすものを着た娘が——榮三郎のやうな娘が袖を胸にかき合せて程近い我家へ更けぬうちにと急ぐ時、ポーンといふ音に、見込しの松の彼方を仰がうとして、ばつたり行きあたつた人、「御免下さい」とわびてからちらと顔をみれば、それはまだ前髮をおとしたばかりの若旦那風の美しい男で、「いゝえ、こちらこそ」といつた低い清んだ聲が、娘の耳にこびりついてしまふ……そうして？……、それからと空想をつゞけ樣とする時、突然、

「ほんとうに花火つてはかないものね、戀のやうに……」末はかすかだつたけれど、はつきりと耳にきこえたので、おや！娘の戀はまだはじまりもしないのにと聲のする方をうつゝごゝろにたづねれば、それはしのびがへしをこえて聞えた道行く人の噂咄らしかつた。はつとして夢からさめたやうに、もう一度左右をみれば、いつの間に來たかお袖さんが、淡縞の明石縮の袂をくわえたまゝ、机の上のうちわを片よせて、切子硝子に盛つたピーチアイスと冷藏庫から出したてらしい、をだけむのたつレトロンとくずまんとを並べて、

「どうぞ」と挨拶して三尺ばかり下つて靜に、觀世水のうちはをとつて風を送つてくれるのだつた。

「もう、そんな事、おかまひなくね。こゝは涼しいんですから。お二階がいそがしいんでせう？」

「いゝえ、奥様がお守りをしなきやあいけないつて仰つしやいますから。」

「お守りですつて、にげもかくれもしないのにね　」

「おほ……」お袖さんにつれて笑ふ中に心がすつかり輕くなつてゐるのに氣がついた。

「もう終りらしうございますね」お袖さんは違ひ棚の置時計を見上げて靜かに云つた。

再び二階に上つた時、花火は惜し氣もなくひつきりなしにちりしきつてゐた。それがやむと水の上の灯が徐々に動き出した。

「もう、歸るらしいんですね。」

「さう、もうかれこれ九時半だから。」

「ねむいな——」と突然ベランダから牛ブボンが振り向く。

「お腹がすいちやつたわ。」といふみそつ歯もある。

「おや、お腹がすいちやあ大變だ。さあこつちへいらつしやい、うんと召し上れ」と夫人は、シュークリームだの、カステラだの、サンドヰッチだのをテーブルの上に出した。私は次第に空いて來てもう灯影がうつるやうになつた水の上を愛惜の念をこめた川でみつめてゐた。

「ずゐぶんすきましたね。」

「もうおしまひでせう。」

「おいとまにしませう。」

「たけしろさんは？」元關町さんに聲をかけられて、その狷介な氣質を好ましいものに思ひ乍らも、やはり敬遠してゐたいこの老人と一緒にかへる心苦しさを思つて「困つた」とかすかに思つたけれど、

「ぜひ、お供をさせて」とまでやつといつておじぎをした、するとK夫人は耳のそばへ口をもつて來て、

「あなた、いいでせう、今晩おとまりなさいよ。それがいけなきやあ自動車でおくらせますわ。ね、もう少しいいでせう、むつつりやさんをむつつりしたまんまかへしちやああたしの職分がたゝないから」

「えゝですけど、またこんど、」

「またこんどなんて、このしとあてになりもしない。パパは留守だし、久しぶりに常盤津をおきかせするわ。」

「でも元關町さんが」

「元K町さんなんかいひぬけの道具にして、ほんとうは一緒にかへるのがいやなくせに—どうしてあなたはかう人なつつこくないんでせう。」とやさしくにらまれたけれど……やつぱら唐屑を胸におさめて、どやどやと辭する群にまじつて玄關に下り立つた時、にぎやかな蓄音器の音が聞えて來た。

本欄は讀者諸姉の自由投稿を歡迎いたします。掲載のものには薄謝を差上げます。投稿について特別の規定はありません。

人間巡禮（三）

深澤邦子

（十）私塾の先生のさもしい下心

その頃私塾の先生は、前の貧乏くさい家を捨てゝ山手通りの洒瀟した二階建に引越した。此處へ移つてからは私塾も開かず、親類つゞきの房子と彼女を敎へる外は、小學校から歸ると習字をしたり、唐紙に大きな字を書いたりするだけだつた。その上家が廣くなつたから、彼女にも同宿するやうに勸めてくれたので、通學するよりは便利でもあり、食料だけを支拂ふことにして夏の初めからこの家へ引移つた。二階の奥の間が先生の書齋にあてられ、入口の六疊に彼女は房子と一緒に机を並べた。先生の奥さんとその母親とは一日交代に茶の製造所へ稼ぎにゆくらしく朝早くから影を見せぬ。毎日食卓に並ぶものは大抵茄子や南瓜ばかりであつたけれど、その頃の彼女は榮養などについて考へる知識もなく、若くて元氣だつたせいか、それで少しの不足も感じなかつた。四時半頃に夕食を濟まし、行水を使つてから、先生は日課のやうに、彼女と房子を伴つて諏訪山に近い草原などを散歩して、そこで二人に體操をさせなどしてから家に歸るのであつたが、晩しなには盃を出して銚子をかたむけるのが常だつた。肴の味噌漬と茄子の淺漬に醤油をタプ／＼かけたのが先生の好物だつた。日曜日などに友達と一緒に飲み始めると、彼女を給仕に出しては誇らしげに笑顔をつくり、醉眼を輝かせて彼女を見返りながら、「仲居はしても泥に染まぬ蓮華の處女だ」とか、「學力なども普通の娘の三分の二以上はある」などゝ賞めそやすので、彼女は愈々堅くなつてもぢ／＼すると、側から先生の奥さんは「邦さんは粋なところにゐた癖に可笑しいのね」と非難らしく言ふ。さう云ふ時奥さんの眼元にちら／＼劍が走る。

彼女と房子は二階の勉强間に机を並べて寢るのであつたが、先生は毎朝二人を起して梯子の段から顔を出した。ある朝、彼女が襲はれたやうにふと眼をさますと、枕元に先生が蹲つてゐて彼女の白い胸に手をさしいれようとする瞬間だつた。彼女は驚いていきなりクルりと起き上つた。房子も眼を醒ました。先生は突立て苦笑をしなが

ら「眠いでせう」と言つて下りていつた。彼女は變な氣持になつた。思ひなしであつたらうか知ら、斯うも考へてみた。先生が日頃漢文の字つきをしながら、態と彼女の指先に先生の指を觸れさせたのではなからうかと疑つた場合がないでもなかつたが、取立てる程の異狀もなかつたので、房子と共に國語、漢文、作文、算術、習字、或時は體操や唱歌までも稽古をして貰つて姉妹のやうに親しんでゐたのである。

ところがある蒸し暑い日の午後だつた。先生の奥さんの母は朝早くから稼ぎに出たらしく、房子も使ひに出かけたあとで、彼女は一人きりで二階の机に習字をしてゐると、下で奥さんが入口の潛戸を大きくたてゝ外出したらしいけはひがした。それから間もなく梯子段の下から先生の聲がして、「邦さん一寸」と呼ぶ。彼女は素直に返事をしながら立上つて階段を下りてみると、階段の直ぐ横手に二疊の小間があつて、先生はそこに坐つてニコ〳〵してゐる。「御用ですか」彼女は襖の敷居を跨がうとした、丁度その瞬間のことだつた。蒸すやうに沈滯した夏の空氣の中にけたゝましく潛戸を開く音が響いて、外出した筈の奥さんが大聲で喚きながらはいつてきた。外出を裝つて良人の所存を窺つてゐたのであつたが、斯うした出來事をさばくことに氣の廻りにくい彼女は、唯吃驚して階段をかけ上り、靜つと階下の樣子に耳をかたむけてゐた。人間の皮をぬいでかゝつた淺魔しい爭鬪の叫びは暫く彼女の耳を亂打した。

彼女はつく〴〵厭はしくなつた。まさかと思ひ正してゐた先生の心持、思ひなしかと取消してみた過ぎ去つた朝のしだら、奥さんが時々何げなく問ひかける疑惑の針を見せた言葉の端々、彼女の胸は煮えたつやうな憤激を感じた。後足で砂をかけて一思ひに飛び出さうかと思つたが、今飛び出したのでは疑惑の念を增させるばかりだと考へ直して、何事も知らぬ顏に勉學をつゞけた。先生もその後は奥さんに喚かれて改心したものか、心に蟠もなささうに爽かな氣分で親切に教へてくれた。それから幾日か過ぎてふとした機會に先生の腹の底が分つたのであるが、先生はもと〳〵、惡人でも色魔でもなかつた。唯身體が弱いし、貧乏ではあるし、四人の家族の生計に苦しみ、行末を共く案じてゐる矢先、彼女に遇つたのであるが、彼女は尋狀により苦學はしてゐても、相當資產のある家の長女に生れてゐることを知つて、奥さんに言ひ含め、表面は奥さんを離緣したことにして彼女の家の婿養子に入込まうとする下心であつたのだ。その前提として借金までして廣い家に移り、彼女を同居させたのをまだ計畫の運ばぬ先に、良人の下心を知らない妻女に喚かれてしまつたのださうだ。

その翌年のこと、彼女は久しぶりで母や妹の安否を訪ね、勉學の基礎をえたことを話すために郷里に歸つた時、昨年彼女の先生の知人だと云つて一夜宿泊していつた男があつたこと、その男が財布を落したから金を貸してくれと云つたが、親戚の注意で斷つたことなどを聞かされた。

（十一） 西洋館内の秘密の花

彼女は私塾の先生の奥さんが疑ひを晴らして、笑顔を見せるやうになつた頃再び學資が盡きたので、先生の家を出て口入屋の暖簾をわけてみた。教員の檢定試驗も明年の夏のことであり、仲居奉公も慣れゝば苦勞も少く、時間の餘裕もあつて、試驗勉強も今では自信のあるだけは出來たが、何時どういふ場合にゐてもなくてはならぬものは金であるし、それに試驗に合格した曉には二度とくゞつてみることの出來ない境遇だと思ふと、勤奉公も何となく殘り多くもあり、其の上好奇心も手傳つて彼女はあと一年足らずの間、樣々の家に住みこんで、いろ／＼な仕事をしてみたい氣持にかられて元氣よく口入屋の暖簾を潜ることにしたのである。店先では口入屋の內儀が寢轉びながら奉公口を捜しにきてゐる四五人の若い男女と話してゐたが、彼女の姿を見るとムク／＼と起き直つて居住ひを正してから、「女中さんの入用ですか。」と言ふのである。彼女は瞬間きまりの惡い思ひをした。次の瞬間には、自分の言葉や風姿が、他からさう思はれたことを誇らしく思はぬわけにはゆかなかつた。

「奉公がしたいのです。」といふ彼女の樣子を內儀さんは熟々と眺めてから「官員さんの處はどうですか」と言ふ。何處に勤める人かと訊くと、縣廳だと云ふ。縣廳の役人だと聞いて彼女は一寸嫌な氣持になつた。料亭の仲居をしてゐた頃、時折夫婦連れで食事をとりにきて橫柄な物の云ひやうをして、何時來ても釣錢一錢おかなかつたのも縣廳の役人であつたし、ある晩すれつからしの受持の仲居が、×××××、豆の葉でどうとかいふやうなことを、俗謠のやうに節をつけて饒舌つた時、くだけた客なら口をあけて笑ふところだが、酷く叱りつけたことのあつたのも縣廳の役人であつた。料亭の前に毎朝二人連れの男が、五つ紋の羽織に袴をつけて通つてゐたが、或る夕方、彼女が藝妓を送り出して暖簾の外に立つた時、例の二人連の官吏が「他男に散財して貰つて生活してゐるのだ、情ないものだなあ、はつはつは……」と通り過ぎたのが、彼女一人を侮辱したやうに感じられ口惜しくてならなかつたことなどを思ひ出し、彼女は縣廳の役人の家は厭だと云つて斷つた。內儀は「それではコンシロへ出る人の家は」と云ふ。コンシロといふのは支那の公使館のことであつて、其家には南京娘（支那人の妾）が住んでゐるのだといふ。彼女は嘗て宏壯な西洋館の立並んだ居留地から南京町を通つて見た時、兩者の懸隔のあまりに甚く、南京町のぢぢむさい狹い町一ぱいに豚の油の匂が漲つて、嘔吐を催したことを思ひ出し、南京娘も何となく厭らしいものに想はれて、胸とが惡く、多少の好奇心が動いてきたが遂々それも斷つてしまつた。それではと內儀さんは言葉を繼いで「それでは西洋館內のラシヤメン（外妾）のところはどうですか」といふ。彼女は好奇の眼を輝かせて即座に承諾した。

傍で內儀と彼女の話を聞いてゐた四五人の男女の中には「ラシヤメンみたいな者のところへ」と言ふものがあつた。彼等は望ましい奉公口がない儘に、古新聞や雜誌を讀んでみたり、火鉢にあたつて饒舌つたりしてゐたがどれもこれも一樣に元氣のない疲れたやうな顏をしてゐた。彼女も奉公の話をきめてから午後の二時過ぎまで、新聞雜誌

讀んでゐたが、内儀は彼女の讀み方の早いのに驚いて、「學生さんやな、何故奉公するのか」と訊いたりした。

店先の達磨時計が三つ鳴つて、傾き易い初冬の黄い日脚が弱くなつた時も、彼女は内儀に連れられて、山手邊りの大きな西洋館の裏門をくゞつた。廣い裏庭の一隅にコック部屋らしい平家建の一棟があつて、白いエプロンをかけた女が、大盥に白い物を一ぱい浸して、洗濯板に石鹼の泡をわきたたせてゐた。長い梯子段を上つた二階には二間幅の廊下がつゞいてゐる。その廊下に面した日本建の襖に手をかける内儀の後に立つて彼女は少しドキリとした。どなん女がゐるのだらうかと想つた。見るとその部屋は細長い形をした十疊間で、何といふ素材か、何といふ塗りか、彼女には分らない立派な鏡臺や衣桁や、茶箪笥などが置かれてゐる、その前に彼女が思はず眼を輝した程、世にも美しい一人の女が坐つてゐた。色のくつきりと透きとほつた白い丸顔、滴るやうな黑い髮を前髮をとらぬ銀杏返しにして派手な柄合の、羽織を着流した衿脚の柔い美事な線、大きな桐の丸火鉢の前の緋緞子の座蒲團に坐つた二十三四に見へる美人は、内儀に向つて「この娘かね、いゝ娘だね。まあおあたり」と云つて彼女の方へ黑い湖に星の光るやうな眼を差向けた。彼女は本當に美しいと思つた。藝妓のやうな美しさとはもとより違ふ、町風の娘の美しいのでもなく令孃の型では固よりない、一種凄艶な品のある容子を具へてゐると思つた。

内儀は煙草を二三服のんでから歸つていつた。勝手の分らぬ彼女は夕方まで火鉢の傍に坐つて、美人から問はれるまゝに、神戸へ來てからの經歴を話したが、仲居奉公をしたことだけは云はなかつた。彼女がゐつけば變ることになつてゐる女中が、夕飯の膳部を長い梯子段から運んできた。彼女は給仕をしたが、これまで幾度となく仲居をして相當に人ずれがしてゐるもかゝはらず、この凄いやうな美人の前には幾らか呑まれた氣持になつて、いつかしら忍びよつてきた厭氣がだん〱彼女の心一ぱいに廣がつていつた。夕餉の跡片附が濟んでから、彼女は女中部屋に行つて、暇をとることになつてゐる女中に勤めの樣子を色々尋ねてみた。單純な性質らしい彼女は何も彼も卒直に話して云ふには「食事は皆コックさんが料理をする、洗濯もそれにかゝりつけの女がゐるから仕事としては偉くない。けんど我慢の出來ない嫌なことが一つある。それは今留守の主人が歸つてくると、夜となく晝となく外國との××××に女中を侍らせては色々の用事に耻づかしげもなく使ふことである。全く西洋人は畜生ぢと思ふ。それが厭で〱普通以上の給金はくれても逃げ出すのぢや」と話すのを聞いて、彼女も翌朝早々口入屋まで行つてくると云つた儘、逃げ出してしまつた。

（十二）蟲の好かない年增仲居

歲末が近づき、迎春の準備に忙しい時がまた巡つてきた。しかし彼女のやうな境遇に住む者は暮から春にかけて の世間の雜しいことは何事も考へる必要もなく、唯紋日に祝儀を當てやうと考へて、身のまはりを整へることに腐心するだけだつた。霜月の中頃から彼女は再

びある料亭に仲居奉公を初めることになつたのであつた。お愛といふ色の黒い三十恰好の年増仲居の外には女がゐるだけで、主夫婦は淡路の生れだといふ話で、料理屋を開くまでは生魚の問屋をしてゐたさうである。その頃の物事を大ざつぱに見る癖のあつた女は氣がつかずにゐたが、今彼女は二昔前のその時分のことを回想し、その料亭の料理場や臺所を思ひ出してみると、單に客に食べさせたり、飲ませたりしたばかりでなかつたらしい。料理場の三和土の上の四斗樽や五斗樽には數の子が一ぱい浸されてゐたり、大きな生魚が遊泳してゐる器が三つも四つも並んでゐたりしたこと、棚の上に置いてあつた大きな米あげ籠に、味のよい椎茸が山盛に煮てあるのを見て、奉公人達は傘の大きいのを選んで幾つも幾つも頬張つたり、濟物代りに數の子を食べたり、幾挺も並んでゐる四斗入の酒樽の栓をぬいて、味さうな酒になみなみとかたむけてゐたりした光景を思ひ出すと、生魚問屋時代からの得意先へ其頃は料理の材料を屆けてゐたのかも知れなかつた。

建物は二棟で、料理場と臺所のついてゐる東の棟には客席と云つては四間しかなく、其他は家族や奉公人の居室化粧部屋などにあてがはれてゐた。中庭を隔てた西側にはダラダラ坂に沿うて細長い小さな部屋が七つも續いてゐた。藝妓や舞妓を連れてくる客は大抵この西の棟に陣取つた。お愛の話によると、若しか刑事にでも踏みこまれた時に、客や藝妓を逃がす拔道が設備してあると云つてゐたが、彼女は遂に一度もその拔道といふのを見たことがなかつた。又女がゐた二ケ月餘の間には寢泊るやうな客は一度もなかつた。

お愛は仲居奉公に慣れきつた年増であるだけに、彼女のやうに飾も着く無邪氣な者は手もなく子供扱ひにされてしまつた。新年の衣裳にお愛は派手な縮緬の長襦袢を仕立てゝ、着古しの方を女に高い値で賣りつけようとした。潔癖な女は嫌で仕様がなかつたが、お愛の機嫌を損ねることが苦になつてとにかく買ひとりはしたものの紅絹裏の汚點を見ては着る氣にもなれず、捨てるのも惜しく、遂々古着屋へ持込んで買値の三分の一で賣拂つてしまつた。お愛も氣位の高い女だつた。「仲居はしても亭主は池さんぢや」と口癖のやうに云つてゐて、紺屋とか料理人に對してばかりではなく、お客に對しても口數を多くきかず、生地の黒い顏に白粉もつけずに、髮も丸髷に結つてツンと取りすました態度であつた。それでゐながら客に相當の人氣を呼んでゐたのは一つは彼女の熟練した腕でもあり、一つは他に秀れた仲居がゐなかつたからでもあらう。

新年の二月三月は比較的客脚が少なかつたが、黒地ななこの五つ紋の羽織着物に、黄八丈の下着を重ねた旦那衆風の男が、藝妓を呼んで酌をさせたり、話などして靜かな遊びをするのが多かつた。かういふ類の客から貰ふ纒頭は割合に多くはなかつた。それでも忙しい紋日にはお愛の運び役に使はれなくて、自分の受持つ客の相手になりきれるのが嬉しかつた。時々女將が客席に顏を出して、祝儀の禮をのべることがある。お客が盃を出すと、魚屋の女將上りの氣の利かない態の女將は、短い太い指の並んだ不恰好な手を突出すのであつた。その時の女將の樣子は田舍出の彼女にも他事ならぬ耻づかしい思ひを

させた。

二月の末になつて松女が暇をくれと言ひ出した時、氣の利かない例の女將は、彼女に金の貸しがあるからと云つて荷物を渡してくれぬ。精細に理由をたゞねてみると、この料亭ではお客が比較的少いから、給金を他の料亭の幾倍も多く渡してあるのだから、半期以上は居續く筈だといふのである。口入屋との約束であつたらうが彼女はそれを知らなかつた。とにかく彼女にはお愛が嫌ひでしようがなかつたので、荷物を打捨てた儘飛び出してしまつた。

（十三）濱の手と山の手の旅館

十七の時、無斷で故郷の家を出てから以後のことをつく〴〵回想し、將來の目的を考へながら、もう奉公生活も切りあげようかと思ふ傍ら、彼女の心にはまだどうしても旅館を見たいと氣持が殘つてゐた。神戸驛と三の宮驛との間の鐵道線路に沿うた濱手に小さな本店があつて、山手の坂路を上つたところに、大きな支店を持つてゐるといふ旅館に雇はれることになつたのは櫻の花の蕾む頃であつた。彼女は最初本店の方で働くことになつた。其家には白髮を散髮にした七十歳近い品のある婆さんが、彼女の外に三人の女中を使つてゐた。亭主は妾を連れて支店の方に働いてゐたが、散髮の婆さんといふのは亭主の母親で、家はもと士族の出だといふのを何よりの誇りにしてゐた。孫息子が一人お婆さんの手許から中學校へ通つてゐたが、學校から歸つてくると制服制帽のまゝで、彼女の部屋に來て「今日校長のところへ授業料を納めにいつたら、何か書いてゐた校長の手がブル〳〵震へてゐるのよ、校金を私用した噂が高いのだ、本當か知ら」などと話したりしてから「學生見たいな女中だな」といつて自分が穿めてゐた手絲の腕袋を脱いで「これを遣らう」と、いふのである。彼女がそれを穿めて見せると、「能く似合う」と聲を立てゝ笑つたりしたけれど、まだ十七になつたばかりの無邪氣な明るい少年であつた。

婆さんは大分喧しやの方であつた。朝も一番先きに起き出して、据風の竈に火をたきつけてから、女中達を起すのが例だつた。或朝も女中達を起して歩いたが、彼女が寢てゐる蒲團にふと目をとめたお婆さんは、その嶮い眼を剝いて眺めてゐたと思ふと「この蒲團は客用のものぢや厚顔しい」と奴鳴り始めた。彼女は跳ね起きて「この蒲團を着て寢てよろしおますとお梅さんがいふたさかへ……」――朋輩古參のお梅が彼女の目見えしたその夜、寢床を敷くときに出してくれたものにちがいなかつた。お梅は齢の若い、林檎のやうなあかい頰と、利口さうな瞳等をもつてゐて、巧みに白髮の婆さんに取り入つて、何事でも自分の思ふやうに、我儘を働いてゐるのであつたが、お婆さんはまたなき正直者と信じてゐるので、彼女のいふことは皆嘘で、お梅は然ういふ大それた女ではないといひ張るのであつた。お梅は側でたゞ默つて居る。彼女は奉公しはじめてから長い月日の間に大分人から揉まれて來たけれど、まだなか〳〵に無實の罪を負はせられても、平氣で受け流して、笑つてあやまるほどにはすれてゐないので、腹が立つてしようがない、しかしどうにも仕方がないので默つてしまつたが、あ

やまることは遂々出來なかつた。

お桝は自分の罪を蔽ひ隱すために、お澄さんに彼女を惡く突込んだらしく、彼女はその日のうちに二階廻りから下廻りに落されることになつた。下廻りといふのは所謂下女働をするところで飯焚きから火鉢の灰ふるひ、食器の洗滌などを働くのである。彼女はなにも經驗だと初手からの奉公を思ひ出して、下廻りに精出した。朝も早く起き出して、婆さんの起きない前に襷をかけ手拭を被つて西洋竈に火を焚き付けたり、二階の廊下の隅に置き並べた、澤山の火鉢を下して來ては、五德を拔いて土間に置き卷煙草の吸殼などを取つてから、小さい金網の灰篩できれいに灰をふるひ落しなどした。三年前にお寺や瀨戸物屋の下女になつてゐたときとは、心持も變り仕事の勝手も自然に違ふところから彼女は何となく生活の面白さをかみしめて味ふことが出來るやうな氣持もしてきた。

或日の朝であつた。火鉢の五德をぬいて土間に置くとき、何事か心に考へてゐた爲めであつたか、彼女は五德の足の方を上に向けておいた。それからまた二階から火鉢を抱へて梯子段を驅け下りた——仲居をしたものは梯子段の上り下りを早くすることには馴らされてゐるし幼い時分に、竹馬に乘ることが好きだつたほど身輕な彼女は、梯子段の昇降の早いのを、誇りにも思ひ面白がりもしてゐた——ところがその時は二階から下りて來た、足の速力の惰性で、火鉢を抱へたまゝ土間まで飛び下りたのであつた。すると生憎其處には今のさつき無意識に置いた、五德の鐵足が上方を向いて突立つてゐた、彼女の跣はその五本足の上に落ちてきたのである。アツといふ間もなく跣の眞中から鐵の先が甲の方へ貫き出やうとするほど深く突き立つてしまつた。彼女は思はず板間の上りがまちに腰をかけて、足をあげて見ると、五德も一緒についてあがる、いきなり五德を兩手で摑まへてグイと力まかせに引きぬいた、鮮血が噴き出すやうに出て來る。手巾を取り出して凝つと傷口をおさへてゐた。その間にお梅、お竹、お松も出て來て介抱してくれてゐると、婆さんは「注意をしないからぢや」と叱言をいひ〳〵流石に老人だけに膏藥を持つて來て貼つてくれる、繃帶を卷いてくれてから、醫師のところへ行つて診てもらふやうにと親切にいつてくれた。しかし彼女はそれだけの傷をしても、醫者のところにも遂に行かず、仕事も休まず跛を引きながら朝夕の勤めを勵んで見せたので、婆さんも感心したやうなことをいふやうになつた。それから半月ばかりの間下廻はりをしてゐると、強て彼女を贔負にしてゐる二階の客達のうちでも、彼女の郷里に近いところから、選出された縣會議員などが、彼女のことを尋ねるやうになつたところから、また二階廻りに上げられた。縣會議員といふのは、彼女の故郷を知つてゐる譯ではなかつたが、言葉の訛がどうしても播州だといつて、心づけの包も他の女中のと別包にして、婆さんの手に渡されてあつたり、室の片付け、食事の給仕も彼女任せにするやうに、婆さんにいつてあるらしかつた。それでも他の客が彼方からも此方からも手をたゝいて、彼女を呼ぶことがある。女中等は議會開會中とかその他の用向で、長く滯在するやうな客筋は、平素からその客の性質、嗜好な

どをよくのみ込んでおいて、一度に二組三組の客用を兼ねて、階段を昇降したり、冗談を聞き流しながら、萬遍に滿足に扱ふことを考へてゐる。彼女も然うした呼吸もどうにか解つて、別包の心付けをくれる客の給仕をしながら、他の室の客達にも厭な感じを起させぬだけの振舞ひが出來た。

縣會議員は、彼女の生地とは十里ばかり隔つた富豪の主人で、五十歳近くの年恰好で、髮の毛には大分白いのが混つてゐた。デップリと肥つた氣品のある大男であつたが、彼女が夜の寢床をのべて、脫ぎすてた衣類をたゝみなどしてゐると、男は寢床に入つてから、煙草盆とか、湯沸しとか、何か用事をいひつけて、輕く彼女の手を握つてみやうとしたり、酒氣の多いときなどには夜具の端を輕くめくつて、この中へといふやうな表情を見せなどすることがあつたが流石に白髮に恥ぢてか、からかふとも、眞實とも分らぬ態度に出るのがをかしくて堪らず、笑ひながらお寢みと挨拶をし退るのが常だつた。

彼女はこの三年にちかい都會の生活によつて、各種の境遇にある男性といふものゝ、僅かばかりの側面を觀た、老いも若きも、尊きも卑しきも、坊主も船頭も博奕打ちも、等しく女性に對しては、所謂色氣をもつてゐて、苦味走つたその顏も、節くれ立つたその腕も、荒々しく鳴り響く聲も、女性に對するときは優しく變るものだと、熟々思はぬわけにはゆかなかつた。同時にまた、女が優しい態度を失はず、生意氣なことさへいはなければ、どんな男でも女の頼むことは聞き入れて親切に世話してくれるもののやうにも思はれた。同時にそれは貞操蹂躙の下心のやうにも思はれた。彼女はある時眞面目な客の一人に、夕餉の給仕をしながら、男の方は女の貞操をあてにせずに、眞實に女の世話をするものでせうかといふやうな質問を出してみたことがあつた。客は笑つて「それはせぬのが眞實でせう」といつてまた笑つた。からかひ半分の親切はともあれ、深く底に徹する程の眞心を求めるには、男の愛慾の滿足と交換しなければならぬものかと考へたとき、彼女は身顫ひする程、男といふものが厭はしかつた。

それにつけても彼女は故里のことを追憶してみた。故郷では男が五十歳にもなれば、周圍からも、自分も爺さん氣持になつて、若い娘達は「おつさん〳〵」と呼んでゐる。あかい渦卷の上の着物を裾からげして人通りのない山坂道をおつさんと一緒に氏神祭禮に伴はれて行つても、冗談一口いふでなく、「疲れたら一休みしよか、小用を足して來い」くらゐをいつて、木の株、岩の頭に腰をかけて、印籠やうの煙草入を取り出し、呑氣さうに空に煙を吹くくらゐのことで、親も娘もおつさんと一緒ならと、大の安心をするのである。

都會のおつさんは頭が禿げても、白髮を一ぱい生やしても、些とも油斷は出來さうでない、田舍の人生は五十年で、都會のそれは百年かも知れぬなどゝ、獨り彼女は淋しく微笑んだ。

それから間もなく支店勤めにしてもらつたが、支店は僅か三層造りだつたと憶えてゐる、その店には何となく陰鬱な空氣が漂うてゐた。亭主は本店の婆さんの倅で、士族を誇つてゐるせいか、どこか高慢ち

きで、三度の食事のときなどには、彼女に給仕をさせて、飯の盛り方などの叱言を頻りにいつた。客に給仕するときの心得に注意する意味でもなく、亭主はつまり肉附のいゝ體をもつてゐたけれど神經の尖つた男なのであつた。痛々しいほど痩せ細つた、青白い妾をこき使つて、朝から晩まで料理場で、料理人も傭はず喧しくブツ〳〵叱言をいひながら稼ぎ通すのである。妾はもと二階廻りの女中であつたのに關係をつけ、女房代りにしてゐるのであつたけれど、女房としては婆さんが承知をせぬので、來る日も夜も白いエプロンを掛けて、陰氣な容子をしながら働いてゐた。彼女は支店の軒をくゞつた初めに、妾の蒼白い陰鬱な顏と、亭主の傲慢な態度とが第一印象として殘つたのである。一體に料亭に比べて客筋はよささうに思はれたが、旅館といふものの樣子も大抵は知れたので一週間ばかりでこゝの支店とも暇をとつてしまつた。

（十四）奉公の足を洗ふまで

櫻の花がチラホラ咲いて世の中が賑やかになつてきた。奉公から足の塵を拂ひ落すことを何時までも躊躇てゐて未練らしいとは思つたが彼女は最後にある有名な西洋料理店へ、目見えの二三日だけでも入つてみたい好奇心にひかれた。口入屋の内儀に聞いてみると、「恰度、都合のよいところがある」といふので、彼女はその日の中に目見えをした。洋風の宏壯な三階建で、梯子段も一間巾がついてゐた。仲居が七八人に上女中が一人、下女中が二人、料理人が三名で、四十五六の嚴格さうな顏付の男が帳場に控へて、四方八方に監督の眼を配つてゐる。亭主は高貴織の羽織を着こんで上品に構へながら、時折帳場に出てくることはあつても、二言二言立つた儘話すだけで直ぐ奧の方へ消へてしまふ。女將といふ人を彼女はとう〳〵見ずに終つた。

午后から夜に通して二階も三階も客が一ぱいだつた。彼女は目見えをした初夜、階段の中程で足取りの拍子を狂はせて、手に持つてゐたお盆の上の洋皿五六枚を滑らして滅茶々々に毀してしまつた。帳場の男は太い眉をたてて甚く叱り飛ばした。彼女は謝罪つた。それと共に明日は此家を辭して、愈々奉公といふ境界を切りあげる決心をしたのである。

實は彼女がこの洋食店へ入つてみたいと思つた動機は他にもあつたので、豫て料亭仲間の高い噂が耳にはいつてゐたからなのである。

——噂といふのはそこの西洋料理店の主人といふのは、もと九州某藩の大名系の人で、帳場をしてゐるのはもとその臣下であつたといふのである。

それ故實質から云つて店舖の營業は帳場の男の腕でやつてゐるが、昔の君主である關係から食客とせず名義を主人としてゐるものの帳場は主人以上の權威をもつて、威張つてゐるのだといふ噂であつた。ところで彼女は初對面の瞬間から、この帳場の態度に目をつけて見た。如何にも噂のやうに威張つたものである。高貴織を着た主人の態度も料理店の亭主らしくはないなどと考へなどしてゐる矢先きに、皿を毀して叱られたときの調子などによつて、この店は眞實帳

場のもので、主人といふのはその實食客だなアと、彼女の心にも印されたのである。

　ところがこの年の秋の末頃、偶然に彼女はこの帳場の成れの果の、惨めな夜がらうどん屋を擔いだ姿を見たのである。

　それは斯うであつた。彼女が西洋料理店の一日の目見えを限りに奉公を止めて、裏店屋の借家にゐる馴染の婆さんの三疊間を、また勉强室に定めて、私塾の先生のところに通つて檢定試驗についての注意をうけたり、太字や細字を書くことの練習をしたりして、とう〳〵その年の秋の初めに教員免狀の通知を受取ることになつた前後のことである。ある夜、婆さんが同じ裏長屋の一軒に夜泣うどんが移つてきたといふ話をした。併し彼女は不思議とも何とも思はなかつた。裏長屋はさういふ人間の住むべきところだと思つただけだつた。ところが或朝のこと、共同井戸端へ洗面にゆく途中、家賃店の繕ひをしてゐる汚らしい一人の男の顏がふと眼に映つた。彼女は吃驚して佇んだ。その汚い男は彼女が奉公の足を洗つた例の有名な洋食店の帳場をしてゐた男に違ひないと思つたからである。けれども素知らぬ様子で「お早うございます」と聲をかけてみた。すると男は「ハイお早うございます」と挨拶を返した。その角ばつた聲の調子は彼女が目見えの日に皿を毀して叱られたときの調子に酷似であつた。男の方では全然彼女の顏を見覺えてゐないらしい容子に見えたがその日はそのまゝ、三疊の間に入ると彼女は机の前に坐つて深い物思ひに沈んだ。大きな店を我物顏に振舞つて威張散らしてゐた日から、僅かばかりの月日の間に、あの惨めな境遇に陷るまでには、何か事情のあつたことであらう。彼女は次第に自分が叱られたことなどは忘れてしまつて、唯だ氣の毒なおもひやりに滿されて、いろ〳〵と想像を巡らしてゐるうちに、不圖頭に閃いてきた一つの思ひ出があつた。それは彼女が料理店に目見えした日のこと眇目の奥女中のムッツリと醜い後姿を指さした仲居の一人が「彼女が帳場はんの好きやんよ」と尋ねもしないに話して聞かせたことだつた。それだけ憶ひ起せば何れも彼と奥女中との間のことが大名氣の主人の怒りに觸れたのだらう位はそれからそれへと想像されることであつた。

　秋は靜かに更けて丘邊のあたりには樹々の紅葉が澄明な陽の下で黄に紅に相映ずる頃になつた。地の上に立つ人間の輪廓が最も鮮かな線を現すのは秋である。彼女はその頃希望に燃えながら、地味な細い銘仙を對に揃て、髪を束髪に結つて、教員の奉職口を搜して歩いた。

改造さるべき學校教育

野口援太郎

パーカースト夫人が來て、ダルトン教育が宣傳さるゝ今日、記者は、張信介を持つて、獨自の兒童教育法を考案し、我が教育界に革命を促し、多大の注目をひいてゐる、野口氏を池袋の兒童の村に訪ねてその稿を得た。

一

（造物主の手から出る時は總ては立派である。が、これが人間の手にはいると、墮落してしまふ）ルーソーがエミールの開卷劈頭に書いた、この叫びは、矢張今日に於いても同樣の意義をもつて居ります。元來純粹　雜である人間を人間が破壞しつゝあるので、しかも人間を造ると稱して居る學校教育そのものが最も有力にこの破壞を逞ふして居るのは驚く他はありません。

今日の如き學校教育が續いて居る間は到底社會改造も、世界平和も期待する事は出來ないと思ひます。

他の方面で如何に努力して見ても、今日の學校教育の方法が改められない以上、それらの努力は皆水泡に歸することは當然であります。何となれば社會萬般の改造の基礎である人間の改造が出來ない以上、その他の改造は改造せらるゝに從つて破壞せられるからであります。私は今日の社會改造の基礎は學校教育の改造にあると信じて居ります。

我々が教育方法の改善を主とせる新教育運動を起して居るのは全くこれが爲であります。

二

私は先づ今日の學校教育が如何に人間性の破壞をなしつゝあるかを說かねばなりません。

先づ知力について言つて見よう。今日の學校では色んな知識を與へる。從つて子供が多くの知識を得つゝあることは事實であります。この點から見て世人の多くは今日の學校は知育は進んで居るが德育が不十分であると言つて居ます。しかしこれは全く[illegible]考であります。今日の學校教育は知力の發達を著しく阻礙して居ることは爭ふべからざることで、六十人七十人と云ふ多くの子供に同一のことを學ばせる。優秀な兒童は何の苦もなくこれを理解する。劣等な子供は如何に力を盡して教へても中々悟ることが出來ない。この間の懸隔は非常に大きいのである。しかも教師はこれを一樣に取扱ひ、始終同一のことを授けなくてはなら

ないのです。秀才はその延びんとする力を延ばすことが出來ないで空しく髀肉の嘆を發するの外はない。その溢るゝが如き勢力は徒らに他の無用のことに發散せられるに過ぎないのであります。これは所謂天才を殺すものではありますまいか。今日の學校教育は偉人を育てることは出來ません。尤も近來教育者もこの弊を痛感して色々な手段を以てこれを救濟しようと努力して居るのは事實であります。併し乍らこの貴重な努力は元來の方法の不完全な爲に固より十分奏功いたしません。それに一方低能兒童は始終學科の強壓を受けて益々その發達を阻止せられ、一般に學科に對する興味を失ふのは已むを得ないことであります。

かくの如く今日の學校教育が秀才と低能との發達を抑止するの結果に陷つて居ると同時に總べての兒童に對しては、とかく注入教授を主として、創造判斷の能力を伸びさせないで居るのであります。それは大人の定めた學科課程を一定の年限内に教へ込まなければならないから、勢ひ注入的に教へるより外に仕方がないのであります。子供達の創造力や判斷力を伸展させる爲には是非彼等の興味を有する事柄について自由に研究させる方法を取らねばならないのです。彼等が自ら興味を有する事について色々と考へてやつて行く所に、創造力も發達し、適當な判斷力も作れて來るのです。これに反して豫定せられた事柄を豫定せられた年月に授けるについては、勢ひその知識を注入するより外に道はないのであります。かくて思慮のある獨創力のある立派な人間の出現を望むはの所謂木によりて魚を求むるのと同樣、困難なことであります。

三

我々は更に眼を轉じて道徳上の結果を見ようではありませんか。誰だつて興味のない事柄に身を入れて眞劍になるものはありますまい。子供と大人との相違は、大人は今現に興味はなくとも、後に何等かの興味が起るに相違ないと信じてある程度までは我慢するが、子供には殆どこの辛抱が出來ない。唯この點が違ふ許りなのです。然るに今日の學校教育は子供本位の教科の材料ではなく、大人が從來の必要を感じて作つた材料が大部分を占めて居るのです。こんな材料は子供に對しては恐らく興味を起さすることの出來ないものが大部分を占めて居ませう。この子供の喜ばないものに向つて強いて注意させようとした所で、それは無理です。子供は動もすれば自分の仕事から逃れ出て、何か別に面白いものを發見しようと試る。まして各教科には時間の制限が附してある。修身二時間國語五時間、算術四時間などとチヤンと極りがついて居るのです。これを落ちもなくやつて行くには、是非時間割を作つて、キチンキチンとその時間割通りにやつて行かなくてはならぬのみならず、各科ともそれ〲教授細目があつて、毎週教授すべき事項が豫定してあるのです。子供達はこの時間割と教授細目とに從つて毎時間豫定通りに教へ込まれなくてはならないのです。そしてその事柄が子供に興味を與へようが與へまいがそんなことには頓着はない。折角子供が何か面白味を

感じて來さうになつて來ると、もう時鐘が鳴つて外の仕事に移らねばならないのです。
　こんな風で子供達は六年も八年も或は十數年も過さねばならないのです。これでどうしてその仕事に忠實熱心な態度が養成せられませう。若し數年若くは十數年の間こんな風で養はれて、そして仕事に忠實な人間が出來たとすれば、それこそ瓜の蔓に茄子がなつたより奇蹟でなくてはならないのです。こんな有樣では自然の子供は課業から逃れて何か興味のある仕事に走るより外はないのでありませう。これが子供の本來の性質であります。今日の人間が次第に仕事を嫌ふようになつて來ると云ふ傾向は何人も認めて居る所でありますが、それはこんな教育を受けた人々に取つては避くべからざる當然の結果ではありますまいか。修身科でいかに仕事に忠實なれと教へても、實際日常の生活がかくの如き有樣では、その教へは何の効果もないのが當り前であります。
　今日の人間はあまりに物質的になつて來たと言ふ非難が強いが、實際私もさう觀察します。しかしそれは學校教育が事實上さう教へて居るから仕方がないではありませんか。我々は自分の仕事が嫌だから、之れから逃れて何か好きなことをしようと云ふ風に長い間仕込まれて居る。自分の仕事そのものに興味を有つて、我を忘れてやる風は子供の時から出來る丈け禁止されて居ます。そして好みもしないことを強いてやるように導かれて居ます。しかし強いてやる爲には何かそこに壓力が加へられなくてはならない。それは及落と、席順と點數と賞罰とであります。もし教へられたことが嫌ひだからと言つて、努めてやらないものはその成績が惡い。先生から叱らる。そして最後には落第と云ふ極刑が加へられるのです。これほど苦痛な、これほど不名譽な、そして又、教育上から見て、これほど不合理なことは他にはありません。これに反して先生の意を迎へて嫌なと云ふ仕事でも勉強してやれば先生から先づお褒めの言葉に預り、點數がよくなり、或はいゝ評語が與へられる。席順も上になり、賞品にも預り及第の譽れを得るのは無論のことであります。我々人間はこんな仕事以外の報酬を以て、小學數年若くは十數年間、好きでもない仕事にいそしむように仕向けられて居るのです。若い人々の心にはこれが當り前のことだと考へられて居るのです。仕事に存する興味以外の報酬は所謂物質か名譽である。成長の後も自然これと同樣な態度で世の中に立つようになるのは分り切つたことであります。
　我々は仕事そのことに興味を有つて、所謂遊樂として仕事をやつて行きたいと思ひます。そこに名案も、工夫も、金錢も、名譽も集つて來ます。義務責任の感なくして自然に義務責任を盡すことになりませう。義務責任を云爲して居る間は本當に義務責任は盡されない。これを忘れて仕舞ふ所に、言ひかふれば、義務とか責任とか云ふのでなく、自分の興味から、自己の愛着心から、やむにやまれぬ心で、その仕事に對する所に、本當に義務責任が盡されるものです。今日の學校教育ではこんな氣風は到底起し得ない。若し今の儘でこんな氣風が興起して來ることを望むも

のがあるとすれば、それは百年河清を待つのと同様愚の骨頂と言はねばなりません。

右の外、今日の學校が極度の競爭心を起して他を排する傾向を助長し、又虚僞虚飾の心を養ひ、浮華輕跳の風を促がして居ることも亦明かなことでありますが、私はあまりにくだくだしく思ふので委しくは述べません。讀者諸君の御推察に任せます。

　つまり今日の社會相は今日の學校教育の反映であります。今日の社會の缺點は皆今日の學校教育が蒔いた種子が實つて居るのであります。勿論學校教育以外色々の原因が奏合して、今日の社會相を形成して居ることは、私も決して否みません。たゞ私の主張する所は少くとも今日の學校教育は今日の社會の缺陷を生み出すについて最も有力な原因の一つだと云ふことであります。今日の學校教育を根本的に改めなければ大人物は出ないのであります。社會の改造などは思ひもよらぬことであります。永久平和は唯一の夢想に終つて仕舞ひます。

　この學校教育の缺陷は日本が一番甚しいとはいへ、世界各國とも矢張りこの缺陷を有して居ます。列國の協調が出來ずに、各國各々自利と、猜忌と、排擠とを事として居るところに、この學校教育の缺陷が充分に現はれて居るのであります。

四

　こんな譯でこの學校教育の改造運動は歐米を通じて起つて居ます。その最も顯著な團體を新教育同盟と呼んで居ます。これは英佛獨の三國語で編輯した機關雜誌を發行し、年々その研究の爲に世界の教育者を召集して、世界的な教育會を開いて居ます。そして各國ともこの新教育の實驗的研究を爲すために多くの私立學校が興つて居ます。私どもこの四月から開かうとして居る「兒童の村」小學校は實にこの世界的の新教育運動に策應して起つたのであります。そして今日の學校教育を根本的に改めたい爲にその實驗的研究を試みるべく生れ出たのであります。我々は眞の人間を養成して、社會の改造をなし永久の平和をこの地上に將來せんが爲に、この小やかな「兒童の村」を創設せんとしつゝあるのであります。

　私どもは何處までも子供本位の教育をやりたいと云ふ考であります。私どもの學校に「兒童の村」と云ふ名をつけたのも實にこの子供本位の意味からであります。私共の新教育は何處までも子供本位の學校であり、子供の興味を主とした學校であります。時間割もなければ、細目も、教科課程も、眼中には置きません。唯子供等の興味の趣く所に任せて從いてそこに教育を施さうと云ふのであります。

　これが實に私立の學校の根本原則であります。そしてそこからあらゆる教育上の方法とその美果とが生れ出て來ると堅く信じて居ります。

　「兒童の村」では教師がみなの子供に一齊に教授することはしない。それは子供の興味の趣くまゝに任せますから、一齊に教授しようとしても到底出來ぬからであります。又進んでこのことを教へかの事を教へると云ふことも殆どしない。たとひこれを教へると

とがあつてもこれを好む子供のみが教はるのであります。これを好まない子供は好むことをやつて居て少しも差支はない。そんな強いてやらせられることほど有害なことはないからであります。子供が自ら爲すことは彼等に取りて最良の教育であります。それは彼等が自ら工夫し、自ら考へ、自ら練磨して行かねばならぬからであります。彼等が自ら爲す所には無理がありません。天分の豐かな子供は豐かなだけ進みます。彼れは進まぬように抑へつけられる苦みを感ずることはありません。彼れは進みたいと思ふだけ進みます。厭けば外の仕事に移ればよい。有益な仕事は幾らでもあります。天分の豐かでない子供は豐かでないだけそれだけ十分に進み。たとひ進みは遲くともその子供に取つては最善の進歩をなします。孟子の所謂苗を引き拔いてこれを枯らすようなことは到底ないのであります。彼れはその進みに應じて興味を感じ、そして樂しくその日その日の努力を成し遂げて參ります。

五

「兒童の村」では、同時に同一の材料で教へられる一團の兒童、即ち所謂學級なるものを認めない、そこには一人の教師が引きうけて教育する一組の少數の兒童があるのみであります。この一團の兒童數を貳拾人と限定して居ます。世間では六七十人の學級を作つて居るのに、我が「村」では、何故にかく少數の兒童に限つたかと言へば、それはこゝの兒童は皆自ら己れの欲することを學ぶのであるからであります。銘々勝手なことを爲させるこの雜然たる社會を指導して行くには、兒童數が多くては到底その目的を達することが出來ません。學校全體としても亦極めて小規模なものであります。即ちかくの如き貳拾人の小さい團體が三つ集つて六十人がこの「村」の定員であるのであります。即ち學校全體として通常の學校の一學級にも及ばないのであります。我々は現代式の大工場的な教育に反對するものであります。人間を同一の型にはめ込んで大量生産をなす安價な教育は、教育とふ名稱を與へることが出來ぬと我々は考へて居るのです。工匠の魂を打ち込んだ最高の藝術品を作る、それが即ち本當の教育であります。この考から見れば我々の「村」ではまだ子供の數が多過ぎる位であります。

「村」の子供になるのは六かしい試驗を要しません。普通の發育をした子供達は皆この「村」にはいることが出來るのです。普通の發育をした子供は皆普通の教育を受くる權利があるのであります。從つて「村」では何れを取り何れを取らぬと云ふ選擇の權利はなく、唯申込順で受け入れると云ふまでであります。從つて教育を受けるに適當な子供達は何日何時でも空席さへあれば「村」の子供になることが出來るのです。

必ずしも四月でなくては入學が出來ぬと云ふ譯ではありません。

かくてこの小さい「村」の子供達は出來るだけ自由に、出來るだけ愉快に、自分の欲する仕事を熱心に、そして殆ど何等の干渉も受けないで、何時までもつゞけて行くことが出

來るのです。その代り厭きが來れば何時でもその仕事をやめて遊ぶことが出來ます。小用一つ足すにも手を擧て先生の許を得ねばならぬやうな、窮屈な世界の空氣とは大分違つて居る筈です。

子供が「村」に留まつて居るのは勿論六ケ年であります。この間に彼れは逸早く尋常小學校の仕事を終へて中等學校の課程にも足を踏み入れることも出來ませう。と言つて我々は秀才教育とか、早教育とかを行ふのではありません。我々はたゞ子供の自然の發達に任せて無理な抑制をしないと云ふまでゝあります。しかし多分は、この六年の間に、中等程度にまで這入つて行くことが出來はしないかと思ふのであります。「村」では別に中等學校に入學する準備はしません。こんな豫定的な無理な教育はいたしません。が、私共の豫想では、相當の學校にならば乾度入學することの出來る實力は充分につくだらうと信ずるのであります。されど私共はこの村の小學校につゞいた中等學校が他日設立されんことを希望して居ます。それはどうかこの教育方法を今數年續けて行きたきの心からです。激烈な競爭試驗の中にほうり出して我が教育の效果を台なしにすることを欲しないからです。子供達は恐らくこの競爭に堪へる勇氣と實力とは充分有つて居ませうが。

六

兒童の村の維持者は子供達の保護者であります。保護者の方々がその子供達の最善の發達を希望せられることは何人よりも優つて居ります。その人々が「村」の教育の方法に對しても、その費用の支出に對しても、責任を負はれるのは當然のことであります。私共は勿論、現時の教育の缺陷を補ひたい一念から出發して、この學校を設立したのであります。ですから、これに對する全責任は負ひます。そしてこの學校の教育に從事する教員諸君は、我々の教育上の主張に共鳴して「村」の教育に從事せられるのである以上、それ丈けの責任を分つべきことは無論のことであります。つまり「兒童の村」は我々の教育主義に共鳴して集つたこの三者の親密な一致協力で遂行せらるべき事實であります。しかもこの小さい規模の「村」の使命は非常に大きいのであります。この大きな使命を行する「村」の保護者會は單にその費用の支出に任ずるのみでなく、その教育方法に對しても責任があるのであります。從つてこれに對する發言權がなくてはなりません。實際この「兒童の村」の保護者會によつて設立せられ、維持せられ、改良せられ、發育せしめられなくてはならぬものと考へるのであります。

かくて彼のヤスヤナ、ポリヤーナ學校に於けると同様、何等賞罰の機能のない、試驗とか、及落などいふ威嚇的な諸道具を撤去した丸の學校が生れ出ることでせう。求知心に燃えて居る、そして活動力の旺盛な、小さな子供達は何等の邪心もなく、唯一生懸命にその欲ふ所に猛進して、そこに無限の興味を感じ、また他の報酬を顧みない一群の生きた少年達が生れて來ることでせう。これらの少年の達が、猶この上、數年間も同じ教育を受けて世に出づる頃の有様を想像して見れば、私は飛び立つほどに嬉しくて胸が躍るのを覺えます。紙數の制限上抱負の只一端を吐露するに止めて擱筆する事とします。

時事問題

日米問題と東洋民族の聯盟

新居格

日本の移民の排斥の法案が合衆國の上下兩院を通過した事は今更說明するまでもない。而して後に殘る問題は大統領クーリッヂ氏が該法案を思ひ切つて拒否出來るか、また適當な折衷案例へば法案實施期の延期の如きで𦊆をつけるかである。しかし本稿起草のときにはまだ未解決であつた。

合衆國の右に述べた法案の通過に就いては合衆國内にいろんな論評があつた。特定の排日紙を除く各紙は筆者の記憶する所によれば上院の態度を非難してゐるらしかつた。

支那印度等の新聞紙は敢て人種戰爭を激成するものである。今回の日本人排斥法案はひとり日本人にたいする侮蔑である許りでなく全亞細亞人にたいする侮蔑である。だから我々東洋人の面目を支持して行く必要から東邦聯盟を結成してもいゝとさへ云ふ人があつた。

筆者の考へる所では人種問題はいろんな意味で厄介極まる問題である。血は水よりも濃しと云ふ言葉があるにしても今人類は國際主義的指標をもつて動いてゐる。人類の理想的原則から云へば人種問題の如きはあつてはならない筈であるが現實の實狀はなか〳〵そうはいかぬ。そこで國際主義と相反的に人種問題が中々頑強に蟠屈してゐる。

今の世界では人類の間に存在する三つの爭鬪體樣がある。國と國との國際戰爭だつて終熄した譯ではない。それに階級爭鬪の事實が儼存する。而してそれ以外に人種的相反がある。

現世紀はインタアナショナルの歩みを執らうとしてゐる。既成諸國家を基礎とするものには國際聯盟がある。ましてプロレタリア階級は階級爭鬪の戰線的布局としてインタアナショナルの志向をもつ。

然るに右二つの志向にたいする障害はいつも人種問題である。それは既成諸國家の國際主義を邪魔すると共にちがつた意味で萬國の勞働大團結をぶちこわす、筆者はこの場合猶太人の社會主義團體ポエール・チオニズムの一派を想起する。彼等は決して純粹なインタアナショナルにはなりえない。と云ふのは彼等は萬國の無產階級團結せよとは叫ばないで猶太人の萬國の無產階級と限るからである。そこに正しく無產階級解放の運動にすら人種的着彩がある事の一例證であるが、そうしたことはどこの無產階級運動にも多少はあるのではなからうか。右の如く云ふ理由は我々が感じたい清爽にして曇りなきインタアナショナルが人種的偏執によつて歪曲される事の遺憾を思ふからである。

私が人種問題がいま猶人類の大問題であるとする譯はそこにある。

合衆國は元々寄り合ひ世帯の甚だしいものではあるがそれにも拘らず汎米主義の志向がかなり强い。この最も極端なのが例のクークラックス・クランの運動であらう。彼等の運動は最初は黑人いぢめに端を發して仕舞には日本人支那人等にまで及んだ。今回合衆國の上下院が日本移民法案を壓倒的に通過させたのは彼等議員の政治的考慮からでもあらうが、彼等の不遜な優越的汎米思想もなかつたとは云はせない。

所が日本の民論はどう。一體民論と云ふものはそれをきつかけに利用されがちになる。

その意味から頑迷な愛國主義者に宣傳の機會を與へてはならぬ。それから日米問題に就いて冷淡を裝ふものがある。その一つは對米貿易を前提とする商業資本主義の徒である。政黨はあまりに選擧の結果に關心事であり過ぎて眞面目に人種問題を考察しやうとはしない。左傾諸團體はそれらが當然の論理である所の人種平等（といふより人間平等）の觀念から排日法案には云ふまでもなく反對であらねばならぬがしかし日米問題を極端に利用的體勢をとらんとする所謂愛國家並に軍閥をも警戒する。

大使埴原が抗議したのを民間にも米國の不正義を鳴らすものがあつたが今の所日米問題はまだ高調に達しない。米大統領の通過法案裁可の事があつても直ちに東洋民族の聯盟的機運は促進されないであらう。議論としてはそうした提唱が相當ありえても日支親善をすらうまくやつて行けない日本國民が東洋民族の聯盟をいかにして具體化しえやう。それ等の議論は人種問題に基礎を於いて論及されえても具體案としてどこまで可能性があるかが考へられる。理論と實際とのひらき

はそこである。

加之、排日問題のカリホルニヤに於ける氣勢を見て悲觀すべきことは同州に於ける勞働同盟までが熱烈なことである。加州に於ける米國の勞働は日本人のそれにたいして利害相反の立場にゐるから止むをえないとして筆者の考へたい事は全米の勞働組合並に社會主義者は本當はどう思つてゐるかである。

我々はどの點からも國際主義に於ける人種的陰影に悶鬪を感ぜざるをえない。

總選擧後の臨時議會と淸浦內閣

總選擧の結果は間もなく發表されやう。その結果如何換言すれば政友本黨が第一黨になるか護憲三派が多數になるかに仍つて新形勢が形成されるのである。

政友本黨は淸浦內閣を支持してゐる。明かに與黨ではないが護憲三派に反對の立場に在るが故に與黨のやうなことになつてゐる。しかし同黨は與黨として淸浦內閣は油斷は出來ない。彼等は主義政策の上から淸浦內閣を支持してゐるのではなく、そうした方が政權をとるのに便利だと考へたに過ぎなからう。

淸浦內閣が臨時議會にはどうなるか。

護憲三派の側が總選擧の結果政友本黨より多くなると彼等は淸浦內閣を彈劾するであらう、そうなると淸浦內閣は勢ひ崩壞する。いくら亂暴な淸浦內閣でも解散を再びする事は出來なからうと想像される。その一大理由は民間事業界は政局の安定をのぞんで止まないからである。隨分と長い間かゝつた總選擧である。それを現政府の與黨が少ないからと云つて選擧をやり直すことは不斷なら兎も角、內外共に問題の多い今では出來ないであらう。だから護憲三派が多數となれば勢ひ淸浦內閣は總辭職する、しかし政友本黨が多數の政黨になつた場合どうなるか、淸浦內閣は選擧を公平にすれば內閣存立の意味があるかの如く云つてゐた。選擧が果してどこ迄公平であつたかどうかは別問題であるが淸浦內閣にしてみれば公平にやつた積りだからそれだけで同內閣の一つの使命が果たさせた譯である。同內閣はそれ丈の意味でも辭していゝのである。卽ち本黨多數ならば政權はそこに授受され、護憲三派が多數ならば淸浦內閣は再び解散が出來ない限り內閣をなげ出すより外はない。

何れにしても總選擧後の政局がどう云ふ新形勢を呈するにせよ、淸浦內閣は臨時議會を機として退く事になりはしないか、臨時議會には過激運動取締法案ぐらゐを置土産として。

我々は現在の政局には興味を持たない。どの黨派もすきではないが淸浦內閣の如きはなるたけ早く罷めて欲しいものである。

これから流行る疫痢と赤痢の話

醫學博士　鎭目專之助

一　疫痢や赤痢に罹り易い子供

其の名を聞いた丈でも身慄ひするお母さんのある程に怖ろしがられる疫痢は赤痢と共に、初夏の頃から眞夏を通して秋の初めの頃までも非常に多い病氣であります。一體子供の病氣は、哺乳兒の時分には榮養障碍が一番多いが、少し大きくなつて三—四才の頃から急性傳染病が著しく殖えて第一位になる。中にも疫痢赤痢は本邦小兒傳染病中最も重要なる怖るべき疾病であります。

疫痢は元來福岡地方に非常に多く、尙又同じ病氣が名古屋邊にも澤山あるので同地方では之を「ハヤテ」と呼んで居ます、それは颶風の樣に急激に來ると言ふ意味から來たもので、以て此の病氣の劇しい事がわかるだらうと思ひますが、實際數時間—拾數時間の內に今まで丈夫にピン〳〵して居た子供が忽ち亡くなる事は珍らしくないのであります。

年齡は滿二年から滿六年の頃までに一番多く、一體に平素達者な丸々肥えて愛くるしい樣な子供に多いのは、平素の壯健に委せて不攝生に陷るせいもありませうが、また外見榮養のよい子供にも體質上虚弱な淋巴性體質のものなどが割合ありますから其んな場合もあらうと思ひます。兎に角そんな可愛いらしい坊ちやん孃ちやんを僅か一夜や半日の間にとられて仕舞つては親御さん方の諦らめられぬのも尤で、そんな譯で一層此の病氣が怖れられるのでせう。

それでは一體疫痢と赤痢とはどう違ふかと申すと疫痢もやはり赤痢菌に似た或る黴菌の爲に起ると言ふのですから病原菌の種類に關してのやかましい學者間の議論は措いて黴菌の感染によつて起る傳染病と言ふ點に於ては素人から見れば同じ樣なものと言つて差支ありますまい。實際赤痢の場合にも立派な疫痢樣症狀を呈する事が少なくなく、殊に東京地方で一般に疫痢と言はれて居る病氣に就ては多くの場合に赤痢菌を證明するのですから、通俗的に以下赤痢疫痢を一緒にして此のお話を申上げる事にいたします。

二　症候と經過について

症狀から申しますと、今迄元氣だつた兒が不活潑になつてゴロ〳〵寢轉ぶ樣になる。氣がついて見ると此時は既にもう熱が出て居ります。尤も熱は初めは餘り高くもなく三十八度前後ですが、漸次に昇つて二、三時間後にはもう三十九度以上になります。又病氣の始まりに注意すべき事は軟便の出る事です。これ迄一日一回形のある便を規則正しく排泄して居た子が、其の日に限り朝からもう二三回も便所にゆき、ゆるい便が出たなどと言ふ時は油斷がなりません。試みに便器に採つて見ると不消化な軟便がしかも多量に出てゐて、屢々非常に惡い臭を發し、多くの場合多少の粘液を混じて居る。同時にお腹が痛んだり嘔吐を催したりする事もよくあります。

こんな狀態で五―六時間する内に、熱も益々昇つて四十度位になり、俄に痙攣を起す樣になる。軟便は漸次に粘液を增して、色も黄綠色から黑綠色の殆ど粘液のみの便になる。尚よく見る中に血液が點狀或は細い條になつて、粘液中に混じてる事がある。重い場合には絶えず痙攣が來て、或は腦症狀が强く非常に興奮し、脈はだん〳〵惡くなり手足の尖が冷えて紫色に變つて來る。吐氣、嘔吐が劇しく、始めは黄色い水を吐くが後には珈琲殘渣の樣なもの、煤の樣な色のものを吐いて遂に心臟麻痺を起して斃れる。早いのは發病後數時間、或は半日一日の後に敢えなくなる。斯樣なものを通常重症の疫痢と言つてゐますが、中には一日位で熱も下り、其の儘快復に向ひ僅に一週間位で治る輕症の疫痢もあります

赤痢と言はれるものでは多くの場合二―三日目から段々便の中に血液が混じて、便の回數も次第に增し多いのになると一日三十回以上ある事がある、且便意を催すと下腹が痛み澁つて非常に氣持ちの惡い感じがする。便にはまた血液と共に濃を混じて來る樣になる、之は血液と同じく腸の爛れた處から出るので、また大腸の粘膜が一部剝れて出て丁度魚の腸の腐つたもの〻樣な狀態を呈する。斯うしてる間に永く續くと衰弱のために斃れる事もあるが、それでも幸に經過よく行けば次第に便の回數も減り、熱も下つて恢復に向ひ、二―三週の後には大抵よい便が出る樣になります。

病氣の經過は其の病原菌の毒性の强弱と其の兒の體質の良否により影響する事が多いが、一般に申せば年齡の上の方が安全で、三―四歲の幼兒は危險が多いのです。また兄弟の一人が忽ち斃れた樣な

場合には他のものは重症になり易い。之は體質が悪いのに基因するのです。

三 是非知らねばならぬ豫防法

家庭に於て最も大切なることは豫防であります。既に述べた様に赤痢も疫痢も皆黴菌の傳染から起るもの故、第一番にそれを避ける事が肝要であります。それには斯かる細菌の附着してゐる虞のある食物を攝らぬことで、よく果物から疫痢になつたと言ふことを聞くが實際に其の例が少くない。しかし元來果物其の物は小兒に取つて有害どころか必要な食物なのですが、只それを汚れた黴菌のついてゐる儘喰べるから有害なのです。それで果物はよく洗つた後に子供に與へる樣にして欲しいと思ひます。一度よく洗へば假令菌が附着して居たものでも大抵洗ひ去られて仕舞ふ。又バナナの樣なものは皮を剝くから洗はなくても差支へなからうなどと思ふと大違ひで、成る程いくら小兒でも皮を剝いでは喰べるが、皮ごと握り汚れた手で中味を把んで喰べるから、やはり黴菌が口の中に入る事になります。

またどうしても充分洗へない果物、即ち苺や葡萄の樣なものは熱湯をかけるか、さもなければどちらかと申すと與へぬ方が安全でせう。一旦よく洗つた後に皮を剝いて與へれば、大抵の果物は差支へありません。若し世間の親御さん方が、只之だけの注意を拂はれゝば少くとも果物から來る疫痢赤痢の危險は充分防ぎ得やうと思ひます。

其の他總て生の食物に就ては充分新鮮と清潔とに御注意を願ひ度い、仕出し屋や料理屋のものなど時に危險がないとは申されません。

更にまた單に病原菌の侵入ばかりでなく、それを體内に蔓らす樣にする誘因に對して注意する事が大切です。多くは夏季の不攝生から消化器官を害することに基因するものですから、第一に不消化物を餘り攝らぬこと、またさなくも胃腸の弱つてる暑い盛りに餘り過食せぬやう、同時に寢冷えせぬ樣心懸けること、河などで泳いで汚ない河水を飲まぬ樣。また暑いとて餘り冷いもの即ちアイスクリームや氷水などを澤山飲むことはそれ自身胃腸を害ふばかりでなく、飲食店の食器に附着する虞れのある病原菌に感染する危險がある故注意せねばなりません。

四 療法についての注意

疫痢赤痢は法定傳染病故直ぐに隔離病舍に入院して然るべき治療處置を受けねばならぬのでこゝでは、醫師のすべき樣

な事はすべて略して申しませぬが、病氣の始めに家庭で爲し得る一寸した注意が大層病氣の豫後（癒るか否か）に關係する事があるので、それを少しく申述べませう。熱が出たとて必ずしも腸から來たものとは限りませんが、夏であつたら先づ此の方が多いものですから、要心して下劑を與へるが宜しい。下劑をやる目的は病氣の始めに腸を掃除して惡い內容物を去り、毒素の吸收を少なくする爲めで、灌腸を行ふのも腸を洗ふのも同じ意味です。故にヒマシ油を飲まして後一―二時間して灌腸なり洗腸なりすれば一層効力確實で目的に叶ふ事になります。

下劑としてはヒマシ油が一番無害でよろしいが、少し大きな兒はヒマシ油の臭を厭つて飲まぬか、或は飲んでも神經質の兒は後から皆吐いて仕舞ふことがありますから其の時はヒマシ油を香茶かサイダーの様なものに浮せて飲ませます。或は近來色々作られるヒマシ油の製劑で臭を消したものを用ゐるのも宜しいでせう。但し斯様なものはどうしてもヒマシ油よりも分量を多く、凡そ二倍位與へぬと効力が確實でない様です。ヒマシ油の用量は小兒の年齢によつて違ひますが七、八瓦から二、三十瓦まで一回に與へる事がある。兎に角ヒマシ油は一般家庭に用意して欲しいと思ひます。

扨て何故早くヒマシ油を飲ませるかと、言ふと病氣が進んで痙攣が起ると齒を喰ひしばつて、下劑も何も飲まされぬ様になるからです。

近頃病院に於ける疫痢赤痢の治療成績が數年前に比して一般に佳くなつてるのは、一つは一般家庭で早く下劑を授與して手遲れにせぬ爲であらうと思ひます。

次ぎに一寸した注意ですが、忘れてならぬのは患者に湯茶などの飲物を充分やる事です。食物の方は何れ牛乳か重湯で、それも始めの間は極く少量しかやらぬ事故萬一忘れても大した事はありませんが、非常に渇きますから飲物は相當に澤山やらねばなりません。醫師から食物を全然止められたのを間違へて、全然湯茶飲物までやらずに過し、水分缺乏のため非常に弱くした例を見る事があります。

高熱に對しては型の如く氷枕でもさせ、また手足が冷える様なら湯たんぽを入れて温める、此時呉々も火傷せぬ様に注意が大切です。腹部には濕布などはせぬ方がよろしく、むしろ乾いたフランネルの様なものでお腹を纏ひ、腹痛が甚しければ懐爐か、温石で温めると樂になります。痙攣に對しては先づ狼狽せぬ事が大切で、衣服をゆるくし、頭でも

冷して或は灌腸でも試みて、静に醫師の来るのをお待ちなさい。

乳兒脚氣の話

ついでに御注意申上げておきたいのは、私は前號に牛乳で育てる小兒には怖ろしい消化不良症が多く、反之母乳の充分なる赤坊は其の心配のないことを述べましたが、併し斯樣な結構な母乳にも亦全然危險が無い譯ではありません。それは何かと言ふと乳兒脚氣です。

此の病氣は脚氣の母親の乳を飲んでるために起る病氣で、早く氣がついて適當の手當てをすれば心配ないが、不注意に捨てゝ置くと急に心臓が侵されて生命を取られる危險がある。しかも其の母親に脚氣の徴候のまだよく現はれぬ中に赤坊の方に重症の脚氣が起る事があるのですから油斷がなりません。

さりとて亦無暗に脚氣の方を怖れて母乳をやめて牛乳に代へれば元來脚氣も夏に多いもの故、丁度消化不良症の季節に當るので今度は此の方で一層危險な病氣に取りつかれる虞れがある。私共小兒科醫は屢々斯樣な理由で消化不良症になつた例を見て居るので、此の意味に於て特に乳兒脚氣症に就て一般の御注意を喚起し度いと存じます。

乳兒脚氣症は前申した通り母親の脚氣に基因するもの故、從つて大人の脚氣と同じく夏に多い病氣です。年齢から申して生後滿二ケ月頃に一番多く、それから半年迄位は中々多い、お誕生近くなつてもあることはあるが、ずつと少なくなります。季節は其の年にもよるが統計上八月の末から九月初めが多く、また入梅時分にも多いものです。

症狀としては突然或は徐々に、乳を吐き一日一二回のこともあり時には數回吐くのもありまする。これと同時に多くの場合青い不消化便を出し、顔色は蒼白になり、口や鼻のまはりは特に青黒く見える。頭の地は殊にドス黒く厭な色になります。機嫌は大變惡く、絶えず泣き夜もよく眠らなくなります。前にはよく笑つた兒が笑顔を見せなくなる。更に重くなると呼吸が大變速くなつて時々苦し相に呻吟し、脈の數も大變多くなります。亦割合早くから聲が嗄れて一種妙な泣聲を出し。遂に口唇が紫色になる樣になるともはや啼聲も出ず、只絶えず呻吟し呼吸は非常に速に、遂に心臓麻痺に陥つて亡くなる場合が多い。また手足に浮腫が來たり、上眼瞼が垂れ下つて眠む相な眼つきをする事もあります。

斯樣な症候は順を逐ふて重くなる事も

あるが、屢々未だ輕いと思つてる間に忽に心臓が侵されて來て重態に陥る場合があるから注意せねばなりません。

療法としては、元來が母乳が惡くて起つたもの故母乳をやめて健康なる乳母の乳に代へれば一番よろしい。けれどもさう早速に乳母を見つける事は實際に甚だ困難ですから已むを得ず牛乳をやる場合が多いのです。

　先づ乳兒に症候が現はれて專門の醫師から乳兒脚氣症と診斷される様になつたらば一時母乳をやめて牛乳に代へる。牛乳は其の赤ん坊の年齢に應じて夫々稀釋するものですが、併し七ケ月以上の子供でも若し始めて牛乳を飲む様な場合ならば、最初等分位に稀釋したものから始めた方が安全です。母乳をやめてる間にはよく乳房を搾つて乳汁の鬱滯を來さぬ様に注意しなければなりません。

　斯くて三、四日様子を見て、具合がよければ母乳を試みに一日一回飲まして見る。それで三、四日經つても何等障りがなければもう一度母乳を増して一日二回にする。それでもよさ相ならば一日三回まで殖やす。そこで一日に母乳三回、牛乳三回にしてしばらく様子を見る事にします。此の間に母には脚氣の療法として半搗米又は麥飯を攝らせ、便通をよくし、また糠製劑を内服させる様にして行く。

　斯うして居れば母乳の分泌の止まる虞れもなく、半分牛乳をやつて居る故、赤坊の脚氣の惡くなる心配もなし、また母乳を半分行けば消化不良症に對する危險も少ないわけです。

　今迄母乳のみで育つて來た乳兒を全然牛乳のみにした場合に消化不良症が起ると急激に重症に陥る事が多いものから、無暗に脚氣を怖れ過ぎて輕率に母乳を斷つ事は注意せねばなりません。

　また母體に立派に脚氣の症狀があつても、乳兒の身體に障りの起らぬ限り母乳を止める必要は更にないのであります。

　若しも平素から體質のよくないお兒さんが乳兒脚氣に罹つて母乳をやめねばならぬ様な場合には、斯様な子供は一層牛乳の消化不良症が危險ですから、何とかして强壯な乳母を求める事を是非お勸めします。

　重症の乳兒脚氣症に對しては直ちに入院して注射などして充分手當する必要のある事は申すまでもありません。

子宮癌の症狀と根治療法

子宮癌は初期に手術すれば必らず治癒す

醫學博士　川添正道

婦人病中最も悲慘な結果を齎らすものは、子宮癌であることは云ふまでもありません。子宮癌を治療せずに放置する時は、平均一年乃至二年位で必ず死亡するし、其間惡臭の帶下及び耐ゆ可らざる痛みの爲めに晝夜苦しめられ死に由つて始めて苦痛から免れると言はる〻位であります。が、此の恐る可き子宮癌を早く之を發見して、手術をすれば死亡を免れるばかりでなく、再發もしないのですが、已に初期を經過してから、醫師の治療を受けに來る爲に、手術が出來ず、死を待つの外なきものが多く、又假令手術をしても其爲めに死亡、或は再發の爲に死亡するものが多くこれは婦人科醫の立場から見て放置するに忍びないことであります。

獨逸では早く子宮癌を發見し、患者を救助する目的を以て、開業醫なり公家なりに、子宮癌の智識を注入し、患者自身又は家庭醫に由つて早く之を發見し、直ちに大學に送る樣の宣傳が試みられて居るのですが、我邦では向ほ此種の宣傳が乏しい爲め、一般に子宮癌に對する智識がなく、從つて其初期徴候たる帶下なり少量の出血位では、醫師の診察を受けずに漫然時日を經過せしめ、已に著しい出血とか、久しく出血が續くとか惡臭帶下なり、痛みなりの爲めに、始めて醫師の診察を乞ふに至るも、已に手術の時期を失つて居るものが多いのであります。一方又子宮癌は已に澤山の小供が出來た四十前後の婦人であつて、之迄向婦人病で婦人科醫にかかつた事もないといふ人が多いので、婦人科醫の診察を受ける事を恥じ、時日を經過せしむるもの頗る多いのであります。それで醫師も此際內診を强要せず止血劑位を與へ、手術の時機を失せしむる事もあります。今一つは患者の醫師を選擇する能力に乏しいのと、其家庭に責任ある家庭醫を有せず、今日は甲醫、明日は乙醫と數多の醫師の門を叩く習慣から、初期の治療を不可能ならしむる原因となるも

のもあります。甚しきは、子宮癌と診斷し、手術を勸告せる患者が數週後再び來ることもありますが、その間に數多の醫師を循つてゐるなどは、畢竟醫師の選擇能力に乏しき結果と言はねばならぬがこれなどは患者の一大不幸であります。

以上各種の原因は、實に子宮癌を早期に發見するといふ機會を失はしむるもので、就中子宮癌に就て智識の幼稚なる者は其最大原因と云はねばなりません。

私は已に二三回此宣傳を試みた事がありますが、其當時は患者も少かつたせいもありませうが、世人の注意を惹くが如きも忽ちにして忘れらるゝ傾向があつて遺憾にたへませんから私は子宮癌に對する數十年の實驗に由り、益々其必要を感じて本誌をかりることにしました。

凡そ子宮癌患者は、婦人科外來の患者百人中、大略三四人ある割で、婦人が罹る癌腫の三分の一は子宮癌だと云はれてゐる程多數患者があります。

一 子宮癌はどうして發生するか

どうして子宮癌が發生する乎といふ事に就ては、古來の學者が熱心に研究してゐますが、未だ正確な原因が分りませんが、とにかく或る刺戟に由つて癌が起ると言ふことは爭はれない事實であつて、煙草を澤山飲む人には口唇癌とか舌癌がやつて來、齒列が惡く尖つた齒で常に舌を刺戟する時は其部に舌癌が發生するものです。又强烈なアルコール飲料を用ゐる人に、食道癌が來るといふ工合に、何物か常に刺戟すると其部に癌腫を發生することがあるものです。此刺戟說といふのは有名なウヰルヒヨウ氏說で、日本では山極博士が「テール」を家兎の耳に塗つて刺戟すると、其部に癌が發生するといふ有名なる發表があります。これと同樣に子宮癌も數回の分娩に由り、子宮口などに瘢痕が出來る樣に刺戟されますので、分娩を頻回やつた婦人は子宮癌にかゝり易いと言ふ統計が出て居るのであります。然し乍ら又何か病的の刺戟があると、矢張り子宮癌が發生するもので、彼の頸管內膜炎とか、又は其結果で子宮口の周圍に糜爛などがあると、其れが原因で子宮癌が發生することがあります。それですから幾回も分娩をした人なり、頸管內膜炎で糜爛などのある人は餘程注意せねばなりません。又頸管加多留や、白帶下のある人はよく之を治さねばなりません。特に幾回も分娩をした上に、頸管加多留のある人は一層危險と思はねばなりませ

ん。

癌腫が遺傳するか否かに就ても學者の說は千種萬樣ですが、其母に子宮癌があり、父に胃癌とか其他の癌がある樣な人は、癌にかゝり易いと言ふことになつて居りますから遺傳を有する人は特に注意を要します。

子宮癌が尤も多く發生する場所は子宮の下の方で子宮口の周圍なり、(子宮腟部癌)又は頸管の內部(頸管癌)に來るものであります。初めは單に糜爛するか又は其部が硬くなつて居るか或はいちごの表面の樣に顆粒狀になつて居るもので、此部の癌組織から稀薄なる白帶下を漏らし或は同衾其他に由り其部に觸れますと癌組織は脆弱ですから容易に出血し、帶下に血液を混ずることになりますが、此時分には帶下に臭氣はありません。又便所に行つて怒責するか何か腹に力を入れゝ樣な仕事をした時に、以上の血性帶下を見ることがあります。以上は月經外の時に出血するのですから如何なる不注意の人でも氣のつく容態でありますから、此時に醫師に診察を受けると極めて初期の子宮癌が發見せられ、手術も容易であり、結果も良好ですが、殘念ながら此際直ちに醫師の診察を受くる人は極めて稀です。其理由は帶下が少ないといふので安心してゐたり、時々血色を帶ぶる位で別に苦痛がないといふ理由、婦人科醫の診察を受ける羞恥の念などですが。時として月經と誤ることもあります。四十五六歲になり月經が閉止した人で一二年後又月經が始まつたと思つて居るとその實、子宮癌であることも多いものです。

二　子宮癌の症狀について

さて之を放置するとどうなる乎と言ふに、癌は次第に發育して出血は強くなり、常に出血するか、又は時々大量に出血する樣になり、次第に血色を帶ぶる帶下の增加を見るものですが、同時に癌組織が壞れて其內に腐敗黴菌が浸入し、少しく帶下に惡臭を發する樣になります。此時分には未だ周圍に蔓延しないか又は例令蔓延しても輕度でありますので手術が出來るし手術の結果も左程惡くない事が多いのであります。私共が普通初期として取扱ひますのは此程度の人が尤も多いのであつて實を言へば眞の初期ではないのであります。然し子宮癌の手術は今日完全と言つてよい位に發達して居りますから其手術に熟達せる人が充分に子宮や其周圍の組織を除く手術即ち根治手術を行ふと、再發は非常に少いものです。私が慶應大學病院で、此時期に根治手

術をしてきた經驗では殆ど死亡者がないことになつて居ります。子宮丈けを單純に摘出する手術は子宮癌には無効で、其周圍に潜んで居る癌細胞より再發する心配があります。然るに根治手術は些か、面倒で婦人科醫でも餘程之に熟練を要しますし、手術に由る死亡數も多いので、單純に子宮丈けを摘出する手術をやる人がありますが、之は是非共廢して根治手術をやる樣にせねばなりません。とはいへ患者が根治手術に耐へない樣に衰弱するとか、又は他に病氣でもあつて、到底大手術に耐へぬと言ふ場合には止むを得ず子宮丈けを除き、其足らぬ處を「ラヂウム」やＸ光線で補はねばならぬこともあります。ところで此時期になつても矢張り醫師の診察を受けずに放置する人が少くない樣です。中には經濟上や家事上の關係やで遷延する人もある樣ですが、甚しきは子宮癌と診斷せられてから一年半以上も之を放置した人さへあります。

三　子宮癌を捨てておくとどうなるか

そこで之を放置するとどうなるかと言ふに子宮癌の破壞は一層激しくなり、出血と共に腐肉樣の汚穢なる帶下を洩らし同居者から其惡臭を注意せらるゝ樣になりますし、又癌は周圍に蔓延する結果神經を壓迫して痛みを發することになります。即ち其蔓延の工合に由り腰痛や下腹痛を訴へ下肢痛が起るものであります。此時は癌が子宮を越えて骨盤結締織や淋巴腺に蔓延した徴候であつて患者は次第に貧血羸瘦し、多くは手術が出來ぬか又強ひて手術をすれば其が困難なる事が多く、從つて手術の爲めに死亡する事が多く又充分なる手術が出來ぬ爲めに、再發も多いわけです。尚此時期には腐敗や化膿を起さしむる黴菌が癌腫内に繁殖し又は癌腫と共に周圍に傳播しますので、其傳染の結果熱が出ることになります。熱も輕いのは三十七度二三分位でありますが、七八分又は三十八度以上に昇る事があります。如此く傳染を起せるものゝ手術は非常に危險であつて、よく手術後に腹膜炎を起すことになるものです。夫れ故に子宮癌で傳染の爲めに熱の三十八度近くに昇ると言ふものは手術を避けねばならぬことになつて居ります。此時期の手術は死亡數が多く、私のやつた根治手術に由りますと二十五％の割合になつて居ります。

處で尚進んで來ると惡臭帶下は益々劇しく、腐敗したる組織片を混じ一種名狀の出來ぬ色をして居ります。出血

は不相變ですが時としては却て減少することになります。腰痛、下腹痛下肢痛等々劇しく熱發し、食慾なく、貧血羸痩し、癌惡液と名づける汚い黄色を帶びた蒼白色となるものです。こゝまで進んでしまつては最早手術は出來ないもので、「ラジウム」療法又はＸ光線に由り其輕快を計るの外ないのであります。子宮癌に對するラジウム療法は癌組織を破壞し之を治癒せしむるものである事は學問的に證明せらるゝ所であります。私が嘗て長崎在職中に實驗した結果に由りますと、其爲めに子宮癌の治癒したる例も頗る多く、手術の出來ぬ樣な重症二例の治癒したるものさへありますが「ラジウム」療法は勿論手術療法に劣るものでありまして、子宮癌は總て手術の出來るものは手術せねばならぬと言ふ事は東西の學者の一致する所であります。只手術の出來ない場合に之を爲すと言ふ事になつて居るのでありますが、近時發表せられたるＸ光線の深達療法の効は尚不明でありますが「ラヂウム」と合併して始めて効を奏すと言ふ樣に解釋せねばなりませぬ。

そこで尚一歩子宮癌が進行しますと衰弱は益々加はり晝夜痛と惡臭帶下に苦しめられ手足や顔面に浮腫を發し、尿量減少し、精神溷濁し、輕い痙攣などが起りて來たりして所謂尿毒症の症狀が起つて、死ぬものが一番多いのでありますが、又一方には腹膜炎の症狀の下に死亡し、或は高熱持續し（敗血症や膿毒症）衰弱の極終に死亡することもあります。

如此き時期に遂すれば全く絶望でありまして、總ての治療法も既に効なく死を待つの外なく、苦痛と戰ひつゝ死の數日前尿毒症の爲めに始めて精神朦朧となりて苦痛を忘るゝ事がある位です。

以上は子宮癌の初期より末期迄の症狀を擧げたものですが、其初めより、央頃迄の症狀は時として他の婦人病に於ても亦た之を見る事があります。即ち白帶下は内膜炎に來る事は人の知る處で出血も内膜炎や靡爛の結果に由る事があり、稀には子宮癌の初期に全く出血なき事もあります。惡臭ある帶下も「タンポン」を忘れて夫れが腐敗するとか又は分泌物の腐敗とか或は流産の殘れるものが腐敗するとか言ふ時に來る事もあります。下腹痛なり、腰痛なり下肢痛なりも子宮癌の外の婦人病に由る事は通常見る處であるし、婦人病で發熱する事もあります　之等の婦人病は其爲めに死亡するが如きはめつたにありませぬが子宮癌になると必ず死亡するし又死ぬにしてもあらゆ

る苦痛と戰ひつゝ死するのであります。總て前に述たる如き症狀を見る時は直ちに專門醫の診察を受け子宮癌の有無を鑑定して貰はねばなりません。極初期では醫師も一寸した診察では確かな診斷を下しにくいので、其一部を切り取り顯微鏡下に照らして始めて癌なる事が分明する事がありますから、さういふ勸告を受けた場合には自ら進んで其診斷を確めて貰はねばなりません。

統計に由りますと、子宮癌中頸部癌は四十歲より五十歲の人に尤も多いものでありますが尚ほ若い人に來る事があります。一番若いのが二十五歲、一番老年が七十歲とせられて居ります。それで先づ四十歲前後から帶下があつて出血する人やら一度月經が閉止したる人に出血する樣な人は直ちに醫師の診察を受けねばなりません。出血が増し惡臭帶下ある時は既に稍々進みたるもので、痛や熱が出たならば一層進んだと思はねばなりません。

癌は前に述べたやうに子宮の下部に生ずるものですが、又子宮の上部卽ち子宮體に癌が出來る事がありまして之を子宮體癌と名付けます。前に述べた子宮頸部癌よりもつと高齡に來るもので五十以上、六十歲のものに於て出血や帶下ある時は注意せねばなりません。此際は子宮鏡を入れて見ても何等變化を見る事が出來ませんので、銳匕を以て子宮內膜を抓把し之を顯微鏡で檢して、初めて老人に來る內膜炎であるか、又は子宮體癌であるかの診斷がつくものです。故に如此き際は醫師より試驗的に內膜抓把を勸告せらるゝもので直ちに之に應じ診斷を確かめて貰はねばなりません。一體に子宮體癌に於ては帶下の惡臭を放つ事も少く、病氣の進行も緩徐で、又其周圍への蔓延も遲く數年間生存し得るもので、從つて手術も容易で再發も少い事になつて居りますが、一朝周圍に蔓延する時は最早手のつけ樣がなくなる事は子宮頸癌以上だと思はねばなりません。

以上述べました處に由り子宮癌が婦人病中尤も恐る可きものであるが、早期に之を手術すれば容易く全快し得るものである事が了解し得られた筈であります。婦人は常に自分の身體の症狀には注意す可きものであるのみならず周圍の人、特に良人は其注意を怠たらぬやうに務む可く、其家庭に於ける主治醫は責任上又た早く之が發見に務めねばなりません。如此くして子宮癌を發見すれば、少しも猶豫する事なく子宮癌の手術に熟達せる婦人科醫を選擇し、其根治手術を依賴せねばなりません。又若し根治手術の出來ない場合で單純に子宮の摘出をするとか「ラヂウム」療法、X光線療法をするとかは、其醫師の考に一任し治療を加へる必要があります。

來客のお接待に就いて

女高師教授　大江スミ

概して日本の婦人はお接待に就ての心得が足りないと思ひます。と云ふのは婦人自身が、人を訪問したり、旅行をしたり、或は講演に出かけたりする事が極めて稀なからです。此の事は日本の婦人が、社交的でなかつたり、來客のお接待に氣がきかなかつたりする、原因となつて居るかと思ひます。婦人自身が客として又は旅行者としての經驗の少いと云ふ事は、それだけ來客に對し、旅行者に對する思ひやりが足りない事になるのです。

例へばある地方の婦人會で遠方から講演者を迎へるとします。—もつともこれは婦人會に限らず一般にも云ひ得る事ですが— 停車場には土地の主なる人々が丁寧に出迎へて與れます。會場には教育會長、名譽職などと、いかめしい人々が禮儀正しく待つて居られる、ここでは目八分に捧げてお茶が運ばれる、見事なお菓子が山と積まれます。人々は几帳面にあらたまつて周圍に控へて居られる。非常に丁寧な接待振りですがかく御茶や菓子を出しても「さぞ御のどが御かわきで御座いませう、御腹がおすきになりましたでせうどうぞあつい内に召し上つて下さいませ」と云ふ調子に進めるのではないので、只所謂作法の形式にとらはれてしやちこばつてしまつてそれを客にたべさせやうとはしないのであります。夫故だれもたべは致しません。その上汽車で疲れも休めず、煙や煤で手や顔が汚れて居つても洗ふ事も出來ず、そのまゝ多人數の前しかも高き壇上にたゝねばならない有樣です。

でも態々遠方から講演でも頼めば、少しは氣持ちのいゝやうにしていたゞくやう注意をせねばなるまいと思ひます。汽車に乘れば疲れもするし、煤煙で氣持ち惡く手や顔などが汚れもするのです。と云つて汽車の洗面所は不潔で使へないと來て居ます。夫故斯ういふ時は案内者は先づ、客を化粧部屋

に案内すべきであります。そしてすつかり汚れを去つて手洗場所も數へて氣持ちのいゝやうにさせ、かつ身装を整へてから、はじめて主だつた人々に挨拶するため客間に案内するやうにせねばならないのです。それだのに汽車からいきなり、汚れたまゝで客間に通され人々に挨拶し、その上聽衆の前にも立たねばならないと云ふ事は、非常に氣持ちの惡い事で非常識な接待振と申さねばなりません。

又洗面所に致しましても、洗面器に水の入れ加減や（あまりすぐれるやうに水を盛る事）洗面後の汚れた水を捨てるバケツ、又水のこぼれた時に拭く雜巾までとゝのへ、凡て手落ちなく氣を配らねばなりません。私などよく地方で經驗する事ですが、たとへ洗面室は氣をきかせて設けてあつても、田舍の學校などでは室の窓が皆ガラス張りになつて居るので、物見高い人からじろ〳〵のぞかれるし、たまに奥まつた處に仕度がしてあるかと思ふと今度はちやんと側に附添ひの人がかしこまつて居ると云ふ有樣です。これでは何にもなりません。

嘗つて私は、ある地方に五日間講演を頼まれた事がありました。處がその地にはいゝ旅館がないと云ふので、さる富豪のうちに案内されました。するとさあ大變です。食事は凡てその家の奥樣が正裝して、自らお給仕を遊ばされる。講演が濟んでホッとする間もなく、食事後そのまゝ夕方の入浴時即ち四時頃までつきつきりで、何か有益な話を伺ひたいと、かしこまつて向ふに坐つて居られる。やう〳〵夕食をすまして居ると『午後に伺ひしやうと思ひましたが、御休息と存じまして、主催者側の人達が多人數來て會場ではそわ〳〵して居てろくに挨拶も出來なかつたから』と云つては、改めて挨拶に來られる。かくの如く又夜は夜で、態々東京から來たから何か有益な話をして呉れとそれ〳〵話をせがまれる。かゝる時でも少しは向からも服裝の問題とか、家事上の事など質問もし意見も述べるとかして下さればよいのですが、たゞかしこまつてへイ〳〵と謹聽せられるのみで、てんで話の合槌をうつではなし、まるで終日を、監視付の生活のやうなもので、ゆつくりくつろぐ事は勿論、東京へ安着の手紙さへも書けないやうな有樣で、とう〳〵堪へられなくなつて、一策を案じ出しました。午前の講演と食事とがすむと、小册子を一つとラツグとを携へて、近くの松の並木の中に入つて本をよみ、ゆつくりくつろいでは夕方歸つて行つたものです。この事は今でもその地でなぜ毎日〳〵松の並木に行つたのだらうと一つの疑問になつて居るさうです。

でもとうでもせねば、とても餘裕が續かなかつたのです。これ等は畢竟、婦人に旅客としての苦勞が足りなくて、他人の思ひやりが出來ないからです。これがせめて旅館にでも居ると、來客があつても二三分間待つて貰つて、その間にちよつと身仕度をして逢ひ、その他の時間は少しはゆつくりくつろぐ事が出來るのですが、素人家ときたらそれこそ大變なのです。

處がこれが西洋の家庭だと、非常に氣持ちよく、行き屆いた待遇をうけられます。先づ停車場には、その家のお嬢さんでも迎ひに來て呉れます。家族の人達は玄關に待つて居て呉れて、一寸あいさつし先づ第一に寢室に案內されます。そこには、湯、水、洗面器、化粧品、汚水をこぼすバケツ、雜巾など一切が手落ちなく整へられて居て、顏を洗つて居る內に案內した人が、トランクの鍵まで開けておいて呉れますからかくして汚を洗ひ、身をきよめ衣服を改め十分間もやすんで、すつかり氣持ちよく落ちついた頃、客間でみんなお待ちして居ますから、と呼ばれるのです。すると何の心配もなく、さつぱりした氣持ちで客間に通りお挨拶も出來るのです。それからは、六時半がお風呂で、七時が食事ですからそれ迄はどうぞ、おゆつくり御獨りで御自由におやすみなさいと、獨り放といて呉れますから幾日他人のうちに居ても少しも窮屈な思ひをせずに暮す事が出來ます。朝などは、食事は七時でありますが、幾時に御起ししませうと、前もつて聞いておいて、その時間が來れば、ノックして、お湯を外迄運んでおいて呉れます。鈴がなつて食事をすますと、十時に外へ御案內致しますから、それ迄は御自由にと云つて外から歸つて來ると、又夕食までは自由に解放しておいて呉れ、凡てが規則正しくて、まことに居心地がいゝやうに待遇されます。

これに反して日本の家庭は、化粧部屋はなく、始終つきまとはれるし、折角おいしいものが出ても、監視付で自由にたべられもしないと云つた有樣です。丁寧にもてなすと云ふ事も惡い事ではありませんが、來客に對して窮屈な思ひをさせないで、くつろがせるといふ事も極めて大切な事で接待上心がけねばならぬ事だと思ひます。

要するに講演會などで人に話など御たのみした時などには氣をきかして先づ手洗場所、化粧室等に導き充分手顏の汚を洗はせ、身體を潔め、衣紋をつくろはせ、多人數の前しかも高き所にのせられ衆目のまとになつても心障りのないやうに

させなくてはなりません。それから主なる客間や講壇に御つれしなければなりません。

講話或は演説がすみましたなら、別室におつれ申し、綠茶紅茶珈琲などをのませ、菓子を出し、充分其辛勞を癒すやう心掛けねばなりません。何ぜなれば一時間も二時間も話をさせた後では、必ずくたびれもするだらうし、のども渇くだらうしと思はねばなりません。それに作法上の形式にのみとらわれ、只菓子などを山盛にし氣どり返つてゐるやうなのは、誠に非常識で話になりません。しかも夕方になるのに辨當も出さず、午後一時頃から話をさせ、小さな茶呑茶碗に茶一杯位で何も食せず其儘汽車に乘り込みますと、田舍の汽車の事なら食品一つ賣りに來ず、たとひ來てもむやみに食はれず、たうたう歸宅するまで即夜の九時十時頃迄飲まず食はずの有樣になる事は度々であります。かゝる時はつく〱と日本婦人の非常識なことを思はせられます。また宿泊客の接待にあまりつきまとはず、相當に獨ぽつちにしてをく事も肝要と存じます。兎に角向ふの人を樂にさせる事を考へて、常識に訴へて接待しなければならないと存じます。

夏季の臺所科學

（冷藏函、魔法壜、アイスクリーム、水・其他の話）

中村榮代

（一）之からの季節に必要な冷藏函

曾てサイベリヤの雪の中から掘出した巨象は、學者の觀察に依れば數千年前の動物であらうと云ふ事であつたが、發見の當時に其肉は少しも變化を認め得られなかつたと云ふ事である。此事實に依つても充分な寒冷が防腐法として如何に有効であるかゞ分る。氷を以て物を冷すと云ふ事が夏に於て行はれる所以は全く此處にあるので、例外はあるが一般に零下に於てはバクテリヤの蕃殖は止められるものである。然し直接に氷と食品とを接觸させて置く事は、出來る場合と出來ぬ時とがあるので、一定の場所の温度を低くして其中に食品を入れてバクテリヤの繁殖を防ぎ、且つ季節の關係から私共の嗜好に適した冷たい物を食せられるに便利な爲めに作られたものが冷藏函である。

近頃は料理屋は勿論魚屋にも亦一般家庭にも使用される程になつて來た。

此の冷藏函の構造は大體に於て周圍は二重の箱から出來て居て、其間に充分に乾燥せる鋸屑をつめて外部からの熱の侵入を出來る丈け少くする樣に工夫されてあるのが普通である。

冷却の源としては、氷を用ひ其氷は函の上部に据えられた手薄な金屬製の容器内に置かれ氷又は其容器に觸れて冷却した空氣は絶對作用に依つて下方に下り此函內全部を冷すと云ふのである。而して函內は最限なく冷える樣に考へられる

かもしれぬが、函内の冷える程度には極限があつて、外部から侵入する熱量と、氷が融ける爲めに必要な熱量とが等しくなる迄は、函内の温度は下り、等しくなつた時の温度が其冷藏函の得られる所の最低温度である。

而して此温度の低い程が好い冷藏函であるから、外部から侵入する熱量をより少くするために種々の工夫がされて居るので、周圍の箱を出來る丈け熱の傳導の少い樣にする爲めに、二重若しくは三重の厚板にして其間に石綿硝子綿コルク屑、枯葉、鋸屑等の如き粗鬆にして多量の空氣を包有するものをつめるのである。

又周圍の箱が少しでも空氣の流通を許す樣ではいかぬから、木板ならば其繼目に目張りをするか若しくは二枚の木板を重ねて其間に厚紙を挾むか金屬ならばハンダを附するとか又セメント漆喰等を塗ると云ふ風にして十分緻密に取り圍む樣にしてある。

而して氷が溶けて出來た水は容器の一偶に設けられた管に依つて、直ちに外部に捨てられる樣になつて居て、其部の構造が洋式便所の如くトラップ式に出來たのは、最も合理的なもので、此れの排出口から空氣が内に入る樣なものはよい冷藏函とは云はれぬのである。

（二）山登りや遠足に必要な魔法壜

魔法壜と云ふ名は如何にも非現代的の聞えがあるが、この原名は「デューワーフラスコ」と云ふので、壜の効用は冷いものは冷いまゝで又熱いものは熱いまゝで長時間貯へて置かれると云ふので、詰り熱の出入りの殆ど無いと見らるべき壜である。

其構造は内外二層の硝子瓶から成り其二層は出來る丈け空氣を排除し、又内側の硝子瓶の外面と、外側の硝子瓶の内面とは立派な銀鏡になつて居る。今之に冷い茶を入れてコルク栓で密閉したとすれば、此のコルク栓及其極く近い範圍の所を除いては、熱が外部から傳導に依つて侵入する事もなく、其上眞空で圍まれて居る爲めに、對流に依つて熱が入る心配もない。又輻射に依る熱の侵入はどうかと云ふに、二枚硝子樣が銀鏡にしてある爲めに、外部から出た熱を内部の銀鏡の爲めに反射されるので、其結果は冷した茶は約二十時間位大體其温度を保つ事が出來る。故に遠足の折節木陰での一休みに喜んで喫する事が出來るのである。此頃は此の壜が酒のかん德利に代用されて、ゐるが之は最も怜悧な方法である。即ちとかく酒飲みはチビ／＼と永くなり勝ちなもので丁度よ

い加減に「かん」をして置いてもすぐに冷えて又何遍か「かん」をし直さなければならぬ繁雜があるが、魔法壜を使へば一度「かん」をして置けば容易にさめぬので此の手數が省けるのである。

（三）アイスクリームをする時の注意

アイスクリームは之からの季節に殊に喜ばれるもので、從つて一般家庭でも追ひ〱作られる樣になつた樣である。其材料の吟味を入念にするには勿論、作り方は讀者の熟知の事であるが、冷す手段として使はれる氷の大さ又氷と鹽との割合等には無關心の樣であるから少し物理的に説明してみたいと思ふ。

私共が低温を作ると云ふ手段には色々あるが、其一種として數種の物質を相混ずる事に依つて其目的を達する方法が割合に簡便である。此の數種の物質を混じて、著しく低温度を生ずるものに色々あるが、總稱して寒劑と云ふ。例へば雪と硝酸、雪と食鹽、雪と鹽化アンモニユーム或は雪と食鹽と鹽化アンモニユームを混じて零下の低温度を得るのである。其他に此寒劑には種々あるが就中食鹽と雪との混合物は、材料が廉價で又効力が割合に大きいと云ふので最も普通に行はれて居るのである。

何故に雪と鹽とを混ずると低温度が得られるかと云ふに水分は雪にも食鹽にも多小あるのが常であるから。食鹽と雪とを混ずる時は先づ十分に濃い所の食鹽水が出來る之が氷に觸れる事となると、十分に濃い鹽水から氷が出來る時の温度は、何度かと云ふに零下二十二度であるから之以上の温度即ち零度から二十二度迄の間の温度ならば氷は融ける狀態になるので、其融解する時に融解熱を要するが其の融解熱を混合物自身から取る爲めに温度が降下するのである。そして氷が融けて食鹽水を稀めれば食鹽は溶けて之を濃くするが爲めに、水は常に十分に濃い食鹽水になつて居ると見ねばならぬ。從つて氷はどこまでも融け、混合物の温度は下るのである。但し其温度が零下二十二度に達した時は食鹽は更に溶けて食鹽水の濃度を大にする事なく從つて此上氷が融けると云ふ事ものないのである。

右の寒劑を作る時に温度が零下二十二度に達せぬのは食鹽が不足するか若しくは食鹽が器底に沈むかする事に依つて、食鹽水の濃さが十分でない爲めである。若し鹽水の濃さが假りに五パーセントであつた時には其の得られる温度は零下三、四度がとまりであつて、食鹽が一に對して雪二の割合に

混じた時に零下二十二度の低温度が得らるゝのであるから鹽の倹約は寒劑の目的を達しられぬ事となる。

而して右の割合に混じた鹽も器底に沈まぬ様に攪拌されねばならぬ事は勿論氷の大きさもなるべく小さく砕かれたものでなければ冷すと云ふ手段をよくする事は出來ぬのである。故に改良されたアイスクリーム器の具備すべき點は、鹽と氷とがよく觸れ合つて、而して氷がよく融ける様に工夫されたもので、換言すれば器底に沈み易い鹽を上部にある氷とよく觸れる様にする事の出來る攪拌器がついてをらねばならぬのである。

（四）注意すべき夏季の用水に就いて

水の良否を論ずるには

一、飲用水としての良否

二、使ひ水としての良否

に分けて述べなくてはならぬ。何故なれば其目的を異にすることに依つて其判斷も亦違ふからである。

飲用水としての良否を検査する方法には化學的方法と微菌學的方法との二種がある。

大體雞卵の腐敗したかの如き臭氣を發するのは硫化水素が溶存する證である。又便所に於て「經驗する如く」鼻をつくが如き臭氣が僅少なりとも水にあつたとすればアンモニヤ瓦斯が溶けて居るので、此兩瓦斯は最も恐るべき且つ忌むべきものであるから、斯る臭氣を帶びる水は如何に渇した場合でも飲んではならぬものである。此兩瓦斯其自身が危險なるのみならず斯る瓦斯の化生するのは水中に恐るべき有機物の存在するのを證するものである。

次に食鹽が餘り多く含まれた水も宜しくないので、食鹽其ものは無害であるのみならず、却つて私共に必要缺く事の出來ぬものであるが、併し全く多く含まれてゐるのは人家に使用した殘汁の廢棄物が地中に侵み込み、終に井水に混じた爲めに鹽氣を帶びるのである。併し地層の如何に依つて井水に多分の鹽氣を與へる事があるが、之は前述の場合とは、其原因が違ふので同視すべきものではないのである。

又鐵分が餘りに多いのも宜しくないが、殊に微生物があるのが最も危險で、飲料水としては一立方糎中にバクテリヤの數が十個以內と制限がつけられてある。井水には化學的分析の結果は良好であつて、而かも其水一立方糎內五萬六百二十五の微菌が居たと或學者が報告されて居る程で、化學的には安全と見らるべき水も危險な場合が多いものであ

る。

此危險な水を如何にして飲料にすべきかと云ふに、現在に於て廣く行はれて居るものは、濾過法である。此の濾す手段には規模の大小に依つて色々あるが小仕掛に行ふ時には棕櫚、木炭、砂、素燒等を用ひるのである。すると、水中に溶けて居る有機色素や惡臭は木炭片の爲めに脱色又は吸收せられ、塵埃其他の混合物の爲めに生じた濁りは砂棕櫚を通過する際に除けられて、一見した所では如何にも清淨な水の樣であるが、最も危險な黴生物は到底濾しつくす事は不可能な事である。(或一部の黴生物は木炭の氣孔中に有する酸素の烈しい作用の爲めに、減ずるものもあるが)東京市の水道の如きでさへ其一立方糎中に約十個の黴生物を持つて居ると云ふ事である。故に最も安全な飲用水を得るには、濾過後に煮沸する事である。此の手段が如何程効力を持つかは次の報告で知る事が出來る。

溫度	時間	一立方糎内に於ける黴菌の數
一四度	一〇分	四六〇八〇〇・〇
五〇	同	六〇〇〇・〇
七〇	同	八八・八
八〇	同	六二・四
九〇	同	二六・四
一〇〇	同	〇・五
一〇〇	二〇	〇・〇

此結果に依つて見れば百度に於て二十分間經過さすれば完全に殺菌が出來たといふことが分る。併しながら黴菌の特別のものは、熱に堪へる事が大層強いものであるから、此方法が常に完全であると斷言する事は出來ぬが、之から夏にかけて渇を覺える事が段々多くなるから子供には常に注意して湯ざましを與へる樣にせねばならぬが、蓋なしで空氣中に曝したものは其の甲斐がないのである。

此湯ざましは味が甚だ淡白である事は衆知の事で、之は主として溶存せる氣體が煮沸の爲めに飛散したからで、泉水には一種云ふ事の出來ぬ美味のあるのは空氣(別して二酸化炭素瓦斯)の溶解した爲めである。

彼遠洋航海の折、海水を蒸餾して、飲料水に供せんとする場合には、其蒸餾した水を甲板上で清潔な棒で攪拌し、十分に空氣を溶し込ますので、斯くして無味淡白な蒸餾水も次第次第に例の一種云ふ事の出來ぬ爽快な味を呈する樣になると云ふ事である。

使ひ水としてこの水の性質に最も著しい影響を與へたものは、水中に溶けて居る鑛物質である。通例鑛物質を多く含める水を硬水と云ひ然らざるものを軟水と云ふて居る。

今此硬水が及す主なる影響を列擧して見れば

(一)洗濯に際して石鹼を無益に費さしめる。

(二)盛に湯垢を生ぜしめる湯垢は熱の傳導の惡いもので湯を

沸かす時に大いに時間と燃料とを費させるもので、茶人が湯垢の付いた鐵瓶を賞美するのは經濟上から見ては共鳴出來ぬ點である。

(三)染色劑にあつては無益に染料を費し而かも出來上りの色調と光澤とを損ずる事が多い。其他皮膚を荒し茶の味を損し若しくは野菜等を煮る時に柔くなりにくい等の缺點を與へるが之を如何にして軟水に變化させるかと云ふに沈澱法と稱せられるものであつて之は水中に溶解して居る鑛物質を不溶解性のものに變化して沈澱させると云ふが主な目的である。此方法には色々あるが消石灰を加へるか、苛性ソーダ若しくは炭酸ソーダを加へるか又は之等の混合物を加へるから最も多く用ひられて居る別の方法としては煮沸することに依つて一部の鑛物質を取除ける方法で、お湯で洗濯をするとよく垢が落ちる。卽ち石鹼の効力を多くする事が出來る樣になる。此如き種の水を一時の硬水と云ひ、然らざるものを永久の硬水と云ふのである。永久の硬水の方は沈澱法に依つて軟水に變化させるのである。

衞生學の害物に良好な井水の備ふべき性質の一として其溫度が四季共に變化なきもの若しくは變化少なきものと云ふ箇條が擧げられてあるのは詰り深い地層から湧き出たものと云ふ事と同じ意味のものである。

學者の調査報告を見ると、四季共に同溫度で且つ其溫度は地表の溫度の一年中の平均よりも高いとすれば其れは地下大凡五十尺より更に深い地層から湧き出るものである事が分り、若し又水の溫度が冬季に於て却つて高く夏に於て却つて低ければ之は地表に於ける冬夏の溫度の變化が達し得る程で、且つかなりの深さと分るのであるから大凡二十尺から四十尺の所であらうと推察されるのである。又溫度が夏に於て暖く冬に於て冷たいとすれば、地下餘りに深くない層に其根源がある事が察せられるので、之は寒暖計を使用して判斷すべき事柄で私共の手先での判斷では極めて不正確をまぬかれぬのである。何となれば私共の手洗は夏は冬よりも暖いのが通例で、此不正確の手先を標準にして井水の寒暖の度合を云ふ事は井水の善惡を定める基準にはならぬのである。

井水の良否は此の位にして之を汲み上る裝置に附いて少しく述べて見たならば、極く片田舍では尙昔のハネツルベ式が

行はれて居るが、都市では滑車式のものはごく少數で、多くはポンプ式である。此ポンプのピストンを動かすには電力を利用されたのと、手で挺子の柄を動かすのと二通りある。

ポンプの構造及其作用は省いて直ちにポンプを動かす勞力と云ふ問題に就いて考へて見たいと思ふ。

水を汲み上る時の勞力は井水の液面からポンプの流出口に至る高さの大な程又ピストンの面積の大な丈け愈々增加すると云ふ事が理論から云はれるのである。故に如何に上等な如何に新式なポンプを用ひたとしても、井戸が深ければ理論上輕く動かす事は出來ぬ筈のもので、又ピストンが太くて多量の水が早く汲み上げられると云ふ樣なポンプも必ず輕く動かぬ筈のものである。故に甲の家では輕く詰り勞力が少くて動いたポンプが乙の家でも必ず輕く動かす事が出來ると定まつたものではなく、案外骨が折れる事のあるのは當然で、其土地の高低卽ち井戸の深さに起因するのである。但しポンプに附屬して居る挺子の柄を十分に長くしてピストンを動かす力を少くする樣には出來るが、之には又他の方面から餘り長くしては使用出來にくい事が出來て來る。

ポンプの一樣式である吸ひ上げ式のものでは井戸の水面の深さが餘り深くては（三丈以上）無効である事は私共として知らねばならぬ事で、此場合には組合せ式のものを使用せねばならぬ結果非常に重くなると云ふ事實はまぬかれる事の出來ぬ事柄である。斯る場合には電力でピストンを上下に動かして水を汲み出すより外はないのである。

欄に對するか、それは決して讀者を失望せしむるものはないと固く信じます。

玆を

應募者へ

を茲に闡明す

欄に對するか、それは決して讀者を失望せしむるものはないと固く信じます。

應募者へ

1、清新の氣に富み、輕佻ならざること。

2、毎月廿日締切りといたします、第一回の應募者は六月廿日まで、第二回は七月廿日まで。(以下毎月之に準ず)

3、原稿は如何なる場合も返還いたしませぬ。四百字詰用紙卅枚を限度とし、應募者は必ず婦人なること。

4、入選者には三十圓以上百圓までの稿料を呈上いたします。發表後廿日以内に御送りいたします。

女性改造

ソーニャ、コヴァレフスカヤ

野上彌生子

曾つて或る批評家は、ソーニャ・コヴァレフスカヤ、マリア・バシュカトシェーフ、エレオノラ、デューゼを稱して十九世紀が生んだ最も偉大な女性の三部合奏曲であると云つた。私は同時代に輩出した他の多くの秀拔な婦人の中から、特にこの三人を選み出した評者の卓見に服すると共に、これ等の三部合奏曲は單にその世紀に於ける優れた三部曲であるのみならず、次の二十世紀に入つて華々しい論議から漸く實行に移りかけた各婦人問題の世界的交響樂に對して、最も悲壯な前奏曲をつとめた點に重大な價値を持つてゐると思ふ。玆に私が三人の代表者としてソーニャ・コヴァレフスカヤを擧げようとするのも、一つはその意味からである。

ソーニャ、コヴァレフスカヤの四十一年の生涯（一八五〇——一八九一）は、それより九年後に生れてこの間まで無事にしてゐたデューゼの一生から見れば非常に短かかつたとは云へ、たつた二十四までしか生きなかつたマリア（一八六〇——一八八四）に比べると倍近く生きた。從つて彼女の生活內容が、二十餘年間を如何によく生くべきか、と云ふ強烈な熱望と焦慮で燒き盡したやうなマリアのそれより、より豐富であつたのは自然である。否、二十八年長く生きたデューゼにも劣りはしなかつたであらうと思ふ。デューゼには（マリアには勿論）戀愛生活はあつても結婚生活はなかつた。然るにソーニャはコヴァレフスキイ夫人であつたのみならず、一人の娘の母親でさへあつた。且つ彼女は文學者であつたと共

に科學者でもあつた。マリヤが一生懸命畫を描き、デューゼが歐洲各都市の劇場で得意の悲劇の女主人公に扮してゐた時、ソーニャはストックホルムの大學で歐洲に於ける婦人の最初の大學教授として數學を講じてゐた。婦人の科學者！これは當時に於ては驚異すべき存在であつた。ソーニャはこの珍しい智惠の果實のために、若し彼女が純粹の女流文學者であつたならば、またはマリアの如く畫家であつたならば、或はデューゼの如く女優であつたならば、決して受けずにすんだかも知れない深刻な苦痛を嘗めたのであつた。私は其處に一歩先んずる者の血に濡れた足跡を見る。荊棘の中に路を拓かうとする者の苦しい涙を見る。女性であると共に人間であらうとする者の痛ましい呻めき聲を聞く。私はソーニャのこれ等の血や涙や呻めき聲に對しては、現代の日本の婦人が誰よりもよき理解者であらねばならぬと思ふ。何故なれば、米國及び歐洲各國の婦人は、既に表面だけでもこの苦しい瀨戸は通り過ぎてゐるに反して、私たち日本婦人に取つては、丁度當面の避くべからざる重大問題であるから。さしつけられた白刃であるから。同時にこの同性の先驅者の貴重な體驗は私たちの若い姉妹たちが今熱心に考究しようとしてゐるもの――婦人の職業問題、戀愛と結婚の問題、母性の問題、その他一切の婦人問題に亘つて意義多き暗示を與ふるに相違ないと信ずる。

ソーニャ・コヴァレフスカヤに就いて知らうとするには、必らず二つの書物に依らなければならぬ。一つは『ラエフスキー家の姉妹』と云ふ題目で彼女自身の書き殘した幼年時代の自叙傳と、今一つは彼女の最後の十年間、最も親しい友達であつた瑞典の女流作家アン・シャロッテ・レフラーに依つて書かれた傳記である。ソーニャは決して長く生きないだらう、と云ふ豫感を持つてゐたので、死んだら傳記を書いて貰ふ約束で、アンには平生から自分の生涯のすべての經驗を隱さず話しておいたのであつた。ソーニャの死後アンは約束を守つた。而してソーニャの自叙傳に直ぐ接續するやうな順序で筆を起こして、最後の瞬間まで忠實に描いたので、私たちはこの二つの記錄に依つてソーニャの完全な肖像と共に、その内的生活の完全な解剖圖を見ることが出來る。

ソーニャのお父さんはイヴァン・セェルギエーヴィッチ・ラエフスキーと呼ばれた將軍で、大地主で、お母さんはエレーナ・パウローヴナと呼ぶ獨逸種の氣弱い美しい婦人であつた。子供は三人あつて長女がアニュータ、次女がソーニャで、一番

下は男の子であつた。ソーニャの幼年時代の自叙傳では、『ラエフスキー家の姉妹』と云ふその題名が示す如く、彼女自身と共にこのお姉さんのアニュータが屢々女主人公の位置を占めてゐる。寧ろアニュータの方がシテである場合が多い。彼女はソーニャよりは六つ年上の非常に美しい才氣煥發の娘で、お母さんのお氣入りであつた。ソーニャは『グース・ベリーのやうな、大きな緑色の眼』に著しい特長があつただけで、子供の頃にはさう美しい娘ではなかつたやうであるが、彼女の何よりの不幸は、自分はお姉さんのアニュータや弟ほどお母さんに可愛がられてゐないと信じてゐたことであつた。これは事實であつたらしい。それ故家庭に於けるソーニャの唯一の味方は十位までは乳母であり、それから十三四までは家庭教師であつた。この家庭教師はロシアで生れたけれども純粋の英國婦人で、ソーニャに對しても嚴格な英國風の教育と訓練を強ひてゐたので、小さいソーニャはこの頑固な未婚婦人の潜熱的愛情を汲み取る前に、窮屈な束縛と威壓のみを感じた。彼女の孤獨の嘆きと愛に對する一生涯の渇望はこの時代から既に根を下ろしてゐた。

併し彼女の純眞な心は、常に羨望の思ひなしには見ることの出來なかつたアニュータに對してさへ、決してひがみはしなかつた。反對にソーニャはお姉さんを崇拜し、その美しさと才能を嘆美して、如何なる場合にも競爭者たらんとするよりは、忠實な弟子であることに甘んじてゐた。實際アニュータは二人の性格の大なる相違にも拘はらず少女時代のソーニャに取つては最も大事な仲間、なくてならぬ先達であつた。

一八六〇から七〇年にかけて引き起こされたロシアの全國的な動搖——政治、社會、産業の各方面に亙る猛烈な前進運動は、その最も早い兆候を小さい一種の家庭悲劇の型で各家庭の中に現はした。若い息子や娘たちは、知識と光明を求めんとする熱望から親達の古い習慣や形式に反抗した。

『思想が一致しない。』

このたつた一つの理由で、すべての若い者はすべての年取つた者と、すべての子供はすべての親と喧嘩をした。これはロシヤの嚴しい傳統的家長制度に對する一大挑戰であつた。

ソーニャの家族は、お父さんのイヴァン・セルギエーヴィッチが軍職を退いてからは、ヴィテプスク州の田舍の領地に引つ込んで暮らしてゐたのであるが、時代の波はその靜かな田園の上にも押し寄せて來た。而して眞先きにその新思想の洗禮を受けたのはお姉さんのアニュータであつたアニュータは村からセント・ペテルブルグ大學に行つてゐた一青年を通じて、その頃若い人たちが熱狂的の讃美を以つて仰いでゐたチェルニシェーフスキー、ドブローロドフ、スレープチェフと云ふやうな人々の書いた物を讀んだり、その說を聞いたりした。云ふまでもなく、お父さんのイヴァン・セルギエーヴィッチは保守的な典型的ロシアの父親であつたので、今まで家庭に入れてあつた讀物は、これ等とは全く反對な種類であつた。たゞ僅かに新しいものとしてはドストイエフスキーの出してゐた雜誌エポカだけであつたのに、アニュータはヘルツエンの禁令の週間新聞をさへ、竊かに讀んでゐると云ふ有樣であつた。

アニュータは終に聖ペテルブルグへ行つて勉强し度いと云ひ出した。而してお父さんから見事に拒絕された時、一般的家庭悲劇がいよ／＼ラエフスキイ家にも始まつた。アニュータはお父さんとは一日顏も合せないし、晩餐の時仕方なく一緒になつても、口も利かないで睨み合つてゐると云ふ狀態の中で一つの短篇小說を書き上げて、ドストイエフスキーの雜誌エポカに送つた。ソーニャは最初はお姉さんのそれ等の秘密に預かることは出來なかつた。アニュータは七つ下の妹をまだ仲間扱ひにする氣にはなれなかつたし、その上ソーニャの一切を監督してゐる家庭敎師の英國婦人は、アニュータとは絕えず衝突して、猜疑と反感を持ち、妹のソーニャがお姉さんに感化されないやうに極力防止してゐるのであつた。その內に最後の激しい衝突があつて、家庭敎師は辭職してラエフスキー家を出ることになつた。ソーニャが彼女の强い愛をしみ／＼思ひ知つたのは、この離別の瞬間であつた。ソーニャは自分がその愛を感謝する前に束縛を厭うたことや、今後は何んでも自由に讀んだり遊んだりされると思ふために、彼女の去るのを氣にもしなかつたのを後悔しながら、白樺の長い並樹の間を駈け去る馬車を見送つて悲しむ情景が、簡素な筆でしんみり表はされてゐる。

けれども家庭敎師の手を離れたことはアニュータへの完全な弟子入りであつた。ソーニャは自分を愛してくれたたつた一人の人がもう居ないのだと思つて泣いてゐたうちにも、今ではお姉さんのところへ行つても咎められはしないと思ひつ

くと急に氣が晴れて、アニユータの部居へ行つて見た。アニユータはその時丁度ドストイエフスキーからの最初の手紙を受け取つたところで、その嬉しい興奮を誰かに洩らさないではゐられなかつた。けれども他には話す人がないので、自はまだ相手にしないソーニャに打ち明けるより仕方がなかつた。

『決して誰にも云はないつて約束すれば、私大事な〱秘密を話して上げてよ。』

アニユータは斯う云ふ風に妹に堅く口留めした上で、大切な書物の入れてある古い書き物机のところへ連れて行つて、一つの抽斗から赤い判でEpocha と押した大きな事務用の封筒を大事さうに取り出す。その宛名にはニキティシユーナ、クジーニナ孃と書いてあつたが、それはアニユータを崇拜してゐる女中頭の名前で、アニユータは表面はその女中頭との名前を使ひ、その女を手先きに使つて小說と手紙をドストイエフスキーに送つたのである。それ故その大形の上封筒を開くと、中には今一つ小さい封筒に入つてゐて、『アンナ、イヴァノーヴナ、ラエフスカヤ孃』とアニユータの正しい姓名を書いたドストイエフスキーの手紙が出て來る。その手紙には斯うあつた。

『最も尊敬するアンナ、イヴァノーヴナ孃――あなたの優しい思の籠もつたお手紙に非常に引きつけられたので、私は早速あなたの小說を讀んで見ました。

私はひそかに疑懼を抱いてそれを讀み始めたことを白狀いたします。私達記者はよく處女作を私達に審判さして吳れる若い初心者の幻影を挫く悲しい義務を持つてゐます。あなたの場合に於てはこの義務が私には取り分け苦痛に感じられました。併し段々讀んで行くうちに私の心配は消滅して、あの小說の全篇に息づいてゐる若々しい清新と曖昧と誠實な感情にすつかり俘虜にされてしまひました。斯んな譯で、私はあまり感動してあなたの贔負になつてゐるので、今のやうに夢中になつてゐては「偉い女流作家になりませうか」と云ふあなたの御質問に正しい返答をすることは出來さうもないのを恐れてゐます。只今では、私は非常に悅んで次號の雜誌にあなたの物語を出すと云ふことだけは申せます。而してあなたの御質問の返事としては、たゞ斯う申します。書け、働け。――その他の事は時がしてくれます。

あなたの小說は或る點に於て餘りに純朴過ぎる事と、完結のついてゐない事と、それから――私の飾らぬ心をお許し下

さい——文法の誤りのある事を拒む譯には行きません。併し、斯んな缺點は微細な事です。少し辛抱してやつて行けば旨くなるでせう。一般の印象は遙かによい方です。

それ故私は繰り返して申します。お書きなさい。お書きなさい。若し機會があつてあなた御自身の事や、年齢、周圍のことを聞かして下さるなら、私は非常に興味深く覺えるでせう。同時にこれは皆なあなたの技倆を判斷するに役立つて呉れるでせう——。あなたの誠實なる、ドストイエフスキー。」

ソーニャは茫然となつて、文字が眼の前で踊り廻つた。而してその悦びと驚きを何んと云ひ現はしてよいか分らないので、お姉さんに抱きついたまゝ、二人で泣いたり笑つたりしたと書いてあるあたりを讀む度に、私は一八六〇年代のロシアの出來事であるとは思はない。これは正しく現代の日本である。而して故有島武郎氏若しくば倉田百三氏などから貰ふ手紙に驚喜するその邊の若い娘たちを想像することに依つて、姉妹のその時の感情は最もよく理解されると思ふ。同時に讀者はこの手紙の中に現はれたドストイエフスキーのほのかな一種の氣分を見遁さないであらう。これはその後アニユータに對して燃やした彼の激しい戀の萠芽であつた。知らない若い娘の一篇の小説と一通の手紙に直ぐこれだけの返事を書いた四十男のドストイエスキー（多分四十二三の頃であつたと思ふ）が、いつも私を微笑させる。

併しアニユータの秘密はいつまでも露見しないではすまなかつた。彼女はドストイエフスキイの手紙に勢いを得てまた一つの小説を書いて送つた。今度はドストイエフスキーは前よりも一層賞めた手紙を寄起した。ところが思はない手違ひから、その手紙が宛名の女中頭に行かないで他の手紙と共にお父さんの將軍の手に落ちたので、お父さんは封筒の上に赤く押し出した Epcha の印に直ぐ不審を抱いて、女中頭を呼びつけて、自分の目の前でその手紙を開封しろと命令した。終にすべてが暴露した。その日はお母さんのエレーナの誕生日で、何十人と云ふお客様の集まつてゐた場合であつたから、事件は一層刻深に發展した。それでなくてもお父さんは平常から女流作家が大嫌ひであつた。それに自分の娘が自分に秘密にものを書いた。彼はこの怒りに堪えられなかつた。殊に何よりも悪かつたのは、ドストイエフスキーが二つの小説の稿料として、三十留を手紙に同封してあつたことであつた。これは貴族氣質の一徹なお父さんに取つては致命傷であつた

「お前は今お前の作品を賣つた。いつかお前自身の身體をも賣るやうなことになるぞ。」

これがお父さんの悲痛な教訓であつたとソーニャは書いてゐる。

併しアニュータは何處までも屈しないでお父さんと對抗してゐる間に、氣弱い娘思ひのお母さんの計らひで、Epochaに載つたアニュータの小説をアニュータに讀ませて聞いて見ようと云ふ事になる。朗讀はドストイエフスキー家の大廣間で行はれた。小説の内容は丁度アニュータ自身のやうな貴族の若い娘で、或る青年との戀愛に依つて輝やかしい新生涯に入らうとして決心が鈍る。青年は去つて仕舞ふ。その後娘は夢であの時當然彼女のものとなる筈であつた有意義な美しい生活の幻影を見る。彼女は目が覺めて、自分の卑怯な躊躇のために運命の大事な機會を取り逃したことを嘆く。娘は終に家を出て青年を探さうとする。が、探し當てた時には、彼の急死の數日後であつたと云ふ筋であつた。アニュータは平生から朗讀などは非常に上手であつたし、殊に今度は一生懸命な上に、女主人公の嘆きは丁度彼女自身の嘆きであつたから、一座の人々をすつかり感動さしてしまつた。頑固なお父さんの將軍までが涙を浮べて聞いた。その結果、彼女は一度お父さんに手紙を見せさへすればドストイエフスキーと文通してもよろしい。またこの冬聖ペテルブルグに行つた時にはドストイエフスキーと交際させようと云ふことになつた。

ソーニャはドストイエフスキーと彼等姉妹との最初の會見を次のやうに書いてゐる。

「聖ペテルブルグへ着くや否や、アニュータは早速ドストイエフスキーに招待狀を送り、姉妹は胸を躍らして彼の訪ねて來るのを待つてゐた。けれどもこの會合はすつかり失望に終つた。

イヴァン・セルギエーヴィッチは、娘たちがドストイエフスキーと逢ふ時には、妻にも必ずその席にゐるやうにと堅く云ひつけてあつた。それで、ドストイエフスキーが云はれた時刻に訪問すると、アニュータはお母さんのエレーナや、その他この有名な人を見たがつてゐる年取つた伯母さん達に取り卷かれてゐた。ターニャ(ソーニャの愛稱)もその席に出して貰つてゐた。アニュータは斯んな風にされてゐるのをひどく迷惑がつて碌に口も利かなかつた。ドストイエフスキィもまた失望してエレーナ・パヴローヴナが幾ら面白い話をしかけようとしても相手にならなかつた。皆んな不快

な氣持になつた。一時間半ばかりの後、來訪者は座を立つて、貴婦人たちにぶつきら棒なお辭儀をしたまゝ、誰とも握手しないで出て行つた。

アニュータは折角の樂しみを滅茶苦茶にされて失望してゐた。お母樣もまた何故と云ふことなしに、可哀想な、罪なことをしたやうに感じてゐた。

ドストィエフスキィの顔つきや態度は不快な印象を殘した。四十をまだたんと出ない人でありながら、老けて、疲れた樣子をして、薄い黃色い鬚を捻つたり、唇を嚙んだりするばかりで、談話と云つても、優しい調子だと云ふ以外にはなんの取り得もなかつた。

けれども五六日してドストィエフスキーはまた訪ねて來た。運のよいことには今度は二人の姉妹だけしかゐなかつた。彼はアニュータの手を取つて一緖に長椅子にかけて、古いお友達のやうに話した。ソーニャは默つてその側に坐つて、フョードル・ミハイロヴィッチをぢつと見詰めながら、非常な興味を持つて彼の一言一句を飮み込んでゐた。何んと云ふ違ひであつたらう。彼は先よりも非常に若く、而して單純で、優しくて、態度も自然のまゝで、恍惚するやうであつた。ソーニャは彼がすつかり好きになつた。

『何んて美しい小さいお妹さんをお持ちなんです。』

思ひがけもなく彼が斯う云つたので、妹を賞められたアニュータは乘り氣になつて、ターニャは韻文を書くのだと云ふ話までしてその詩を見せた。ドストィエフスキーは一つ二つ聲高く讀んで見て、それに就いて色々云つて吳れた。ソーニャは嬉しさで眞つ赤になつた。

皆んな時間を忘れて仕舞つてゐるうちに、三時間ほどして遂にエレーナ・パウローヴナが歸つて來た。お母樣は客間にドストィエフスキーが娘たちとだけゐたのを見るとはつとした。けれども二人が餘り愉快さうにしてゐるので、その心配も直ぐ忘れて、ドストィエフスキーにどうかゆつくりして、一緖に御飯を食べて行つて吳れるやうにもと勸めた。この日以來彼は家の常客となつた。

豫想された順序の如く、ドストイエフスキーのアンニュータに對する感情は完全に戀愛に成長した。同時に彼はひどく嫉妬深く一克になつて彼女を苦しめ出したので、アンニュータの方でも以前のやうには尊敬しないで、却つて彼をいぢめて面白がつたりした。斯うして二人の間がこじれて來るに連れて、ドストイエフスキーと小さいソーニャの友情が熱して行つた。ドストエフスキィは腹を立てるとアンニュータのことを淺薄な考へのない人形だと惡口を云つて、

『あなたのお姉さんを御覧なさい、あの人は私をよく了解してゐる。底深い、美しい心を持つてゐる。』

と云つて賞めるので少さいソーニャは出來たら胸を引き裂いて自分の眞心を見せ度いと思ふほど嬉しがつてゐた。實際彼女は不思議なほどドストイエフスキーを理解し、彼の暖い優しい感情を洞察し、その天才と獨創力に俘虜にされてゐた。而してお姉さんに對する後めたさからそれを否定しようとしながら決して否定することの出來ない激しい熱情で三倍も年上のドストイエフスキーを愛してゐた。――彼からはそんなことゝは夢にも氣づかれないで――

或る時ドストイエフスキーはソーニャの顔を非常に賞めて、今にお姉さんより乾度よい器量になる。殊にあの一對の正銘無垢のジプシーの眼の前では、アンニュータはたゞ美しい獨逸風な顔をしてゐるに過ぎない、といふやうな批評する。

ソーニャはそれが非常に嬉しくて、その晩寢室に行つた時に、その話をし出すと、

『フョードル・ミハイロヴィッチがあなたを私よりか美しいなんて、考へられると思つて。』

とアンニュータから冷笑される。ソーニャは口惜しいと思ひながら、鏡の姿見に並んで映つてゐるお姉さんの美しい人魚のやうな姿と、自分のまだ小さい陰氣な姿を見るとがつかりした。ソーニャはお祈禱に斯う云ふ言葉をつけ加へて祈つたと云つてゐる。

『神樣、世界ぢうの人たちにアンニュータを賞めさして下さいまし。でも、フョードル・ミハイロヴィッチだけには私の方を美しいと思はせて下さいませ。』

併し最後の痛ましい絶望が哀れなソーニャを待つてゐた。

ドストイエフスキーはソーニャに音樂を勉强するやうに頻りに勸めた。ソーニャは餘り音樂的ではなかつたけれども練

習だけはしてゐた。而してドフトィエフスキィがソナタ・パテチークが非常に好きだと云ふので、まだ荷が勝ち過ぎるのを彼に聞かせ度いばかりに一生懸命で覺えた。或る晩お母樣も伯母さんたちもよその夜會に出掛けて、ドストイエフスキイのために彈くには丁度よい機會があつた。ソーニャはピアノに向つて始めた。なりたけ上手に彈かうと思つて夢中で鍵盤に取つついてゐる間に他の事は何もかも忘れてゐた。やつと一曲彈き終つた時には自分でも見事に彈けたと思つた。でドストイエフスキーからうんと賞めて貰ふ積りで待つてゐると何んの聲もかゝらなかつた。後を振り向いて見ると誰もゐなかつた。——ドストイエフスキーもアニュータも。

ドストィエフスキーはその夜アニュータに對して結婚の申込みをしたのであつた。ターニャは遠い部屋の帷の陰で偶然その光景を目撃し、ドストイエフスキーの火のやうな愛の告白を聞いて、絶望して自分の部屋へ逃げて行く。併しアニュータはドストイエフスキーの申込みを拒絶した。これは小さい片戀のソーニャに取つては大きな驚きであると共に恥しい安心であつた。アニュータは自分の拒絶の理由——ドストイエフスキーに對する本統の心持を妹に斯う打ち開ける。

『それは勿論あの人は好きでもあれば崇拜もしてゐますわ。聰明で獨創的なんですもの。本統に天才なのね。でも——何んと云つてよいか分らないけれども——私はそんなことであの人を愛しはしなくてよ。結婚までしようなんて氣にはなれないわ。』アニュータはとうと泣きながら續ける。『ターニャ、あんたは、私があの人を愛しないのを自分でも驚いてるつてことは分るでせう。あの人はあんなに善良で優しいんですもの。最初は私だつてその氣がないぢやなかつたのだけれども、私はあの人の要求するやうな妻ぢやありませんわ。あの人と結婚する人は自分を捨てなければならない。あの人以外のことは考へても感じてもならないのです。でも私にはそんなことは出來ないわ。私は自分自身のためにもまた生き度いのですもの。それにあの人はあんなに神經質で氣むづかし屋でせう。私はあの人の前では決して自由な氣持になれないわ。』

小さいターニャはお姉さんの感情を理解した。同時に彼女は斯う考へた。

『あの人といつも一緒に暮らすと云ふこと、あの人のために何んでもしてあげると云ふことは、どれ程仕合せだか分ら

ない。アニュータは斯んな幸福がどうして拒絶されるのだらう。」

けれどもこれ等の考へ方はまだ人生の可愛い赤ん坊としてのターニャの疑惑に過ぎなかつた。この時のアニュータの惱みは軈てまた彼女自身の惱みであり、その小さいターニャがソーニャに、またマダム・コヴァレフスカヤに、更に著名な大學教授にまで成長するに從つて、ますます倍加され行く苦痛に面しなければならなかつた。

さて、ソーニャ・コヴァレフスカヤの自叙傳はドストィエフスキィに對する彼女の秘密な初戀で終つてゐるので これ以後の生涯はアン・シャロッテ・レフラーの書いてたものに依らなければならぬ。その最初に於て私たちをちよつと驚かすのはソーニャの奇妙な結婚であつた。

ドストィエフスキィとの挿話が終つた後、ラエフスキイ家の姉妹は再び故郷の淋しい家に歸つてゐたが、丁度ソーニャの十七ばかりの頃今度は一家をあげて聖ペテルブルグで一と冬を送つたことがあつた。この時分は例の知識階級の革進運動が頂點に達した時で、向上心に燃えてゐる若い元氣な娘たちは、自分たちの知識慾をみたすために、或る非常に風變りな方法を選んだ。それは誰かと表面上だけの結婚をするのであつた。さうすれば娘は厳しい親權から解放される。夫は妻を連れて外國へ出掛ける。而して彼女をどこかの大學へ入れてやる。――ソーニャ姉妹がペテ聖ルブルグで交際してゐた娘たちの中ではこの結婚が大流行になつた。而して皆んなが今までのやうな男女間の平凡な戀愛競技の果てに、自分だけの感情を滿足させるやうな結婚は極力輕蔑したので、或る一人の娘は愛し合つた男と結婚したけれども、友達の思はくを恥ぢて、彼等の前では夫らしく接吻することも抱擁することも許さなかつたと云つてゐる。實際これ等の若い熱誠家に取つては、個人的の幸福は第二の條件で、公共のために自己を犠牲にしよう、またうんと勉強しよう、自分たちの心を改善し、愛する國家のために最上の努力をしよう、暗黑と壓制から光明と平等へ向上しよう――とのみ望んでゐたのであつた。

アニュータと彼女の親しい一人の友達は終に自分たちも流行の理想結婚をしようと決心する。が、それは二人でなくもよい。二人のうちのどちらかゞ誰か條件結婚をする夫を探し出せばよい。さうすれば他の者は友達の新夫婦について大陸

に遊びに行くと云ふ手順で容易に行かれさうだから。——色々詮考の末、ワルデマートル・コヴァレフスキーと云ふ若い大學生が探し出された。彼は頭の鋭敏な勉强家で、自分でも獨逸に留學したがつてゐる際であるし、且つ家柄も釣り合つてゐるから、彼との結婚ならばどの親達も反對はしないであらう。ところがワルデマールに下相談をして見ると、ワルデマールは理想結婚は結構だが、花嫁としては意外にもソーニャを選び度いと云ひ出したので、折角の計畫が頓挫しさうになる。何故ならばソーニャの結婚と云ふやうなことはまだ到底問題にならぬことであつたから。事實、コヴァレフスキーの申込みはラエフスキイ家から立派に拒絶された。そのうちにラエフスキイ家は聖ペテルブルグに於ける一と冬の逗留を終つて、頓て故鄉の領地に歸らうとしてゐたので、娘たちに取つては一大事であつた。この儘故鄉の田舍に埋れること、有らゆる希望を打ち捨てることは、自殺にも等しい氣がしてゐた。

この時に當つて、內氣な優しいソーニャの中に隱れてゐた驚くべき熱情と激烈な意志が爆發した。彼女は家を捨てても、どんな犧牲を拂つても勉强を續けようと決心した。或る時家に晩餐會があつた夜、彼女は終にお姉さんのアニュータの助けを藉りて次ぎのやうな殘置を殘して家を出る。

『お父樣、お許し下さいませ。私はワルデマールと一緒になります。この上はもう私たちの結婚に反對なさらないで下さいまし。』

これを讀んだ父親が怒りと驚きに慄えながらワルデマール・コヴァレフスキーの下宿に訪ね行つた時には、その風變りな若い花嫁は、未來の夫の汚ない書齋の書物と本棚の間で新しい運命の決定を待つてゐた。

彼女は終に兩親の許可を得て、一八六八年の十月（彼女が十八の時）にワルデマール・コヴァレフスキイと故鄉の領地で結婚した。若い夫婦は外國に行く前に六ケ月ほど聖ペテルブルグで暮らしたが、その間にコヴァレフスキーは若い妻を色々な政治團體へ紹介した。當時ソーニャと親しくしてゐた一人の友達は彼女の容貌や態度について次のやうに云つてゐる。

『人生の氣苦勞や煩悶のために、皆んな幾分疲れきつてゐた政治的婦人の中ではソーニャは全く風變りな樣子をしてゐ

た。顔つきが子供々々してゐるところから、『小さい雀』と云ふ仇名を貰つた。彼女はほんの十八になつたばかりであつたが、まだ／＼ずつと若く見えた。顔はふつくらしてゐたが、身體は小さくすらりとしてゐた。短かい栗色のちゞれつ毛に生き／＼した顔つきをして、絶えず表情の變するきら／＼とした眼の中には、子供らしい純樸と思想の深さとが混ざり合つてゐた。彼女はその年頃にしては珍しい無意識なしとやかさで有らゆる人を引きつけた。年寄りでも若い者でも、男でも女でも皆んな魅せられてしまつた。態度はどこまでも自然で、微塵も誘惑的な點がなく、自分が皆んなの尊敬の的になつてゐるなどゝは思ひもかけぬ風であつた。實際彼女は容貌や着物にはちつとも頓着しなかつた。出來るだけ質素な着物で、幾らか無精な點さへあつた。――これはソーニャが直すことをしなかつた一つの疵である……』

それから若い夫婦はハイデルベルヒへ留學して、夫は地質學を、ソーニャは數學を學んだのであるが、この學科に於ける彼女の天才の早い芽に就いて、私たちは一つの興味ある記事を『ラエフスキー家の姉妹』の中に見出すことが出來る。

ソーニャのお父樣の兄さんに當る人で、小さい時のソーニャをひどく可愛がつてくれた一人の伯父さんがあつた。（この人に關する物語は非常に面白いものであるが、岐路に亘るために省かなければならないのを私は心から殘念に思ふ）この人は正式な學問はしなかつたのだが頗る讀書家で、殊に數學に趣味を持ち、それも學者の冷たい研究態度ではなしに、子供が『智惠の輪』でも說くやうな呑氣な樂しみとして六づかしい數學の問題を解いてゐた。併しそんな解釋をおとなしく聞いてくれる人は誰もなかつたので、彼は小さいソーニャを相手に色々說明して聞かせるのが常であつた。ソーニャにしてもまだ八つ九つでそんな高等數學が分かる筈はなかつた。けれども、分つた顔をしておとなしく聞いてゐると伯父さんが大層悅ぶのでさうしてゐるうちに、段々と面白くなつた。それからまた、故鄉の家の一つの部屋にお父樣が若い時分に勉强した數學の計算紙で、壁の中張りがしてあつた。どうした都合かその部屋はいつまでも中張りのまゝで放つてあつたので、遊び友達のない孤獨なソーニャは、よく壁の前に立つてその謎のやうな線や記號を眺めて時間をたてた。その內に記號や線の連絡がひとりでに分るやうな氣がして、非常に面白い遊び道具になつたが、後で十四五になつて聖ペテルブルグで初めて微分積分を敎はつた時、むづかしい公式や解き方が自然に一度敎はつた事があるかのやうに分つたので、先生を

喫驚さしたと云ふことである。

併し私はこれ等の記事に依つてソーニャがひとり數學にのみ特別な才能があつたとは斷定し度くない。彼女は若し專門にやりさへすれば、何に限らず――文學は殊に――數學と同程度の成功を勝ち得たに相違ない程の偉大な頭腦の所有者であつたと信ずる。現に晩年の彼女に取つては數學は味の失せた食物であつた。食べずにはゐられなかつたけれども、決して樂しみにはならなかつた。而して僅かに彼女の精神的飢渇を救つたものは、時々アマチューアとして書いた文學的勞作であつた。――併し私はまあ順序を追うて話さなければならない。

ハイデルベルヒではソーニャは夫のコヴァレフスキーと、今一人彼女を頼つてロシアから留學して來た同じ年頃の女友達と三人で暮らしてゐたのであるが、彼女とコヴァレフスキーとの關係はまだ何處までもプラトニック、ラヴで、夫婦と云ふよりは兄妹か親しい友達以上に進まなかつた。彼等は愉快に勉强した。殊にソーニァの異常な數學上の技倆は大學の教授や學生仲間に直ぐ評判になつたと云はれてゐる。けれどもこの仲間の樂しい生活も、軈てロシヤからアニュータと、曾つて一緒に理想結婚の計畫をした一人の友達が來て一緒になつた時から破綻が生じかけた。この二人はソーニャやまた前から來てゐる彼女の友達よりは年が上であつたし、殊にコヴァレフスキーに對しては、彼とソーニャの結婚はほんの表面だけの筈だから、それ以上に親しくする權利はないと云ふ態度を見せてゐるので、コヴァレフスキーが一般に不快になつて、自分だけ別居した。それから一學期が終るとハイデルベルヒを去つてイエナに行き、またミーニッヒに移つて研究に沒頭した。一體彼は非常に聰明でまた勉强以外には何等の娛樂も要らないと云ふ風な學者肌な人であつたから、この風變りな結婚生活もさう苦痛ではなかつたかのやうに見える。それに比べるとソーニャはずつと熱情的で、彼に對しても妻らしいと云ふよりは、寧ろ甘へた妹らしい要求や無理を持ちだしてゐたらしい。

『ソーニャは何んでも物をやり遂げるのが好きであつた。一度目的を定めるとどんな手段を盡してもそれを止めさせることは出來なかつたから乾度成就した。たゞ不思議にも、感情上のことだとその鋭い知覺のためによく失敗した。自分が愛する人にも、また愛さるゝ人にも餘り多くを求め過ぎるので、さうかさにかかつて求めなくも氣樂に貰へるものを

無理やり取る風があつた。彼女はまた何處までも優しくされたり信じ込まれたりし度い方で、絶えず自分の傍らにゐてすべての事を共にする人を欲しがつた。ところで彼女自身の生活は、彼女と親しい接觸を持つて暮らす人たちにはとても眞似の出來ないものであつた……』

これは當時彼女と同居してゐた女友達の批評である。ソーニャはハイデルベルヒには二學期しかゐないで、それから伯林に行つて近世の數學的解析の父として知られてゐるワイエルシュトラスに就いて研究を續けた。また夫のコヴァレフスキーはイエナ大學に立派な論文を出してドクトル・フィロソフィーの學位を得た。

最初ワイエルシュトラスはソーニャから數學の弟子になり度いと申込まれた時には、(伯林大學では婦人を入れないから個人教授を乞ふたのである)決して多くを期待しなかつた。與へた問題も研究科の學生のために作つた特別むづかしいものであつたから出來る筈はないと信じてゐた。ところでソーニャはそれが出來たばかりでなく鋭い完全な解き方がしてあつたので老教授を驚嘆させた。それ以來この偉大な數學者は彼女の生涯の友達となり、彼の家庭に於てはソーニャは娘か妹のやうに愛され、尊敬された。ワイエルシュトラスに就いてゐたこの四年間のソーニャの勉強はもの凄いほどであつた。彼女は朝から夜まで、夜はまた遲くまで紙の上にのしかかつたきりで一歩も外に出なかつた。その極端な例はワイエルシュトラスの家の基督降誕祭に列席するためにソーニャは新しい着物を拵へなければならなかつたが、自分ではとうと買ひに行かないで、下宿屋の神さんにいゝ加減な反物を買はせて縫はせにやつた。

一八七四年の秋、ソーニャはギヨッチンゲン大學に三つの論文を出してドクトル フイロソフイの學位を貰つた。破格の取扱ひで口頭試驗なしにすんだ。けれども過度の勉強は精神的にも肉體的にも彼女を疲らしてしまつた。それに就いて彼女と一緒に勉強してゐた友達は斯う云つてゐる。

『實際ソーニャの科學的勞作は自分に取つては眞の樂しみにならなかつた。彼女の極端な勉強は、そのために人生を樂しむことを妨げたのみでなく、自分のやつてゐる仕事さへ樂しめなくなつた。思索は彼女の召使でなくて、暴君であつた。……また彼女の伯林に於ける學生時代の不幸は、過度な勞作以前に他の色々な事情が加はつてゐた。第一は自

分と夫との關係、即ち二人の極めて間違つた狀態に就いての彼女の意識であつた。……彼女はその淋しい生活に滿足はしてゐなかつた。後年彼女の中に燃え上る焰となつた大なる情緒に對する熱望を既に感じかけてゐた。彼女の內奥の自我は、その生活の方法から判斷して推察するものとは非常に違つてゐた。けれどもその希望や慾性は、半分は恥しいため、半分は實際的の感覺が缺けてゐたため、自分の間違つた狀態を思ふためとで、抑制されてゐたのであつた。……」

斯うして彼等の夫婦關係はいつまでも風變りなまゝで續いてゐた。が、二人は非常に親密で、コヴァレフスキイはハイデルベルヒからよく伯林へ訪ねて來たし、ソーニャに取つても、彼の訪問が苦しい勉強の間の唯一の慰めであつたと云はれてゐる。休みの時には一緒に旅行もした。殊に一八七一年の正月（普佛戰爭の最後の年）には二人で甚だ冒險的な旅行をした。

それは當時ロシアの家には內證で巴里へ行つてゐたお姉さんのアニユータを助けるために、獨逸軍の重圍を突破して佛蘭西に行つたのであつた。併しアニユータは後で自治制の時に重要な役に就いた若い佛蘭西人と親密な關係になつてゐて巴里を離れようとしなかつたので、コヴァレフスキー夫婦はまた獨逸に歸つた。けれども自治制が顚覆すると共に、アニユータの愛人は死刑を受けた。アニユータはソーニャを通じてロシャのお父樣に事實を打ち開け、どうか自分の愛人を救ひ出して呉れるやうにと哀願する。この時のアニユータの境遇は可なり悲慘であつたらしい。二三年前ドストイエフスキーから著作の報酬を受け取つた時のお父樣の怒りの言葉――お前は今仕事を賣つた。いつか自分の身體を賣るやうなことになるぞ、と云ふ悲しい敎訓が的中したのであつた。が、お父樣は妻やコヴァレスキイ夫婦と共に巴里へ急行して娘を宥し優しく慰めた。而して時の大統領のチエールによい傳手があつたので、彼に縋つて或る戲曲的な方法で娘の婿を救ひ出して、皆んなで無事にロシアニ歸ることが出來た。（未完）



僻見

芥川龍之介

三 大久保湖州

或秋の夜。僕は本郷の大學前の或本屋を覗いて見た。すると店先の陳列に古い菊判の本が一冊、「大久保湖州著、家康と直弼、引ナシ五十錢」と云ふ貼り札の帶をかけたまま、雜書の上に抛り出してあつた。僕はこの本の埃を拂ひ、ちよつと中をひろげて見た。中は本の名の示す通り、德川家康と井伊直弼とに關する史論を集めたものらしかつた。が、偶然開いた箇所は附錄に添へてある雜文だつた。「人の一生」——僕はこの雜文の一つにかう云ふ名のあるのを發見した。

人の一生

德川家康

急ぐべからず

心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。

大久保余所五郎

後るべからず。

心に望失なはば得意なりし時を思ひ出すべし

怒は敵と思へ。
勝つ事ばかり知てまくる事をしらざれば害其身に至る
及ばざるは過ぎたるより勝れり

卑屈は敵と思へ。
負くる事に安んじて勝つ事を知らざれば亦其身に至る。
成すは成さざるより勝れり。

僕は思はず微笑した。この湖州大久保余所五郎なるものは征夷大將軍德川家康と處世訓の長短を比べてゐる。しかも彼の處世訓は不思議にも坊間に行はれる教科書の臭氣を帯びてゐない。何處か彼自身の面接した人生の息吹きを漂はせてゐる。「心に望失はば得意なりし時を思ひ出すべし。」——情熱に富んだ才人の面かげはかう云ふ一行にも見えるやうである。僕は漫然とその次の「鎌倉雜筆」へ目を移した。漫然と——しかし僕の好奇心は忽ち近來にない刺戟を感じた。まづ僕を喜ばせたものは歴史家を評した數行である。

「若し徂徠にして白石の如く史を究めたらんには其の史眼は必ず白石の上に出づべし。『南留別志』を一讀して知るべし」

「頼山陽を歴史家と思ふは非なり。日本政記の論文にも、取るに足らざる淺薄の見多し。」

次に興味を感じたのは一頁にも足りない史論である。

「大日本史の宗旨は勸王に在りといふ。水戸黄門この書を思ひ立ちしは、伯夷傳を讀みて感ずる所ありてなりといふ。周の武王は時の強者なり。伯夷は時の強者を制し、名分を正さんとして用ゐられざりし男なり。黄門何とてさる支那の一不平黨に同感して、勸王の精神を現せる國史を編まんとはしけるぞ。幕府は時の強者なり。之を制して名分を正さんとしけるにや。されど德川は正に其の宗家なり宗家の不利を顧みざりしにや。黄門は世に賢明の人なりと嘖々す。さる人にして、いかで朝廷重くなれば德川輕くなるの理見えずやあるべき。是に於て黄門の眞意は甚だ疑ふべし。不平黨に同意せし胸中推察を要する所なり。時の將軍綱吉と黄門の不快なりしは、亦世に傳ふる所なり。得意なりしならんには、大日本史を編みしや否や、我れ識らず。美はしき表口上より、裏の遠見まほしくこそ。」

「家康の朝廷に對する精神は、敬して遠ざくるに在りしなり。信長秀吉等は皆朝廷を擔ぎて事を圖りしかど、家康にはさる事なし。關ケ原大阪の軍にも、朝旨を受けて、王師皇軍などいふ體を裝はず。武家と武家との戰と做して、朝廷の力を假らず。是れ實に家康の深慮の存ずる所なり。德川の末世に及びて、勸王を唱へし徒は、朝廷尊崇をもて東照宮の遺意なるが如く說きて、幕府を責めしかど、實を知らぬ者の迂說なりけり。朝廷に權力を持たせて、將軍政治の行はると思ふは笑ふべし。流石に新井白石は此の間の消息を解せしが如し。家康また至て公卿風を嫌ひし男なりけり。」

しかし最も愉快だつたのは鮮かに著者自身の性格を示したやはり數行の感想である。

「人三十にして老人にも少年にも交はるを得べし。

「我れ酒を飲まざれど、人に酒を呑(原)せて語るは面白し。

「始めて人を訪へば、知らぬ顏して室內の模樣を見屆け置くべし。爾後訪ふ每に亦其の室內の變化に注目せよ。やがて主人の口には掩ひける性癖のをかしきふしを看出すべし。

「人物を知らんには、其の人の命のつかひやうと、妻に對する振舞との二つこそ尤も見まほしけれ。若し世に細君の自ら筆を染めて細かに良人が日常の振舞を書き取れる日記と、金銀出納帳とだにあらば、之れに優る傳記の材料はなかるべし。

「世評に善くいはるる人も、實際はそれ程の大人物に非ず、惡くいはるる人も、亦それ程の惡人にあらず、古今皆然り。個人の眞目を識らんには、世評の封袋を除くことを忘るべからず。

「智慧できて、氣性の強くなりしものあり。弱りしものあり

「成る可く勞力を節約して成る可く多く成功するの工夫を運らすべし。さりとて相場師に傚れと言ふには非ず。但し人事なべて多少投機の性質を帶ぶるものと念ふべし。

「愚人を相手に得々然たること能はざる政治家は、輿論政治の世に政治家たる資格なきものと知るべし」

男女とも尻つ尾さへぶら下げてゐなければ、一人前の人間だと考へるのは三千年來の誤謬である。一人前の人間となる爲には、まづ腦髓と稱へられる灰白色の塊にも一人前の皺襞を具へなければならぬ。この大久保湖州と云ふ書生は確かに孔雀や猿を脫した一人前の腦髓を所有してゐる。いや、一人前所ではないかも知れない。彼の文章は冷然とした中に不思議にも情熱を漲らせてゐる。天下にかう云ふ文章ほど、一人前以上の腦髓の所在を歷々と數へる指道標はない。のみならず——實價は五十錢である。僕は皺くちやになつた五十錢札を出し、神保町のクロオスの表紙のついた「家康と直弼」を買ふことにした。

　買つた後に開いて見ると、卷頭には近衛公の題字を始め、重野成齋、坪內逍遙、島田沼南、德富蘇峯、田口鼎軒等の序文だの、水谷不倒の「大久保湖州君小傳」だの、明治趣味の題辭を生やした著者の寫眞だのもはひつてゐる。無名の書生だと思つた湖州は思ひの外

知己に富んでゐたらしい。が、現代に生れた我々の湖州を知らぬことも亦事實である。すると諸名士の金玉の序文も「家康と直弼」を傳へることには失敗したと云はなければならぬ。これは讀者たる僕の勇氣を沮喪せしめるに足る發見である。才人だと思つた大久保湖州も或は大學の教授に多い、荘厳なる阿呆の一人だつたかも知れない。僕は夜長の電燈の下にかう云ふ疑惑を抱きながら、まづ彼の大作たる家康篇を讀みはじめた。……

これはもう一昨年、――念の爲に書いて置けば、大正十一年の秋のことである。爾來僕は何かの機會にこの忘れられた歴史家を紹介したいと思ひながら、とうとう今日に及んでしまつた。紹介したいと云ふ以上、湖州大久保余所五郎の才人だつたことは云ふを待たない。いや、湖州は明治の生んだ必しも多からざる才人中、最も特色のある一人である。諸君は勿論かう云ふ賛辭に懷疑的な微笑を浮べるであらう。諸君の確信する所によれば、古今の才人は一人殘らず諸君の愛顧を辱うしてゐる。況や最も特色のある才人などと云ふものの等閑に附せられてゐる筈はない。それは諸君の云ふ通りである。第一古今の才人は何も才人だつた故に諸君の御意にかなつたのではない。諸君の御意にかなつた故に才人になることも出來たのである。つまり才人を才人にするのは才人自身と云ふよりも諸君であると云はなければならぬ。諸君はまことにその點だけは神よりも全智全能である。如何なる才人も諸君の爲に門前拂ひを食はされたが最後、餘命さへ繋げぬのに違ひない。この故に尾形乾山は蕭條たる陋巷に窮死した。この故に亦大久保湖州も明治三十四年出版、正價一圓二十錢の著書を、――しかも彼の唯一の著書を「引ナシ五十錢」に賣られてゐるのである。

僕は湖州を才人だと云つた。が、諸君の微笑の前には少時この言葉を見合せても好い。その代りに僕は諸君の愛顧を辱うする光榮を得なかつた湖州の薄命を弔はなければならぬ。湖州もその後聞いた所によれば、少くとも識者の間には全然忘れられた次第ではない。しかし湖州の母校たる早稲田專門學校――現在の早稲田大學は片上伸の如き、本間久雄の如き、或は又宮島新三郎の如き、有爲の批評家を世に出してゐる。けれども大久保湖州の名は未だ彼等の椽大の筆に一度たりと雖も上つたことはない。彼等は皆彼等の職に甚だ忠なる批評家である。或は聊か傀儡の職に忠過ぎる憾みさへあるかも知れない。しかも湖州を逸してゐるのは怠慢の罪と云ふよりも、やはり我々と同じやうに無智の罪と云はなければならぬ。彼等は萬里の波濤を隔てた佛蘭西、英吉利、露西亞等の群小作家の名をも心得てゐる。が、彼等の先輩たる大才の名だけは心得てゐない。かう云ふ湖州を薄命と呼ぶのは必ずしも誇張とは咎め難

いであらう。且又湖州は早稲田大學の前に銅像か何か建てられたとしても、依然たる薄命の歴史家である。成程「家康と直弼」は彼の面目を傳へるかも知れない。しかし彼の畢生の事業は「井伊直弼傳」の大成である。彼はこの事業の爲に三十六年の心血を濺いだ。が、死は彼の命と共に「井伊直弼傳」をも奪ひ去つてしまつた。「こころざしなかばもとげぬ我身だにつひ行くべき道にゆきにけり」——水谷不倒の湖州君小傳によれば、死に臨んだ彼は滿腔の遺憾をかう云ふ一首に托したさうである。これをしも薄命と呼ばないとすれば、何ごとを薄命と呼ぶであらう？　僕は少くとも小道に仆れた先達の薄命を弔はなければならぬ。（以上前號所載）

大久保湖州の作品は第一に「徳川家康篇」である。第二に「井伊直弼篇」である。第三に「遺老の實歴談に就きて」である。第三の「遺老の實歴談に就きて」は「明治維新の前後に際會して國事に與りし遺老の實歴談多く世に出づる」に當り、その史料的價値を考へた三十頁ばかりの論文に過ぎない。第二の「井伊直弼篇」も「井伊大老は開國論者に非ずといふに就いて」、「岡本黃石」、「長野主膳」の三篇の論文を寄せ集めた、たとへば「井伊直弼傳」と云ふ計畫中の都市の一部分である。しかし第一の「徳川家康篇」だけは幸ひにも未成品に畢つてゐない。いや、僕の信ずる所によれば、寧ろ前人を曠うした、戞々たる獨造底の完成品である。

一部の「徳川家康篇」は年少の家康を論じた「徳川家康」中年の家康を論じた「鬼作左」、老年の家康を論じた「本多佐渡守」の三篇の論文から成り立つてゐる。（尤も湖州はかう云ふ順序に是等の論文を書いた譯ではない。「徳川家康」は明治三十一年、「鬼作左」は明治三十年、「本多佐渡守」は明治二十九年、——即ち作品の順序とは全然反對に筆を執つたのである。）是等の論文は必しも金玉の名文と云ふ譯ではない。同時に又格別新しい史料に立脚してゐると云ふ次第でもない。しかし是等の論文の中から我々の目の前に浮んで來る征夷大將軍徳川家康は所謂歴史上の家康よりも數等に家康らしい家康である。たとへば「徳川家康」の中に女人に對する家康を論じた下の一節を讀んで見るがよい。

「家康の子、男女合はせて十六人、之れを生みし腹は十人、夫人の産みし二子を除きては、余は皆側妾の所出なり。(中略)其の最後にお勝が腹に末女を擧げさせしは、既に將軍職を悴に渡して、駿府に隱居せし身にて、老いても壯なる六十六歳の時なりとぞ識られける。其の他この豪傑が戯に手折られながら、子を結ばで空しく散りにし花は亦一二に止まらざるべし。實に家康も英雄色を好むの古則に漏るる能はじ。秀吉は北條征伐の陣中より淀君が許に一書を寄せて、『廿日ごろに、かならず參候て、わかぎみ(鶴松)だき可申候。そのよさに、そもじをも、そばにねさせ申候可候。せんかく御まち候可候』とは言ひ越しき。天眞爛漫といはばいへ、又痴情めきたる嫌なからずやは。家康には表面さる事見えざりしかど、所詮言ふと言はぬとの相違にて、實は兩雄とも多情の男なりけん。深きは言はぬ方なるべし。

「さはれ流石に思慮深き家康は、秀吉の如く閨門の裡に一家滅亡の種を蒔かず、其が第一の禁物たる奢は女中にも嚴に假さで、奥向にも儉素の風行はれしは、彼の本多佐渡守が秀忠將軍の乳母なる大姥に一言咎められて、返す詞も無かりし一場の話に徴して知るべし。駿府にて女房等が大根の漬物の鹽辛きに困じて、家康に歎きけるを、厨の事をば沙汰しける松下常慶を召して今少し鹽加減よくすべしと諭ししかば、此の老人主が側に進み寄りて、何事をかささやきしに、主は言葉なくして唯笑ひけるを、彼れ其の儘退きしと云ふ。

「老人ささやきしは、今の如く鹽辛く漬けさせ候てさへ、朝夕の用夥しきものを、女房達の好みの如く、鹽加減いたし候はば、何ほどの費用に及ぶべきも計りがたし。女房達の申す詞など聞し召さぬ樣にて、わたらせ給ふこそ然るべけれ』とは曰ひしなりけり。常慶も鹽辛き男なれば、家康が笑ひし腹加減も大に鹽辛かりけり。天下を取りし後だに此くの如し。三河の事想ふべし。(中略)

『近年日課を六萬遍唱へ候事、老人いらぬ過役にて候。遍數減らし候樣に皆々申聞候。成程遍數をへらし候へば、樂に成り候得共、幼少より戰國に生れ、多くの人を殺し候得ば、せめて罪ほろぼしにもなり候半。且年若より一日も隙に暮したる事なき身故、何ぞの業を致度候得ども、それもいらぬ事故、念佛と日々の稽古事の樣に致し候ゆへ、毎日朝起いたしてもはやくは休不申、おこたらぬやうにこころ懸候事。夫故食事の中りもなく健にて、念佛の影と存候。』と言へるを看て

も、裏面の行跡に大に放縱の振舞なかりしは察すべし。但し彼の秀吉すら「女に心不レ可レ免」と戒めたれば、家康が清淨潔白の念佛談も、曾て一時に數人の侍妾を設け置きし覺えある男の言と識るべし。人を殺しし罪ほろぼしの外に、肯ひ難き懺悔の珠數をば繰らざりしにや。徒士の者奧の女中に文を送りしとて、徒士頭松平若狹守改易の罪に處せられきと傳ふれば、奧向の規律の嚴正なりしを窺ふべし。亦窮屈なる規則の內にても、主人には之を濟りて融通の道ありしを忘るべからず。三河に在りし頃は特に何事も手輕なりしなるべし。家康年積みて處世の道に熟しては、(中略)

「おのれ常に老臣共の衆評を聽きて、一人に權を占めさせじと努めし跡は、歷々として史上にも殘りけるが、表の政治に用ゐし此筆法は、奧の女中を制御するにも應用して、一人の女に寵を專にさせじと抑えしは疑あらず。十六人の子を擧げし十人の妻妾、二人より多くを產みし者なかりしは、深き仔細ありぬるにや。强ち偶然の事のみにあらざるべし。」(胡麻點は原文のを保存したのである。)

この德川家康は女色を愛する老爺たるばかりか、產兒制限をも行ふ政治家である。これは明かに三百年來、我々の見慣れた家康ではない。我々の見慣れた家康よりもはるかに人間らしい家康である。はるかに人間らしい、──諸君は或は僕の言葉の平凡過ぎるのに微笑するであらう。「人間らしい」と云ふ言葉は勿論非凡でも何でもない。あらゆる新刊の小說や戲曲は必ずその廣告の中に「人間らしい苦しみ」とか「人間らしい生活」とか、人間らしい萬事を賣りものにしてゐる。が、それらの小說や戲曲は果してどの位廣告通り、人間らしい何ものかを捉へてゐるのであらう？　殊に英雄の傳記の作者は無邪氣なる英雄崇拜者でなければ、古色蒼然たるモオラリストである。成程彼等の或者は人間らしさを說いてゐるかも知れない。しかし彼等の人間らしさも實際彼等の吹聽するやうに人間らしいかどうかは疑問である。彼等はいつも儼然とかう諸君に云ふであらう。──「英雄も勿論凡人ではない。が、神には生れない以上、やはり凡人たる半面をも具へてゐたことは確かである。すると我々の目の前に何の某と云ふ人物を立たせ、その何の某の英雄たることを認めさせる爲には、凡人たらざる半面を指摘すると同時に凡人たる半面をも指摘してなければならぬ。在來の傳記の英雄に人間らしさの缺けてゐるのはかう云ふ用意の足りぬ爲である。…………」

けれどもこれだけの用意さへすれば、果して彼等の云ふやうに、人間らしい英雄を示し得るであらうか？　たとへば諸君の輕蔑する「漢楚軍談」を披いて見るが好い。「漢楚軍談」の漢の高祖は秦の始皇の夢に入つたり、白帝の子たる大蛇を斬つたり、凡人ならざる半面を大いに示してゐるかと思へば、女樂を好んだり、士に傲つたり、凡人に劣らぬ半面をもやはり大いに示してゐる。しかし「漢楚軍談」の漢の高祖に王者の眞面目を發見するものは三尺の童子ばかりと云はなければならぬ。もう一つ次手に例を擧げれば、諸君の「漢楚軍談」よりも常に一層信用せぬ歷史、――新聞の記事を讀んで見るが好い。新聞の記事の大臣も民意を體したり、憲政を擁護したり、凡人たらざる半面を大いに示してゐるかと思へば、嘘をついたり、金を盜んだり、大凡下たる半面さへやはり大いに示してゐる。が、新聞の記事の大臣に英雄の眞面目は少時問はず、凡人の眞面目さへ發見するものは三尺の童子――ではないにもしろ、六尺の童子ばかりと云はなければならぬ。すると彼等の云ふやうに、凡人たらざる半面と共に凡人たる半面をも指摘することは少しも英雄の英雄たる所以を明らかにしない道理である。彼等はこの道理にも頓着せず、神經衰弱に罹つたエホバのやうに彼等の所謂人間らしい英雄なるものを創造した。その結果はどうだつたか？　山積する彼等の傳記の中から我々の目の前に浮んで來るものは丁度兩頭の蛇のやうに凡人たらざる半面と凡人たる半面とを左右へ出した、滑稽なる精神的怪物である。英雄崇拜者の英雄は英雄よりも寧ろ神であらう。モオラリストの英雄も餘りに善玉でないとすれば、餘りに惡玉であるかも知れない。しかし彼等の英雄は或統一を保つてゐる限り、人間らしいとは云ひ難いにもしろ、人形らしい可愛らしさを示してゐる。けれども一部の傳記の作者の所謂人間らしい英雄はかう云ふ可愛らしさゝへ示してゐない。就中彼等の創造した征夷大將軍德川家康は最も不快なる怪物である。聖アントニウスを誘惑した、如何なる地獄の眷屬よりも一層不快なる怪物である。

湖州の德川家康は是等の怪物に比べずとも、おのづから人間らしい英雄である。この相違は何處から來たか？　湖州は家康を論ずるのに、凡人たらざる半面と共に凡人たる半面をも指摘したのではない。唯凡人たる半面と凡人たらざる半面との融合する一點を指摘した、――と云ふよりも寧ろ英雄の中に默々と生を營んでゐる人間全體を指摘したのである。これは言葉の穿鑿だけすれば、凡人たらざる半面と共に凡人たる半面をも指摘するのと毫釐の相違に過ぎないかも知れな

い。が、事實は千里の山河を隔絶したにもひとしい相違である。凡人たらざる半面と共に凡人たる半面をも指摘するのは凡庸なる作者にも成し得るであらう。しかし神彩奕々たる人間全體を指摘するのは一代の才人を待たなければならぬ。湖州の前人を凌駕する所以はこの人間全體を指摘した炯眼に存してゐる。湖州自身も史上の人物に人間全體を發見することは絶えず工夫を凝らしたものらしい。たとへば明治二十七八年頃の「隨感錄」と題する隨筆は次の一節を錄してゐる。

「書を讀て、心緒忽然として古人に觸れ、靜夜月を仰ぎて、感慨湧然として古人に及ぶ。同情の念沸々として起る。是時彼を觀察し、彼を沈思す。大抵誤まざるを得。」

更に略々同時代に成つた「傳記私言數則」は悉このことに及んでゐる。

「事實に依りて心術を悟り、心術を悟りて更に事實を解す。然れども其間往々矛盾するものあり。人は外界の事情に制せられて、己れの意志を枉げて心ならざる事を行ふ。此隱秘の關繋を説明するを至要とす。

「人は短所と長所との縫合物なり。一の長所あれば、必ず之れに短所伴ふ。短所を覗れば、乃ち其長所を知るべし。君子は其過を見て其仁を知る、亦此の意なり。能と不能とを明識するもの、始めて人を談ずべし。

「人の世に立つ、各自皆一個の位地を占む。之を見るもの同等の地位に立ちて見るを要す。決して上より見るべからず。下より見るべからず。一鄕の人は一鄕の眼を以て見るべく、一國の人は一國の眼を以て見るべく、天下の人は天下の眼を以て見るべし。」

是等の言葉は湖州によれば、いづれも史上の人物に對する觀照の態度を述べたものである。けれども湖州は古人にばかり、かう云ふ觀照を加へたのであらうか？いや、德川家康をも冷眼に眺めた大久保湖州に唯史上の人物にばかり、かう云ふ觀照を加へろと云ふのは出來ない相談ではないであらうか？水谷不倒の湖州君小傳によれば「君、（中略）人に接するや寬容にして能く客を遇す。故に君の門を叩くもの日に絶えず、而して客の種類の問へば、概ね未來に屬する政治家、文學者、詩人、美術家、史家、哲學者、事業家等あり。」だつたさうである。未來に屬する政治家、文學者、詩人、美術家、史

家、哲學者、事業家などと云ふものは勿論書生だつたのに違ひない。湖州は必ず是等の人々に獨特の炯眼を注いだのであらう。同時に又是等の人々の中に、貪慾なる、奸譎なる、野卑なる、愚昧なる、放漫なる、が、常に同情を感ずる人間全體を見出したのであらう。僕の信ずる所によれば、湖州たる所以は德川家康と云ふ英雄の中に人間全體を發見する前に、この所謂未來に屬する政治家、文學者、詩人、美術家、史家、哲學者、事業家などの一部の中に人間全體を發見したことである。大いなる支那の賢人は「古きを溫ね、新らしきを知る」と云つた。成程神功皇后の古きを溫ね奉ることは勇敢なる婦人參政權論者の新らしきを知ることになるかも知れない。しかし又逆に新らしきを溫ね、古きを知ることも確である。のみならず新らしきも知らない癖に、古きばかり溫ねるのは新古ともに茫々たる塵境に墜ちることも確かである。不幸にも當世の傳記の作者は大抵この塵境に安住した。彼等は史上の人物を知つてゐると信じてゐる。が、彼等自身をはじめ、彼等の父母妻子の人間たることさへ一度も眞に知らずに來た彼等に、模糊たる史上の人物はどの位心臟を窺はせるであらうか？　湖州から云ふ出發點から、既に彼等とは反對の道へ精進の歩みを運んでゐる。湖州の德川家康の人間らしい英雄となり得たのも偶然ではないと云はなければならぬ。

「家康（中略）、おのが庶子於義丸を遣し、石川數正が子の勝千代と、作左衛門が子の仙千代とを附添へて都に登しぬ。（僕曰、小牧山の戰後、都にゐる秀吉に事實上の人質を出した時である。）於義丸は即ち黄門秀康の幼稱にして、家婢お萬の生む所。家康之を愛して孕みしかば、嫉妬深き築山夫人の怨を避けて、本多豐後守廣孝が家老本多半左衛門が許に忍びしを、作左衛門密かに家康に訴へて之を營救せしなりとぞ。（中略）生まれし兒は作左またおのが子として之れを養ひ、三歲のとき、兄信康この愛弟を連れて家康に見え、始めて實の父の膝に抱かれぬ。之れを尤も喜びしは、父よりも兄よりも、將た其の幼兒よりも實は他人の作左衛門なるべし。（中略）

「許多の武士味方の大家に遣はすめでたき養子と喜ばで、一時和したる敵國に遣はす質子なりと思ひ做しし中にも、作左衛門特に此念强かるべく、許さぬ仇敵の詐術と見ては、縱ひ戰國の世の習ひながらも、豪鋭の性いかで一冷笑に附し去るべき。而かも今は此の作左が身に、已れ多年養ひ進らせし公子をば、そが犧牲に供せさるべからざる難題、直接に降り臨

りぬ（中略）極譚の作左を首肯せしめしには、家康必ず若干の苦勞ありしなるべく、作者も亦己れを抑えて、もだし難き君命を奉ぜしには、千鈞の力をもて勇斷せしなるべし。而して僅に十一歳の幼者をば、識らぬ人に托して遣るに忍びで、遂におのが一人の愛兒をもさし出だして、其の行を共にせしむるに至りき、奉公の衷心、亦何ぞ美なるや。離別の際、作左が武骨の哀情眼前に髣髴たり。是より作左が心は常に上方に馳せて、二人の身の上に到ると共に、秀吉が振舞を注目することも一層嚴刻となりしなるべし。（中略）

「さる程に（中略）德川の家中にては、彌增す敵意と猜忌とをもて、上方の空を眺めつつ、變心測られぬ秀吉、いつ攻め來んも知り難しと、衆情枕をさへ安んぜざりし折柄、とりどりの流言傳はり、中にも秀吉於義丸等を殺すべしとの風聞は、痛く一家の人心をぞ刺しにける。（中略）家康は流石に忍刻の人、冷然として言へらく、『秀康今は我子にあらで、秀吉が子なり。之を殺すは秀吉の不義なり。殺さば殺せ』と。想ふに秀吉往々威喝を用ゐて人を屈するを慣術とすれども、亦敢て籠裡の小禽をば無益に殺生せん愚人にはあらじ。家康の智いかで之れを識らざることのあるべき。其の自若として無懇の蜚說に意を留めざるは、恐らくは此の邊の觀察もあるに依るなるべし。されど作左はまた斯くの如く冷酷に看過する能はずして、以爲へらく『いや〳〵仙千代丸都におきて、人の疑うけん事も詮なし。ただひとりある子、うしなはんも不便なり』と。直に母の大病に言よせて、永訣のためにとて呼び還しぬ。蓋し作左我が子の愛情もさることながら、おのが多年育て上げし公子が身危しと聽きては、其の痛傷の感いかで仙千代を念ふにも劣るべき。既に秀吉に與へし上は、今更これを取返さんやうも無けれど、其の儘都に置きては、不安の想ひに得堪へで、仙千代が身に先だちて、必ず家康に公子が事を訴へしなるべく、坐上無道の秀吉を罵りし憤慨の豪氣も察せられたり。家康も於義丸は兎も角、仙千代招還せんことは作左が老情を憫みて、喜びて許ししなるべく、母が大病とは圓滑に聞こえて、否み難き好辭柄なりけり。猛き作左も子さへ還らばと、斯くは穩便に言ひ做ししなるべし。腹黑き主人の注意もありなん乎。且つ夫れ仙千代と共に隨ひ行きし勝千代が父は、彼の秀吉が覺よき石川伯耆守にして、德川の家中には兼ねてより、竊に其の貳心を疑へる者さへありければ、作左は素より忠侃一邊の男なれど、當時雜說紛々の折柄、伯耆守と共に子思ひの作左が心底も動かずやと、家中の噂

にも上りしことあるべく、疚しからぬ腹を揣摩せられて、潔白を傷けんも口惜しと、さてこそ思へば待てぬ作左衛門、急に疑の種をば引き戻すに至りしなるべけれ。」

　これは本多作左衛門と共に秀吉に慴伏する家康を論じた「鬼作左」の中の一節である。諸君は今もなほ大久保湖州を明治の才人の一人に數へる僕の蒙を笑殺するであらうか？笑殺するとしないとは勿論諸君の隨意である。唯僕は前に舉げた「傳記私言數則」の中に「天自ら言はず、人をして言はしむ、されど人の聲は、必ずしも天の聲と一致せず、人の褒貶毀譽は、數々天の公裁と齟齬す。人世尤も憐むべきは、生前天の聲を聞かずして死に入るものと爲す。後人は彼が爲めに、天に代り死後の知己たらざるべからず」の語を讀んだ時、我々の忘れてゐた湖州の爲に愴然の感を深うした。僕の文章は何であるにしろ、嚴肅なる天の聲などを代辯しないことは確かである。いや、得々と諸君の前に僕の發見を誇らうとする人の聲に外ならぬかも知れない。しかし僕の文章を機會に、正眞正銘の天の聲の「家康と直弼」を讃美することは必しもないとは云ひ難いであらう。して見れば僕の文章は中道に倒れた先達の爲にも多少の回向にはなる筈である。云はば僕は孤墳の所在を出來るだけ叮嚀に指し示した。この寂しい孤墳の前に人々の禮するのはいつのことであらう。更に又無數の花束の手向けられるのはいつのことであらう。

血と砂

イバニエス著　鈴木厚譯

定價貳圓六拾錢

送料十九錢　四六判上製

忽ち十版

イバニエスの出現が西歐文壇近時の驚異であつたと共に、彼の出世作「血と砂」は寫實主義文學の廣大な沙漠の中に誕生せる革命的新彩に充ちた**ロマンチシズム**の先驅であつた。

「世界に二人とない鬪牛士」として西班牙の首都でもてはやされた**ガルラアド**を主人公とし、それに配するに神の如き美はしき**カルメン**――そして、某侯爵の姪――の間に起れる三角關係に筆を起し、鬪牛士の面白き生活、悲壯なる最後、そして我國には全く神秘の國であつた西班牙の異つた舞臺を展開せしむ。

彼は飄然として我國へ來り、又飄然として我國を去つた。彼の驚くべき燃犀、深酷の筆致によりて西班牙に横行する唯物主義的義賊がいかに描かれ、そして八公、熊公の無産階級の世界的大歡樂郷が、鬪牛場を通して我等にいかなる新しき興味をそそらしめるか。

それは全く彼の如き思想的に豐富な背景を有つ一大文豪でなければ能きない近代的の收穫であつた。**新しくて、面白くて、舞臺が全く變つてるから面白いことは限りない。**

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京四八〇二


イージーおしめ
決して衣服や蒲團を汚さず
外出にも絶對御安全!!
特長
◎伸縮自在の純ゴム製おしめカバーにして體裁頗る上品◎大小便は決して漏れず、赤ちゃんの衣類は常に清潔◎着脱に手數がからず、洗濯はたゞ水をかける許りで奇麗になりますカサ張らず旅行携帶に便利
イージーおしめ定價
小形(二重)七〇錢 八〇錢
大形(四重)八〇錢 九〇錢
純ゴム特製 一圓十錢 一圓卅錢
◎振替口座東京一三〇〇二番
直接發賣元へ御注文の節は送料十二錢添へ前金に御願ひ致します。代金引換は送料二十四錢切手御前送下さい。
到る處の藥店にあり
發賣元
東京向島寺島町生產館前
大和ゴム製作所
電話墨田四二一、一〇三三、一〇三四番

創作欄

にも上りしことあるべく、疚しからぬ腹を揣摩せられて、潔白を傷けんも口惜しと、さてこそ思へば待てぬ作左衞門、念に疑の種をば引き戻すに至りしなるべけれ。」

これは本多作左衞門と共に秀吉に雌伏する家康を論じた「鬼作左」の中の一節である。諸君は今もなほ大久保湖州を明治の才人の一人に數へる僕の蒙を笑殺するであらうか？　笑殺するとしないとは勿論諸君の隨意である。唯僕は前に擧げた「傳記私言數則」の中に「天自ら言はず、人をして言はしむ、されど人の聲は、必ずしも天の聲と一致せず、人の褒貶毀譽は、數々天の公裁と齟齬す。人世尤も憐むべきは、生前天の聲を聞かずして死に入るものと爲す。後人は彼が爲めに、天に代り死後の知己たらざるべからず」の語を讀んだ時、我々の忘れてゐた湖州の爲に愴然の感を深うした。僕の文章は何であるにしろ、嚴肅なる天の聲などを代辯しないことは確かである。いや、得々と諸君の前に僕の發見を誇らうとする人の聲に外ならぬかも知れない。しかし僕の文章を機會に、正眞正銘の天の聲の「家康と直弼」を賛美することは必しもないとは云ひ難いであらう。して見れば僕の文章は中道に倒れた先達の爲にも多少の回向にはなる筈である。云はば僕は孤墳の所在を出來るだけ叮嚀に指し示した。この寂しい孤墳の前に人々の禮するのはいつのことであらう。更に又無數の花束の手向けられるのはいつのことであらう。

イバニエス著　鈴木厚譯

血と砂

定價貳圓六拾錢　送料十九錢　四六判上製

忽ち十版

イバニエスの出現が西歐文壇近時の驚異であつたと共に、彼の出世作「血と砂」は寫實主義文學の廣大な沙漠の中に誕生せる革命的新彩に充ちたロマンチシズムの先驅であつた。

「世界に二人とない鬪牛士」として西班牙の首都でもてはやされたガルラアドを主人公とし、それに配するに神の如き美はしきカルメン——そして、某侯爵の姪——の間に起れる三角關係に筆を起し、鬪牛士の面白き生活、悲壯なる最後、そして我國には全く神秘の國であつた西班牙の異つた舞臺を展開せしむ。

彼は飄然として我國へ來り、又飄然として我國を去つた。彼の驚くべき燃犀、深酷の筆致によりて西班牙に横行する唯物主義的盜賊が、いかに描かれ、そして八公、熊公の無産階級の世界的大歡樂郷が、鬪牛場を通して我等にいかなる新しき興味をそそらしめるか。

それは全く彼の如き思想的に豐富な背景を有つ一大文豪でなければ描きない近代的の收穫であつた。新しくて、面白くて、舞臺が全く變つてるから面白いことは限りない。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京四八〇二


イージーおしめ
決して衣服や蒲團を汚さず
外出にも絶對御安全!!
特長
◎伸縮自在の純ゴム製おしめカバーにして體裁頗る上品◎大小便は決して漏れず、赤ちやんの衣類は常に清潔◎着脱に手數がからず、洗濯はたゞ水をかける許りで奇麗になりますカサ張らず旅行携帶に便利
イージーおしめ定價
(男子用) 小形(二歳迄) 七〇錢 (女子用) 八〇錢
(兼用) 大形(三歳迄) 八〇錢 九〇錢
純ゴム特製 一圓十錢 一圓卅錢
到る處の藥店にあり
發賣元
東京向島寺島町火葬場前
大和ゴム製作所
電話墨田四二一、一〇三三、一〇三四番
◎振替口座東京一三〇〇二番 直接發賣元へ御注文の節は送料十二錢添へ前金に御願ひ致します。代金引換は送料二十四錢切手御添付下さい。

創作欄



嘘らしい話

有島生馬

この谷から隧道を潜つて町へ通ふ電車を橋の袂の松の下で彼は待つてゐた。どんより曇つた朝で、河口の波音も聞えない位だつた。魚屋が二人荷を擔いで急いで橋を渡つて行く、その話聲が妙に調子高く靜かな松林の中へ傳つて來た。

電車を待ちながら、松葉の散つてゐるしめつた砂の上を彼はあちこち歩いた。入梅の雨と共に急に丈の伸びた山の草の中にはぽつ〳〵白百合が咲き初めた。暗い天の光が綠に映つて一層鮮かに、照りつける日とは自ら異つた軟かさを感じられた。

電車の近づく響が先づ電線を傳つて來た。電線は波打つて搖れた。やがて光つた線路の上を見る〳〵大きくなつて電車が滑つて來た。運轉手の忙しくブレークを廻すのが窓の中に見え、やがて徐かに彼の前に停つた。彼は運轉手臺の方から飛び乘つた。車内に這入ると直ぐ或る異常な感を受けた。電車は動き出した。

毎日の事だつたから、彼は運轉手の顏も、車掌の顏も皆んな知つてゐた。のみな

らず、電車内の乘客をも悉く知つてゐた——とも云へた。なぜならそこにはいつも同じ人——と云つてはいけないが、同じ種類の人しか乘つてゐなかつたからだ。變つた人はゐても、變つた種類の人はゐなかつた。その人々の顏も、その人々の服裝も、その人々の持物も、悉く僅か五六種の型の中に限られて終つてゐた。村の人か都の人か、若いか年とつてゐるか、コオルテンの鞄と土産物とを手拭で振分けて擔いでゐる遠い地方の人か、細い杖と派手な日傘を持つた新婚の若夫婦か、そのどれかの括弧内に入るべき人々が厭き／＼するほど、いつも同じ表情で、いつも同じやうに、そこに腰かけてゐる許りであつた。然し今日だけはその單調な空氣が亂され、或る異常なものが、這入つた途端直ぐそこに感じられた。といふより寧ろ彼が這入つた時、車内の人々が既に或る異常なものを感じてゐて、それを彼に感染せしめたと云ふべきだつた。

車内の人々は皆んなこつちにかたまつて向を見てゐた。電車の後方、車掌臺の入口に添つた仕切の硝子窓に倚りかゝつた二人の婦人があつた。その脇には一人も人がたかつてゐなかつた。車掌臺の方には四五人の人が立つてゐたが、車内の空席をそのまゝにしてゐた。人々の視線は兩方からこの二人の婦人に集められ、或る緊張した空氣が漲つてゐた。

女は向ひ合つて、一人は俯向き、一人は仰向に窓にもたれかゝつたまゝぐたりとなつてゐた。髮の毛が散らばつて眞蒼な顏から肩に下つてゐた。二人は身動きもせず、勿論人々の視線を恐れもしなかつた。彼は人々の肩越しにもつと仔細に二人の方を見た。一人はもう四十を越えてゐたらう。痩せた頰は妙に紫色に黑ずんで、眼を半分開いたまゝ仰向に窓にもたれてゐた。然し開かれたその眼は動きも、瞬きもしなかつた。醜く口も明いたまゝになつてゐた。もう一人の女はやつと二十位にしか見えなかつた。醜いことは殆ど同じやうに醜かつたが、俯向いてゐただけに醜さが少し隱されてゐた。二人とも粗末な浴衣に古びた帶をしめてゐたが、それがぐしよ濡れになつてすつかり身體に吸ひ付いて終つてゐた。その濡れてぴたりと身體についた着物の下に生きた肉體とは感じの違ふ體格がぎごちなく、木のやうに感じられた。髮からも、

着物からも、雫がぽた〳〵たれて、床板を暗く濡らしてゐた。

身投げですか。彼は脇の人に小聲で聞いた。

えゝ、××から今連れて來たんです。

親子らしいね。外の一人が云つた。

さうかも知れねえ……どこか似てゐるな。

彼は改めて二人の方を見た。憐憫よりも或る憤りがその心を支配してゐた。

もう駄目かね。

さうでもあんめい。何しろ早かつたからね。

早くつてよかつたが、こんなになると態ねえもんだな。

死んだ方がまだましだんべえ。

全くよ。

隧道へ這入ると電燈の火に照され、二人の姿は闇の中に物凄く浮び出して來た。皆んな遠くから薄氣味惡さうにそれを眺めて默つて終つた。二人は暗い世界から來るとその場所を得たかのやうに落付いて見え出した。醜い中にも、氣味惡い中にも或る嚴かな感が伴はれた。生きやうとする人々と、死のうとする人々の間には越せない隔りがあつた。生者と死者の中間に消遥ふものが、彼を誘つて人生の恐ろしい暗黒の淵へ導きその底を覗かせでもするかのやうな氣がした。早く隧道を出ればいゝと思へた。然し隧道を出てみると、二人の姿は餘りあからさま過ぎて目もあてられず醜かつた。

電車が終點に着くと警察から菰をもつた人夫が二三人迎ひに來てゐた。××から從いて來た巡査が指圖して、一人づゝ頭と足をもつて電車から下し、往來の地面にぢかに敷いた菰の上に搬び出した。濡れた髮の毛も、着物も濠の砂で一面に

まみれてゐた。髪の間から頭の肌に砂のなすり込まれてゐるのは悲慘な感だつた。擔ばれながら兩方の腕は人形のやうにだらりとぶら下つて爪の色が變つてゐた。

それは朝七時頃のとだつた その日の夕方町から谷の方へ歸る電車の中で偶然彼は亦今朝の巡査と乘合せた。氣が付いてみると今朝のも、これも四號といふ電車だ。この電車は何度となく人を轢き殺したといふので有名になつてゐる車だつた。

助かりましたか今朝の人達は。彼が訊いた。

え丶、助かるには助かりました。大して水も飮んでゐませんでしたから。なにしろ今朝は凪でしたからよかつたんで、あれで荒れてゞもゐやうもんなら、助かりつこありませんでした。

身元は分りましたか。

大慨分りました あなた方は御承知かも知れません、××ていふ×學博士の奧さんとお孃さんらしいんです。今照會中ですが……。

××さんの奧さんとお孃さんですか。さうですか。

彼は二十年も前にその人から××を敎はつたことを憶ひ出した。博士は永く支那にゐた人だけに豪傑肌で、家事を顧ず、淸貧に安じるといふ人で、學生からも好意を持たれてゐた。どんな事情があつてこんなことが起つたのか彼には想像もつかなかつたが然し二十年の間には××さんだつて、どんなに變つたかそれは分らないと思つてみた。

何しろやり切れません何日此頃のやうにかう澤山ぢやあ。

そんなですか。

え丶、毎年この六七月つて月が一番多いんです。

では新聞に出ないやうな事件もあるんですか、

どうしてある所ぢやありません。出ない方が多いんです。警察としては成るべく出さない方針をとつてゐるんです。身元の分らないのなどで止むを得ず出すのもありますが。今日あたりあ、なんでせう、留置場に五人も這入つてゐます。別にかういふ人達を入れて置くといふ特別の部屋の設備もないんですから。

男も女も一緒にですか。

さうです仕方がありませんから。

それは少し亂暴じあないんですか。

はゝゝゝと笑つて、でも仕方がないんです。然し一緒にして置くと泣いたり、笑つたり、喧嘩したりするんで困ります。

まさか喧嘩もしないでせう。

所がおほしなんです。今日なんか大分激しいのが初まつて午飯にとつてやつた親子丼を投げ付け、一人は額にひどい怪我をしました。

本統ですか。

本統ですとも。

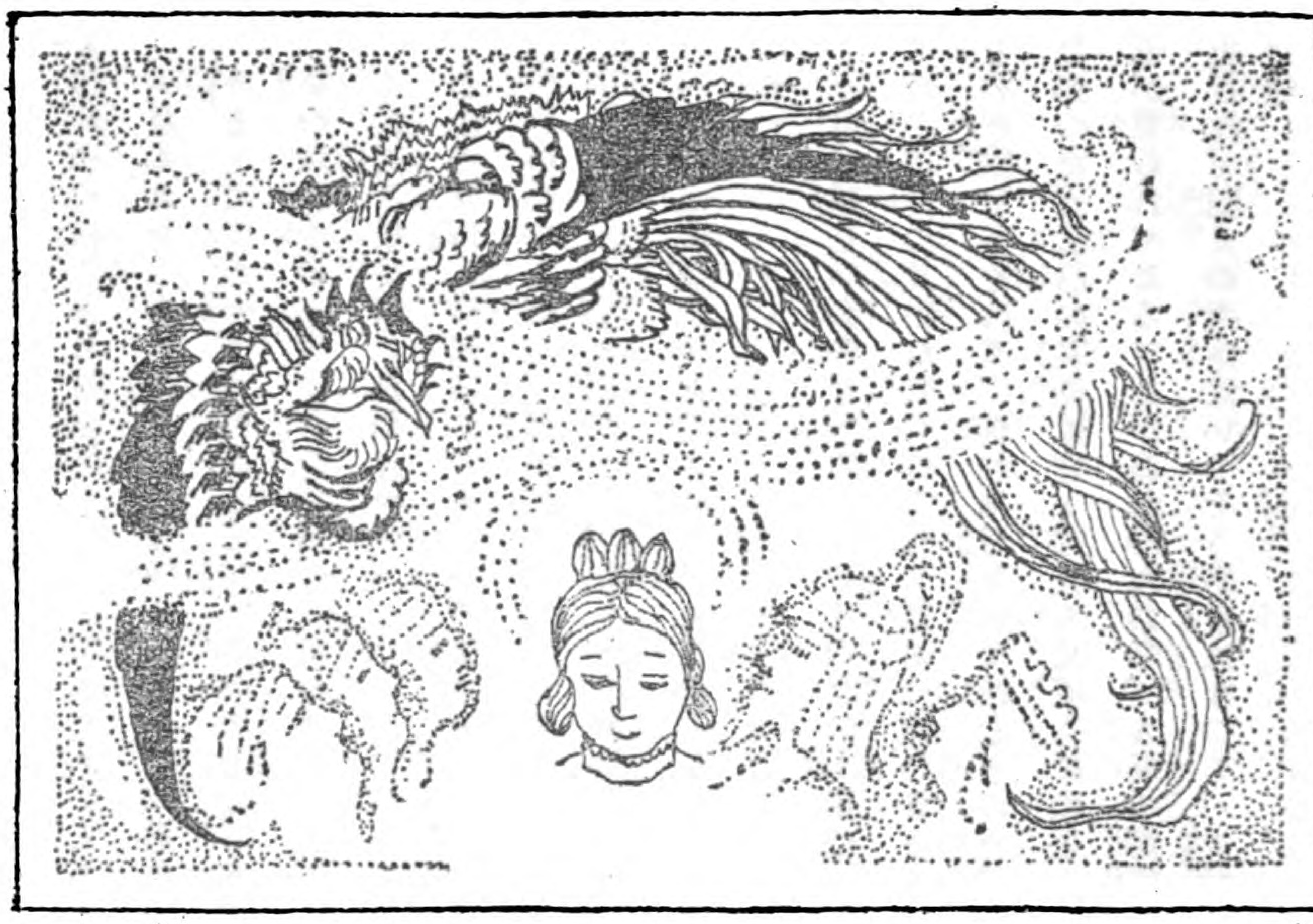
身投げでもしやうといふ人が警察で、警察の中で……さうですかね。

えゝえゝ、喧嘩でも、取組でも、毆り合ひでも、なんでもやり出します。それはどうして陽氣なもんです。

巡査はさういつて留置場の滑稽な光景――地獄の我鬼共が摑み合ふ繪圖でも憶出すやうにから〱と笑つた。

然し彼は笑ふより呆れて終つた。淺間しいと思ふより馬鹿らしくなつて終つた。で××博士の奥さんと娘がその喧嘩にどんな關係があつたものか、それを訊いてみる勇氣もなくなつて終つた。

電車はいつか赤隧道の處まで來てゐて、暗闇へ這入つて行つた。（海村雜記のうち）



鳳凰天に搏つ

柳原白蓮

□

この驚くべき不時の出來ごとに、これはそも何者の仕業であらうかと、上下左右の者達は皆色を失つてたゞ狼狽するばかりであつた。將士の機敏な働らきによつて、時を移さず犯人の搜索を始められたのだけれど、この重罪犯人らしい者は一向に發見されなかつた。そればかりではない、此の邊りと思ふ處にも證據物らしいものは何一つ殘されては居なかつた。幸ひ武后は微傷だに負はせられなかつたけれども、若しこれが何者かの恐ろしい目的のために行はれたものだとすれば、それは想像して見るだけでも由

由しき一大事に相違なかつた。日頃から人並優れて自尊心の强い武后のことなので、その怒りはまた一通りではなく、人人が何一つ得るところも無く、あわてふためいてゐる樣子を見て、いよ〳〵いらだたしさうに、

「なんぢや、まだ犯人はよう捕らへぬと？　そのとり亂しようは、まあ、何うしたものぢや。弓を放つた者は、たつた今そこに居た筈。それがまだ捕へられぬとは不都合千萬。この大勢の家來共は皆木偶か、それとも人形か。この御狩に集つた將士の輩は全く烏合の衆ぢや。その見苦しいあわてようは何事ぢや。わたしはこの大勢の家來の面前でまさしく裳裾を射貫かれたのぢや」

とあたり憚らず罵るのであつた。千軍萬馬の間を往來した猛將達も一國の宰相も彼女の前では親に叱られる幼い子供にも等しいのであつた。急使によつてこの變事を聞き知つた帝は、馬を飛ばして皇后の幔屋へ駈け付けられたのである。帝は先づ無事な皇后の樣子には安緒されたものゝ、その怒りはまた武后よりもいつそう烈しかつた。

「それは手負ひ猪を追ふ時の流れ矢かもしれぬ。猪狩の將士を一人も殘らず調べて見よ。たとへ過失にしろ用捨はならぬ」

と帝は嚴しい命令を下された。さつきの大猪は、皇后の居ます幔屋の横をすりぬけようとした時、力の勝れた一人の武士の手に持つ長鎗に刺されてうち取られたのであつた。猪を追ひながら皆の者は、武后の御座所の方に向つて矢を放つことの危險をおそれて、何れも弓を捨て鎗をとつたのである。さればかの征矢を帝の云はれる如に流れ矢と見る理にはゆかなかつた。武后の裳裾にさゝつた矢は直ちにぬきとられて、猶詳細に改められたのであるが、その矢尻には、怖るべき鴆毒が塗られてゐることがわかつたので、人々の驚愕上下の騷ぎは一入甚しくなつた。帝の命令によつて御獵は速座に中止され、犯人の搜索はいつそう嚴重になつて、大勢の者共は、草を分け石を掘り返しても犯人を捕へねばならぬと、一同血眼になつた。また諸々の關所は犯人を逃がさぬようにと、早馬を走らせて之を固めるなど、將士達は物々しく右往左往

に馳けめぐるのであつた。帝は事の餘りに重大なのを愛へて此の幄屋をそのまゝ會議所とし、群臣百官を召集されて俄かに御前會議を開かれた。

「私の考へますには、これは或は淑妃の縁類で、此度の御狩に加つたものがありまして、豫て折を狙つてした仕業ではないかと思ひまするが」

と進言する者があつたけれども、

「淑妃は先后王氏の在世の頃、既に失脚してしまつて、今では淑妃の身方らしいものは皆追放されて居る筈である。それが今日の御狩の中に加はる將卒の間に居ようとは信じられませぬ」

と多くの人々は之に耳を貸さうとしなかつた。

「それも淑妃殿が現存の人でもあれば、權力爭ひとか妬みとかで、或は武后の御身邊を窺ふものゝないとも限りませぬが、その人はもはや此世にない人であつて見ればそんな疑ひは起り得よう筈がない。これは何か國民の中に不平の徒でもあるのではありますまいか」

と云ひ出す人があつた。するとまた、

「今太平の世は長く續き、萬民こぞつて唐室の萬々歳を謳歌してゐる時にあたつて、斯うした不祥事の起らうとは夢にも想像が出來ませぬ。これは狂人か但しは馬鹿者の所作に異いないでせう」

「と申して人の雜踏する洛中に於ての出來ごとではなし、この山中、人里を遠く離れた所に、別種の人の入り込みよう筈もありません。容易に見當のつかぬこの詮議には、我々もほと〳〵困り入る次第であります」

と反駁する者があつた。

「猶それならば念のために、士卒の群の中にも心當りはないか、調べて見るがよろしからう」

それで直ちに令して士卒の面々に至るまでひとり〴〵に取り調べ、心當りの者もあれば直さま申出でよと尋ねられるのであつた。そして其の中で最も有力な話を傳へたのは衞護の士卒が申立てた優孟の馬鹿のことであつた。

「昨日私共が篝火を圍んで人の出入りを嚴重に見守つて居りました時、丁度その折私共の面前を異樣な風體の者が通りかゝりました。依つて呼び止めて色々と訊しますると、この男は畏多くも陛下の狩を遊ばすことについて、かれこれと無禮なことを申しますので御座います。それで聞き捨てならぬと存じまして、ひどくたしなめてやりましたら、子供のやうにたわいもなく泣き出しましたので、どのみち普通の人間だけの智慧も持たない馬鹿だと考へまして、そのまゝ放免致しました」

この上申を聞いた役人は、折返しその衞護の士卒に、

「うん、さういふ愚者は何を致すかわからぬものだ。この男は先づ詮議致す必要があるから速かにこゝへ引き立てゝくるがいゝ」

といひつけた。その言葉の下に直ちに衞護の士卒は、かの優孟の顏を見知つてゐるもの數人と山また谷を尋ね廻り、忽ち彼を捕へて、この訊問所に連れて來たのである。

「これが先程申上げました優孟と申す男で御座います」

と衞護の士卒は山男の優孟を、役人の前に引き出した。役人はつく〴〵と優孟の顏を見て居たが、

「こら、優孟とやら！お前はこの衞護の士卒達の顏を知つて居るか？」

「あゝ知つてゐるともさ、ゆうべ近づきになつたから」

と優孟は役人を格別恐れる氣色もなく答へた。

「して、お前は昨夜この士卒達と會つた時、何か不穩なことを申したとかいふが、何を話たのか有ていにこゝで申立てる

のだぞ」

「不穩なことつて？そりや何のことかな。ゆうべこの兵隊さん達と何をおれは話たつけかな」

其の時衞護の士卒のひとりが、

「優孟お前はもう隱しても駄目だぞ！お前は昨夜國王樣の御狩のことを何とか云つたじやないか？」

すると他の士卒が、

「お前だらう？御幔屋の方に向つて矢を射かけたのは」

「あはゝゝこつちの方には猿一疋居やしめえし、誰がそんな頓馬な眞似をするかい」

「いゝや隱してもちやんと解つてゐる。お前は畏多くも國王樣の御獵の御催しをひどく惡口したではないか？」

「何も惡口なんか云はねえよ。あたりまへのことを云つたまでのことよ」

なる程馬鹿の言葉だとも知りながらも、嚴格な場所柄をもわきまへぬあまりにはしたない口のさゝやうを、側で默つて聞いて居た役人は少し腹を立てゝ語氣を荒らげ、

「お前は何か云つたと申たな。その云つたことを逐一白狀に及べ！」

優孟は頓狂に目をぱちつかせながら左右を氣にするらしい身振りで、

「あの時云つたことを皆云つてしまへていふのか？ふん、何でもないことなんさ、ただ斯う云つたんだ。なんぼ國王樣が偉いか知んねえが、猿一疋だつて自分で造り出せもしないくせにこの山へ來て毎日〳〵何百疋とも知れない獸を殺しちや、きつと罰が當る。とそう云つてやつたのだ。それがいけないといふのかへ？」

役人は堪り兼ねたように、

「こりや、そんなことを申すとお前の首が飛ぶぞ！」

と優孟をおどしつけた。

「ほう、またかへ？何かつていふとお前さん達はよく殺生をしたがる。どうしてそんなに生き者が殺し度いのかなあ。ちよつとばかし矢が飛んで來てさへこの騷ぎじやあないか。本當に殺されてゐる鹿や猿の仲間に入つて見ろ……」

と馬鹿は何の憚りもなくのべ立てるのであつた。

「うん、だからお前はその猿共の仇を打つた積りでこの御幔屋に矢を放つたにちがひない。何うぢや正直に云へ！」

「そりやな。おれの仲間の猿や鹿どもがあんなに殺されたんだもの、友達がひに敵も打つてやりたいがな、それでもおれはこの幔屋には矢は打たないよ」

今度は衞護の士卒が口を添へた。

「それ見ろ！お前は鹿や猿が澤山殺されたのを恨んでゐるぢやないか？こつちの方へ矢を放たうといふ氣は必ずあつたに違ひない」

優孟は呆氣にとられたやうな顏つきをして士卒にいつた。

「お前さんまでそんなことをいふのか？おれは他處には射ても、こつちには矢は打たないよ。お前さんと約束をしたぢやないか？こゝは女の居る幔屋だらう。その美しい女どもを見せてやるからと、お前さん達はその約束で皆しておれの酒を飲んだぢやねえか？」

役人はこの意外の申立てに驚いた。そして此度は番卒の方を睨めつけて、

「こら、其方達は優孟と何を話たのか？」

番卒共は優孟に何もかも饒舌られては大變だと、はら／＼しながらそれを止めるために、色々と優孟に相圖をして見たが、優孟は一向それを悟らず、べら／＼と飛んでもないことまで白狀してしまつたので番卒共は困り切つて、

「はつ、この男が馬鹿で御覧の通りの片輪者なので、つい面白さに戯談つて見たまでのことなので御座います。決してそんなことは申しません。何うしてこんな愚者を眞面目に相手にすることが出來ませうか、其邊の處はよろしく御賢察を御願ひ致します」

と苦しい云ひわけをしたが、役人はそれをたしなめるやうに、

「併し優孟の持つてゐた酒を、其方共はとり上げて飲んだといふではないか？」

優孟はのり出して、

「あゝさうさ、おれの持つてゐた徳利に、何が入つてゐるかとこの人達が聞くから、これは容易に手に入らぬ甘露の酒だといつてやつた。そしたらその酒を是非くれろといふから、人間のこさへた粗末な酒とは異ふ。何しろおれの仲間の猿がこしらへた甘露の酒だ。さうむやみやたらにおまへさん達にやれるもんかつて斷つたら……」

もうその先は云ふなといふ風に氣が氣でない。番卒共は優孟を睨みつけるのであつた。すると流石に馬鹿にもその心もちだけでは解つたものと見えて、

「うむ、いつちやいけねえのか？おまへさん達がこのおれに幔屋の中のきれいな女を見せてやるつて約束をしたあのことはな、この役人には内證なんだね」

と聞いて役人は怒つて番卒共に、

「昨夜其方共は何をしてゐたのだ。衛護を勤める重い役目を忘れて何事だ！畏多くも陛下の御側近くに奉仕する宮女達を見せ物にする約束をしたとは、不屆き至極である。たわけ者奴！」

と叱られて番卒共は、

「御覧の通り優孟は性來が馬鹿者なので御座います。私共が何でそんな約束を致しますものですか。この相手をよく御

覧になつて下さいまし。この男は嘘を云つてるので御座います」

と云はれて優孟はやつきとなつた。

「約束したさ。向ふの幔屋の中に美しい女がたんとゐるが、お前は見度かないかと。見たけりやその酒を置いてゆけ。そしてあしたまた甘露の酒をもつと持つて來たら、あの女達を見せてやるからとそう云つたのだ。それでおれは今日山奥へ酒をとりに行つたそのかへり道を、否應なしにこんなところへつれて來たのだよ」

役人はなほも優孟を確めながら、

「うん、して見ると今までお前は山の奥に入つてゐたのだな？確に相違あるまいな。もし違つたら承知をしないぞ」

「確だともさ。おれは幔屋の中のきれいな女を見せて貰ひたいばかりに、山へ酒をとりに行つたんだ。おれはちやんと約束を守つてゐらあ。なあ。おい！兵隊さん！」

と番卒の方をふり向いた。番卒はそしらぬ顔をしてゐる。すると優孟は兩手で酒徳利を振つて見せながら、

「これ！この通り酒が入つてゐるぜ！みんなあとでお前さん達にやるよ」

と横を向いてゐる番卒共に猫聲をかけようとするのを役人が、

「こら！此所を何と心得てゐる！」

と叱られて優孟は肩をすぼめて小さくなつてしまつた。

「して見るとお前は矢を射つた者ではないのだな？」

「矢なんか持つてゆくもんか。今日は酒とりに行つたのだ。第一あの山の中からこんな處へ矢が的るものか。わからねえことをいふ人だね。お前さんは役人のくせしてそんなことをいふなんておれより頓馬だぜ」

「この男を放免しろ！」

と役人は士卒に命じた。士卒は、

「お前はもう歸つてよろしい」

優孟は何か物足らぬような顏をしながら、

「このまま歸るのかへ？約束の酒はどうするんだ。きれいな女を見せるつて云つたのは？」

「こら！まだそんなことをいふ。馬鹿！早く歸れ！」

と番卒は腹立しさうに優孟の口を手で閉さむばかりにして彼を外へ伴ひ出した。役人は優孟と共に外に出てしまはふとする番卒を呼び止めて、

「これ！其方は外へ出てはならぬ。優孟にはもはや用事はない、捨て置け！改めて昨夜當番の衞護の士卒共に申し渡す。其方共は役目をおろそかに致し、それのみならず、上長へ對して以つての外の不屆きなことを致した。何れ輕からぬ御咎めがあらう、それまでは幔屋の中に謹んで何分の御沙汰を待つて居ろ！」

と云ひ渡した。衞護の士卒等は觀念したらしく、皆默つて役人に云はれるまゝに各々自分等の幔屋の方へと何れも引き退がつてしまつた。

さてその後はいよ〳〵罪人が捕へられぬ爲めに、その詮議は益々嚴重になるばかりであつた。この假りの訊問所に出入する物々しい人馬の足の繁くなればなるほど、この犯人の捜査は愈々困難を加へるのであつた。

さつきから帝と皇后との御前に開かれてゐる會議では、この思ひかけぬ不祥な出來事のために直ちに狩を中止して、明日は都に還幸といふことになつたのであるが、その還幸の道中の警護の嚴しさはまた格別であつた。かゝる間にも幾多の嫌疑者は捕へられ、かつ無實の罪とわかつて放免された者も數知れない程であつた。はてはこの重大事件の裏面には彼の長孫無忌や褚遂良等の新后冊立に反對した一味の者が潜んでゐるのではあるまいかとの推測は誰もが胸に浮ぶのであつ

た。されば李勣や許敬宗や李義府などの名將や宰相達は皆自分等の落度なりとして、懸命に罪人を探し出だすべく焦せり立つたが、則天皇后は何を考へたものか、さつきとはまるで異つたことを云ひ出した。

「御上は何と仰せられようとも、わたしの生命にかゝわつたことでは無かつたし、幸ひ斯うして何の微傷だにも負はずに健かにしてゐるのだから、この罪人を強いて探すことを止めて、もう打ち捨てゝ置いてもらいたい」

人々は武后のこの突然なそしてあまりに寛大な意見を聞いて、その心底を計り兼ねた。出來ごとは實に天下の大事、さう易々と中止などとは思ひもよらぬことなのである。ましてさつきから非常に怒つて將卒を督して居られる帝は、武后のこの言葉の意外なのに愈々焦ら立つて來られたらしく、

「そりや何を云ふのぢや。かりそめにも我等を窺ふ不屆き者は誰人にもせよ極刑に處するはこれ當然の國の掟なのぢや。その罪は實に九族にも及ばねばならぬ。」

「いゝえ、それはなりませぬ。私にも考へのあること、どうぞこれだけは………」

「たとへどんな考へがあるにもせよ、國の掟は重いのぢやぞ！」

武后は帝に懇願するように、

「これが他の高位高官達でも狙撃されましたのならいざしらず……」

帝はこれを聞きとがめて、

「何ぢや？他の高官達ならいざしらずぢやと？それはまた何うしたのぢや。そちは今日の身分を何と心得てゐる。たとへ高位高官とても畢竟我等が臣下の者共ではないか。この出來事はそれ等に對して行はれてさへ重罪なのぢや。ましてそちに向つて矢を放つなんぞとは、彼等の場合とはまた比らべものにならぬ大事ぢや。そちは何うか致してゐるな。あまりの驚ろきに氣も轉倒したのか。さうぢやろうとも、婦女子のことなれば無理もないことぢや」

武后はやゝ怒氣を含んで問ひかけた。

「御上！わたくしが亂心したと仰せられるので御座いますか？」

帝はやさしく云ひ聞かすように、

「いや、あながちそういふた譯でもないが、そちの今の身分をよく〳〵考へて見るがいゝ。かつての詔儀や、皇后の侍女の時とは違ふぞよ。今は國母として萬民に君臨するところの皇后ではないか。その身を卑下するにも程がある。それでは却つて私の威嚴にも關はるといふものぢや」

と終りの言葉はいつになく武后を叱るようであつた。武后にはさま〳〵の考へが浮んでゐた。斯うした萬民周知の大事に出合ひ、この不幸に於てこそ此の身の力と萬民に對するへだてなき愛とを示めさねばならぬ。かくしてこそ王者としての權威もいや增すであろう。まして此度の罪人は自分を皇后として裁くのに不平を抱く徒輩の業であろうと察せられる。されば尙更彼等の意表に出でて、寛仁の度量を示めさねばなるまい。刄を以つて歯向ふものには德を以つて悅服させるのが王者の踏むべき道なのだ。と斯う思ひこんだ武后は尙も屈せずに、

「その御思召はあべこべなのでは御座いますまいか。御上は今のわたくしの身分をあまりに低く輕々しく見て御出になります。もしもわたくしが以前の臣下の身分にあるので御座いましたならば、それは是非とも犯人を捕らへて重き罪科に處して頂かねばなりませぬ。それが國法を重ずるの道でも御座りませう、また私としてもさうして頂かねばこの胸が納まりますまい。けれども御上も仰せられます通り、今は國母として萬民は赤子のように慈しまねばならぬこの身、その人民の中の唯ひとつかふたつの生命でも私故に處分して頂かうとは存じもよりませぬ」

側から李勣は帝と武后との意見の相異を何とかして和らげ、そして此の場合武后が帝の言葉に從はれるよう計らはうとして武后に、

「皇后様の仰せながら、その思召は私共には一向に合點が參り兼ねます。此度ゆくりなくこの重大事を惹き起しましたることは、一つには私共の不束の致す處と、此所に控へ居ります面々の何れも共に、如何ようの御咎めも致し方ない義と覺悟致して居るので御座いまする。ましてこの大罪を犯せる者に至りましては、最早何等斟酌の餘地は御座りませぬ。只今陛下の仰せられました通り、實に其の罪九族にも及ぼすべきはあたりまへのことかと存じます。勿論この不心得者に對して、一片の許すべき點は更にないと存じますから見付け次第に……」

武后が默然としてこの李勣の言葉を聞いて居られるのを、帝はやゝ合點したものと見てとり李勣に、

「狩も中止ぢやによつて、もはや斯ういふ所に長居の必要はない。早速只今からでも歸洛の用意をしよう。が斯ういふことにあつて見ると、まして犯人もまだ捕へられぬ時であるから歸りの道筋も案じられる、これ李毅府！還幸の途次、長安の都までの通路は充分堅固に守り疎漏のないように致すであろうな？」

李毅府は畏れ入つて、

「仰せまでも御座りませぬ。還幸の御通路は既に數萬の兵を以つて固め、なほその上に遠近の兵を召集致し、其の數二十萬騎といふものを今夜中にそれ〴〵配置出來得るように、計らつて置きまして御座りまする。故にその點に於きましては、何卒御安心遊ばして頂き度う存じまする」

すると武后は打ち驚いたように李毅府に向つて、

「あゝ、これ！それはまた何事ぢや。直ちに物々しい警護は解かねばなりませぬぞ！」

してまた改めて帝に、

「ではせめて還幸の御道筋の警護なりともゆるやかにして頂き度う御願ひ申上げます。私と致しまして、そんな嚴しい警護の中をどうして通られませう。丁度敵國の中をでも行くような。それは萬民をあまりに侮辱した致し方ではあるま

いかと、私には堪へられない心地が致します。御上！」
と懇願するのであつた。李義府はこの言葉をさへぎつて、
「たとへ一人たりとも斯る不心得者を出しました以上、人民共がその責めを負ふのは致し方のないことなので御座います。君主には君としての名譽もおありになる筈で御座います」
「それはまた何をいふのぢや。そういふことを致すのは實に高位を握つて天壤の間に驕るといふものぢや」
帝は武后の言葉をも耳に入れず尚ほ、
「いやならぬ。充分の警護を致せ！」
と李義府等に云はれると彼は畏こまつて、
「はい。只今注進の者が、既におさ〳〵怠りなく充分の手配を終つたと申して參りまして御座りまする」
則天皇后は自分の言葉の帝を初め是等の人々の中にも一つとして顧みられぬことを怒るといふよりも、いまは目に涙さへ浮かべて云はれた。
「李勣、李義府！わたしの行く爲めの道すぢに、最も親しかるべき我人民の中を、そんなことまでせねばならぬ程なら、わたしはむしろ此の身の位を呪ふであろう」
そして帝に對して武后はなほも熱心に說くのであつた。
「御上！何卒私の申上げるこゝろをよく汲みとつて頂かねばなりませぬ。そも〳〵この唐土億兆の民草は決して私共の奴隷では御座いますまい。人民は私共のまたとない寶、民あつての王位で御座います。人民がなければ帝位も王位も存在致しませぬ。昔秦の始皇帝は慘酷な車裂の誅罰を設けて邪惡を矯め、萬里の長城を築いて胡越の爲めの備へに致したので御座います。また宰相の李斯をして法律を國内に嚴にして天下を治めようとなされましたが、事の愈々煩雜になれ

ばなるほど、天下は益々亂れて參りました。法の愈々滋くなればなるほど邪惡は却つて熾んになつたと申します。これを御上は何と思召ます？古聖も申して居るでは御座いませぬか、刑を設くるは輕きを厭はず、德を爲すには重きを厭はず、罰を行ふには濫きを患へず、賞を布くには厚きを患へずと。身を殺して仁を爲すこそ本當の王道では御座いますまいか。私はこの唐の社稷を秦のような果敢ない運命に置かうとは思ひませぬ。御上！私が人民の爲めに殺されまするのが萬民の幸ならば、私は悅んで生命を捧げ度いので御座いまする」

と皇后の美しい眸は强い決心に輝いてゐた。李勣、李義府、許敬宗等は、武后の强い言葉に打たれて何うしてよいかわからずに、凡てを自分等の落度として繰り返し陳謝するより外なかつた。

「誠にもちまして、此の我々共の不行屆をどうかお叱り下さいまし」

武后は帝を動かすべく、何所までも我意を貫ぬく決心を面に見せて、

「御上！天下は馬上でとれたかは存じませぬが、國は馬上では治まりませぬ」

と諫めるようにいふのであつた。帝は、

「これは、そちの爲めばかりではない、このわしとても同じことぢや。斯ういふ人心の定めない世に、何の警護もなしにどうして都に歸られようぞ。そもそも油斷を致すといふことは愚なことぢや」

武后は此度は李勣等に、

「御上は惡い幻影に苛まれてお出になるのぢや。わたしには御上の御言葉も大切ながら、今となつてはそれよりもなほ萬民の心が大切なのだ。それはとりもなほさず御上の御爲めにもぢや」

帝は餘りに武后の意志の强いのに猶この上しひて逆らつたならばまたどんな難題を云ひ出すやらと、いさゝか恐れをなして遂に默つてしまはれた。帝の心がやゝ解けて自分の思ひ通りになるものと見てとつた武后は、やゝ落ち付いた言葉で

側の人々に云はれるのであつた。

「先づ〱此度だけはわたしの申付け通りにして貰らひ度いものぢや。成程そなた達の察してゐる通り、犯人に就てはわたしにも思ふ仔細もあるのぢやから」

李義府は恐る〱、

「はつ、誠に恐れ入つたる義ながら、或は彼の猪遂良及び長孫無忌等の企てました陰謀かと……」

「そうぢや、その通りぢや」

李勣が側から言葉を添へて云ふのであつた。

「長孫無忌は先帝太宗皇帝の皇后の御生家でもあり、承乾王が廢せられてから長孫無忌が先帝に御勸め申して今上皇帝を奉戴したので御座いますから、此度皇后樣を御冊立になるにつきましては隨分と御面倒なこともおありになつたので御座いますが、併しそれもこれも彼等が餘りに無理解であつたがためなので御座います」

「ほんにさうぢや。一人は大切な先帝の遺臣、一人は今上の御血統にも當る人。今あの二人の者は御上の御目通りを去つてしまつてはゐるが、なほ他にもあれ等と同じ心の人の數多殘つて居る筈ぢや」

武后は自分の主張を少しも曲げようとしなかつた。それは彼女の高い見識からと、ひとつには皇后としての強い誇りからであつた。彼女は誰人も解き得ないほどの高い氣位を一歩でも他人に蹂躙されることを欲しなかつたのである。彼女の前には帝も遂に意を屈せざるを得なくなつて、

「では皇后の申す通り行幸の道筋には特別の警護に及ばぬと沙汰致せ」

と人々に命ぜられた。すると武后も續いて嚴かに申渡されるのであつた。

「直ちに警護を解かねばなりませぬぞ！通路の大袈裟な警戒などほんに氣づまりな、思ふても息苦しうてならぬ。いら

ざる警護に身を固むるのは、それは自らの身を束縛することになるのぢやぞへ」

李勣、李義府、許敬宗等の顯臣達もかへす言葉もなくたゞ恐縮して、

「仰せのまゝにはからひませう」

といふのみであつた。武后はいふだけのことを云つた後は、歸路の用意をすべく帝を促がして共にその場を立つて行かれた。

後には手持ち不沙汰にたゞ呆然として、武后の後姿を見送つて居た李義府が許敬宗に、

「貴公は何と思はれるかの？今の皇后のあの御言葉を！」

「さればさ……」

李勣が側から、

「誠に婦人の心は解すべからざる迷宮にさも似たりだね。その恐るべき智慧は波立てる深淵の如しだ」

としみ〴〵と詠歎の吐息を漏しながらいふのであつた。

□

「これ！。眼を醒ましてくれ。もう何時であらう。何となく身に感ずる微風の樣子ではもう明け方のやうな氣がするが」

と、帝は側らに眠つて居た武后を搖り起されるのであつた。皇后はもう疾くに目を見開らいて居たのだけれども、眠りから醒めさへすれば、またしても暗い心に閉ざされてしまふ帝を、せめては夢の中だけでも明るい氣持ちに置き度いとの考へから、帝の安らかな眠りの少しでも長かれと思つて靜かにして居たのであつた。

「はい、もう夜が明けて居ります」

「太陽は出てゐるかな？」

と帝はまたしても尋ねられた。帝は先頃狩場から歸られると間も無く風眩を病み、可なり長い間その執拗な病魔と戰はれたのであつた。侍醫達はある限りの力をつくしてこれが治療につとめたけれども、何の驗も無く、果ては諸國に布令して良醫良藥をたづね、民間に行はれるありとあらゆる療養まで試みられたけれども、其の甲斐もなくて遂に失明してしまはれたのである。

「太陽はもう出てゐるかな？」

とまたしても同じことをきかれると、武后はこのまばゆい程の陽の光りをさへ知らずに居られる帝の樣子の痛々しさに、それには何とも返事をしなかつた。そしてあらぬ方へ話題を轉じて、

「もう春で御座います。あれ！あちらの方で鶯が……」

と耳をすます。武后の斯うした帝の痛手に觸れまいとする心遣ひは直ぐに帝の胸にひゞくのであつた。で帝はいつそうつまらなさゝうに、

「わしにはもう、あのまばゆいような太陽の光りさへもわからないのだ」

と、それでも暖かい陽の光りを手探りながらその力ない肱を延ばされると、武后は立つて窓の帳りを開け放して、外に照る柔らかい陽を誘ひ入れるのであつた。

「たとへ身は萬乘の位にあつても目が見えなくなつてはこの世の凡てを奪はれてしまつたも同樣な氣がする。わしの身にはもう晝も夜もないのぢや。唯暗ばかりの世界に今では帝位も何もあつてないようなものぢや」

と淋しさうに云はれるのを武后は、

「曉の太陽でさへ夕にはその光りを失ひますもの、まして人間、御目の光りを失ふたばかりで何でそのように御落膽

遊ばします。御上は世界中の王の中の王に在らせられます。御目は御不自由でもそれに變りは御座いませぬ」

「そうぢや。わしは目を失つて初めて目の尊さが解つた。ぢやが萬機躬にありとは云ひながら所詮はわしも人の子ぢや。限りない大自然の力の前には斯うもかよわいものであつたのか」

「この私が及ばずながら御上の御目になり御手になりおみあしになつて居ります」

「それはそうぢや。そちが女性の身としてわしがとるべき政事をさへ代つてやつてくれてゐる。そしてその決裁がいつも當を得てゐるのには物馴れた宰相等でさへも皆驚いてゐる。わしは其の點は滿足に思つてゐるのぢや」

「いゝえそれはわたくし一人の力ではないので御座います。すべては何事も御上の御名のもとに致すからこそで御座います。只今は斯うして國内もよく治まつて居るので御座いますけれど、併しそれも餘りに長く此の狀態が續きましたならまたどのような變動が起ろうも知れませぬ。とこそ存じてそれが不安でならないので御座います」

と云つて悧巧な武后はとかく心細がつてゐる帝をたてゝ、どこまでも帝あつてこその自分であるといふことを說くのであつた。そして猶云ひ續けて、

「それ故御上の御惱みの一日も早く御全快遊ばして頂かねばならぬと存じて、わたくしはまたも諸國に布令を出しました。或は未だ世に隱れた仙藥でもありはしないかと存じまして、身分の上下を問はず必ず帝の御目を癒やす御藥を知らせた者には多分の褒美を取らせるからと。それで人民達は皆爭つて良い御藥を求めに必死となつて居るので御座います。この四百餘州を尋ねましたなら、きつと手に入るものが有ろうと存じまする。さすればこの御眼の御惱みもやがてよくおなり遊ばす時があろうと信じて居ります。どうぞもう暫らくの間御辛抱遊ばして頂き度う存じます」

「うん、そちのその心遣ひを滿足に思ふてゐる。がそちにまで色々の手數やまして婦女子には重過ぎる役目まで負はせて、それが氣の毒でならぬのぢや」

「何のその御心遣ひは御無用にあそばしませ。あのいつもの御氣まゝな御上が、御病氣となると、まるで幼い子供のように、たわいもなくわたくし一人を母のように御慕ひ遊ばす、それがわたくしには嬉しいので御座います。斯う申上げたからとて、御不幸を却つて身の幸にして喜んでゝも居るかのように惡くおとり遊ばさないで下さいまし」

と武后の慰めの言葉の數々も、帝には何となしに空虚なように聞きなされるのであつた。帝の病氣は武后にとつて大して不仕合せともなつて居ないのみならず、彼女の底しれない怜悧さと、飽くことをしらぬ自尊心をいよ〳〵深むる動機ともなつてゐるのだといふことを帝は既によくさとつてゐられるのである。さう思ふとまたしても暗い氣持ちになるのを、帝はどこまでもその淋しさを押し隱くしながら平靜に語られるのであつた。

「わしもこの病を最大不幸と思ふことは止めにしよう。そちの手厚い看護は、斯うして初めて知つたのぢやもの、陗う!」

帝は失明のために不自由な身になつてからは、却つて言葉の一々の色分けまではつきりと解るほどの鋭い感覺を持つようになられた。そして言葉の主自身すらも氣のつかぬ程のこまかい心の動きようまで、ひとつ〳〵手にとるようにわかるので、いよ〳〵淋しさが募つて來た。してその淋しさは丁度深淵に動く渦卷のように、帝の痛ましい心を底のしれない暗黑の中に引き込まうとするのであつた。

是等の話の間に、武后は帝を助け起し參らせて、側にある金鈴を振ると、何人かの侍女達が現れ、手に〳〵朝の御用の道具など持つて入つて來た。この侍女達の手を借りて、朝の御身仕度がほゞ出來上ると、武后は別室にと退いて自分の身仕度をされるのであつた。武后が起つたあとには侍女達によつて打ち振られた二度目の金鈴の響きに應じて、此度は近侍の何人かゞ入つてくる。すると帝をそれ等の者に預けて侍女達は退出してしまつた。やがて晝の御衣に召しかへ、身仕度なつた武后が入つて來られ、そして武后自ら帝の御手をとつて宏欄によると、そこには立派な籠の中に飼はれた様々

な美しい聲の小鳥が節おもしろくさへづりかわしてゐた。「この小鳥らの方がわしよりも、もつと仕合せなのだ」と言葉にこそは出さね、帝は心の裡で斯うつぶやくのであつた。そしておとなしくそこに腰を下したまゝ默つて小鳥の歌に聞き入つて居られる帝の胸には既に熱い涙が湧いて居た。そこに朝の食事が運ばれると、帝はさも大儀さうに食事をとりながら

「不思議なものぢやなう。味は舌にあるものではなくて大方は目にあるものなのぢや。わしは斯うして物を見ずに食するようになつてからは、山海の珍味も、その美味を失つてしまつたのぢや」

と云ひながら、それでもいくらかは樂しさうに語らひながら帝は武后と共に食事を終つたが、暫らくするとそこに近侍の一人が入つて來て、

「皇后樣に申上げます。只今狄仁傑、姚崇等が今日の御政事向のことについて御裁下を仰ぎ度い數々の件をもつて、未央宮で臨御を御待ち受け申上げて居るとの使者が參りまして御座いますが、如何申して返しませうか?」

と跪いて申上げるのを聞いて帝は武后に、

「わしはもう政事のことなど煩はしくてならぬ。それではわしに代つて今日も亦そち一人が行つて政ごとを見てくるがいゝ、すべてはそちの意見に任せるであらう。わしはそれよりも斯うして小鳥らと遊んでゐる方がずんとましぢや」

「左樣なれば片時も猶豫のならぬことも御座りますれば、お淋しうは御座いませうけれど、暫らくお待ち遊ばして」

「うむ、そちの戻つてくる迄は、近侍の者共の伽をうけて待ち受けるであらうから」

帝の許を得て武后は敬いの禮をして靜かに行つてしまつた。武后の立ち去つたあとには暫らく沈默が續いたが、やがて帝は問はれた。

「誰かゐるか?」

「はい御側に控へて居ります。何ぞ御用で?」

と近侍は答へた。

「もう此所には誰も居ないのか?」

「はい、御近侍の外には誰も居りませぬ」

「皇后の侍女達もそこら邊りには居ないかな?」

「皇后樣があちらへ成らせられると共に皆御供をして行つてしまいました」

ときくと帝はいくらか氣が緩んだらしく、默つて居られたが、

「またいつもの笛の音がもう聞えて來る時分ぢや喃う」

とひとり言のように云はれる。そして何か遠い所の物音を聞き出さうとするかのように、じつと耳をすましてゐられた。

「今日こそわしはあの笛の主をしらべて見度いのぢや。そち達は誰も知らぬと申したな?」

「はい、一向に心當りも御座いませんので」

「そんな筈はないのぢや。この宮殿の中にあることをそち達が知らぬ道理はない筈ぢや」

と云ひかけて、之れには何か近侍の人達が憚らねばならぬ譯でもあるのではないかと、帝は強いてそれ以上聞きたゞそうとはしなかつた。とやがて遠くの方から切れ〴〵な笛の音が微かに聞えてくると、まるで待ち人でも來たときのように帝は急に元氣づかれて、

「おゝ、あの聲ぢや、あの笛の音ぢや」

とまたしても耳をすまされるのであつた。

「これ！お前達はもつとわしをあの笛の音の確に聞える所へ連れて行つてくれ」

近侍達はやゝ躊躇らう樣子であつたけれども、帝のきつい仰せに否みかねて、

「では私達二人がお手をとりませう。少し御庭内の御運動も御體の御爲めに御必要だと御侍醫の申出も御座いましたから」

といひ譯けのようなことを云ひながら、二人の近侍は兩の御手をとつて靜かに階段を下りて禁園のうちへ進んだ。帝は物懐かしさうに唯笛の音のする方へとばかり歩みを運ばれるのであつた。そして折々立ち止つては耳をすまして、其の音のある方を訊ねながら何所までも行かうとされるのを、近侍は押し止めながら、

「御上、もうそちらのほうは後宮の御殿になつて おります。私共の御供して參れる處では御座いません。それにもしや……」

「うん、もしや皇后に知れると面倒だと申すのか？」

と兎角躊躇らふ近侍を言葉あらはに云ひ咎められるのであつた。

「私共はまたどんな御咎めを受けようも存じませんからどうぞ御許し下さいますように」

「してみるとあの笛の主は後宮の中に隱れてゐる女だな」

「何か私共にはわかりませんので」

「うん、よいわさ、誰であらうとも。わしはあの笛の美妙な音にひかれて來たのぢや。わしをその女の處まで連れて行け！」

「でも後宮の中へは……」

「わしが許す。さあ行け！」

「でも、……」

「でも、とは何ぢや？　假り初めにもわしに向つていふ言葉か？

「はい、でも皇后様が固く……」

「そち達はそんなに皇后が恐いのか？今はこのわしのゆるしよりも皇后に憚られるのか？　あゝ、わしはもう……」

云ひかけて直ぐにその弱々しい言葉を打ち消すように、

「たとへ笛の主が後宮の女でもいゝ、わしの心覺えにはそういふ女は無い筈なのぢやが、誰があの笛を吹いてゐるのであらう。不思議にわしの心をひく……」

とまたしてもその笛の方に氣をとられるらしい帝の樣子に近侍は當惑しながら、

「何うか御上！」

と願ふようにいふ。帝は遂に焦らだゝしさうに、

「うむ、そち達は今ではこのわしの言葉よりも皇后の權威を恐れてゐるのだな」

二人は無言に何とも答へない。帝は淋しさうな表情されたけれども、怒る模樣は少しもなかつた。そしておとなしい言葉で、

「ではあの笛を吹く女をこゝへそつと連れて來てくれ。わしはその女がどんな人であらうとも決して他言はすまい。そち達に迷惑はかけないのぢやから」

近侍二人は顏を見合せた。流石に病を得てから怒るといふことをまるでしなかつた帝の何となく痛々しくあはれに思はれて來て、その中の一人が、

それでは私がその人を尋ねてそつと此處へ連れて參りませう」

と云ふと帝は悦んで、

「うん、さうしてくれ」

帝は嬉しさうにひとりの近侍にかしづかれて、そこに待つてゐながら、ひとりその女のことなど樣々に考へられるのであつた。皇后に叱られることの恐ろしいのは近侍の者ばかりではなく、帝にも或る恐怖に近い遠慮があつた。併し一種の冒險のやうな、そのくせ何か樂しいものが待つてゐるやうな氣持ちで、帝はその人を色々に想像しながら待つてゐられるのであつた。暫らくするとさつきの近侍は若い女を一人伴つて戻つて來たが、女の手にはたしかに一つの笛があつた。その女は帝の前に出ると叮嚀にお辭儀する。近づいて來た二人の足音を聞きつけた帝が、

「お〻、來たのか？」

後宮の方から歸つて來た近侍が、

「はい、只今召つれて參りました。やつぱり後宮の中に居られた若い女の方で御座います。御前に御辭儀を致して居りますのがお尋ねになりましたその笛の主で御座います」

「お〻、お前は誰ぢや？此の宮中に笛を吹く女をわしは誰も知らなかつた。此の間中から考へて見ても一向に心當りもないが、何といふ人の子ぢや？わしの後宮にゐる人ぢやときいたが、わしにはとんと覺えがないのぢや。まだわしの知らぬ女がそこに居ようとは思はれぬのぢやが」

初めて若い美しい女の聲を帝はきくのであつた。

「はい、御上に御覺えのないのが私の不運の初まりだつたので御座いました」

と僅に云ひさしてうつむいてしまつたらしい女の言葉には何か仔細ありげであつた。

「それはどういふ譯なのぢや」

「この私は七年前にこの宮中に召出されて、そのま〻御上に忘られてしまつた女なので御座います。斯うして御上の御思出の中にさへ入ることの出來ない不仕合せな女なので御座います」

それはよしないことをしたものぢや。そう聞けばどうやら思ひ出されぬこともない。いつぞや誰かゞ召連れて後宮に納れた女子はあつたやうに思ふ。わしの長い月日にはさうした女も數多くあつたのだから」
その女は悲しさうに、
「おゝ、まあ何といふ果敢ない身の上で御座いませう。唯一人御頼り申上げる御方樣だと親共からも云ひ聞かされ、身分不相應な果報を祝福されて、宮門をくゞりましたものゝ、いつ召し出されるといふあてもなしに忘られ、やう〳〵今日只今御前にそれと名乘つて出られましたと思へばもう……」
「それではまだ一度もわしはお前を見てやらなかつたのか？　お前はいくつの年からさうしてわしを待つてゐたのぢやか？」
「はい、十七の春から後宮に參じましたまゝ、いつ召出されるともわからぬ日を待つて今年もう七年、けふかあすかと思ふ明けくれはずい分長う御座いました。と云つて一度後宮に入れられた身は籠の鳥も同樣に、斯うしてやがて老ひ果てゝゆく身の上なので御座いました」
と云つて女は涙を流すのであつた。そして女はもうそれきり何とも云はずにこぼれ落ちる涙をそつと拭いた。やゝあつて帝は、
「わしはもうそちを見る目を失つてしまつてゐるのぢや。せめて目のあるうちに一度でもそちを見てやらなかつたことは、わしも悲しいことに思ふ。が併しつきせぬ縁があつたればこそ、斯うして會ふ日もめぐつて來たのぢや」
「ありがたう存じまする。私はいつまでも死ぬる日までも、御上の御出を御待ち申上げる心で居りました」
「そんなあはれな女があるともしらず、つひぞ見てもやらなかつたわしを恨らみもせずに、お前はさうして待つてゐてくれたのか？その優しい女らしい心でわしのこの冷い暗らい淋しい魂を抱いてくれ！　盲いたわしの心は切れ〴〵に

碎かれてしまつて、わしにはこの世界が不思議なほど靜寂なのだ。もの音の全く消え去つた處には一時もわしはぢつとしてはゐられなくなつたのだ。お前は歌も唄ふであらう。何でもいゝ、心のまゝの歌をうたつて聞かしてくれ」

「私が明けくれの慰めはせめて歌を唄ふだけで御座いました。それもいつの日に御耳に入れようてだてもなくて、悲しい年月を歌つてうたつて唄ひぬいた私の歌を、今聞いて頂いてもよろしいので御座いますか？」

「おゝ、そちの恨らみも存分に聞からぞ。どんな歌でも苦しうない。遠慮なく歌つて聞かせてくれ！」

後宮の少女は唄ふのであつた。

「庭に玉輦の跡を絕ち、
芳草漸く窠をなす、
隱々として簫鼓をきく、
君恩何所にか多き」

一節を終つたその女は、婉麗なその聲を涙に濕して、またしても次の一節を歌ひ出でた。

「泣かんと欲するも涙をなさず、
悲しみ來ればかへつて強いて歌ふ、
庭花方に爛漫たるも、
計なし春を奈何せん」

帝はとめど無く涙を流しながら聞いて居られたが歌ひ終つて後宮の少女も遂に袂を蔽ふて泣き伏してしまふのであつた。帝は女の肩に手を置きながら、

どうか許してくれ、わしはそちのことを全く忘れてしまつてゐたのぢや。七年前にそちを誰かゞ連れて來て後宮に納れ

たのであらうが、わしは其時そちのことを必らず聞いたに違ひないのだけれども……」

と云ひかけてこんどは獨り言のやうに、

「いや、もしかすると皇后のはからひでわしの耳に入れなかつたのかも知れない」

といつてまた女に、

「忘れてしまつてゐたのはわしが悪かつたのだ。許せよ」

「いゝえ、私は斯うして生涯を、もしかすると彼の世の未來永劫までも思ひ出されることとなしに終つてしまふ運命だつたので御座います。それがはからずも私の笛が御耳に入つたばかりに、斯うして御前に御召を頂きましたことを嬉しいと存じて居まする。これがよしや私の命の際の一瞬間前で御座いませうとも、私は感謝して死ぬる筈だつたので御座いますもの。それにまあ何とした、とめどもなくこぼれ落ちる涙で御座いませう。今斯うして初めて龍顔を拜み參らせ、鳳姿に近づきました時、もう私の顔を御覽遊ばしては頂けなくなつてしまい遊ばしました。おゝ、何といふ悲しい悦で御座いませう。あの樂しい青春の盛りを忘られて、今思ひ出された時は、もうとりかへしのつかなくなつた時であつたのだと思ふと、私はそれが悲しくてならないので御座います」

とまたしてもさめ〴〵と泣く女の手をとつて帝は、

「おゝ、この手は戀の爲めに作られた手ではなかつたのか。たゞ惱みの爲めであつたのか。併しお前ばかりではないのだ。このわしの心のうちも、今は常に無慈悲な夜ばかりが打ち續いて、そして冷たいその暗の中に踊つてゐる過去の華やかな王者の威容！それは皆短かい夜に結びかねた夢のやうに効果ない幻となつて了つたのぢや。けれども本當の人間の幸ひといふものはそこには無かつたのぢや。あの輝く黄金の鎖にも等しいわしの王位が、全く錆び朽ちてしまつた今となつて見れば、路傍に捨てられた一條の繩ほどの用もなさなくなつた。わしの權威はもうわしの體と同じく廢れてしま

つたのぢや。昔から王位の爲めにどれだけの犧牲が拂はれたであらう。わしは果してあの時億兆の國民の膏血をすゝり、邪曲をたすけ、正義を虐げ、天下に刑棘の苦しみを負はすあの驕慢の王ではなかつたであらうか。今のわしに最も怖ろしいことは、おゝそれは過去に於てしらず〳〵犯して來た罪のどれ程大きいものであるかを考へることだ。罪もない優しいそちの魂をすらもわしは日に〳〵殺してゐたことも知らなかつたのぢやもの。併し今のわしはもう弱い心の持ち主になつて了つたのだ。寂しいといふことが、今のわしには一番恐ろしい……。そちはどうかこのわしをこの上淋しがらせずにおいてくれ」

といひながら帝は頸にかけてゐた寶玉の首飾りをとつて彼女の頸に手さぐりつゝそれをかけてやりながら、

「これはわしが最後に愛した最も聖い乙女の爲めに贈るのぢや。永劫に續く帝王の悲哀の象徴として……」

絡み合つたふたつの手には女の涙が光つてゐた。そこへ近侍の一人が駈けてくる足音がすると、帝はつとその手を離して何の用かといふ風に近侍の言葉を待つてゐられる。

「もう御時間が參りました。やがて武后が歸られませうから」

「む、もう時が來たのか？わしはもつとこの女と話てゐたいのぢやが……」

帝は女に向つて、

「今のわしには何の權威もなく、たゞ生きてゐる一個の人間に過ぎないのだ。そして我妻なる皇后！今彼女は其の實、唐の國王ぢやから喃う。この地上に二聖があると世間では云つてゐるといふ話ぢやが、それは本當なのぢや。わしは彼女の支配をすら受けねばならなくなつてしまつたのぢや。名のあるところに權力があるのではない。實のあるところに力はあるのぢや。

侍臣に促がされてやう〳〵帝は立つてそろ〳〵と元來た方へ歸らうとして、

「ではまた會はうぞ！わしの呼んだ時はきつとくるのぢやぞよ！」

後宮の少女は病の爲めにいくらか年よりも老衰した帝を見上げながら、

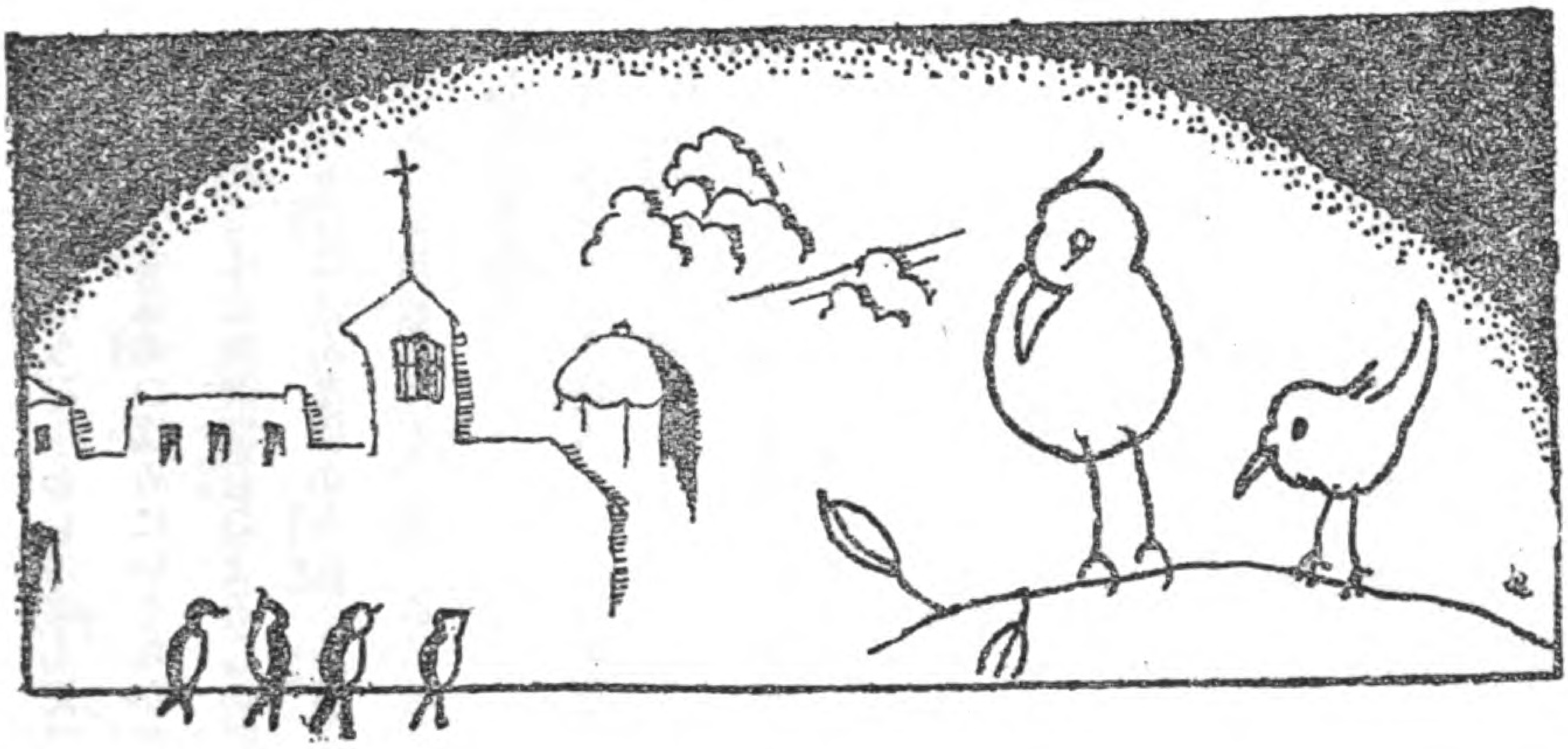
「それではまた御都合のよろしい時御召し下されませ。せめて私に少しでもお慰めを致すことが出來ますれば、それだけでも私はどんなにか有難く存じませう」

「おゝ、また會はうぞ。逢へぬ時も折々はあの笛を吹いて聞かしてくれ。わしはお前の笛の音を遠くから聞いてそれを樂しむであらう」

と云ひ捨てゝ名殘惜しさうに帝は歩みも淋しく兩手を侍臣に預けながら御殿の奥深く入つてしまはれた。

後に後宮の少女は、いつまでも〳〵帝の御後姿を見送るのであつた。彼女の手には首から垂れ下つた寶玉の一つを固く握りしめてゐた。そしてその顏にはとめどなく熱い涙が湧いて流れた。

（次號完結）



セピア色の村

稲垣足穂

……飛行機とか軍艦とかいふものは、どこかオモチャみたいなところがあつて、なか〳〵高踏的な美をもつてゐるものだ。それをよく感じるのは大人より子供の方だ――と、そんなことを考へながら、私はお孃さんと一緒に、飛行場の横手の柵をぬけました。

赤土に石のまじつたゆるい坂があつて、そこを下りると、さつき來た正門につゞいてゐる路です。路でまへには、ちよつと湖のやうな感じのする池の入江がのびて、向ふに、はるかな山のきはまでヴァレイになつた田舍の春景色が一目に見渡されます。

みぢかくなつた足元の影に、時計を出さうとすると、ブーンブーンといふ音がせまつてきました。

目をあげると、白い翼に紅い日の丸をゑがいたニユーポールが、眞珠のやうにかがやいてゐる太陽の方へ突きすゝんで行くところです。

「どれくらひでせう？」とお孃さんはすんだ瞳をかへしました。

「さあ」と私は、そのまぶしさにハンチングのひさしをひいて「八百メートル？　もつとあるでせう」

その時、プロペラーの刃がピカツと白金のやうに光つて、飛行機はひろい瑠璃色のまんなかでクルツと横轉して下の方へ向きなほりました。五六歩うしろにゐるお孃さんはかけてきながら「インメルマンターンつていふんでせう」

「お氣の毒さま、ランベルスマンですよ」

「どこがちがふの」

「それは」と私は、ちやうど取り出したタバコの箱を、飛行機のかはりにして說明しました「インメルスマンはかうやつて横倒しにまはるんです。今のは、かうルーピングの恰好に逆になつて、むかふ側からさかしまに頭をきた方にもちあげたでせう。つまり宙返りをもう一度のばすのです……」

云ひかけて、あるかないかの風を手のひらでかこひながら、ぬき出した一本に火をつけた時、私はふと、青や、黄や、綠や、灰や、紫やが、キユービズムの畫面のやうに入りまぢつたなかにある一つの奇妙な村落に目をとめました。

「ちよつと」私はかう云つてお孃さんをかへりみました「あしこに村があるでせう」

「どれ？」

「そら、あの森のこちらに……」

「あゝあのかすみがかゝつてる」お孃さんはうなづきました。

「へんぢやありませんか、あしこだけよけいにぼやけてゐますよ」

「さうね」と云つて、お孃さんの長い睫毛のある眼がしばらくその方へそゝがれました「何か焚いてゐるんぢやなくて……

……チヨコレート色ね」

なるほど、さう云はれて見ると、それは又全體くすんだやうな灰色をしてゐます。

「ひよつとしたらあのあたりの地質のせいかもわかりませんよ」

「行つてみようか？」

お孃さんが無造作な言葉を出しました。

「それでもいゝ」

と私は答へて、しかしこの入江をどうしてわたらうかとながめおろしました。それは向ふ岸まで半丁ともありませんが、橋がかゝつてゐないのです。

「ボートがあつてよ！」

お孃さんが叫びました。指ゝれたところを見ると、いかにも、堤の下の二三十間さきにネズミ色のボートがほり出されてあります。

崖下の砂にとび下りてかけつけると、少しばかりあかがはいつてゐるだけで、オールもクラッチもついてゐました。

「こゝで何をしたつて大丈夫ね」とお孃さんが云つたのは、こんな一段と低くなつたところだから、だまつて他人のボートにのつても見つかりやしないといふ意味でせう。そのお孃さんはともに坐り、私はヅーと押し出して、ひらりとのりうつりました。

ゆら〳〵と小さな船體がゆれて、ぬるんだ春の水の感觸をからだにつたへると、舷側の藻の花がキラキラと光りました。がそれよりもつといゝのは、私の正面に腰かけたお孃さんの短いスカートが上にひきつられて、ぴつちりした赤い靴下との間に、白いふつくらしたはぎをのぞかせてゐることです。そこへ、船の底にたまつてゐる水の反射がチラ〳〵と縞にうつります。指先を水にひたして横向きに何か考へてゐるらしいお孃さんに、そんなことは氣がつかず、オールをにぎつ

た私が、だまつてそれを楽しんでゐるうちに、ボートの先はヅシンと向ふ岸の砂に當りました。

「やつぱり春はいゝのね。」

むせかへるやうな麥畑のあぜへ上がつたとき、お孃さんはとほい山の方を見ながら云ひました。

「そら、ソッピース」と私は云つて、二人は、こんどははるかに高く蜜蜂のやうにうなつて行くのを仰ぎました。

「さつきのS中尉ね、あの方上手なの―」

「さうでせう、きつと」

「上手だつたら一度のつけてもらひたいわ―だつてインメルマンもおしまひには落つこつたんでせう」

「そりや戰爭で擊たれたんだもの、仕方がない」と私は、麥の穗をぬきながら云ひました。

お孃さんはそれを見ながら「ギネメル中尉もさうね」

「なか／＼飛行通でいらつしやいますね」

「それくらいの事……失敬よ」お孃さんはにらみました「この間活動で見たの。まだ子供みたいな人ね。勲章をもらつてゐるところがうつゝたのよ」

「それからどうしました」

「をかしいのね、フランスは大將が勲章をやつてからキッスをするのよ。ギネメル中尉もさうされたのよ。それが白いひげもじやのおやぢやでせう―わたしひとりでふき出しちやつたわ……」

「ちや一つこゝでその眞似をしませうか？」

「……」

「あなたがギネメル中尉ですよ」

「知らないわ」

そんなこと云つて、青い菜畑の間を大分歩いた私たちが、氣がつくと、肝心の村がどこであつたかわかりませんでした。

「聞いてみようか?」と私は立ち止まつて云ひました。

「チョコレート色の村なんて知つてゐる者はゐないわ」

お孃さんは笑つて、すぐまへにある一かたまりの家を指さしながら「でもたしかにこゝよ。わたし道をまがるとき見當をつけてをいたんですもの」

私にもさう思はれるのですが、そこには見たところ、格別、水蒸氣が多いやうにも、又、煙がたなびいてゐるやうな模樣もありません。

へんな氣持で、二人は、紅い浮草のういた小さい池のそばから一足なかへはいつてみました。が、そこにある白い土藏も、藁ぶきの家も、そのまへにゐるヒヨコも、よだれをたらしてゐる牛小舎の牛も、まるい石をつんだ低い垣も、みんなあたりまへの村に見かけるもので、ちつともチョコレート色なんかしてゐません。

「これや間ちがつたのかな」

「どうあつてもこゝよ。さつきどうしてあんなに見えたんでせう……」

とお孃さんはあたりを見まはしながら「それに人が一人もゐないのね」

「畑へでも出かけてゐるんでせう」

私は答へて、とほりがゝりの二三軒に目をやつてみましたが、ほんとうに誰もゐません。ひとりぐらひは……と思つてこんどこそは人がゐさうな次の家のなかをよくのぞいてみました。やつぱり、あけ放された障子をとほして裏の方まで

つきぬけですが、人のけはひもありません。

この時、ふいに白いものがうしろからかすめて行きました。

「まあ、びつくらしたわ！」

とふり向いて笑つたお孃さんの頰の片ゑくぼから、それが出たやうに見えました。

まへには水車がひとりでコットン〳〵まはつてゐます。むかうの菜の花のうへに、ヒラ〳〵と夢のやうにとんでゐるのは今の蝶でせうか……

飛行機の音はちつともしなくなり、雲雀の聲だけがひゞいてくるしづかな春の午さかりです。

緑の荒野

室生犀星

毒のある蝶ほど粉つぽい、
虹のやうに美しい。
わたしの毎日考へることも粉つぽい蝶のやうに
いつとなく消えてしまふ、
はる過ぎる遠方に、
みどりの荒野に、
毒のある蝶でもいいから
ひとりくらゐ道づれになり

荒れた森の中をあるきたいものだ、
荒れた森の中には
まだ蝶が粉つぽく逍ふてゐる――

すももの花

花と芽と一しよに匂ふ、
あを白い病鬱なすももの花。
あさも夕もわたしの見るのは
もの憂い古い町景色、
たつきにつづる寂しい文章……。
すももの花は散り敷いてゐる、
わたしの家のまわりに。

日輪草（童話）

—日輪草は何故枯れたか—

竹久夢二

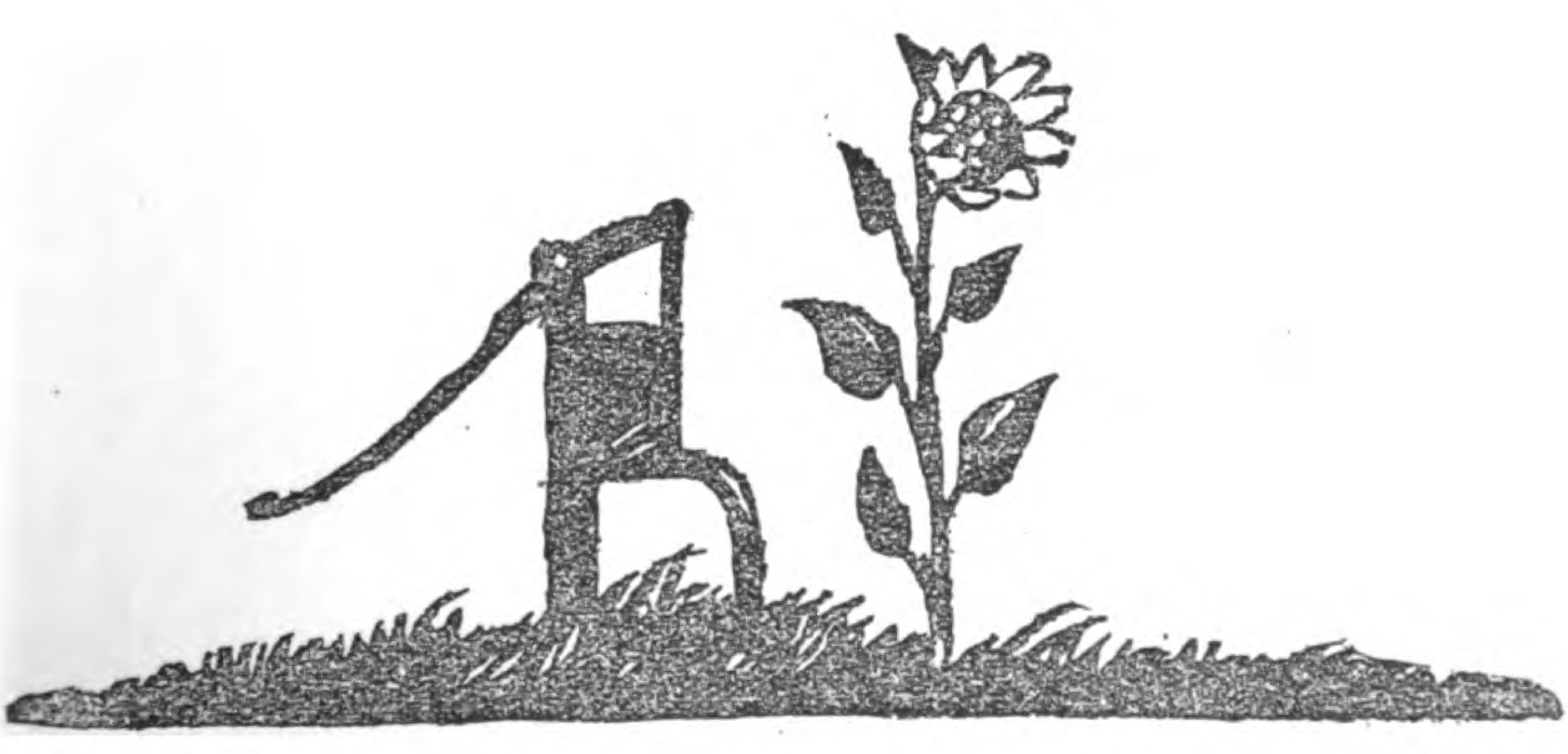
三宅坂の水揚ポンプのわきに、一本の日輪草が咲いてゐました。

「こんな所に日輪草が咲くとは、不思議ぢあありませんか」

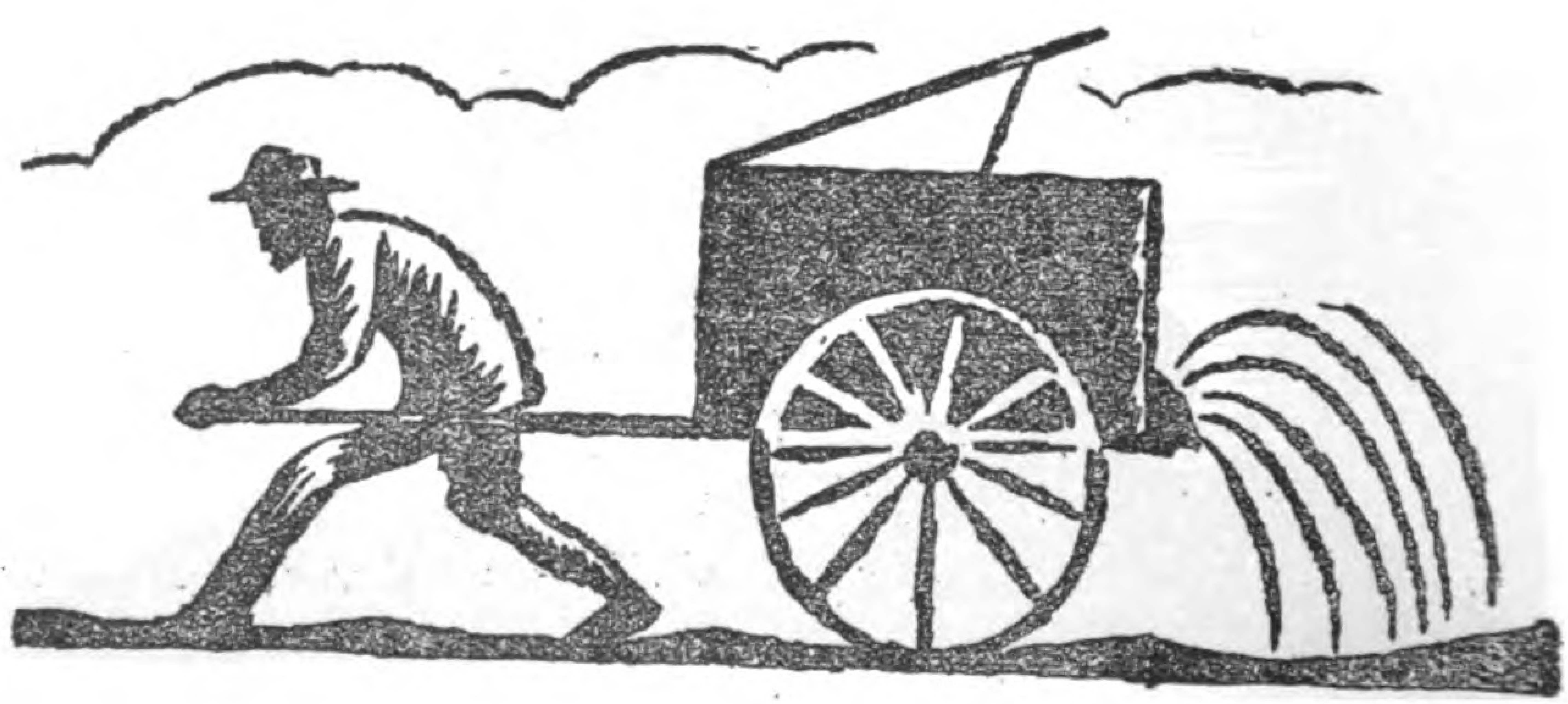
そこを通る人達は、寺内將軍の銅像には氣がつかない人でさへ、きつとこの花を見つけて、さう言ひ合ひました。

熊吉といふ水撒人夫がありました。お役所の紋のついた青い水撒車を引張つて、毎日半藏門の方から永田町へかけて、水を撒いて歩くのが、熊さんの仕事でした。

熊さんがかうして、毎日水を撒いてくれるから、この街筋の家では安心して、風を入れるために、障子を明けることも出來るし、學校の生徒達も、窓を明けてお辨當



を食べることが出來るのでした。
熊さんは、情深い男でしたから、道の傍の草一本にも氣をつけて、勞はるたちでした。
熊さんはある時、自分の仕事場の三宅坂の水揚ポンプの傍に、一本の草の芽が生えたのを見つけました。熊さんは朝晩その草の芽に水をやることを忘れませんでした。可愛い〻芽は一日一日と育つてゆきました。青い丸瓜のやうな葉が、日光のなかへ手をひろげたのは、それから間もないことでした。風が吹いても、倒れないやうに、熊さんは、竹の棒を立ててやりました。
だがそれがどんな植物なのか、熊さんにはてんで見當がつきませんでした。圓い葉の次ぎに三角の葉が出て、やがて莖の端に、觸角のある蕾を持ちはじめました。
「や、をかしな花だぞ、これは、蕾に角が生えてら」
つぎの日、熊さんが、三回目の水を揚げに、ポンプのところへやつてくると、その草は、素晴しい黄ろい花を咲かせて、太陽の方へ晴々と向いてゐるのでした。熊さんは、感心してその見事な花を眺めました。熊さんは、電車道に立つてゐる電車のポイントマンを連れて來て、その花を見せました。
「え、どうです」
「なるほどね」ポイントマンも感心しました。
「だが、なんといふ花だらうね、車掌さん」熊さんは聞きました。



「日輪草さ」車掌さんが教へました。

「ほう、日輪草といふだね」

「この花は、日盛りに咲いて、太陽が歩く方へついて廻るから日輪草つて言ふのさ」

熊さんはもう嬉しくてたまりませんでした。熊さんは、永田町の方へ水を運んでいつても、早く日輪草を見たいものだから、水撒車の綱をぐん〳〵引いて、早く水をあけて、三宅坂へ少しでも早く歸るやうにしました。だから熊さんの水撒車の通つたあとは、いくら暑い日でも涼くて、どんな風の強い日でも、塵一つ立ちませんでした。

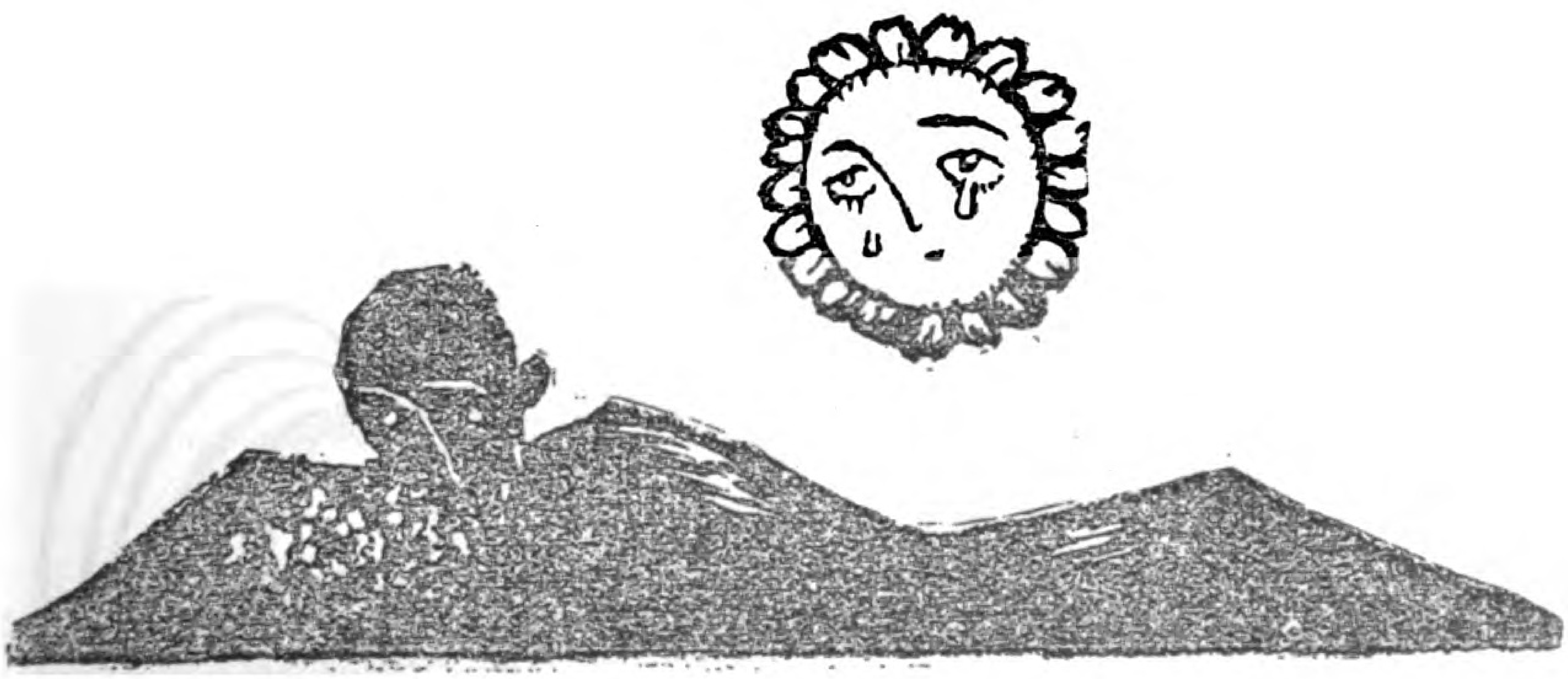
太陽が清水谷公園の森の向ふへ沈んでしまふと、熊さんの日輪草もつぼみました。

「さあ晩めしの水をやるぞい。おやお前さんはもう眠いんだね」

熊さんはさう言つて、しばらく首をたれて寢てゐる花を眺めました。時によると日が暮れてずつと暗くなるまで、ぢつと日輪草を眺めてゐることがありました。

熊さんのお内儀さんは、馬鹿正直なかはりに疑ひ深いたちでした。このごろ熊さんの歸りが晩いのに腹をたてゝゐました。

「お前さんは今まで何處をうろついてゐたんだよ。いま何時だと思つてゐるんだい」



「見ねえな、ほら八時よ」

「なんだつて、まああきれて物が言へないよ、この人は。いつたいこんなに晩くまでどこにゐたんだよ」

「三宅坂よ」

「三宅坂だつて！　嘘を言つたら承知しないぞ。さ、どこにゐたんだよ、誰とゐたんだよ」

「ひめゆりよ」

「ひめゆり！？」

熊さんは、日輪草のことを、ひめゆりと覺えてゐたので、その通りお内儀さんに言ひました。それがそも〳〵事の起りで、熊さんよりも力の强いお内儀さんは、熊さんを腰の立たないまで擲りました。

「草だよ、草だよ」

熊さんがいくら言譯をしても、お内儀さんは、許すことが出來ませんでした。

翌日は好い天氣で、太陽は忘れないで、三宅坂の日輪草にも、光りと熱とをおくりました。日輪草は眼をさましましたが、どうしたことか、今日は熊さんがやつて來ません。十時になつても、十二時が過ぎても、朝の御馳走にありつけませんでした。日輪草は、太陽の方へ顏をあげてゐる元氣がなくなつて、だん〳〵首をたれて、とう〳〵その晩のうちに枯れてしまひました。

——をはり——





置き手紙

アルマ・スタウト作
木村毅譯

譯者曰く――たとへばイプセンの諸作などに代表せらるる如く、或は因襲の束縛を堪へ難しとし、或は戀愛に身を殉じやうとして、良人と家庭と子供とを捨てて行く婦人を描くことは、近代文學の一つの顯著な傾向でありますが、ごく最近の英米の小說中、特に多數の讀者を對象とするものは、それと反對に向ふ見ずな戀愛の冒險を懲戒して、微溫的な平安と穩和をもつ家庭に落ちつくことを主張するやうな寓意の小說が非常に澤山出初めました。ここに示すのもその代表的な一例、近着の英國雜誌から譯出しました。

一　永久の別離

モナ・クラヴアリングは今更のやうに住みなれた自分の室を見廻した。中にある物凡てが新らしい價値を以て彼女の眼に映じた。ある物の價値は增して見え、ある物の價値は減つて見えた。

七年の間モナの家庭に大切な附屬物の役目をつとめた家具も、繪畫も、裝飾も、これが見納めになるのであつた。モナは凡ゆるものを、ゆつくりと且意識して、値ぶみし直した。

そのカイプ（オランダの畫家）の作はよく出來てゐるさうだ。又この銀の皿は彼女自身の好みで買つたものだ。併しこの臥榻や椅子の無趣味で不便な事はどうであらう。尤もモナに變る氣さへあれば此れと變る事は何でもなかつたのだ。良人リチヤードは彼女の要求する事なら決して拒みはしなかつた。或は無言のうちに不同意を表はす事はあつたかも知れないが……。

モナは最初のうち家庭の細かな事まで、非常に熱心で、敏感で、又興味を持つてゐたものだ、が、後には段々頓着しなくなつた。肝腎の彼女は生活そのものは無趣味で堪へ難くなつて來た時には、家の調度の無趣味な位がどうして問題になららう。

七年前モナは今の良人が有名な、成功した辯護士だと聞いて、自ら心すすんで結婚したものであつた。

その時お友達が、あの人は丁度その家の中の家具や調度のやうに無趣味な、退屈な人だと言ふ事を暗示して呉れはした。併しその時のモナは批評的でなかつた。彼女は今迄の全生涯を貧乏の中に生きて來た。彼女は母の手商賣を眞似て美しい細工物を作つてゐた。と、そこへ髮の黒い、やや不細工な、顔の感じの重苦しい人が現はれて來た。モナは此の人が僅かばかり田舍の別莊へ滯在してゐる間に巡り合ふたのであつた。彼はいささか慄へを帶びた深い聲で、妻になつてくれぬかとモナに頼んだ。彼女は承諾を躊躇しなかつた。

モナは利慾づくめの勘定高い女ではなかつた。凡て少女達がさうであるやうに、ローマンスと、戀愛と、美しき貴公子とを夢みてゐた。しかし豐かな財產のある上、仕事から來る收入も大きい人が、ローマンスや貴公子とは到底めぐり合ひ

さうもない一文なしの貧乏な少女に、彼女が常に憧れてゐた凡てのものを與へやりと申し出たのだから、モナは空想で勝手に彼を理想的な人間に描き上げて了つたのであつた。

もし誰かがモナに向つて、あなたはあの鈍重な感じの人と、愛がありもしない癖に結婚したのねとでも言はうものなら、彼女は屹度それをひどく怒つたであらう。

勿論、彼女は彼を愛してゐたのだ！

蜜月の旅行はモナが空想に描いてゐたものと、殆ど違ふ所はない樂しいものであつた。そして歸宅した時にはささやかな勝利の感じを味はつた。最初の數ケ月も亦滿足であつた。モナは生れて初めてその處女らしい美しさを、平凡な女をも人目をひかせ、綺麗な女ならば素敵もなく美しく見せる凡ゆる化粧法で、存分に飾り立てる事が出來た。彼女は贅澤な家庭と、おいしい食事と、抱えの自動車と、それから親切な交際仲間とを得た。この人達はいづれかと言ふと多少流行からはおくれてはゐたが、併し自分の良人には丁度頃合の仲間であつた。

最初の頃は良人もよく食事や芝居に彼女を連れ出して呉れた。が、彼女の魅力と美しさとに對する良人の注意は次第に薄れて行つて、遂には消えて失くなつたのかと思はれる位にまでなつた。

モナは今、見なれた家具の一つ一つに眼を留めながら、過ぎて行つた年月の上に馳せた。

が、彼女は只の一回として、良人が不親切であり、不正であつた場合を、思ひ出す事は出來なかつた。ただ、良人と共に送つた此の四五年間は、羽蒲團——それも特に風通しが惡くつて、むつとする羽蒲團に掩れたやうな生活であつたと云ふ事は出來た。彼女は退屈さのため息が詰まりさうであつた。だが今やそれも終結した。

モナはまだ僅かに廿八才であつた。彼女の全生涯中の最も愉快な歳月は、なほ前途にも擴がつてゐた。

モナが深い溜息をついてゐると、丁度時計が三時を打つた。

彼女は昨夜、殆んど夜通しかゝつて書いた手紙をポケットから取出し、良人の多くの書類の中に挿んだ。そして良人が外出から歸るとすぐに眼に付くやうに記錄簿の上にのせておいた。彼が歸宅するのは毎日きまつて晩の六時過ぎであつた。

それからモナは毛皮のコートを着て、恰もそれが日常のありふれた出來事でもあるかのやうに平靜に、自分の家と最後のお別れを告げた。

『私が此の階段を踏む事は今後永久にないのだ。』と、ひとり胸の中で言ふと、さすがに血管の中には聊かの慄えが起つた。が、踵の高い靴を穿つた小さな足は躓きだもしなかつた。

モナはタキシを呼んで、ピカデリ近くの一區畫にある小粋な家へと疾驅させた。

二　情熱の翠

數分間の後、モナはハイカラに設へられたある家の客間に通された。そこでは旅裝を調へてゐる一人の男が、おちつきなく室の中を行つたり來たりしてゐた。

モナが入つて來るのを見た時其の男は、思はず微かな叫聲を立てた。扉がモナの背でパタリと閉ぢられると、彼女の方へ走りよつた。

『あゝ、モナさん！』と、彼は兩手でしつかりと彼女を搔き抱きながら囁いた。『此の場に及んであなたの勇氣は挫けたのじやないかと、僕はどんなに心配したでせう。全く時間が飽き〱する程長く思へました。』

モナは紅らめた顏を彼の方へ向けて言つた。

『だけれど私、丁度いゝ時に來たでせう。三時が鳴るとすぐ出發しやうとお約束したんだわね。今三時十分過ぎよ。』

『さうです、さうです。だが僕は、憧れと希望と恐怖とで燃えてゐました。何かお差支へが出來たのではないかと、その場合をいろ〳〵に空想してゐました。』

『もし、あたしが來なかつたとしたら、あんた、そんなに氣に掛つて？』

男の手に凭れかゝり、美しい頬の上に石炭の如く輝いてゐる眼を半ば細めて彼を見上げながら、かう言つたモナの言葉には甘えるやうな調子があつた。



男の薄い唇にはニタリと緩漫な微笑が湧いた。これが本來どんなに殘酷な唇であるかを、モナは未だ知らないのであつた。

『氣に掛けるつて？ 僕はその美しいあなたが僕のものになつて下さるとのお約束を得て以來と云ふもの、毎分毎秒、時間を數えて待つてゐたのを、あなたも御存知じやありませんか。これ、分りませんか。僕のこんなに慄えてゐるのが——

——。』

彼が片手を差出すと、モナはすぐそれに握手を與へた。

モナのやうに愛に目のくらんでゐない女だつたら、これは情熱の表示と云ふよりも、もつと外の或るものである事を見破つたかも知れなかつた。が、モナはたゞ、

『あなた、あたしを後悔させなさるやうな事はないか知ら？』と、尋ねたばかりであつた。

『後悔させるつて？ あなたが家庭と呼んで居らつしやるあの納骨堂を去り、美しい女の多いロンドン中でも最も美しい女を妻としてゐながらそれを知る丈けの機智も理解もないあの鈍心鈍體の無骨者を去るのを、後悔するんですつて？』

『だけれども、あたし、本當に美しいのでせうか？』と、モナは囁いた。『昨夜もあたし、良人を試してやらうと思つて、その時着てゐた新調の天鵞絨の茶會服が似合ふか何うかと訪ねて見たんですよ。そしたら、例の御存じの通りの癖で、答をする前に三四分間も、ゆつくりと勿體振つて、吟味するやうな風をしてゐましたが、それから、成程ね、たゞ私はお前が黄色の着物をきるのは好まないつて言ふんですよ。――よかつたわね。』

『馬鹿だ！』と、スタンリ・ボアーク（男の名）は呟いた。『あなたがお好みの着物を召した所は、さながら一個の夢ですよ。さ、自分で自分を御覧なさい。』

スタンリはモナを壁一ぱいに嵌めてある鏡の前へつれて行つた。黒い毛皮に包まれたしなやかな姿、情熱を潜めて輝く小さな笑靨の浮んだ顔、脱ぎ去てたヴエイルの下に波打つ豐かな黄金色の髪の影から星の如くに光つてゐる大きな碧い眼――それを見た時モナの唇からは滿足のかすかな微笑が洩れた。

『一寸、樣子がいいわね。』と、彼女は幸福さうに言つた。

『一寸だつて！』と彼は蔑すむやうに繰返した。『あなたは僕の知る最も美しい人です。そして其のあなたが僕の……僕のものになつて下さらうと云ふんです。』

モナは身を退いた。頬は急にその艶やかしい色を納めた。

『勿論、私のしてるのは決していい事ではないのね。』

『その事は今迄に何度も〱論じつくしたぢやありませんか。そしてお互に、愛は凡てを征服し、一切の罪悪を拭ふと云ふ結論に同意したんでせう。リチャード君は年齢としてはまだ若い、四十五にならんのです。だから此の先きまだ三四十年は生きます。あなたはあの人を良人とする限り、その長い間、持つに價し、生くるに價する凡ての娯しみから、見放なされて、ゐなければならない事を考へて御覧なさい。女は、愛のために作られ、彼女を禮讃する若者の歡びとなり、冠となるために生れて來たものぢやないですか。』

この瞬間、モナの魂はその言葉に或る不眞面目さの暗示が含まれてゐる事を感じた。が、彼が再び兩腕の中にしつかりと彼女を抱きすくめた時には、その暗示も消えた。

『さあ、そろ〱出掛けねばなりますまい。あんまり遅くならないうちにドウバアを越えて了ひたいと思ひます。あなたのお荷物はどちらにありますか。』

『昨日送つておいたから、ホテルで私達を待つてゐますわ。あたし、それにはあなたのお名前を書いておいたのよ。』

『結構です。さあ行きませう。』

スタンリは扉を開いた。モナは又顔から咽喉をヴエールで掩ひ隠して室を出た。二人は外に待つてゐた掩ひのある自動車に乘つた。

ロンドン郊外の道は泥濘の難路であつた。霧雨が降りはじめて、凍りかゝつてゐた道は解け、自動車は屢々その上を滑つて動揺した。モナはそれが大嫌ひであつた。

モナの神經は尖つて來た。たとへどんなに飽き〱してゐたにせよ、七年の間、衣食と、庇護と、温情とを提供して呉

れた良人、家庭、及び馴れ親しんだ生活と永久に別れを告げやうと云ふ時には、そして新しい戀の冒險に旅立たうと云ふ時には、どんなに無考へな女だつて物思ひに沈まずには居ないだらう。

スタンリの神經も亦尖つてゐた。彼が、正當の妻ならぬ婦人とロマンチックな冒險に船出した事は決して此れが最初ではなかつた。たゞリチャード・クラヴアリングの妻と斷落ちすると云ふ事が、今迄とは違つた不安な思ひを彼の胸の中に抱かせた。

勿論、彼女は凡ての危險を賭するに足る價値を持つてゐた。彼女はこの數年間彼が會つた中の最も愛らしい女であつた。彼女は人を眩惑さす程の若さと生氣とを持つてゐた。彼は明日から開けて來る光明に輝いた三ケ月を空想して見た。彼は三ケ月以上を空想することは自ら禁じてゐた。愛と享樂は三ケ月以内に限ると云ふのが、彼の標語であつた。

『あッ！また泥濘に入ります。』とモナは自動車が路上を辷らうとした時思はずスタンリの手に縋りついた。

『呆けッ』と彼は叫んだが、その聲の中にこもる鋭い怒りの響きに、モナが思はず眼を圓くしたのを見ると、すぐ彼は片手を彼女の方へ投げ出し、附け加えて言つた。『御免なさいよ。僕はあなたのため聊か神經過敏になつてゐるんです。それが無闇に僕を昂奮させるんです。かう路が悪くちやドウバアへ出るには大分遲くなりますね。あなたは風邪を引いたり、疲勞が出たりしやしませんか。』

彼はモナの詰るやうな眼を迎へながら大膽に微笑した。彼の燃えるやうな熱意ある凝視を受けると、彼女の穩かならぬ色は消えて了つた。

あゝ、此のやうに一個の生きた女として愛せられ、世にも尊き者として禮讃せらるゝのはどんなに喜ばしい事であらう！

勿論彼女は暫くの間も、今迄の家庭の安全な贅澤や、七年間彼女を荒い風にもあてず、悲します事もなかつたが然しあ

の無趣味きはまる良人を、去つた事を後悔する氣には少しもなれなかつた。後悔などと云ふ事はあり得る事でなかつた。

モナは再び、青春をも、戀愛をも、ローマンスをも、漠とした過去の中に葬つて惜しまぬ日々の平穏な娯しみと云ふ生活に、飽き〳〵した自分ではないかと、自らその感銘を强うするやうに胸の中で言つてみた。

彼女は情熱を確かめたさに、愛人に縋りついた。

『あなたは、いつまでも今日のやうに私を愛して下さるわね。』

スタンリは彼女の顔を仰向けにさして、その挑むやうな薔薇色の唇の血に滲んで來るまで强く接吻した。

『さあ。』と、彼は女に對する自分の欲求に多少醉ふやうな氣持を感じて言つた。『これで滿足ですか。可愛い小雲雀さん!。』

暫くの間は確かに彼女も滿足であつた。前途を危惧する不安な念は消えた。

車は一時間以上も走つてゐた。冬の黄昏は次第に深くなりかかつた。と突然、彼等が鋭角を型作つた廻り角を越えやうとした時、車は激しく動搖した。

自動車は路を右に逸つて斷崖に突き當り、滅茶々々に壊れて了つた。

三　救ひの手

モナが氣が付いた瞬間に感じたのは、燃えるやうな熱い液體が咽喉を流下する事であつた。それから妙に聞き覺えのある聲が彼女に語つてゐた。

『これをお飲みなさい。クラヴアリングの奥さん。ええ、え、飲まなくちやいけません。それでよろしい。私の肩にお掴まりなさい。二三分間もすればもとの元氣に還ります。お怪我はどこにもないんです。』

眩暈の霧が晴れると、モナは、自分をのぞき込んでゐる男らしい、聰明な顔は、多年良人がかかりつけの醫師ピーター・

ラムスデンの顔である事を知つた。

『あゝ、ラムスデン先生、どうして――誰が――?』と、喘ぎながら言つた。

『もう暫く安靜にしてゐなさい。』と、ラムスデンは權威のある聲で命じた。『もつと此れを飲むんです。これは早く元氣に還る氣付けですから。』

モナはおとなしく、ラムスデンが唇に宛がつて吳れるスラスコ・コップの藥液をのみ下した。

すると氣持が前よりしつかりして來て、自分は無蓋の旅行用自働車の運轉臺にゐる事が分つた。

『どうしたんでせう。私、どうしてこんな所に居るのか知ら。』と、傍に立つてゐる人に、困惑したやうな眼を向けた。

すると回想の洪水が心に溢れて思はず飛上つた。ラムスデンが手をのべて引き留めた程その勢は激しかつた。

『スタンリ。――スタンリ。』と、彼女は叫んだ。

『おちつきなさい。』と、ラムスデンは嚴かに言つた。『誰かに聞くといけない。さて。篤くりとあなたにお話ししたい事があるからよく聽いて下さいよ。急ぐ私には、あなたの爲めに頒けるべき時間がもう僅かしかない。スタンリ・ボアーク君とその運轉手とはかなりな重傷で、玆から一哩程はなれた所にゐますが併し命に別條はありません。あなたに取つて幸ひな事には、私はシエルエルの古馴染の患者を手術して、助手カズンと一緒に歸途に就いてゐた所です。そして數碼さきで自動車の爆破するけたたましい音をききました。何か手助けにもならうかと車を玆へ廻して見ますと、あなたとボアーク君とが同車して、ドウバアへと急がれる途中の出來ごとである事が分りました。あなたは私に向つて何事も御辯解なさる必要はありません。私も寧ろ聞かさらんことを望むのです。私はかなり長い間、御主人に向つてとらるるあなたの態度に氣づいてゐました。だから此の際もそれを前提として結論するのを禁じ得ない。私は御主人の古くからの友人ですから、あの人の傷つけられる事を望みません。ボアーク君の方へはカズンを看護に殘しておきましたが、彼にも堅く口止めをして

おきます。さ、もうあなたの氣持は恢復しましたからロンドンまでひとりで旅立つ事が出來るでせう。も少しでシエルエル發の汽車が來ますから、それに乘れば五時五十五分にはビクトリヤへ着くでせう。どうです、私の言ふことをお聽き下さいますか、それともヒステリイ染みた馬鹿な眞似をしますか。』

モナは、此の鋭敏な心理洞察者がわざと自分を鞭打つてゐるのであることには氣付かなかつた。しかし、

『いいえ、馬鹿な眞似は致しません。』と、簡單に答へた。

『結構！』と、ラムスデンは自動車に爆音を立て初めた。『この上ゆる〳〵お話ししてゐる時間などない。あなたは骨の挫けてる所はありませんか、身體が震蕩を受けてゐますから、歸つたら熱い湯に入つてからお寢みなさい。私は明日になつたら何とか口實を設けて診察にあがります。あなたは一生涯の危機から遁れる機會を與へられたと云ふものです。非常に立派な人物でも婦人に依つて不幸に陷らされるのが數多くあるものですが、あなたも亦その立派な人を振りすてゝ無謀なことを企まうとされたのを救はれる機會を得たのです。今日のこの狂氣じみた馬鹿な眞似は御主人にはお話しなさらんがよろしい。あれは誇りの強い人です。そして限のない程あなたを愛してゐられる。無用な懺悔などしてあの誇りとあの愛とを碎くやうな事があつてはいけません。だから默つてゐるんですよ。その位、何でもない事でせう。』

ラムスデンがモナを乘せた自動車を、ある小さな田舍停車場へ急がせると、丁度その時構內へ入つて來た汽車の笛の鋭い叫喚が聞えた。

ラムスデンは自動車を躍り出て、扉を開いて言つた。

『さあ、走りなさい。切符は私が買つて上げます。』

ラムスデンは開札口へ驅けて行つた。それから一等の切符とブランデイの壜とをモナの手に渡した。

『さやうなら、お幸せに……。』

モナは涙を浮べた眼でラムスデンの顔を見ると、彼女の上に注がれてゐるその凝視は決して親しみのないものではない事が分つた。それに彼が彼女の手に與へた握手もしつかりとして、その親しみを確證してくれた。

『わたし、まだ頭がはつきりとして參りませんが……。』と、モナは言つた。

『そんな事ではいけない、途中ではつきりさせなくては……。もう一時間にもなるぢやありませんか。あなたが、その信任をお裏切りなされた立派な人格者の將來は凡て、その一時間の正しい考へ方の上に係つてゐるのですよ。さあお乘りなさい。私はまだカズンの手助けにも赴かなければならない、だがボアーク君の事では御心配なさいますな。挫いたのは手丈けです。』乘車の際ラムスデンはもう一度握手した。

一人車内に殘されたモナは痛む頭をクッションに凭せた。この數時間は實に何と云ふ生活を送つた事であらう！

ラムスデンが彼女のためにしてくれた事は何であつたか。彼は壞れた車から彼女を救ひ出してくれた。そして誰も來合せないさき、いな、彼女がまだ生氣に返り切らないさきに、事件の場所から連れ去つて呉れたので、醫師その人と助手以外には何人も彼女がボアークと共にゐたことを知る者はない、併しその助手のカズンは、彼自身と同じく信用のある人だと、醫師自ら言つてゐる。

スタンリ・ボアークとの物好きでロマンチックな戀の冒險に出掛けるよりも　古くから馴れて來た過去の生活に還るのを尊ぶの念が、急に胸一ぱいになつた。

つまる所彼女は、ボアークと云ふ男をよく知つてゐなかつたのだ。車に同乘してゐたあの僅かな間の所作には、彼女の一寸腹におさめ兼ねる事があつた。彼がまだ充分に彼女の愛を得ない前には、又良人の無趣味な家を捨て、青春のロマンスとを享樂しに手を携へて外國へ出奔しやうと口說くことに努めてゐた時には、あんな態度は決して見せなかつた。

突然、同窓の友であつたステラ・ラングトンの運命がまざ〳〵と思ひ出された。ステラは良人と子供とを捨て、愛人と向

ふ見ずに印度へ奔つて行つた。しかし三月とも經たないうちに、男は、ステラを英國から來た愛らしい少女に見換えて、遂に結婚して了つた。

ステラは一文なしになつて英國へ歸つて來た。元の良人は彼女を再び迎へることを拒んだ。彼女は河に投じてその赤熱の生涯を終へた。

戀に一切を睹しながら、後で男から見捨てられて慘めを見た樣々な婦人の話が、群がる雲のやうに次から次へと思ひ出された。モナは危く叫び出さうとするのを、手で咽喉を押へて漸く止める事が出來た。

『あたしは何と云ふ馬鹿だつたのだらう！何と云ふ馬鹿！』と、モナは聲に出して言つた。

そして、自分が陷りかかつてゐた危險な運命から救はれた事を感謝するの念がしみじみと湧いて來た。

彼女は一たび、あの平安と堅實と信頼と贅澤とにふさはしく立つてゐる家庭に歸つたら、再びそれを失ふやうな危險は冒すまいと思つた。安全のためを思へば、退屈位は物の數でもない。彼女を取り圍んでくれる平和のためには、多少良人に鈍重な感じのある位は忍ばねばならぬ　ラムスデン醫師の忠告に隨つて今日のことは良人に言ふまい。もし良人がこれを知つたら到底ゆるしては吳れないであらう。それにしても有難いのはラムスデンの力ある助言であつた。良人を捨てやうと企んだ事などその常人に向つて言ふ必要はないのだ。

その時突如として、氷のやうな冷たさを以つた困迷が彼女を打つた。彼女はあの置き手紙のことを忘れてゐた！あの中には、凡ての退屈、凡ての幻滅、スタンリと愛に輝く生活を開拓するための凡ての計畫など、心にある事を殘る限なく書きつけ、此の際良人として取るべき唯一の適當な行爲は自分に自由を與へて下さる事だと、要求してあるのだつた。

彼女は汽車の中で恐しい叫びを舉げて時計を見た。六時に十分前、汽車は次第にビクトリヤ驛に近づきつつあつた。彼女は、良人が事務所から歸つて來ぬ間に、家へ着いてあの手紙を取返すことが出來るであらうか？　おお、あんな手紙を

書くとは何と云ふ馬鹿だつたのだらう。あれさへ無かつたら安全でゐる事が出來たのに。

それは良人と彼女との競走であつた。なんて緩い汽車だらう、停車場は未だか知ら？ 變事の出來？ 汽車は止まつたがプラットフォームの影も見えぬ。

あゝ！ 機關がまた動き出すと彼女は胸を撫でおろした。たゞ其の除々とした動き方に、彼女は焦れて氣が狂ひさうだつた。のろ〳〵とはしてゐるやうだつたが併し汽車は正確な時間に停車場へ入つた。

停止するとモナは客車から飛び出て、家兎のやうに出口を駈けぬけ、近くのタキシを呼んだ。

『出來るたけ急いで下さい。お代は倍あげます。』座席に腰を沈めながら、彼女は喘いで言つた。

四　小犬の戯れ

モナは六時を三分過ぎた時に家へ歸りついた。そして鍵を以て、置き手紙をした書齋へ躍りこんだ。

彼女はテーブルの上を掻きさがした。が、破りすてた紙片がある許りで、肝腎の手紙がそこに無いことを知ると、心臟が棒立ちになるのを覺えた。

暫くの間は氣が遠くなつて倒れさうな心持ちがしたが、ある限りの努力でそれに堪え、呼鈴を鳴らした。

『旦那さまはもうお歸りになつたこと？』

權の高い小間使は答へた。『まだでございませう。お顏も見ませんし、第一そんな御樣子などありませんでございましたよ。』

恐ろしい緊張を彼女は覺えた。

『あゝ！ 私はある書付をさがしてゐるんだがね。お前書付けでも動かしやしませんか。』

『それでございますか、奥さま、あの、一時間ばかり前一束の書付けが落ちてゐました。下働きの人がお火を見にきて、戸をあけ放しにしておいたものですから、小犬が入つて來て、屹度その旦那さまの御書類を玩具にしたのでございませう。爐の方まで飛んでる紙もございますし、外のも皆嚙まれたり、裂けたりしてゐました。私、出來るだけは片付けておきました。』

『それを見せて頂戴。――ありがたう。まあ、よかつた。』

小使が去ると、モナはテーブルの上にある紙片の間を熱心に捜した。皺になつたのや、破れたのや、燒灰で焦げたのや、汚れたのがあつたけれど、彼女の手紙らしいものは見當らなかつた。

彼女は紙屑籠を取上げ、神經過敏な指で、紙片の中をあさつたが、あの運命的な手紙のきれは、やはり無かつた。

彼女は立つたまゝ、疲れ切つた頭腦を無理にも働かせて見た。あの小間使は、まだ良人の歸つた樣子はないと言ふ。しかも手紙はここにない。今度飼ふことにしたコリイ種の小犬が、室中に紙をまき散らした時、あるものは爐の方まで飛んで行つて、灰の上に落ちた。とすれば說明のしやうは只一つしかない。彼女の手紙は卽ちこの祝福すべき小犬のため手玉に取られてゐる中に、爐の火に觸れて燒けたのだ。

カリ〳〵と扉を掻く音が聞えた。モナは走りよつて、泣き立てゝゐる柔い毛皮の毬（犬のこと）をつまみ上げ、ひしと胸に抱きしめて、その首に自分の顏を埋めた。

『あんたは本當に可愛い小犬ね。』と彼女は囁いた。『あんたは私をすくつてくれた、もうもうどんなに、引掻いても、壞しても、決して叱りませんよ。』

あらゝかに動悸を打たせながら　モナは二階へ上がつて行つた。そしてラムステン醫師の忠告に隨ふことにした。

彼女は熱い浴を濟ませた後、すぐ寢床に入つた。

七時が鳴つた。八時が鳴つた。良人リチャードはまだ歸つて來なかつた。もしモナが良人はなぜそんなに遲くまで歸宅しないのか、その眞因を知つたならば、どんな不安な夢魔に唸されることであらう！

モナは自分の室まで食事を運んで來るやうにと吩付けた。なぜ良人は歸つても來ず、電話もかけてくれないのか、氣がかりになり初めた。

良人の室の扉に鍵の音の聞えたのは十時近くであつた。

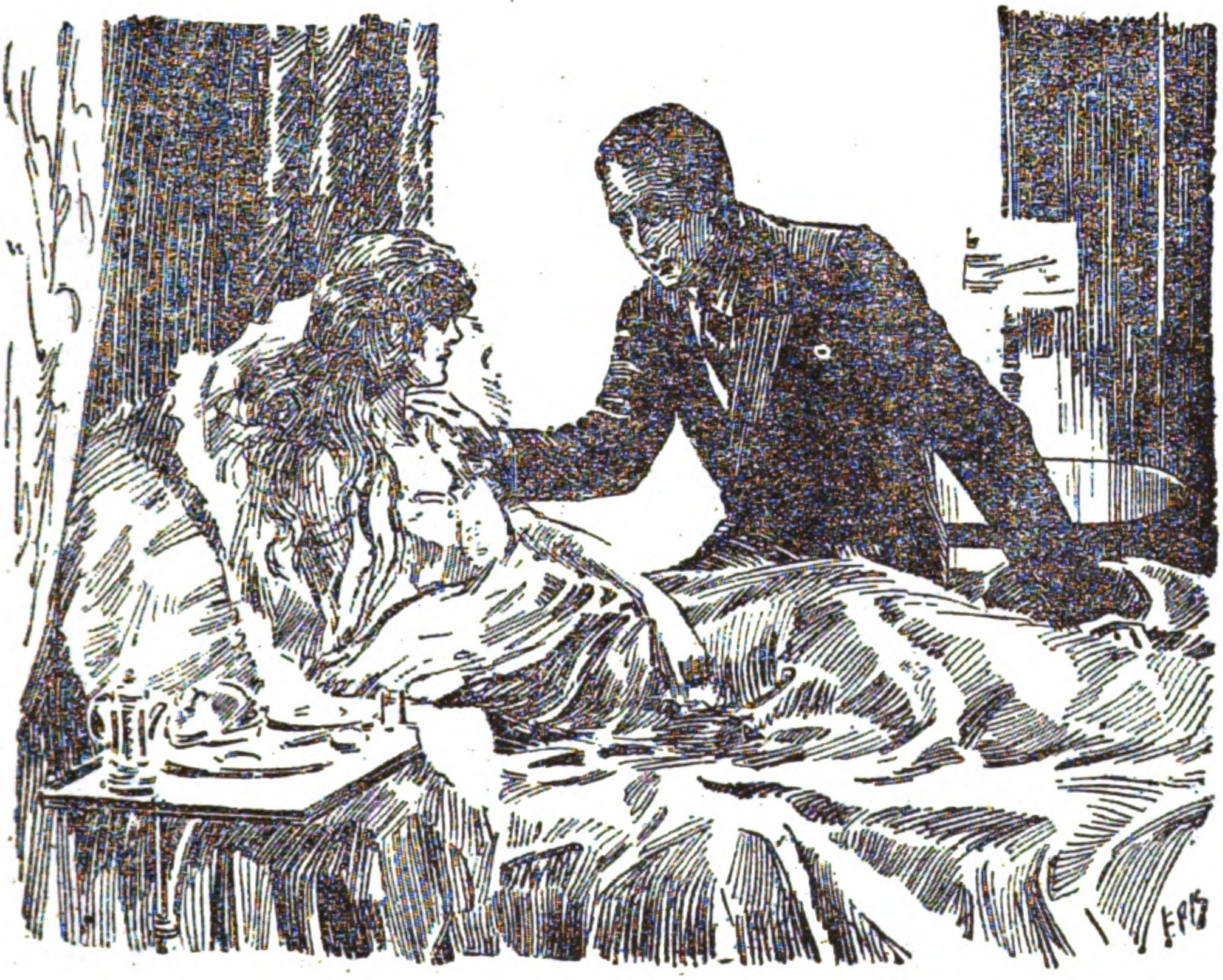
數分間過ぎた。いつもの通り小間使が、毎夜の最後の努めとして書齋へ運ぶコップや壜のかち合つて鳴る音が聞えた。

それから一時間ばかり經つて、凡ての召使達がみんな寢入つて了ふと、リチャードの階段を上つて來る足音が聞えた。彼女の心臟は亂暴な鼓動を打ち初めた。彼女は思はず聲を出しさうになつた。リチャードが何も知らないと云ふ事を確かめなければ、彼女は、今宵一夜とてもまんぢりとも出來さうでないと思つた。良人をして今日の事を何か推察させ、想像させる事が起つては居りはすまいか？

モナは美しき室を見廻した——今、彼女はそれを美しいと呼んだ。無趣味だとは思はなかつた——この設備は凡て彼女のため彼の出費と心遣ひとで出來上つたものだ。繻衫の掩ひの掛つた此の柔かい寢床に横たはつてゐる事はいかに幸福であらう。もしかすれば彼女は今頃病院で惱ましい横臥をつゞけてゐなければならなかつたかも知れない所であつた。——さもなくば恥辱で身を苛まれてゐる時なのだ。それにしても此の數ケ月何と云ふ狂氣に捉へられたものであらう。今はラムスデン醫師が根こそぎ取り除いてくれたが、さき程までは何と云ふ繃帶で眼隱しされてゐたものであらう。

五　手紙のゆくえ

リチャードが扉の外で立留まると、すぐノックが響いて來た。



この一瞬間でわかるのだ――良人があの致命的な手紙を見たか何うかがわかるのだ。

『どうぞ』とモナは、嗄れ聲で答へた。

リチャードは室へ入ると、扉を締めて、寢床の傍へつか〳〵と歩み寄つて來た。――皮膚の白さを際立たすため殊更碧色の繻袗の掩布をかけ、レースで縁を取つた枕の上一面に美しい髪を波打たせてゐるモナは、恰も眼に、物問ひたげな謂はれなき恐怖の色を現はしてゐる小娘のやうに見えた。

彼女の心臓は大きな脈動を一つ打つたが、やがて良人がいつもに變らぬ調子で話しだした時には殆んど停止して了つたかと思はれた。

『アリス（小間使）が、お前は大變に冷えた上疲れて歸つて來たから、早く寢に就いたと言つてゐたが、少しは具合が好いやうか。』

これなら大丈夫だと彼女は思つた。良人は何も知らず、又何事をも疑惑してはゐないのだ。

『ありがたう。リチャード。』と、彼女は歡びと感謝と

で手を差出した。『大變遲うございましたね。』

『重要な用件があつたから。』と、リチャードは妻の肩へ無器用さうに手を遣つて、それから黄金色の髪を撫でた。

『全くお前の髪は綺麗だね。私はこんなに艶のいゝ髪を見た事がない。これを見る度に私は、黄金色の海面に漾ふてゐる小浪を聯想する。』

モナの兩眼は見開かれた。スタンリだつてから詩的な言葉は嘗つて一度も口に出した事はない。

『あなたに好んで頂けて、あたし大變に嬉しう存じます。』

リチャードは彼女の寢臺の端にどしりと腰かけた。

『前から考へてゐてお前の都合がどうかと氣遣つてゐたのだが、此の冬二三週間埃及へ旅行しないかね。あの有名な墓窖などを見れば、私も氣晴らしになるし、お前に取つても面白いことゝ思ふが。』

『埃及ですつて！』と、彼女は早口に繰返した。埃及、カイロ、ルクソア、アッスアン、墓窖、ピラミット？　これらは凡て彼女の常に夢見てゐたものであり、リチャードが亦連れて見に行きたいのは山々だがどうも時間の繰合せがつかないと言つてゐるものであつた。

『まあ、さうなればどんなに嬉しいでせう。』

『では出掛ける事にきめやう。私はお前が無變化と退屈に苦しんでゐる事は考へてゐたのだ。私は、自分が老人で無骨者である事はよく知つてゐる。が、お前を熱愛してゐること丈けは忘れないでゐて貰ひたい。私の心は昔も今も同じ思慕をお前に感じてゐる。お前はこの數年、私の愛なんかは必要としてゐないかも知れない。だが少しでも私の愛を求める氣持があるなら、何時だつて昔通りと變る所はないのだ。』

此の危急の一瞬間、モナは心に非常な恐怖を抱いて、良人の顏をのぞき込んだ。

が、あの優しい、重厚な額はもとの通りおだやかで、兩眼もやさしさに溢れてゐた。
殆んど七年の間死んで了つてゐた或るものが、今やモナの心の中に動きはじめた。あゝ、あの結婚の夜のリチャードの眼眸と話し振りには、些少の非難すべき點もなかつた。彼女に配つた心遣りもやさしくて、愛撫に充ちてゐて、そして紳士的であつたものだ。

『リチャード』と、モナは、良人が室から去つて行かうとした時、衝動的に呼びかけた。
一瞬前には白紙のやうに蒼ざめてゐた彼女の頰は、いま紅く輝き渡つてゐた。

『あたし、何だか今晩は感情が昂ぶつて、一人きりになりたくないのよ。』
モナは良人の兩眼に燃え出した輝きを見た時、何か生きた指のやうなものでしつかりと心臓を掴まれたやうな氣がした。

『お前の言ふのは、つまり私に一緒にゐて貰ひたいと云ふことか。』

『えゝ、どうか、——もしあなたがお厭でございませんでしたら。』と、彼女は喘ぐやうな聲で答へた。
彼は大足で寢床の傍へ寄つて來て、兩手にモナを抱き上げ、荒らかに鼓動を打つ胸に抱きしめた。その時彼女の髪は黄金の瀑布の如く二人の肩の上に落ちかゝつた。

『わが愛、わが希望、わが妻。』と、囁きながらリチャードは、情熱的な憧れに飢えた唇を、彼女の口、閉ちた眼、脈搏をうつ咽喉に燃ゆるが如く濺いだ。

『あたし——あたし、あなたがさうまで私を氣にかけてゐて下さらうとは存じませんでした。』と、モナは良人の兩腕に力なく身の重みを投げかけながら言つた。『どうしてあなたは、もつと早くそれを私に知らせて下さいませんでしたの。あたしは極めて人間的な女です。だからこんなに熱愛して頂くことを、どんなに望んでゐたでせう。』

『私も極めて人間的な男だ。しかしこんなにもお前を愛しながら、その感じのまゝをお前に示すことが出來なかつた。と云ふのはお前が私との融和を嫌つてゐるやうに思へたからだ。私は愛してゐても、相手の婦人が私を忌避してゐると思へばキスさへ試みることが出來ないのだ。』

モナは良人の顔をのぞきこんだ。あのいつもの鈍重な感じは、彼の眼に溢れ、唇にも現はれてゐる晴々しい輝きの中に消え去つて了つてゐた。

『あたしは――あたしは今はじめてあなたを知りました。リチヤード。あなたが本當に私を望んで下さるなら、あなたも私になくてはならぬ力でございます。』

リチヤードは自分の室に歸るとポケットから一通の手紙を取出した。その中に書いてある言葉によつて彼の魂はどんなに萎れ返つた事であらう。彼はそれをずたずたに引裂いて消えかかつてゐる火の心臓の中に叩きこんだ。

モナは、彼が晝間の四時少し過ぎに一度歸宅したことを知らないのであつた。彼は自負心と生命とを全く傷付けられて再び家を出て行つた。極度の不幸を感じて幾度となく躓いたりしたのだけれど召使はそれを見も聞きもしないのであつた手紙の最後の切端まで灰と化した上で、彼はあかりを消して、廊下へ出た。そして妻の室の扉へと急いだ。但し今度はノックもしないで、中へ入つて行つた。（完）



出世五人男

（長篇小説）

宇野浩二

どうして厨戸夏生が彼の郷里の田舎に歸るやうになつたか。——

作者はこの人を大砲に譬へたことがあるが、それは彼が以前砲兵にとられたことがあるのと、體が大きくて、色が黒くて、顔の形が角張つてゐるのと、つまり一口にいつて大砲のやうな感じがするからであるが、聞くと、中學時代の彼の綽名が矢張り大砲といふのだつたさうだ。子供のつける綽名といふものには、直感から來るところの、實に穿つたものがあるものだが、夏生の場合がその一例に違ひない。それ等の綽名を呼んだ者の誰が『大砲』が大きくなつて、砲兵に徴集されると思つたものがあるだらう。それどころか、彼がこの世に出てからも、恰もわざ〳〵その綽名に適合させるかのやうに、武骨であること、鈍であること、善良であること、そして世間交りが出來ないこと、悉く大砲の通りであらうとは誰が豫想したであらう。唯一つ、その名に適はしくないのは、彼がその柄にもなく臆病で、變に神經質

なことであつた。

それに、赤木阿珂丸が初めて入井の家で彼に會つた頃のことから思ふと、彼も幾分か人柄が變つたやうに見えた。その一番はつきりした例は、あの頃は彼も未だ見知らぬ人に、彼自身が書き記した失戀の經歴を持つて、泣きながら讀んでもらふ熱情を持つてゐたではなかつたか。或は又恩義を忘却したものとして、聲を上げて花子を恨むことが出來たではなかつたか。それが今は失戀を泣くことも、人の裏切りを憤ることも、さういふ氣持が彼になくなつた譯ではないが、以前のやうに聲を上げてそれをしなくなつたと見えるのだつた。それは彼のやうな性格ながらにも、謂はゞ以前は親の家を離れたばかりの、氣質としてはお坊ちやんだつたからでもあらう。それから思ふと、激しい東京の空氣に揉まれて、彼も彼なりに「この世の人」になつた證據であるのだらうか。

が、いふ迄もなく、人の性質は、どれ程の激しい外界の波に遭つたところが、根本から變ることはあり得ないだらう。それは唯見たところが變るだけなのだ。そして我が厨戸夏生の場合では、古雜誌に失戀の悲みを書いたり、知らぬ人を尋ねて己に辛い人のことを恨んだりする代りに、この頃ではひどく愚痴つぽくなつたのである。それは極めて自然な成行きに違ひなかつた。それにしても、何と『大砲』の愚痴！

つまり、彼のやうな人にも、――といふよりはこの世では彼のやうな人が最も露骨に輕蔑を向けられる。友達からも、戀人からも、下宿の女中からさへも、――たとへ表面は大砲のやうに頑固に、鈍感に見えても、物を感じる心持にそんなに違ひのある筈がないのだが、人は彼のその體裁と、吃音の癖と、善良な性質とに、輕蔑の目を向けるのが普通であつた。だが、彼の心にも不平や、悲みや、恨みが溜つて來るのである。が、彼はそれを吃音のために、普通に人がするやうに、自由な言葉で表現することが出來なかつたので、――といつて、彼にしても、さういふ不平や、悲みやを、吃り吃り現したのでは、恐らくその功果が半減せられると齒がゆく思ふのであらう。そこで彼は發明したのに違ひない、――といふ

のは、どんな吃音者でも、吃らずに表現出來る發音法がある。それは俗に『吃音の小唄』といふ通り、唄である。唄をうたふ時は、どんな吃音者といふけれども、決して吃らないものである。彼はそれから思ひついて、唄をうたふ呼吸で、少しばかり節がついても、少しばかり句切りがをかしくなつてもかまはないから、その流儀で物をいふやうな稽古をしたのである。そして彼はそれに成功した。その代りそれは可成り小聲であつた。

「いーまーゐーるーうーちーはーじゆーんーさーのーうーちーでーせう」といつた風にである。さういふ言ひ方で、今彼の間借りをしてゐるのは巡査の家だ、と或時いつたことがあつた。巡査の家だから貧乏なのである。貧乏なくせに子供が四人もあつて、下の二人の子は、一人が病身で、一人が泣虫で、どちらもこの泣聲で二階の彼を惱ますといふのである。その上、上の子はもう一人で二階への梯子を上り下り出來るものだから、始終彼のところへ遊びに來る。彼は性來子供が好きなので、それはどちらかといふと彼の望むところなのだが、困るのは彼の寢てゐる時でも、勉強してゐる時でも、病氣の時でも、始終やつて來る。それも子供自身の意志で來るのなら決してかまはないのだが、細君が二言目には子供の耳にさゝやいて、「厨戸さんのところへ行つといで、二階へ行つといで」と煽動するので、それが不愉快だといふのである、

「僕だつてそれや――どんもりだつて――耳は人より――よく聞えます――ねえ赤木さん……」

この厨戸の癖はだん〳〵激しくなつて來て、――といふのは、これは彼自身にも胸に溜つたものゝ唯一の吐け口であり、自然樂みでもあつたと共に、聞く者にも、語られてゐることは彼の悲みや不平ではあつたが、そこに唄を聞いてゐるやうな快感を覺えさせられるので、彼に會ふとそれを聞くのが面白さであるやうになつたので、彼を多少煽てさへしたのだつた、――で、彼は終には、それで彼自身の直接の悲みや不平を訴へるばかりでなく、彼の見聞する悲みや不平やをそれで語るやうにさへなつたものだ。たとへば、それを先の巡査の家の場合でいふと、巡査は未だ年も若くて、而も中々の美男なのである。ところが細君は彼よりも年上で、おまけに鼻の低い、縮れ毛の、前歯がいつも二本缺けたまゝになつ

てゐる、醜い女なのださうである、それで、一番上の子はその女の先夫との連れ子だといふのだ、巡査は一日おきに休み番で家に歸つてゐるが、家にゐる時は大抵寢てゐる、隨分月給が安いのだらうが、彼等は豚より惡いものを食べてゐる、厨戸自身が可成り粗食をしてゐると思へるのに、それより遙かに遙かに粗食してゐる、道理で、巡査は家にゐる時で、寢てゐない時は、よく厨戸のところへ話をしに來る、そして厨戸の自分を羨んでゐる、などといふのである、つまりその時は厨戸夏生はその巡査の爲に、彼の唄をうたふのに外ならなかつた。が、彼は又彼の細君の爲にもうたつてやることを忘れなかつた、――細君はあんなに大勢の子供を抱えながら、朝から晩まで内職の麻つなぎをしてゐる、それで子供に乳も飲ませ、三度三度の食事の用意から、洗濯から、よくもあんなに働けたものだ、勞働としても、彼女の分は、夫の巡査の倍にも當るかも知れない、それで何か彼女の樂みだと尋ねたら、樂みといふものはない、この世は苦みに來てるのですもの、と彼女はいふのだ、年上だといつたつて、まだ二十九歳ださうだ、などと『吃音の小唄』がうたふのである。

「遞信省も――つらいもんです――僕は人よりど鈍なので――いつ迄たつても――見習生です――いつ迄たつても――さういふ人が――あるさうですよ――僕の外にも――」と到頭『吃音の小唄』が、彼の勤めてゐる遞信省の通信の、通信事務員のつらさをうたふやうになつた。彼の勤といふのは午前八時から午後五時までゝあつた、が、彼は朝起きて、自分の朝飯の仕度をしなければならなかつた、それから新橋の遞信省まで歩いて通ふのは十五分以上の道のりではなかつた。彼はその途中でジャム附のパンを辨當のために買ふのである、彼は物覺えが惡くて、本當ならとうの昔に止めさせられてゐたかも知れないのであるが、人に好かれる質で、――といふよりも人から面白がられたり、からかはれたりするのによい性質といふ方が適當かも知れない、兎に角、今だにつゞけてゐるのであるが、外の者は毎日出勤してゐる時間だけで濟むのであらうが、彼にはいろ／＼と覺えたり、計算したりすることやらが、家に歸つてからもしなければならぬほど殘るのである。勤めの辛いことはそんなに苦勞には思はぬが、自分自身の時間のないのが殘念である、といふのは、彼のやうな者

でも、畫をかく時が欲しいといふのである。

おゝ、藝術といふものゝ不思議な魅力よ、これは正に熱病以上のものに違ひない。人が一度この病氣に取り憑かれると、どんな賢いものも、どんな愚なものも、才のあるのも、才のないものも、富める者も、貧しき者も、一生涯このために悩まされなければならない。我等の哀れな厨戸夏生も、毎朝遞信省へ通ふ途で、金七錢のジヤム附のパンを買ふ時も、巡査の子供に悩まされてゐる時も、さては久し振りの鮭の切身で滿腹して舌皷打つ時も、月末に思ひの外一圓五十錢の特別手當金を貰つて喜ぶ時も、ふと藝術といふことを考へると、ヒステリイの發作にあつたやうにいら／＼するのである。彼は彼の畫が人並より劣つてゐることを知つてゐた。だが、さうだからといつて、遞信省の職を投げ打つ氣にはなつても、畫をかく樂みを止める氣にはどうしてもなれなかつた。晝飯のパン代が一ケ月三十日として二圓十錢かゝる——と彼は『吃り青の小唄』で口說くのである。間代が四圓五十錢で、米代が略々それと同じ位だから、それだけで既に十一圓十錢かゝるといふのである。その外に副食物と煙草代、それで彼が遞信省から貰ふ日給は一日一圓五十錢だから、たまの日曜にも、うか／＼電車に乘ることも出來ない。日曜に電車に乘れないこともかまはないが、日曜は後の六日間の疲れで半日は大抵寢てしまふ「赤木さん」赤木さん、ぼ僕のやうな——者でもやつぱり——畫をかきたいよ——下手でも何でも——ぼ僕並にかきたいよ、」と彼は赤木にいふのだつた。

更に附け加へていふのには、彼も子供の時分それ程でもなかつたが、考へて見ると入井の家で食糧攻めにあつた時に、腹を減らしたのが今でも祟つてゐるのだらうか、どんなに我慢しても一日に二度（一度はパンなので、五六合の飯を食はないと腹の虫が治まらない。彼は畫をかくことを除くと、人のやうに外に何の樂みも持たない。せめて飯食ふことが樂みだから、米だけは存分に食べたいよ、存分に食べたいよ、といふのである。低い濁み聲の、調子の惡い唄だが、正直な男だけに眞實がこもつてゐるので、これを聞くと、誰も笑ひながら、腹の中は風が吹くやうな思がした。が、さうして、米

を食ふことだけの樂みで、辛抱しいしい通つてゐた遞信省を、或日到々止めてしまふことになつた。

それには、次のやうな仕事の的もあつたからだつた。仕事といふのは、見返按次郎の世話で、或私立の醫學校へ、顯微鏡の擴大圖を畫きに行くのである。實は、見返も彼自身の日本畫だけでは、到底生活の資になり兼ねるので、最早半年以上内職としてその仕事を勤めてゐたのであるが、それがだん〳〵忙しくなつて、彼を主任として、彼の外にもう一人、同じ仕事をしてくれる人を欲しいと學校から頼まれてゐたので、それを厨戸に世話しやうといひ出したのであつた。仕事は馴れないうちは少し骨が折れるかも知れないが、元々顯微鏡を覗いては、それを十倍とか、二十倍とかに寫しとるだけのことであるから、それ程の畫才がなくても、根氣さへあればいゝといふので、厨戸のやうな者でも、その位のことなら出來るだらうと見返は考へたのに違ひはない。

厨戸は喜んだ、たとへそれが前の通信事務員のそれよりも辛い仕事であつたとしたところが、彼にはまるで、不得手な、頭痛を催すところの計算や暗記の仕事から思ふと、蛙の腸にしても、傳染病の黴菌にしても、それは畫にかく仕事だといふことだけで滿足だつた。而も日曜と土曜とか休みで、時間も九時頃から二時頃まで、或は十時頃から四時頃まででよかつたし、少し勉強すれば、通信事務員よりもずつといゝ報酬を得ることが出來るといふのである。もつとも、初めのうちは顯微鏡を覗くことが可成骨が折れた。元より近眼でもないし、外に視力に缺陷がある譯でもなかつたから、見えない筈はないと思ふのだが、やつぱり馴れる迄は容易に見分られなくつて困つた。次にやうやくそれと見えるやうになつてからも、少し此方が動くと、直にその對照が見えなくなつたり、片方へよつたりして、中々見當がつき兼ねた。

「こ、これは何の病氣ですと？」と、彼は水色の川のやうに見える中に、ぼつ〳〵と妙な恰好のものが模樣のやうに浮いてゐるのを見て、ちよつと傍にゐた職員に聞いて見ると、「それは、その水色のが、それは肺病の黴菌だよ、」といはれて、思はずぎくりとして身體を後に引いて笑はれたり、同じやうに、チブスの黴菌だとか、何々の黴菌だとか、こと〳〵く不氣味な

ものばかりなのに、初めのうちは笑はれながらも、つひ氣味悪い思ひを外に現さない譯に行かなかつた。

「見返さん、だ大丈夫でせうか、こ、こんなに毎日々々黴菌にばかり接してゐても……?」と彼は一間ばかり離れたところに、同じやうに机の上の顯微鏡を覗きながら、怒つたやうにむつつりして畫いてゐる見返の方を見て、おづ／＼した調子で問ひかけて見た。が、相手は振向きもしないで、繪具の筆をぴちや／＼嘗めながら、馴れた手附きで畫きつゞけてゐるので、厨戸も亦そのまゝ彼の仕事をつゞける外なかつた。が、つゞけながら、今見た見返の白い顏の中で、目に立つて唇のところだけが、紅や青やの繪具が、嘗める度につくと見えて、それがきら／＼光つてゐた物凄い姿が目について仕方がなかつた。すると、見返そのものが何か恐るべき黴菌の親分でもあつて、彼厨戸もまた今にその黴菌の一つになつてしまふのではないか、といふ氣がされた。だが、彼は自分の弱い心を鞭打ち鞭打ち、辛抱して勤めた。

けれども、彼がその醫學校に通ひ出してから、たしか一週間目のことであつた。彼等の仕事部屋は三階であつた。彼等が向つて仕事してゐる北窓からは、晴れた日には、ぽつと筑波山が新月のやうに地平に浮かんで見えた。

「み、見返さん」と厨戸はいつた。變な椅子で、床の上に作りつけになつてゐて、腕掛も、背を凭れかかるところも、同じ高さで、そしてそれが小さいので、一旦その上に腰を掛けると、嵌め込まれたやうに身動きが出來ない程窮屈だつた。で、厨戸は顏だけ見返の方に向けていつたのだつた。「あ、あそこに筑波山が見えます。」

「ふむ……」と見返は例に依つて、仕事の手を止めないで、答へたのか、唯鼻を鳴らしたゞけなのか、分らないやうな返事をした。

「き、綺麗ですよ。」と厨戸はも一度いつて見た。何故といつて、彼が輕子と手をとつて出た切り、何年間か見たことのない彼の故郷の、それは山だつたからだ。

が、今度は見返はもう鼻を鳴らす音さへさせなかつた。厨戸は泣きさうな顏になつて、再び顯微鏡を覗くことと、それ

を寫しとる仕事に着手した。その時、後の扉を開けて、職員らしい人が二三人部屋の中にどや〳〵と這入つて來た氣配を、厨戸は感じた。が、それは少しも珍しいことではないので、それを一々振り向いてゐたのでは、彼等の仕事は半分も出來なかつたから。もつとも普通の例だと、この部屋に這入つて來たものは、大抵一度は彼等の傍に來て、彼等の仕事を覗き込んでは、默つて見てゐるものもあるし、「肩の凝る仕事だな、」といふものもあるし、或は「君、この色はもう少し鮮明に出してくれ給へ、必ずしも顯微鏡に見える通りでなくていゝから、」などと指圖するものもあつて、それ〳〵此方から振向いて挨拶する必要がなかつた。が、そんな時でも、厨戸がひどく恐縮する反對に、見返は彼に對すると同じやうに、いつの時でも首一つ振りもしなければ、返答一つしたことがなかつた。そして厨戸も今は多少さういふ闖入者には馴れかゝつてゐた。で、彼はかまはず仕事をつゞけてゐた。

ところが、この日は闖入者たちは一向厨戸等の傍には寄つて來ないで、暫くすると、何かばた〳〵と、彼等自身の仕事を始めたらしかつた。それが何か知らぬが、少し穩かでない仕事らしいなと感じるまでもなく、突然、きやん〳〵〳〵と、確に犬に違ひない、動物の必死の叫び聲が起つて、それと同時に、動物が暴れ出したらしく、人々のばた〳〵と騷ぐ足音がけたゝましくなつた。厨戸はそれが何であるかを、はつきりは分らなかつたが、直覺的に感じると、忽ち脊中と股の下とに寒さを覺えた。その次の瞬間が人々のばた〳〵いふ足音である。堪えに堪えてゐた彼も、到頭たまり兼ねて、椅子からひよつりと腰を浮かした、犧牲の動物が、苦しまぎれに彼の足元に飛んで來はしないかといふ恐怖にも襲はれたからであつた。

彼が完全に椅子から立上つて、そこに起つてゐる事件の方に目をやつた時は中で一人の最も勇敢らしい、五分刈頭の、無髯の職員が、洋服の上から來た白衣を袖ごとまくり上げて、

「この野郎、しぶといな、」といひながら、麻睡劑を濕ましたらしい脫脂綿のかたまりを持つて、最早や逃げ場所がなくな

のは、どんな吃音者でも、吃らずに表現出來る發音法がある。それは俗に『吃音の小唄』といふ通り、唄である。唄をうたふ時は、どんな吃音者といふけれども、決して吃らないものである。彼はそれから思ひついて、唄をうたふ呼吸で、少しばかり節がついても、少しばかり句切りがをかしくなつてもかまはないから、その流儀で物をいふやうな稽古をしたのである。そして彼はそれに成功した。その代りそれは可成り小聲であつた。

「いーまーゐーるーうーちーはーじゅーんーさーのーうーちーでーせう」といつた風にである。さういふ言ひ方で、今彼の間借りをしてゐるのは巡査の家だ、と或時いつたことがあつた。巡査の家だから貧乏なのである。貧乏なくせに子供が四人もあつて、下の二人の子は、一人が病身で、一人が泣虫で、どちらもこの泣聲で二階の彼を惱ますといふのである。その上、上の子はもう一人で二階への梯子を上り下り出來るものだから、始終彼のところへ遊びに來る。彼は性來子供が好きなので、それはどちらかといふと彼の望むところなのだが、困るのは彼の寢てゐる時でも、勉強してゐる時でも、病氣の時でも、始終やつて來る。それも子供自身の意志で來るのなら決してかまはないのだが、細君が二言目には子供の耳にさゝやいて、「廚戸さんのところへ行つといで、二階へ行つといで」と煽動するので、それが不愉快だといふのである、

「僕だつてそれや――どんもりだつて――耳は人より――よく聞えます――ねえ赤木さん……」

この廚戸の癖はだん／＼激しくなつて來て、――といふのは、これは彼自身にも胸に溜つたものゝ唯一の吐け口であり、自然樂みでもあつたと共に、聞く者にも、語られてゐることは彼の悲みや不平ではあつたが、そこに唄を聞いてゐるやうな快感を覺えさせられるので、彼に會ふとそれを聞くのが面白さであるやうになつたので、彼を多少煽てさへしたのだつた、――で、彼は終には、それで彼自身の直接の悲みや不平やを訴へるばかりでなく、彼の見聞する悲みや不平やをそれで語るやうにさへなつたものだ。たとへば、それを先の巡査の家の場合でいふと、巡査は未だ年も若くて、而も中々の美男なのである。ところが細君は彼よりも年上で、おまけに鼻の低い、縮れ毛の、前齒がいつも二本缺けたまゝになつ

てゐる、醜い女なのださうである、それで、一番上の子はその女の先夫との連れ子だといふのだ、巡査は一日おきに休み番で家に歸つてゐるが、家にゐる時は大抵寢てゐる、隨分月給が安いのだらうが、彼等は豚より惡いものを食べてゐる、厨戸自身が可成り粗食をしてゐると思へるのに、それより遙かに遙かに粗食してゐる、道理で、巡査は家にゐる時で、寢てゐない時は、よく厨戸のところへ話をしに來る、そして厨戸の自分を羨んでゐる、などといふのである、つまりその時は厨戸夏生はその巡査の爲に、彼の唄をうたふのに外ならなかつた。が、彼は又彼の細君の爲にもうたつてやることを忘れなかつた、――細君はあんなに大勢の子供を抱えながら、朝から晩まで内職の麻つなぎをしてゐる、それで子供に乳も飲ませ、三度三度の食事の用意から、洗濯から、よくもあんなに働けたものだ、勞働としても、彼女の分は、夫の巡査の倍にも當るかも知れない、それで何か彼女の樂みだと尋ねたら、樂みといふものはない、この世は苦みに來てるのですもの、と彼女はいふのだ、年上だといつたつて、まだ二十九歲ださうだ、などと『吃音の小唄』がうたふのである。

「遞信省も――つらいもんです――僕は人より鈍なので――いつ迄たつても――見習生です――いつ迄たつても――さういふ人が――あるさうですよ――僕の外にも――」と到頭『吃音の小唄』が、彼の勤めてゐる遞信省の通信の、通信事務員のつらさをうたふやうになつた。彼の勤といふのは午前八時から午後五時までゝあつた、が、彼は朝起きて、自分の朝飯の仕度をしなければならなかつた、それから新橋の遞信省まで歩いて通ふのは十五分以上の道のりではなかつた。彼はその途中でジャム附のパンを辨當のために買ふのである、彼は物覺えが惡くて、本當ならとうの昔に止めさせられてゐたかも知れないのであるが、人に好かれる質で、――といふよりも人から面白がられたり、からかはれたりするのによい性質といふ方が適當かも知れない、兎に角、今だにつゞけてゐるのであるが、外の者は毎日出勤してゐる時間だけで濟むのであらうが、彼にはいろ〳〵と覺えたり、計算したりすることやらが、家に歸つてからもしなければならぬほど殘るのである。勤めの辛いことはそんなに苦勞には思はぬが、自分自身の時間のないのが殘念である、といふのは、彼のやうな者

でも、畫をかく時が欲しいといふのである。

おゝ、藝術といふものゝ不思議な魅力よ、これは正に熱病以上のものに違ひない。人が一度この病氣に取り憑かれると、どんな賢いものも、どんな愚なものも、才のあるのも、才のないものも、富める者も、貧しき者も、一生涯このために惱まされなければならない。我等の哀れな厨戸夏之丞も、毎朝遞信省へ通ふ途で、金七錢のジヤム附のパンを買ふ時も、巡査の子供に惱まされてゐる時も、さては久し振りの鮭の切身で滿腹して舌皷打つ時も、月末に思ひの外一圓五十錢の特別手當金を貰つて喜ぶ時も、ふと藝術といふことを考へると、ヒステリイの發作にあつたやうにいら／＼するのである。彼は彼の畫が人並より劣つてゐることを知つてゐた。だが、さうだからといつて、遞信省の職を投げ打つ氣にはなつても、畫をかく樂みを止める氣にはどうしてもなれなかつた。晝飯のパン代が一ケ月二十日として二圓十錢かゝる──と彼は『吃音の小唄』で口説くのである。間代が四圓五十錢で、米代が略々それと同じ位だから、それだけで既に十一圓十錢かゝるといふのである。その外に副食物と煙草代、それで彼が遞信省から貰ふ日給は一日一圓五十錢だから、たまの日曜にも、うか／＼電車に乘ることも出來ない。日曜に電車に乘れないこともかまはないが、日曜は後の六日間の疲れで半日は大抵寢てしまふ「赤木さん」赤木さん、僕のやうな──者でもやつぱり──畫をかきたいよ──下手でも何でも──僕並にかきたいよ、」と彼は赤木にいふのだつた。

更に附け加へていふのには、彼も子供の時分それ程でもなかつたが、考へて見ると入井の家で食糧攻めにあつた時に、腹を減らしたのが今でも祟つてゐるのだらうか、どんなに我慢しても一日に二度（一度はパンなので、五六合の飯を食はないと腹の虫が治まらない。彼は畫をかくことを除くと、人のやうに外に何の樂みも持たない。せめて飯食ふことが樂みだから、米だけは存分に食べたいよ、存分に食べたいよ、といふのである。低い濁み聲の、調子の悪い唄だが、正直な男だけに眞實がこもつてゐるので、これを聞くと、誰も笑ひながら、腹の中は風が吹くやうな思がした。が、さうして、米

を食ふことだけの樂みで、辛抱しいしい通つてゐた遞信省を、或日到々止めてしまふことになつた。

　それには、次のやうな仕事の的もあつたからだつた。仕事といふのは、見返按次郎の世話で、或私立の醫學校へ、顯微鏡の擴大圖を畫きに行くのである。實は、見返も彼自身の日本畫だけでは、到底生活の資になり兼ねるので、最早半年以上内職としてその仕事を勤めてゐたのであるが、それがだん／＼忙しくなつて、彼を主任として、彼の外にもう一人、同じ仕事をしてくれる人を欲しいと學校から頼まれてゐたので、それを厨戸に世話しやうといひ出したのであつた。仕事は馴れないうちは少し骨が折れるかも知れないが、元々顯微鏡を覗いては、それを十倍とか、二十倍とかに寫しとるだけのことであるから、それ程の畫才がなくても、根氣さへあればいゝといふので、厨戸のやうな者でも、その位のことなら出來るだらうと見返は考へたのに違ひはない。

　厨戸は喜んだ、たとへそれが前の通信事務員のそれよりも辛い仕事であつたとしたところが、彼にはまるで、不得手な、頭痛を催すところの計算や暗記の仕事から思ふと、蛙の腸にしても、傳染病の黴菌にしても、それは畫にかく仕事だといふことだけで滿足だつた。而も日曜と土曜とか休みで、時間も九時頃から二時頃まで、或は十時頃から四時頃まででよかつたし、少し勉強すれば、通信事務員よりもずつといゝ報酬を得ることが出來るといふのである。もつとも、初のうちは顯微鏡を覗くことが可成骨が折れた。元より近眼でもないし、外に視力に缺陷がある譯でもなかつたから、見えない筈はないと思ふのだが、やつぱり馴れる迄は容易に見分られなくつて困つた。次にやうやくそれと見えるやうになつてからも、少し此方が動くと、直にその對照が見えなくなつたり、片方へよつたりして、中々見當がつき兼ねた。

「こ、これは何の病氣ですと？」と、彼は水色の川のやうに見える中に、ぼつ／＼と妙な恰好のものが模樣のやうに浮いてゐるのを見て、ちよつと傍にゐた職員に聞いて見ると、「それは、その水色のが、それは肺病の菌だよ。」といはれて、思はずぎくりとして身體を後に引いて笑はれたり、同じやうに、チブスの菌だとか、何々の菌だとか、こと／＼く不氣味な

ものばかりなのに、初めのうちは笑はれながらも、つひ氣味惡い思ひを外に現さない譯に行かなかつた。

「見返さん、だ大丈夫でせうか、こ、こんなに毎日々々黴菌にばかり接してゐても……？」と彼は一間ばかり離れたところに、同じやうに机の上の顯微鏡を覗きながら、怒つたやうにむつつりして畫いてゐる見返の方を見て、おづ／＼した調子で問ひかけて見た。が、相手は振向きもしないで、繪具の筆をぴちや／＼嘗めながら、馴れた手附きで畫きつゞけてゐるので、厨戸も亦そのまゝ彼の仕事をつゞける外なかつた。が、つゞけながら、今見た見返の白い顏の中で、目に立つて唇のところだけが、紅や青やの繪具が、嘗める度につくと見えて、それがきら／＼光つてゐた物凄い姿が目について仕方がなかつた。すると、見返そのものが何か恐るべき黴菌の親分でもあつて、彼厨戸もまた今にその黴菌の一つになつてしまふのではないか、といふ氣がされた。だが、彼は自分の弱い心を鞭打ち鞭打ち、辛抱して勤めた。

けれども、彼がその醫學校に通ひ出してから、たしか一週間目のことであつた。彼等の仕事部屋は三階であつた。彼等が向つて仕事してゐる北窓からは、晴れた日には、ぽつと筑波山が新月のやうに地平に浮かんで見えた。

「み、見返さん」と厨戸はいつた。變な椅子で、床の上に作りつけになつてゐて、腕掛も、背を凭れかかるところも、同じ高さで、そしてそれが小さいので、一旦その上に腰を掛けると、嵌め込まれたやうに身動きが出來ない程窮屈だつた。で、厨戸は顏だけ見返の方に向けていつたのだつた。「あ、あそこに筑波山が見えます。」

「ふむ……」と見返は例に依つて、仕事の手を止めないで、答へたのか、唯鼻を鳴らしたゞけなのか、分らないやうな返事をした。

「き、綺麗ですよ。」と厨戸はも一度いつて見た。何故といつて、彼が輕子と手をとつて出た切り、何年間か見たことのない彼の故郷の、それは山だつたからだ。

が、今度は見返はもう鼻を鳴らす音さへさせなかつた。厨戸は泣きさうな顏になつて、再び顯微鏡を覗くことと、それ

を寫しとる仕事に着手した。その時、後の扉を開けて、職員らしい人が二三人部屋の中にどや〳〵と這入つて來た氣配を、厨戸は感じた。が、それは少しも珍しいことではないので、それを一々振り向いてゐたのでは、彼等の仕事は半分も出來なかつたから。もつとも普通の例だと、この部屋に這入つて來たものは、大抵一度は彼等の傍に來て、彼等の仕事を覗き込んでは、默つて見てゐるものもあるし、「肩の凝る仕事だな、」といふものもあるし、或は「君、この色はもう少し鮮明に出してくれ給へ、必ずしも顯微鏡に見える通りでなくていゝから、」などと指圖するものもあつて、それ〴〵此方から振向いて挨拶する必要がなかつた。が、そんな時でも、厨戸がひどく恐縮する反對に、見返は彼に對すると同じやうに、いつの時でも首一つ振りもしなければ、返答一つしたことがなかつた。そして厨戸も今は多少さういふ闖入者には馴れかゝつてゐた。で、彼はかまはず仕事をつゞけてゐた。

　ところが、この日は闖入者たちは一向厨戸等の傍には寄つて來ないで、暫くすると、何かばた〳〵と、彼等自身の仕事を始めたらしかつた。それが何か知らぬが、少し穩かでない仕事らしいなと感じるまでもなく、突然、きやん〳〵〳〵と、確に犬に違ひない、動物の必死の叫び聲が起つて、それと同時に、動物が暴れ出したらしく、人々のばた〳〵と騷ぐ足音がけたゝましくなつた。厨戸はそれが何であるかを、はつきりは分らなかつたが、直覺的に感じると、忽ち脊中と腋の下とに寒さを覺えた。その次の瞬間が人々のばた〳〵いふ足音である。堪えに堪えてゐた彼も、到頭たまり兼ねて、椅子からひよつりと腰を浮かした、犧牲の動物が、苦しまぎれに彼の足元に飛んで來はしないかといふ恐怖にも襲はれたからであつた。

　彼が完全に椅子から立上つて、そこに起つてゐる事件の方に目をやつた時は、中で一人の最も勇敢らしい、五分刈頭の、無髯の職員が、洋服の上から來た白衣を袖ごとまくり上げて、

「この野郎、しぶといな、」といひながら、痲醉劑を濕ましたらしい脫脂綿のかたまりを持つて、最早や逃げ場所がなくな

つたのか、逃げる力がなくなつたのか、机と壁の間の隅つこに體を横倒しにして、宙に浮いてゐる二本の足を顫はしてゐる犬の方へ突進して行くところであつた。犬は白と茶の斑の、一寸兎のやうな感じのする雜種だつたが、少しばかり開いた口から舌を覗かしながら、何ともいへぬ哀れつぽい目をして、殘酷な人間どもの方を眺めてゐた。

厨戸にはとてもそれ以上見てゐられなかつたので、大急ぎで元の椅子に腰を下ろして、救ひを求めるつもりで、

「み見返さん、見返さん」と傍の机に向つて叫んだ。が、見返は繪具のついた筆をちよつと口の端に持つて行つた時、そんな事にかまふな。といつた風な表情で、小さく二三度首を横に振つた切りだつた。厨戸もさうしやうと思つて、無理に顯微鏡を覗いたり、筆を取り上げたりして見たが、顯微鏡の中は眞暗で見えないし、手が顫えて一分間と筆を持ちつゞけてゐられなかつた。その間も、後の方の物音は絶えずつゞいてゐた。哀れな犬は到頭絶息したらしかつた。

「やれ〳〵、骨を折らしやがつた、」と先の犬を追つかけてゐた職員らしい聲がいつた。

「稻川君、その代り刀の方は君に頼むよ。」

厨戸は恐いもの見たさで、ちらつと首だけ後に振り向けて見た。と、別の、眼鏡をかけた、立派な口髭を生やした職員が棒のやうになつた犬の後足を二本持つて、それを下げるやうにしながら、右手の方へ歩いて行くところだつた。が、それから五分ほどして、厨戸がもう一度振向いた時には、それがいつの間にか毛皮を剝がれて、桃色のかたまりになつてゐた。厨戸は思はず今朝食べたものを吐きさうな氣持になつた。同時にくら〳〵と目が廻つたので額に手を當てゝ、前の机の上に俯伏しになつてしまつた。

が、誰一人、――彼の隣の机の見返も、彼の後の職員たちも、彼がそんなに閉口してゐるのに注意したものがなかつた。見返は相變らず畫をかき、職員たちは一つの臺の上で、子供のやうにがや〳〵騷ぎながら、メスをふるつてゐた。……

厨戸夏生はその日限り、その醫學校の勤を止めた。それから、彼は十日近くの間、仕事を探すことゝ、前途に就いて考

へることゝで、送つてしまつた。或日は見返を尋ねて、何か別の仕事がないかと頼まうと思つたが、それにしても、折角あゝして彼が世話してくれたのを、いくら自分に氣に入らないからといつて、葉書一枚で斷つたことは、隨分見返の機嫌を惡くしてゐるだらうと思つて、彼に叱られるのが恐くて、足がすくんだ。が、到頭五日目だつたかの晩、彼を尋ねて行つたところが、見返は相變らずの無口で、厨戸があんな風にして醫學校を止めたことに就いてなど、一言もいはなかつた。あの仕事は身體が疲れて、おまけに夜になると黴菌の夢にうなされるから、と厨戸が勢一ぱいの智慧で書いた嘘を、見返のやうな無頓着さうな男だから、本當にしてゐるのかも知れない、とさへ思はれた。が、その日は到頭、新しい仕事の口が何かないかといふことは、いひ出せずにしまつた。で、その翌日、もう一度出かけて行つて、思ひきつて新しい仕事の口を頼んで見たところが、

「もうない、」と見返は相變らず簡單な言葉でいつた。「僕も自分のを探してるんだ。」

「ぢやあ、き、君もあそこを止めるんですか?」と厨戸が思はず膝を乘り出して聞くと、

「もうこの月中であそこの仕事は終ひてなるんだ、」と見返がいつた、そして、彼にしては珍しい無駄口を附け加へて、

「僕は、犬殺し平氣だ、」といつた。

厨戸は赤くなつた。が、又暫くしてから、

「ぼ、僕のやうなものに出來る、し、仕事ツてどんなものでせう?」と聞いて見た。「僕はもう斯うなつたら、どんな事でもするつもりだが……」

「ぢやア、車掌か巡査がいゝ」と見返はいつた。

「な、なる程、車掌か巡査がいゝか、」と厨戸は感心して、「し、しかし僕のやうなものでもなれるか知ら……?」としばらく眞面目に考へてゐる風であつたが、「だけど、車掌はい、いやだな、誰にみ、見付かるかも知れないもの……」

でも、畫をかく時が欲しいといふのである。

おゝ、藝術といふものゝ不思議な魅力よ、これは正に熱病以上のものに違ひない。人が一度この病氣に取り憑かれると、どんな賢いものも、どんな愚なものも、才のあるのも、才のないものも、富める者も、貧しき者も、一生涯このために惱まされなければならない。我等の哀れな厨戸夏生も、毎朝遞信省へ通ふ途で、金七錢のジヤム附のパンを買ふ時も、巡査の子供に惱まされてゐる時も、さては久し振りの鮨の切身で滿腹して舌皷打つ時も、月末に思ひの外一圓五十錢の特別手當金を貰つて喜ぶ時も、ふと藝術といふことを考へると、ヒステリイの發作にあつたやうにいら／＼するのである。彼は彼の畫が人並より劣つてゐることを知つてゐた。だが、さうだからといつて、遞信省の職を投げ打つ氣にはなつても、畫をかく樂みを止める氣にはどうしてもなれなかつた。晝飯のパン代が一ケ月三十日として二圓十錢かゝる——と彼は『吃音の小唄』で口說くのである。間代が四圓五十錢で、米代が略々それと同じ位だから、それだけで既に十一圓十錢かゝるといふのである。その外に副食物と煙草代、それで彼が遞信省から貰ふ日給は一日一圓五十錢だから、たまの日曜にも、うかく／＼電車に乘ることも出來ない。日曜に電車に乘れないこともかまはないが、日曜は後の六日間の疲れで半日は大抵寢てしまふ「赤木さん」赤木さん、ぼ僕のやうな——者でもやつぱり——畫をかきたいよ——下手でも何でも——ぼ僕並にかきたいよ、」と彼は赤木にいふのだつた。

更に附け加へていふのには、彼も子供の時分それ程でもなかつたが、考へて見ると入井の家で食糧攻めにあつた時に、腹を減らしたのが今でも祟つてゐるのだらうか、どんなに我慢しても一日に二度（一度はパンなので、五六合の飯を食はないと腹の虫が治まらない。彼は畫をかくことを除くと、人のやうに外に何の樂みも持たない。せめて飯食ふことが樂みだから、米だけは存分に食べたいよ、存分に食べたいよ、といふのである。低い濁み聲の、調子の惡い唄だが、正直な男だけに眞實がこもつてゐるので、これを聞くと、誰も笑ひながら、腹の中は風が吹くやうな思がした。が、さうして、米

を食ふことだけの樂みで、辛抱しいしい通つてゐた遞信省を、或日到々止めてしまふことになつた。

それには、次のやうな仕事の的もあつたからだつた。仕事といふのは、見返按次郎の世話で、或私立の醫學校へ、顯微鏡の擴大圖を畫きに行くのである。實は、見返も彼自身の日本畫だけでは、到底生活の資になり兼ねるので、最早半年以上内職としてその仕事を勤めてゐたのであるが、それがだん〱忙しくなつて、彼を主任として、彼の外にもう一人、同じ仕事をしてくれる人を欲しいと學校から頼まれてゐたので、それを厨戸に世話しやうといひ出したのであつた。仕事は馴れないうちは少し骨が折れるかも知れないが、元々顯微鏡を覗いては、それを十倍とか、二十倍とかに寫しとるだけのことであるから、それ程の畫才がなくても、根氣さへあればいゝといふので、厨戸のやうな者でも、その位のことなら出來るだらうと見返は考へたのに違ひはない。

厨戸は喜んだ。たとへそれが前の通信事務員のそれよりも辛い仕事であつたとしたところが、彼にはまるで、不得手な、頭痛を催すところの計算や暗記の仕事から思ふと、蛙の腸にしても、傳染病の黴菌にしても、それは畫にかく仕事だといふことだけで滿足だつた。而も日曜と土曜とか休みで、時間も九時頃から二時頃まで、或は十時頃から四時頃まででよかつたし、少し勉強すれば、通信事務員よりもずつといゝ報酬を得ることが出來るといふのである。もつとも、初のうちは顯微鏡を覗くことが可成骨が折れた。元より近眼でもないし、外に視力に缺陷がある譯でもなかつたから、見えない筈はないと思ふのだが、やつぱり馴れる迄は容易に見分られなくつて困つた。次にやうやくそれと見えるやうになつてからも、少し此方が動くと、直にその對照が見えなくなつたり、片方へよつたりして、中々見當がつき兼ねた。

「こ、これは何の病氣ですと？」と、彼は水色の川のやうに見える中に、ぽつ〱と妙な恰好のものが模樣のやうに浮いてゐるのを見て、ちよつと傍にゐた職員に聞いて見ると、「それは、その水色のが、それは肺病の菌だよ、」といはれて、思はずぎくりとして身體を後に引いて笑はれたり、同じやうに、チブスの菌だとか、何々の菌だとか、こと〱く不氣味な

ものばかりなのに、初めのうちは笑はれながらも、つひ氣味惡い思ひを外に現さない譯に行かなかつた。

「見返さん、だ大丈夫でせうか、こ、こんなに毎日々々徽菌にばかり接してゐても……？」と彼は一間ばかり離れたところに、同じやうに机の上の顯微鏡を覗きながら、怒つたやうにむつつりして默いてゐる見返の方を見て、おづ／＼した調子で問ひかけて見た。が、相手は振向きもしないで、繪具の筆をぴちや／＼甞めながら、馴れた手附きで畫きつゞけてゐるので、厨戸も亦そのまゝ彼の仕事をつゞける外なかつた。が、つゞけながら、今見た見返の白い顏の中で、目に立つて脣のところだけが、紅や青やの繪具が、甞める度につく／＼と見えて、それがきら／＼光つてゐた物凄い姿が目について仕方がなかつた。すると、見返そのものが何か恐るべき徽菌の親分でもあつて、彼厨戸もまた今にその徽菌の一つになつてしまふのではないか、といふ氣がされた。だが、彼は自分の弱い心を鞭打ち鞭打ち、辛抱して勤めた。

けれども、彼がその醫學校に通ひ出してから、たしか一週間目のことであつた。彼等の仕事部屋は三階であつた。彼等が向つて仕事してゐる北窓からは、晴れた日には、ぽつと筑波山が新月のやうに地平に浮かんで見えた。

「み、見返さん」と厨戸はいつた。變な椅子で、床の上に作りつけになつてゐて、腕掛も、背を凭れかかるところも、同じ高さで、そしてそれが小さいので、一旦その上に腰を掛けると、嵌め込まれたやうに身動きが出來ない程窮屈だつた。で、厨戸は顏だけ見返の方に向けていつたのだつた。「あ、あそこに筑波山が見えます。」

「ふむ……」と見返は例に依つて、仕事の手を止めないで、答へたのか、唯鼻を鳴らしたゞけなのか、分らないやうな返事をした。

「き、綺麗ですよ。」と厨戸はも一度いつて見た。何故といつて、彼が輕子と手をとつて出た切り、何年間か見たことのない彼の故郷の、それは山だつたからだ。

が、今度は見返はもう鼻を鳴らす音さへさせなかつた。厨戸は泣きさうな顏になつて、再び顯微鏡を覗くことと、それ

を寫しとる仕事に着手した。その時、後の扉を開けて、職員らしい人が二三人部屋の中にどや〳〵と這入つて來た氣配を、厨戸は感じた。が、それは少しも珍しいことではないので、それを一々振り向いてゐたのでは、彼等の仕事は半分も出來なかつたから。もつとも普通の例だと、この部屋に這入つて來たものは、大抵一度は彼等の傍に來て、彼等の仕事を覗き込んでは、默つて見てゐるものもあるし、「肩の凝る仕事だな、」といふものもあるし、或は「君、この色はもう少し鮮明に出してくれ給へ、必ずしも顯微鏡に見える通りでなくていゝから、」などと指圖するものもあつて、それ〳〵此方から振向いて挨拶する必要がなかつた。が、そんな時でも、厨戸がひどく恐縮する反對に、見返は彼に對すると同じやうに、いつの時でも首一つ振りもしなければ、返答一つしたことがなかつた。そして厨戸も今は多少さういふ闖入者には馴れかゝつてゐた。で、彼はかまはず仕事をつゞけてゐた。

ところが、この日は闖入者たちは一向厨戸等の傍には寄つて來ないで、暫くすると、何かばた〳〵と、彼等自身の仕事を始めたらしかつた。それが何か知らぬが、少し穩かでない仕事らしいなと感じるまでもなく、突然、きやん〳〵〳〵と、確に犬に違ひない、動物の必死の叫び聲が起つて、それと同時に、動物が暴れ出したらしく、人々のばた〳〵と騷ぐ足音がけたゝましくなつた。厨戸はそれが何であるかを、はつきりは分らなかつたが、直覺的に感じると、忽ち脊中と腋の下とに寒さを覺えた。その次の瞬間が人々のばた〳〵いふ足音である。堪えに堪えてゐた彼も、到頭たまり兼ねて、椅子からひよつりと腰を浮かした、犧牲の動物が、苦しまぎれに彼の足元に飛んで來はしないかといふ恐怖にも襲はれたからであつた。

彼が完全に椅子から立上つて、そこに起つてゐる事件の方に目をやつた時は、中で一人の最も勇敢らしい、五分刈頭の、無髯の職員が、洋服の上から來た白衣を袖ごとまくり上げて、

「この野郞、しぶといな、」といひながら、痲睡劑を滲ましたらしい脫脂綿のかたまりを持つて、最早や逃げ場所がなくな

つたのか、逃げる力がなくなつたのか、机と壁の間の隅つこに體を横倒しにして、宙に浮いてゐる二本の足を震はしてゐる犬の方へ突進して行くところであつた。犬は白と茶の斑の、一寸兎のやうな感じのする雜種だつたが、少しばかり開いた口から舌を覗かしながら、何ともいへぬ哀れつぽい目をして、殘酷な人間どもの方を眺めてゐた。

厨戸にはとてもそれ以上見てゐられなかつたので、大急ぎで元の椅子に腰を下ろして、救ひを求めるつもりで、

「み見返さん、見返さん」と傍の机に向つて叫んだ。が、見返は繪具のついた筆をちよつと口の端に持つて行つた時、そんな事にかまふな。といつた風な表情で、小さく二三度首を横に振つた切りだつた。厨戸もさうしやうと思つて、無理に顯微鏡を覗いたり、筆を取り上げたりして見たが、顯微鏡の中は眞暗で見えないし、手が震えて一分間と筆を持ちつゞけてゐられなかつた。その間も、後の方の物音は絶えずつゞいてゐた。哀れな犬は到頭絶息したらしかつた。

「やれ／＼、骨を折らしやがつた。」と先の犬を追つかけてゐた職員らしい聲がいつた。

「稻川君、その代り刀の方は君に頼むよ。」

厨戸は恐いもの見たさで、ちらつと首だけ後に振り向けて見た。と、別の、眼鏡をかけた、立派な口髯を生やした職員が棒のやうになつた犬の後足を二本持つて、それを下げるやうにしながら、右手の方へ歩いて行くところだつたが、それから五分ほどして、厨戸がもう一度振向いた時には、それがいつの間にか毛皮を剝がれて、桃色のかたまりになつてゐた。厨戸は思はず今朝食べたものを吐きさうな氣持になつた。同時にくら／＼と目が廻つたので、額に手を當てゝ、前の机の上に俯伏しになつてしまつた。

が、誰一人、――彼の隣の机の見返も、彼の後の職員たちも、彼がそんなに閉口してゐるのに注意したものがなかつた。見返は相變らず畫をかき、職員たちは一つの臺の上で、子供のやうにがや／＼騷ぎながら、メスをふるつてゐた。……

厨戸夏生はその日限り、その醫學校の勤を止めた。それから、彼は十日近くの間、仕事を探すことゝ、前途に就いて考

へることゝで、逐つてしまつた。或日は見返を尋ねて、何か別の仕事がないかと頼まうと思つたが、それにしても、折角あゝして彼が世話してくれたのを、いくら自分に氣に入らないからといつて、葉書一枚で斷つたことは、隨分見返の機嫌を悪くしてゐるだらうと思つて、彼に叱られるのが恐くて、足がすくんだ。が、到頭五日目だつたかの晩、彼を尋ねて行つたところが、見返は相變らずの無口で、厨戸があんな風にして醫學校を止めたことに就いてなど、一言もいはなかつた。あの仕事は身體が疲れて、おまけに夜になると黴菌の夢にうなされるから、と厨戸が勢一ぱいの智慧で書いた嘘を、見返のやうな無頓着さうな男だから、本當にしてゐるのかも知れない、とさへ思はれた。が、その日は到頭、新しい仕事の口が何かないかといふことは、いひ出せずにしまつた。で、その翌日、もう一度出かけて行つて、思ひきつて新しい仕事の口を頼んで見たところが、

「もうない、」と見返は相變らず簡單な言葉でいつた。「僕も自分のを探してるんだ。」

「ぢやあ、き、君もあそこを止めるんですか？」と厨戸が思はず膝を乘り出して聞くと、

「もうこの月中であそこの仕事は終ひてなるんだ、」と見返がいつた、そして、彼にしては珍しい無駄口を附け加へて、

「僕は、犬殺し平氣だ、」といつた。

厨戸は赤くなつた。が、又暫くしてから、

「ぼ、僕のやうなものに出來る、し、仕事ッてどんなものでせう？」と聞いて見た。「僕はもう斯うなつたら、どんな事でもするつもりだが……」

「ぢやア、車掌か巡査がいゝ」と見返はいつた。

「な、なる程、車掌か巡査がいゝか、」と厨戸は感心して、「し、しかし僕のやうなものでもなれるか知ら……？」としばらく眞面目に考へてゐる風であつたが、「だけど、車掌はいゝいやだな、誰にみ、見付かるかも知れないもの……」

「君は身體がいゝから、巡査がいゝよ。」と見返がいつた。

そして、厨戸は眞面目に巡査に就いて考へた。が、その時はどうしたのか、現に彼自身が巡査の二階を借りてゐることを忘れてゐた。そして見返に別れて、家へ歸る途で、ふとその事に氣がついて、彼は益々乘氣になつた。階下の巡査は細君があつて、子供が五人もあるから、あんなに慘めだが、自分は一人だから、ずつと樂に暮せるだらう、そして最も都合のいゝのは、一日おきに休があることだ、さうだ、自分ならその休の日には、階下の巡査のやうに寢ないで、寫生にでも出かけよう、繪具も買へるだらう、と考へると、彼は久しぶりに氣が浮き立つて來るのを覺えた。

幸ひ、その日は階下の巡査が非番の日だつたので、早速その相談を持ちかけて見たところが、彼等も餘り長く厨戸にのらくらしてゐられると、間代を拂つてくれないかといふ心配をしてゐた時なので、同じ勤めとはいひながら、後輩を一人持つといふ張合ひとで、夫婦して熱心に厨戸に巡査を志願することを勸誘した。もつとも先の通信見習生と同じことで、六ケ月間巡査教習所といふ、つまり巡査になるための學校に這入らなければならなかつたが、無論、その間の手當はくれることになつてゐて、それも通信見習生より割がよかつたので、厨戸は早速そこに這入ることに定めた。

この教習所の時代が、厨戸夏生のこれ迄の生涯のうちで最も張り合ひのある、愉快な時だといふことが出來たかも知れない。何故といつて、こゝでは彼のやうに中學校を卒業してゐるものが片手の指の數もなかつた、のみならず繪の嗜みさへあるといふことまでが、一層珍しがられた。そこへ彼の善良な性質をもつてしたので、彼は多くの者に好かれた。さうなると、彼の氣持も引き締まつて來たと見えて、法律でも、撃劍でも、習字でも、熱心に勉強したので、成績も惡い方ではなかつた。自然、上役の者たちからも目をかけられた。唯一つ、困つたことが起つた、といふのは、巡査として可成り重要な條件であるところの、言語の明瞭を缺くといふ點であつた。普通だと、この缺點は、折角一ケ月なり二ケ月なり勉強した後でも、罷免される理由にさへなるのだつた。が、彼は不斷上役の者たちから愛されてゐた爲に、彼等の斡旋で、六

ヶ月後、その教習所を出ると、交通巡査に採用されることになつた。

ところが、半月もしないうちに、彼の訥辯はその交通巡査にもどうしても不向きであることが發見されて、愈々やつぱり免職になりさうだつたが、又上役の一人で世話する人があつて、彼は今度は風俗係の刑事に採用されることになつた。これはだん／＼困つたことになつて來たな、刑事は厭だな、と彼は心の中で二三度も思つて、今度は此方から止めたくなつたが、世話してくれた好意に叛くのが惡かつたので、辛抱して、彼は下谷署の刑事の辭令を受けたのであつた。

その翌晩が初めての出勤日で、厨戸夏生は何となく重々しい氣持を抑へながら、下谷警察署に行つたところが、そこで不思議な命令を受取つた。彼は部長の机の前へ呼ばれて、一枚の地圖を渡された「これが交園の入口で、こゝに交番があるから、こゝを根據地として、この博物館の裏の、こゝと、こゝと、赤い印のつけてあるところへ行つて張り込んでもらひたい。つまり男女の密會を捉まへるんだね。張込んでゐる位だから、鳥を取るのと同じことだ。成るべく靜かにして、咳拂ひなぞは禁物だよ。そして捉まへたら、男と女とを直に別々に引離すのを忘れちやアいけないよ。後は君の考で、まア大抵の奴は一度交番まで引張つて行くんだね。そして說諭をするんだ。で、名前と大體の要領とを手帳につけておかなければいけないよ。いふ迄もないことだが、件數が多ければ多い程、君の出世も早い譯だ、それ相當の賞與もあるといふ譯だ。ちやア、行つてくれ給へ、途でその交番へ一寸挨拶に寄り給へ。」

そこで、彼は言はれた通り、公園の中の交番へ寄つてそこの巡査に新任の挨拶をしてから、目的の博物館の裏手の方へ出かけて行つた。やがてからひばか何かの、こんもりとした灌木が稻叢のやうにぼかり／＼と立つてゐるところへ出たので、この邊ぢやアないかなと思つて、念のために持つてゐた地圖を調べて見ると、案の上その邊に當るところに赤い印がつけてあるので、成る程警察などといふものは大したものだな、と感心しながら、その灌木の一つの傍に進んで行つた。彼はそこで警察署から借りて來た敷物用の黑い切を敷てからひばの梢が傘のやうに蔽うつてゐる下に、部長から聞いた通

りに大地にその大きな體を横たへた。あたりは妙に靜まり返つてゐて、これは電車が走り、犬が歩き、人が通つてゐるところの今先までその中にあつた世の中とは、ずつと遠く離れてしまつたやうな氣がした。そして、彼自身も亦兵隊になつたり、女と駈落したり、入井の下宿で苦勞したり、さては通信事務員になつたり、顯微鏡の御蔭になつたりした、あの厨戸夏生と同じ厨戸夏生か知ら？　と怪しまれた位であつた。ふと又、彼はその腹這つてゐる土地のにほひを嗅ぐともなしに嗅いでゐるうちに、古里の筑波山の麓にある村のことを思ひ出した。少年の頃そこで近所の腕白友達とかくれん坊や、泥棒ごつこをしたことを思ひ出した。そして現在のこれは何んといふ隱れん坊、泥棒ごつこであるだらう。おゝ私はこれから、——私はまだ二十五歳であります。私はこれからどうなつて行くのでせう？　と厨戸夏生は心の中で叫ばない譯には行かなかつた。

ふと、その時近くの土の上を確に人の歩いて來る氣配がしたので、彼は我に返つた。すると、心臟がどき／＼し出して來た。それは正に二人の男女に違ひはなかつた。「矢張り來るんだな」と厨戸は思つた。彼はふと何年か前に、彼が鮮子とこんな風に歩いたことを思ひ出した。そのうちに彼の忍んでゐるところから三四間と隔てないところまで、男女の者は進んで來た樣子だつた。彼は胸中がむづ／＼するやうな嫉妬を感じた。それでも彼はこれが職務だからと思つて、なるべく呼吸を凝らして我慢してゐた。ところが、一方そんな者が隱れてゐるとは知らない男女の方では、うつかりしてゐると、彼が隱れてゐるところへやつて來さうだつた。さう氣がつくと、彼の方が却つて恐ろしくなつて來たので、夢中で、彼はその場から飛び出した。

「こ、こ、こら！」と彼は叫んだ、叫びながら、しまつた、こんな肝腎の時に吃つてしまつて……と思つたが、さう思へば思ふ程、後の言葉がつゞかなかつた。

が　男女の方では、相手が新米の　而も吃りの刑事であるなどと氣がつく筈はなかつた。何故といつて、彼等の方が一層

あわてた。

「す、濟みません……」と相手の男も吃りながら、顏を眞青にしていつた。

「と、兎に角、交番まで……」と厨戸はいつて、男の袖を掴みながら歩き出した。

彼は先程部長から聞いた、男女を別々に引離す注意などを忘れて、いつの間にか掴んでゐた男の袖をも離して、たゞ逃げられない程度の間隔を保ちながら進んだ。

「旦那」と歩きながら男がいつた。「私どもは決して怪しいものではありませんので、まつたくの夫婦なんでして……」

「ふ、夫婦がどうしてこんなところへ來るんだ？」と厨戸は割合に威嚴のある言葉でいふことが出來た。

「それが、私どもは職工でして、親父夫婦も、兄貴夫婦もみんな職工で、それで小さな家の中に一緒に住まつてゐるもんですから……へえ、それは、そんなにしなくたつて、別々に暮して行けるんですが、親父も兄貴も、親父や兄貴の惡口をいふやうですが、そろつてけちなもので、金を溜めることばかり考へてるものですから……」

その時、三人は博物館の前の通に出たところで、ずつと先の方に交番の紅い電燈がちらり見えた。厨戸はそれを見ると突然足を止めて、「よし、さういふ事なら今夜は見免しておかう、これから氣をつけなければいかんぞ。」といふと、

「どうも有難うございます、どうも……」と職工夫婦は乞食のやうにぺこ／＼お辭儀した。

「早く歸り給へ。」と厨戸は鷹揚にいつて、彼等の去るのを見送つてから、無意識に又元の道の方へ引返した。歩きながら、成る程、可哀さうな夫婦があるものだな、と思つた。しかし、あの夫婦と俺と、どちらが可哀さうだらう、と思ふと、彼は急に彼自身の存在が情なく感じられた。彼はいつの間にか、とある路の傍にあつたベンチに腰をかけて、取止めのない本想に耽り出した。すると、その時、何時を告げるのか知らないが、ボーンと上野の鐘が鳴り出した。彼ははつとして立上つて、再び先の隱れ場所の方へと歩いて行つた。

彼は途々、ふと先の男女が又舞戻つてゐるやうなことはあるまいな、と考へた、今度は彼の方で、彼等を見附けることを恐れるやうな氣分になつてゐたのだつた。だが、幾ら何でも、同じところへ立返るほど大膽なものではあるまい、と考へ直して、彼は元の場所の五六間手前まで來た時、突然彼が棒立になつた、程、彼を驚かした音にはッとした、それは何か動物か、大きな鳥かゞ急に人の足音に驚いて飛び出したやうな音であつた。そして一秒の後、ぱた〳〵と彼が來たとは反對の方角に、その物音の主が斷け出した時、何の事だい！と初めて彼は氣がついたのだつた。夜目によく見分けられなかつたが、明らかに先の男女とは違つて、二人とも背の高い、もつと身上のよささうな一對の男女が逃げて行くのだつた。あまり咄嗟のことなので、厨戸刑事が驚いてゐるうちに、彼等の姿は見えなくなつてしまつた。彼は稍々暫くの間、その場にぽかんと突つ立つてゐた。が、やがて急に咽喉の邊がむづ痒いやうな氣がして、大きな聲で笑ひたくなつた。それを堪えて、にッと脣でだけ笑つてから、彼は何といふことなく、その男女が陣取つてゐた場所の跡を、腰を曲げてのぞいてみた。すると、又急に逃げた彼等がいま〳〵しい氣がして來て、彼はそこへ例の黒い切を敷いて、今度こそは誰彼の容赦なしに、見附けたら最後大いに膺らしてやらうと待ちかまへた。

それから二十分程した時分に、カサカサと待ちもうけた音がして來た。突然、而も案外近くの、最初の時のやうに路の方からではなく、ずつと向うから草原に這入り込んでゐたものらしく、足音は左手の土手の上から來たのであつた。先のことと、それから暫く待たされた退屈な氣分とからで、彼は氣分がむし〳〵しやしてゐたので、今度こそ愈々といふ場で飛び出したら、部長も場合に依つては毆つていゝといつてゐたから、本當に毆りつけてやらう。それも男の方より、女の方の、白粉をつけたむち〳〵した柔かい頰ぺたを毆つてやらうと思つた。すると、女が泣き出すだらう、どんな聲で泣くだらうなどと想像しながら、殆ど息を詰めるやうにして樣子をうかゞつてゐた時、急に彼の心臟がこつんと止まつやうな氣がした。といふのは、だん〳〵彼の蹲つてゐる場所に近づいて來た男女の、ほそ〳〵いふ話聲が、ほそ〳〵ではなく、

個性を持ち始めて來ると、卽ちその女の聲が彼をはツと打つたのである、そして彼の心臟が止まつたやうな氣がしたのである。

彼は鶴のやうにぐつと、幾等も延びないその太い首を延ばして、終ひには耳に手を當てがつて聞いて見たが、やつぱりどうしても、間違ひなくそれは彼女の聲なのである。よく似た聲があるものだな、しかし……いや、幾ら何でもこれは似た聲ではない。確に彼女の聲だ、彼の忘れることの出來ない聲だ。それにしても、彼は矢張りそれを疑問の聲として、永久にその聲の主を確めなかつたら、その方が幸福であつたかも知れない、然し、男の聲として「輕ちやん、」と相手を呼ぶ聲を、彼はそれから數回聞きとつたのである。

彼は逃げ出す譯にも行かなかつた、といつて、先の見知らぬ職工夫婦の場合のやうに、飛び出す譯にも行かなかつた。彼はしかし、幾度逃げようか、それとも刑事として飛び出さうかと迷つたか知れなかつた。そして彼は或は彼等の會話を聞くまいとして、兩手の指で耳を抑えたり、或は兩手を拳にして汗を握つたり、さうして輕子と彼女の連の男とが悠々とその場を立ち去つてしまつたまで、そこに石になつたやうに、身體を固くしてゐた。……

それから二三日後に、厨戸夏生は決心して赤木にも、見返にも誰にも、知らさないで、何年ぶりかで筑波山の麓にある、古里の村へと上野から汽車に乗つて立つたのであつた。

校正室にて

□信じて生きれば短かい人生も生き栄えがあるが、信ぜられぬ人生では生きることも、死ぬることも可なりの苦惱を見ねばならぬ。

□慌しい氣持で花を眺めて、何處にその美を認められやう。自己の眞實が花に、そして自然に働きかけてこそ、そこに藝術が生れ、哲理が啓かれるのです。眞理は此より開くべきものでなく、頭腦より創作される高貴な所産です

□人眞似、猿眞似の本家が日本人の代名詞であればそれは哀しいことです、近時の婦人雑誌が全く猿眞似のヂヤーナリズムであれば、それは一層に哀しいことです。足と手と、鋏とのりで出來る婦人雜誌であればそれは此以上の哀しみはない譯です。

□今時の如何なる高級雑誌でも讀者に妥協します。一面には四角四面の論文を、そして一面には讀者の味覺をそそる蠱惑的下劣な文字を用ゐます。これはマホメットが劍と經典とを用ゐて蠻人を征服した故智です。そこに眞の平和が生れない如くそうした妥協的やり方では結局鷄しか生れますまい。私どもは日本にそうした鷄の跋扈を許したくはない。

「妥協した生活には一つの眞實もつかめない、一つの眞理も發見しえない、こうした多難多事の國に生れて、そしてその多事多難を切り拔くべき有爲の男兒の母となるべき人々が、一つの目標もなく、一つの主義もなく、何一つの創造もなき新聞雑誌を毎月購讀して、却つて自己を混亂迷妄のうちに沒するのは惜しむべきことと云ふより、それは恐るべきことです。

□本誌は別頁の豫告にもあるがやうに、本誌の程度を引下げて幾萬の讀者を併やうより、却つて程度を引上ぐることとしました。堅實なる我が母性の創造にまたねば我國の前途は危ないものです。そして萬事を堅實な地味な道程から出發することにしたい。

「對米問題、對支問題對露問題と看來れば、新日本の母たる人は一日も晏如としてをれぬ筈です。こうした問題は「改造」や「中央公」」で取扱ひますが、しかし婦人には、婦人の儼然たる立場がある筈です。そうしたことや、學術上のことなどをこれから相談的に進めて行きたいものです。

□七月以降からの本誌が、いかに諸姉に向つて忠實、懇切の道を歩くやうになるかは刮目して待つて下さい、決して期待にはそむかぬつもりです、今まで並んで來たいろ〳〵の高級婦人雑誌に比していかに私どもの歩く道がハツキリとして來るかを來月號に待つてゐて下さい。

女性改造定價表

冊數	定價	郵税
壹冊	五十錢	壹錢五厘
六冊	參圓	郵税共
十二冊	六圓	郵税共

註文の注意

◇一大地震其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は普通郵税實費を申受く（但し支那を除く）
◇見本は送らず
◇郵便切手代用は實割增のこと
◇御拂込みは振替によらるゝが最も便利なり

本誌廣告料一頁　一等百圓　二等七拾圓
◎本社廣告取次ｵ　日本電報通信社　博報堂　弘盛舍

大正十三年五月十三日印刷納本
大正十三年六月一日發行
（六月號特價七十錢）

編輯兼發行印刷者　平田貫一郎　東京市芝區愛宕下町一ノ一
印刷所　秀英舍　東京市牛込區市賀町一ノ一二

發行所　改造社　東京市芝區愛宕下町一ノ一
電話高輪四九九三
振替東京四一〇二

改造社の重要新刊書

文學博士 桑田芳藏著（新刊）

ヴントの民族心理學

（四六版四九七頁定價參圓五拾錢送料書留廿一錢）

心理學の使命は、個人心理や、實驗心理に限定さるるものでなく、夫は當に社會及人類の心理解剖が尤も重要とさるべきだ。實驗心理の鼻祖にして又、其大成者たるヴントは遂に民族心理に到達したが、而も彼の民族心理學は、坊間の非科學的のものでなく、科學的心理學の體系に於て尤も重要なる一部門をなして居る。これ彼の該博無比なる科學的、心理學的智識の最後の總束であり、又結晶でもある。

著者は、ヴントに親しく師事した新進の心理學者である。彼が廣瀚なる十數卷は讀むに困難である。此一書を通讀して彼の蘊奥なる文化や社會及人類の心理の科學的説明を聞いて人類の使命を完全に遂行せよ。

りに大地にその大きな體を横たへた。あたりは妙に靜まり返つてゐて、これは電車が走り、犬が歩き、人が通つてゐるところの今先までその中にあつた世の中とは、ずつと遠く離れてしまつたやうな氣がした。そして、彼自身も亦兵隊になつたり、女と駈落したり、入井の下宿で苦勞したり、さては通信事務員になつたり、顯微鏡の[illegible]きになつたりした、あの厨戸夏生と同じ厨戸夏生か知ら？と怪しまれた位であつた。ふと又、彼はその腹這つてゐる土地のにほひを嗅ぐともなしに嗅いでゐるうちに、古里の筑波山の麓にある村のことを思ひ出した。少年の頃そこで近所の腕白友達とかくれん坊や、泥棒ごつこをしたことを思ひ出した。そして現在のこれは何んといふ隱れん坊、泥棒ごつこであるだらう。おゝ私はこれから、――私はまだ二十五歳であります。私はこれからどうなつて行くのでせう？と厨戸夏生は心の中で叫ばない譯には行かなかつた。

　ふと、その時近くの土の上を確に人の歩いて來る氣配がしたので、彼は我に返つた。すると、心臓がどき／＼し出して來た。それは正に二人の男女に違ひはなかつた。「矢張り來るんだな」と厨戸は思つた。彼はふと何年か前に、彼が梓子とこんな風に歩いたことを思ひ出した。そのうちに彼の忍んでゐるところから三四間と隔てないところまで、男女の者は進んで來た樣子だつた。彼は胸中がむづ／＼するやうな嫉妬を感じた。それでも彼はこれが職務だからと思つて、なるべく呼吸を凝らして我慢してゐた。ところが、一方そんな者が隱れてゐるとは知らない男女の方では、うつかりしてゐると、彼が隱れてゐるところへやつて來さうだつた。さう氣がつくと、彼の方が却つて恐ろしくなつて來たので、夢中で、彼はその場から飛び出した。

「こ、こ、こら！」と彼は叫んだ、叫びながら、しまつた、こんな肝腎の時に吃つてしまつて……と思つたが、さう思へば思ふ程、後の言葉がつゞかなかつた。

が男女の方では、相手が新米の而も吃りの刑事であるなどと氣がつく筈はなかつた。何故といつて、彼等の方が一層

あわてた。

「す、濟みません……」と相手の男も吃りながら、顏を眞靑にしていつた。

「と、兎に角、交番まで……」と厨戸はいつて、男の袖を摑みながら步き出した。

彼は先程部長から聞いた、男女を別々に引離す注意などを忘れて、いつの間にか摑んでゐた男の袖をも離して、たゞ逃げられない程度の間隔を保ちながら進んだ。

「旦那」と步きながら男がいつた。「私どもは決して怪しいものではありませんので、まつたくの夫婦なんでして……」

「ふ、夫婦がどうしてこんなところへ來るんだ?」と厨戸は割合に威嚴のある言葉でいふことが出來た。

「それが、私どもは職工でして、親父夫婦も、兄貴夫婦もみんな職工で、それで小さな家の中に一緒に住まつてゐるもんですから……へえ、それは、そんなにしなくたつて、別々に暮して行けるんですが、親父も兄貴も、親父や兄貴の惡口をいふやうですが、そろつてけちなもので、金を溜めることばかり考へてるものですから……」

その時、三人は博物館の前の通に出たところで、ずつと先の方に交番の紅い電燈がちらり見えた。厨戸はそれを見ると突然足を止めて、「よし、さういふ事なら今夜は見免しておかう、これから氣をつけなければいかんぞ。」といふと、

「どうも有難うございます、どうも……」と職工夫婦は乞食のやうにぺこ〳〵お辭儀した。

「早く歸り給へ。」と厨戸は鷹揚にいつて、彼等の去るのを見送つてから、無意識に又元の道の方へ引返した。步きながら、成る程、可哀さうな夫婦があるものだな、と思つた。しかし、あの夫婦と俺と、どちらが可哀さうだらう、と思ふと、彼は急に彼自身の存在が情なく感じられた。彼はいつの間にか、とある路の傍にあつたベンチに腰をかけて、取止めのない空想に耽り出した。すると、その時、何時を告げるのか知らないが、ボーンと上野の鐘が鳴り出した。彼ははつとして立上つて、再び先の隱れ場所の方へと步いて行つた。

彼は途々、ふと先の男女が又舞戻つてゐるやうなことはあるまいな、と考へた、今度は彼の方で、彼等を見附けることを恐れるやうな氣分になつてゐたのだつた。だが、幾ら何でも、同じところへ立返るほど大膽なものではあるまい、と考へ直して、彼は元の場所の五六間手前まで來た時、突然彼が棒立になつた、程、彼を驚かした音にはツとした、それは何か動物か、大きな鳥かゞ急に人の足音に驚いて飛び出したやうな音であつた。そして一秒の後、ばた〳〵と彼が來たとは反對の方角に、その物音の主が駈け出した時、何の事だい！と初めて彼は氣がついたのだつた。夜目によく見分けられなかつたが、明らかに先の男女とは違つて、二人とも背の高い、もつと身上のよささうな一對の男女が逃げて行くのだつた。あまり咄嗟のことなので、厨戸刑事が驚いてゐるうちに、彼等の姿は見えなくなつてしまつた。彼は稍々暫くの間、その場にぼかんと突つ立つてゐた。が、やがて急に咽喉の邊がむづ痒いやうな氣がして、大きな聲で笑ひたくなつた。それを堪えて、にツと唇でだけ笑つてから、彼は何といふことなく、その男女が陣取つてゐた場所の跡を、腰を曲げてのぞいてみた。すると、又急に逃げた彼等がいま〳〵しい氣がして來て、彼はそこへ例の黒い切を敷いて、今度こそは誰彼の容赦なしに、見附けたら最後大いに膺らしてやらうと待ちかまへた。

それから二十分程した時分に、カサカサと待ちもうけた音がして來た。突然、而も案外近くの、最初の時のやうに路の方からではなく、ずつと向うから草原に這入り込んでゐたものらしく、足音は左手の土手の上から來たのであつた。先のことと、それから暫く待たされた退屈な氣分とからで、彼は氣分がむしゝやくしやしてゐたので、今度こそ愈々といふ場で飛び出したら、部長も場合に依つては毆つていゝといつてゐたから、本當に毆りつけてやらう。それも男の方より、女の方の、白粉をつけたむち〳〵した柔かい頬ぺたを毆つてやらうと思つた。すると、女が泣き出すだらう、どんな聲で泣くだらうなどと想像しながら、殆ど息を詰めるやうにして様子をうかゞつてゐた時、急に彼の心臟がこつんと止まつやうな氣がした。といふのは、だん〳〵彼の蹲つてゐる場所に近づいて來た男女の、ぼそ〳〵いふ話聲が、ぼそ〳〵ではなく、

個性を持ち始めて來ると、即ちその女の聲が彼をはツと打つたのである、そして彼の心臟が止まつたやうな氣がしたのである。

彼は龜のやうにぐつと、幾等も延びないその太い首を延ばして、終ひには耳に手を當てがつて聞いて見たが、やつぱりどうしても、間違ひなくそれは彼女の聲なのである。よく似た聲があるものだな、しかし……いや、幾ら何でもこれは似た聲ではない。確に彼女の聲だ、彼の忘れることの出來ない聲だ。それにしても、彼は矢張りそれを疑問の聲として、永久にその聲の主を確めなかつたら、その方が幸福であつたかも知れない、然し、男の聲として、「輕ちやん、」と相手を呼ぶ聲を、彼はそれから數囘聞きとつたのである。

彼は逃げ出す譯にも行かなかつた、といつて、先の見知らぬ職工夫婦の場合のやうに、飛び出す譯にも行かなかつた。彼はしかし、幾度逃げようか、それとも刑事として飛び出さうかと迷つたか知れなかつた。そして彼は或は彼等の會話を聞くまいとして、兩手の指で耳を抑えたり、或は兩手を拳にして汗を握つたり、さうして輕子と彼女の連の男とが悠々とその場を立ち去つてしまつたまで、そこに石になつたやうに、身體を固くしてゐた。……

それから二三日後に、厨戸夏生は決心して赤木にも、見返にも誰にも、知らさないで、何年ぶりかで筑波山の麓にある、古里の村へと上野から汽車に乘つて立つたのであつた。

校正室にて

□信じて生きれば短かい人生も生き榮えがあるが、信ぜられぬ人生では生きることも、死ぬることも可なりの苦惱を見ねばならぬ。

□愉しい氣持で花を眺めて、何處にその美を認められやう。自己の眞實が花に、そして自然に働きかけてこそ、そこに藝術が生れ、哲理が啓かれるのです。眞理は外より開くべきものでなく、頭腦より創作される高貴な所產です

□人眞似、猿眞似の本家が日本人の代名詞であればそれは哀しいことです、近時の婦人雜誌が全く猿眞似のヂヤーナリズムであれば、それは一層に哀しいことです。足と手と鋏とのりで出來る婦人雜誌であればそれは此以上の哀しみはない譯です。

□今時の如何なる高級雜誌でも讀者に妥協します。一面には四角四面の論文を、そして一面には讀者の味覺をそそる軟惑的下劣な文字を用ゐます。これはマホメットが劍と經典とを用ゐて蠻人を征服した故智です。そこに眞の平和が生れない如くそうした妥協的やり方では結局鵺しか生れますまい。私どもは日本にそうした鵺の跋扈を許したくはない。

「妥協した生活には一つの眞實もつかめない、一つの眞理も發見しえない」こうした多難多事の國に生れて、そしてその多事多難を切り拔くべき有爲の男兒の母となるべき人々が、一つの目標もなく、一つの主義もなく、何一つの創造もなき新聞雜誌を毎月購讀して、却つて自己を混亂迷妄のうちに沒するのは惜しむべきことと云ふより、それは恐るべきことです。

□本誌は別頁の豫告にもあるがやうに、本誌の程度を引下げて幾萬の讀者を得やうより、却つて幾萬の讀者の程度を引上ぐることとしました。堅實なる我が母性の創造にまたねば我國の前途は危ないものです。そして眞事を堅實な地味な道程から出發することにしたい。

「對米問題、對[illegible]問題對[illegible]問題と看來れば、新日本の母たる人は一日も晏如としておれぬ筈です。こうした問題は「改造」や「中央公論」で取扱ひますが、しかし婦人には、婦人の儼然たる立場がある筈です。そうしたことや、學術上のことなどをこれから相談的に進めて行きたいものです。

□七月以降からの本誌が、いかに諸姉に向つて忠實、懇切の道を步くやうになるかは刮目して待つて下さい、決して期待にはそむかぬつもりです、今まで並んで來たいろ／＼の高級婦人雜誌に比していかに私どもの步く道がハツキリとして來るかを來月號に待つてゐて下さい。

女性改造定價表

册數	定價	郵稅
壹册	五十錢	壹錢五厘
六册	參圓	郵稅共
十二册	六圓	郵稅共

註文の注意

◇[illegible]其他定價變更に依る前金沸込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は總部郵稅實費を申受く（但し支那を除く）
◇見本は送らず
◇郵便切手代用は壹割增のこと
◇沸込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌廣告料一頁 一等百圓 二等七拾圓

◎本社廣告取次者 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

大正十三年五月十三日印刷納本
大正十三年六月一日發行
（六月號特價七十錢）

編輯兼發行印刷者 平田貫一郎 東京市芝區愛宕下町一ノ一

印刷所 [illegible]秀英舍 東京市牛込區加賀町一ノ一二

發行所 改造社 東京市芝區愛宕下町一ノ一 電話高輪四九九三 振替東京[illegible]〇二

改造社の重要新刊書

第二章　土地耕作の初
第三章　動物飼養
第四章　工藝の發達
第五章　經濟生活
第六章　國家及社會
第七章　精神的文化
第三篇　文化の將來
第一章　現代君主國の形式
第二章　マークス派よりスパルタカス派までの民主
第三章　軍國主義と社會主義
第四章　戰爭と道德との原理
第五章　民族自決權と國際聯盟
第六章　財產の神聖と契約の神聖化
第七章　强制媾話を合意媾話
第八章　精神的媾話と終局の媾話
附錄
第一　兒童の行路
第二　兒童の肖像

改造社隨筆叢書

我社は今回隨筆叢書を發行することとなつた。其內容は政治、社會、經濟、文藝、思想、美術に亘ろうとそれは著者の隨意です。其の何種の讀みものにあれ肩の凝らぬものであつて欲しい。四角四面でないことが望ましい。しかしふざけたものでないことは必要だ。だが、その宗旨もそれは著者自身の主觀によつて決定さるべきものだ。定價は一定しないが大抵壹圓三十錢乃至壹圓八十錢としたい。

長谷川如是閑著　**犬、猫、人間**（八版發行）　定價壹圓八拾錢　送料拾五錢

堺利彥著　**入獄前後**（五月廿日發行）　定價壹圓六拾錢　送料拾五錢

森戶辰男著　題未定（五月下旬發行）
成瀨無極著　題未定（五月下旬發行）
佐藤春夫著　風流論（五月下旬發行）
河東碧梧桐著　題未定（六月下旬發行）
正宗白鳥著　題未定
岡本一平著　題未定
廣津和郎著　題未定
吉江喬松著　題未定

志賀直哉著　題未定

厨川博士の遺稿
『苦悶の象徵』を讀みて

文學士　矢野峯人

×

かねて友人山本修二君の手によりて整理中であつた厨川白村博士の遺稿が、新裝して愈〻改造社から出版された。四六判にして二百有餘ページ、天金白羽二重の、背に小さく貼つた黒皮の間には、金文字の光も鮮かに、『苦悶の象徵』と印せられてある。見返しには、更に、勿忘草の色をからませたこの瀟洒にして高雅極まりなき装幀は、たしかに本邦最近の出版界に於ける白眉たると共に、又博士の著書中未だ其の比を見ざる所である。隨分と凝り屋で氣難かしかつた先生も、この秀抜の出來榮に對してはあの世で思はず破顔一笑せらるゝであらう。

×

本書は山本君の跋文にも見ゆる通り、先生が年來心を傾けられ、最後まで深く意を用ゐられた一大事業のいはゞ胚珠たる芽生えたるに過ないが、而も先生が遺された純文藝上の纏つた著述としては、其の出世作『近代文學十講』『文藝思潮論』以後はじめてのものである。從つて、本書は、たとひ未定稿であり之に依つて評價さるゝ事は先生の最も心外とし不滿とさるゝ所であらうとも、尚且つ先生の文藝に對する論見抱負を窺ふ上に、最も重大なる意義を有するものと言はねばならぬ。

×

先生は曾て何處かで、遠からず『プロレゴメナ』刊行の意志ある事を洩らされた事があつたやうに記憶するが、この『苦悶の象徵』こそは恐らく、其の序論又は總論として執筆されたものであらう。一切の文藝乃至藝術を『苦悶の象徵』なる術を以て蔽ふ事が妥當であるか否かは姑く措き、先生が特に獨自の文藝論に此名を附せられたには確に深い理由が

高濱虚子著　題未定（六月中旬發行）

ある。

×

知れる人は知れるやうに、先生はこの世にあつて常に險しい路を歩むべく運命づけられた人であつた。枉げ難き已が性格と、傷つき易き神經とのために、先生は始終環境との抗爭衝突を人一倍强く經驗された。さうして其の遁り所なき滿腔の不平憂悶を和げ醫するものとしては、僅に讀書と執筆とあるのみであつた。從つて讀書の對象とたるものには、自ら深刻悲痛なる味を含めるものが選ばれがちに其の吐露する言辭は亦自ら憂鬱の調を帶びざるを得なくなつた。即ち、先生にとりて、一切の言說は必然的に悉く『苦悶の象徴』たらざるを得なかつたのである。かくして先生の文藝論は、取も直さず先生自らの體驗に生れたるもの、其の魂の僞らざる叫びとなつて來るのである。世上凡百の理論、如何に巧緻を衒はうとも、體驗によりて基礎づけられざるものは眞に形骸骨骸に等しい。

×

先生がフロイド一派の精神分析學に親しまれるやうになつたのは果して何時頃からであつたか、不幸にして私は詳にしないが、彼等の所說の當否は別問題として、兎に角、先生が其晩年特に彼等の研究に多大の興味を感ずると共にその影響を蒙る事もかなり深かつたのは事實である。少くとも『苦悶の象徴』一卷は、フロイド說に對し不卽不離の態度を取りながら文藝の創作鑑賞の心理を豐富なる引例によつて說明せんとの企てである。

×

先生は大學教授の職に在つてゆかれた。然しながら、先生の本領眼目は、單に專門の學府に於て少數の後進を誘掖指導するに止まらず、進んで廣く一般民衆の文化に貢獻せんとする所にあつた。從つて、先生一代の事業、其の不朽の功績は文藝の社會的浸潤に對する殆ど空前ともいふべき一大寄與であつた。先生の存在に依つて、信頼するに足る親切なる西洋文藝輸入者を有してゐた我が所謂知識階級はその死によりて好適の指導者解說者を失つたのである。まことに、人の價値は棺を蓋つて定まるといふ。先生の眞價は何物よりも先生の死によつて最も明確に證明されたと思ふ。瓦石を以て珠玉に代へる事が不可能なる限り先生の死によりて生じた空虛は永久に滿足されまい。

×

かく考へ來れば、『この苦悶の象徴』一卷こそは、一世の指導者、文化の開拓者を以て任じ、啓蒙を以て旨とせられた先生が、越土に遺された貴重なる置土産であり、忘れがたみである。平易にして而も餘りに專門的に傾く事無き本書は、言ふに足るべき文學概論の未だ現れざる本邦の讀書界にははじめて投ぜられた一大光明といふべきであらう。

婚姻の基調

（定價壹圓五十錢　送料十五錢）

京大教授　宮本英雄著

第一　婚姻法の將來

□社會生活と法律□所有關係と男女關係□自由主義への進展□新團體主義の婚姻

第二　夫婦間の貞操

□問題の意義□婦人運動の主張□妻の貞操に關する史實□刑罰法規の廢止□民事法規の活用

第三　寡婦の再婚

はしがき□寡婦を財産視せる思想□再婚の制限□若寡數と再婚□寡婦の殉死□家族制度と寡婦再婚□現代への暗示

第四　離婚の防止

□離婚は害惡か□離婚の原因□婦人の覺醒

第五　婚姻媒酌

□珍らしい訴訟事件□婚姻媒酌とは何ぞ□報酬附媒酌は不法□媒酌後の謝禮□支拂つた報酬の返還

第六　家族制度と婚姻

□家族制度の二義□婚姻に對する戶主の同意□戶主又は相續人の婚姻□內緣の夫婦□家族制度と妻の地位□家族制度と離婚

村松梢風著

近世名匠列傳

定價貳圓五拾錢

送料十九錢

四六判上製

第四版

本書は明治年代の美術界各方面に活躍して最も傑出せる十名家の詳傳である。其の一部が中央公論に連載され讀書界に空前の好評を捲き起したることは世人の記憶に新たなるべし。今や著者は新たに追加補筆をなし合本して上梓することゝなれり。列傳中の人物は、柴田是眞、島村俊明、狩野芳崖、橋本雅邦、木内喜八、竹内久一、森寛齋、旭玉山、田崎草雲、海野勝珉の十大家、畫家あり、彫刻家あり、彫金家あり、細工人あり、之れ何れも當代美術界の粹を拔きたる名家にして、其の多くは未だ完全なる傳記を有せざる人々である、著者數年來爰に着眼し、殆んど寢食を忘れて材料蒐集に努力し爰に始めて本書は生れたのである。著者は物語作家として文壇及び社會に定評ある人、材料正確、興味豐かにして而も藝術的匂ひの高き筆致は、忽ち人を魅了し、天才藝術家の性格及び生涯を寫し得て遺憾が無い、世の美術研究家は論を俟たず、美術の愛好者たると否とを問はず、社會の各方面の人々に推奬すべき名著である。

東京芝區愛宕下町

改造社

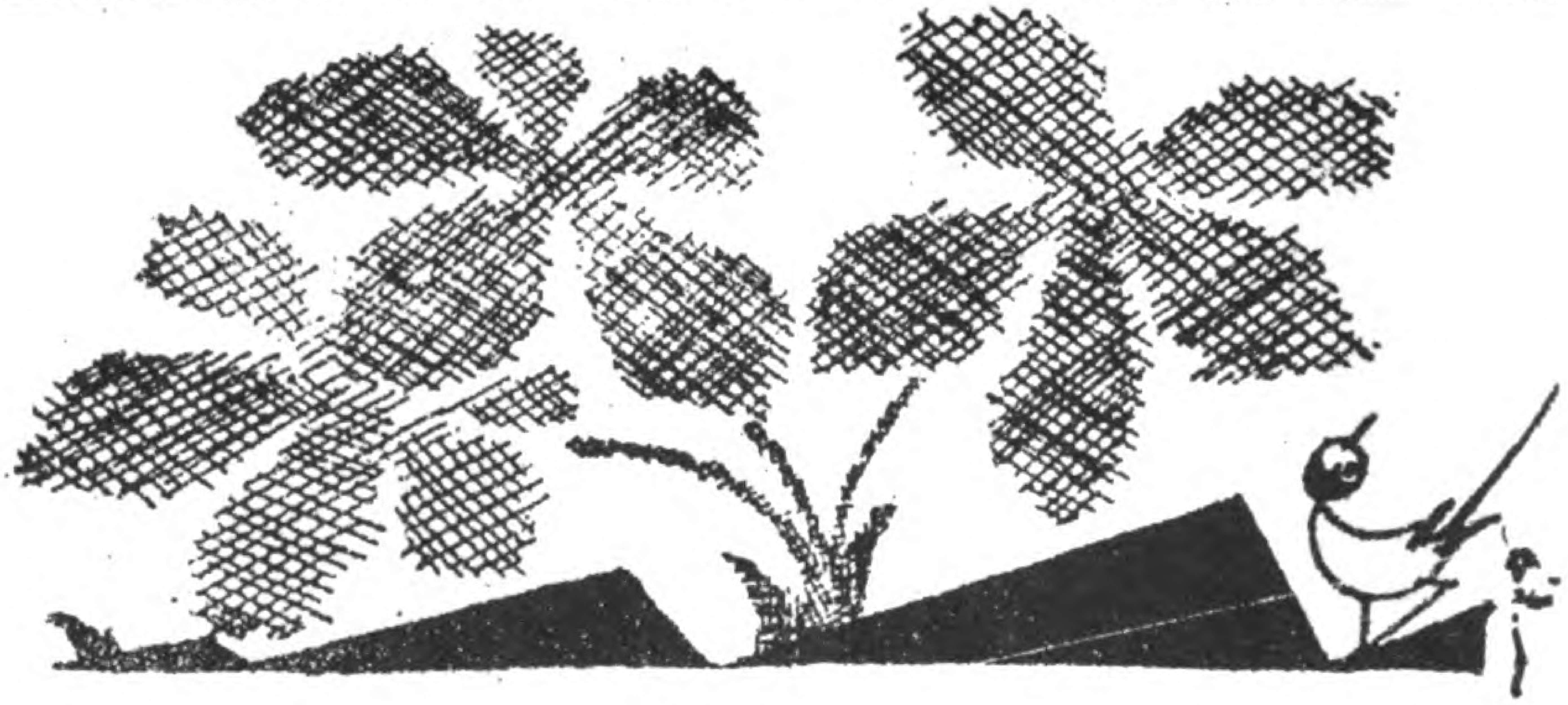
振替東京八四〇二

◇本社殘留書整理の結果左の書籍若干部數を發見致しましたから貴需に應じます。

著者	書名	定價	送料
桑木彧雄著	物理學と認識	一圓五十錢	十五錢
犬養健著	一つの時代	三圓五十錢	十九錢
フラー、オム作 高瀬毅譯	此世は如何にして終るか	二圓	十七錢
近松秋江著	二人の獨り者	二圓	十五錢
尾瀬敬止著	勞農ロシア詩集	二圓	十七錢
藤村千代著	脂粉の顏	三圓三十錢	十九錢
矢崎美盛著	現代哲學思潮	一圓五十錢	十七錢
藤森成吉著	東京へ	二圓三十錢	十九錢
北一輝著	日本改造法案	二圓五十錢	十五錢
梅澤親光著	水泳	二圓八十錢	十五錢
槙有恒著	山行	三圓三十錢	十九錢
三宅大輔著	野球	三圓八十錢	十九錢
加藤一夫著	亂舞する焰	二圓	十五錢

著者	書名	定價	送料
武林無想庵著	文明病患者	二圓	十七錢
中西伊之助著	農夫喜兵衛の死	二圓七十錢	十五錢
ブハリン著 稻垣守克譯	轉換期の經濟學	二圓八十錢	十九錢
石原純著	アインスタイン講演錄	二圓八十錢	十五錢
昇曙夢著	ロシヤ現代思潮と文學	四圓八十錢	二十七錢
堀江歸一著	國際經濟と國民經濟	二圓五十錢	十九錢
長田秀雄著	愛憎篇	二圓六十錢	十五錢
賀川豐彦著	雷鳥の目醒むる前	二圓三十錢	十七錢
北澤秀一著	近代女性の表現	二圓五十錢	十五錢
長與善郎著	青銅の基督	二圓	十七錢
室伏高信著	印象と傾向	二圓	十七錢
佐藤春夫著	佗びしすぎる	二圓六十錢	十五錢
恒藤恭著	ジムメルの歴史哲學	二圓	十七錢

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社



夏の御支度は三越

青葉に清々しく、燿く陽の光に、夏は參りました。三越では凉味と美趣に溢れた中形浴衣、縮、蚊帳、夏座蒲團、團扇など澤山に取揃へました

◆六月の催物◆

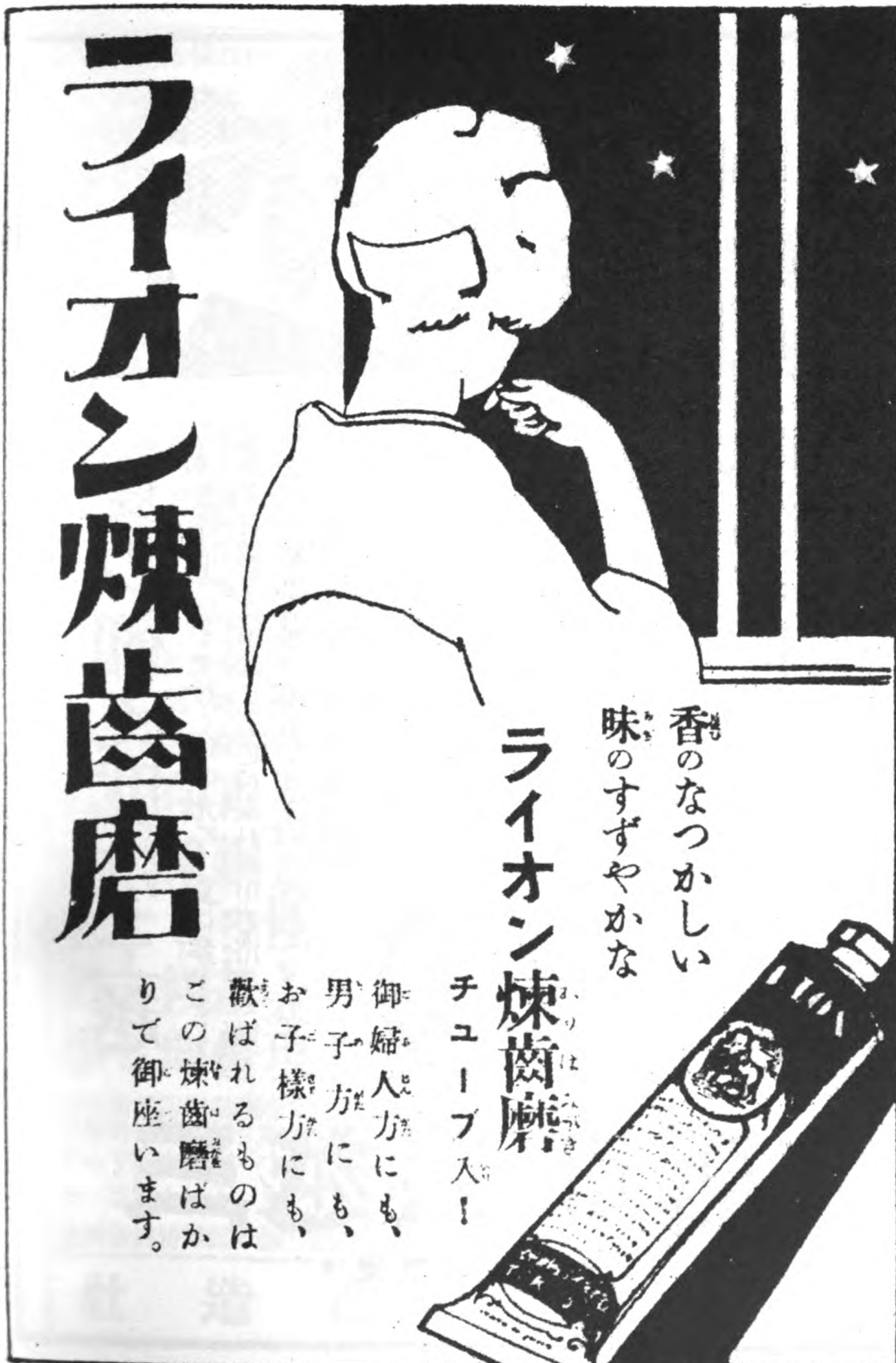
夏衣裳陳列會	上旬
ートル及背皮賣出會	一日より
傳神刺繍展覽會	二日より
參了會油繪展覽會	十一日より
夏季用家具陳列會	十四日より
三彩會染織展覽會	十三日より
新製夏帯陳列會	十五日より
戊光會繪畫展覽會	廿一日より
岡野知太郎氏南洋寫生畫展覽會	廿四日より

雨の御用意は三越

若葉の緑濃かに、梅雨の季節が參りました。三越では防水が完全で、體裁の優美な雨外套、雨傘、雨天用洋傘、ゴム靴等各種陳列致しました

三越呉服店

◆東京駿河町◆


香のなつかしい
味のすずやかな
ライオン煉歯磨
チューブ入！
御婦人方にも、
男子方にも、
お子様方にも、
歓ばれるものは
この煉歯磨ばか
りて御座います。
ライオン煉歯磨